はぐれ悪魔　イッセー

夜の魔王

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「俺は静かに暮らすんだ！　神も悪魔も堕天使も知ったことか――！」

持っている神器を危険視され、堕天使に殺された兵藤一誠。彼は悪魔によって再びの生を受けた。

しかし、彼は悪魔として生きる事を拒絶した――

そして平穏に暮らそうとするのだが、赤龍帝という存在がそれを許してくれなかった。

※注意事項

・イッセーがエロくない。

・ハーレム未定（現段階では無し）

・イッセーははぐれ悪魔でありグレモリー眷属では無い

・上記に伴いグレモリー眷属の面子に若干の変更あり＆大幅な弱体化

・リアスさんの扱いが酷い

・おっぱいドラゴンなんてない

以上の事がＯＫな方のみ本文をご覧下さい。

この作品は作者が『ハーメルン』のＩＳ二次創作を見て『そういえば一夏が闇堕ちする事はあってもイッセーがそうなるのは見たことないな』と思い立って書きました。

目次

第一章　再生のストレイデビル
Prologue ―― 1
リバイバル・ドラゴン
Reborn ―― 3
Encounter ―― 13
Sister ―― 21
Escape ―― 31
アサルト・フェニックス
Training ―― 40
Trick ―― 49
Attacked ―― 56
Smoke ―― 63
Rouge et noir ―― 69
Phoenix ―― 78
Welsh Dragon ―― 86
ヒーリング・シスター
Fiancee ―― 93
Anger ―― 102
第二章　交錯のヘブンリィドラゴン
Welsh×Vanishing ―― 109
ドラゴン・アタック
Black Cat ―― 111
Vanishing Dragon ―― 120
Go to Hell !! ―― 128

ストレイ・キャッツ
Issue in the Hell 137
Devils party 145
Combat 153
Sword Dance 161
Termination 169
エクストラ・ターン
Black and Black 177
ゴッド・バスター
Homecoming 184
Happy／End 192
Juggernaut Drive 202
ヒーロー・クライシス
Fox princess 210
Chaos in the Kyoto 218
Bridge across moon 227
Break impact 241
Double limit over 250
Early End 261

第一章　再生のストレイデビル

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

人生というものは何があるのか分からないものだ。

誰かを助けた見返りに何かを貰うこともあれば、逆恨みを買ってしまうかもしれない。

極悪非道な人物がのうのうと生きている事もあれば、当然の如く無残な末路を迎える者もいる。

至極真っ当に生きていた善人が幸福な人生を送っている事もあれば、それが報われずに無残な結末を迎える事もあるだろう。

善行を積んでも必ず幸福になるとは限らず、悪行を重ねてもその罰が下されるとは限らない。

その差が何によって齎されるかは分からない。だが、人類は平等でなく、同じ家に生まれ育った双子でさえも同じ人生は送らない。

その違いは一体どこで付くのか。

親？　兄弟？　姉妹？　祖父母？　友達？　先生？　近所の人？

能力？　環境？　時代？　国？　市町村？

何がそれを定めるのか。何がそれを左右するのか。何がそれを決定するのか。誰もそれは知らないし、きっと知りたくもないだろう。

自分の人生が一から十まで定められているというわけでないのなら、もしかしたらその一生には幾つもの可能性があるのかもしれない。

もしそうであるならば、本来そうなるはずだった彼が、別の人生を歩むという事もあるのかもしれない――

彼はどこにでもいる普通の少年だった。普通に生きて、普通に暮らして、普通に死ぬ。

過度な幸福も不幸もなく、その一生を終えるはずだった彼は、その身に宿した存在によってその人生を大きく変えた。

ただの少年は一度死に、種族を変えて蘇った。　そして少年は蘇ら

せて貰った主の為に強くなった。
堕天使を倒し、不死鳥（フェニックス）を退け、聖剣を砕き、白き龍と争い、友と競い、魔王を覇し、悪神を討ち、獅子王を打倒し、聖槍を破った。
七難八苦を乗り越えて、少年はとある世界の英雄（ヒーロー）になった。
如何なる困難にも屈せず、如何なる相手にも引かず、如何なる状況も打破し、二度目の死すら乗り越えた。
彼は子供に好かれ、王に期待され、仲間に愛され、少女たちに好かれた。

だが、もしかすると、無数の可能性があるこの世界には、そうはならない可能性もあったのかもしれない。
道半ばで打倒されたかもしれない。争いの渦中におらず、ただ数多くある存在の一つのままだったかもしれない。　死なず、蘇らなかったかもしれない。
もしかすると、普通で無くなった事を認めなかったのかもしれない。

今から綴られるのはそんな可能性の一つ。誰の為ではなく、自分の為に生きた、彼の一つの可能性だ。

誰だって、本来ではない在り方を求める事はできるのだ。

リバイバル・ドラゴン
Ｒｅｂｏｒｎ

「死んでくれないかな？」
彼女である夕麻ちゃんにそう言われた後、槍のような光が腹に突き刺さり、俺――兵藤一誠はその短い生涯に幕を下ろすはずだった。
（死にたくない……！）
だけど、死に際の願いが、紅髪の悪魔を呼び寄せ――

――命の代わりに、大事な物を喪った。

「――はっ!?」
気がついた時、俺は自分の部屋のベッドで寝ていた。
「俺は確か……夕麻ちゃんに――！」
殺された事を思い出して体を起こし、大穴の空いたはずの腹を見たが、傷跡一つ残ってなかった。
「ゆ、夢だったのか……？」

一先ず生きている事に安堵して時計を見ると、起きるのには丁度いい時間だったのでベッドから降りる。
「うっ……」
カーテンの隙間から差す日差しに目を細める。
「何だか体が重いな……」
何とも言えないだるさを覚えながら、俺は駒王学園の制服の袖に手を通した。

夕麻ちゃんに殺された夢を見てから数日が経った。
何と驚くことに、俺と夕麻ちゃんが付き合っている事を知っているはずの悪友二人までもが彼女のことを忘れていた。
彼女と付き合った末路からすると、彼女の存在自体俺の妄想だったのではないかと思ってしまう。
だが、俺の体には彼女と出会ってから大きな変化があった。
簡単に言えば夜型になっていたのだが、最近になって夜ふかしをするようになったわけではない。
しかも普通の夜型の昼に寝て夜に活動するという単純なものではなく、昼だと体がだるくなり、夜になると力が有り余ってしまうという状態だった。
「なんでこうなっちまったんだろうな……」
学校の自分の席で頭を抱えていると、校舎の外が少し騒がしくなった。
気になって外を見ていると、丁度赤い長髪の美少女が登校してくるところだった。
彼女の名前はリアス・グレモリー。この学校の三年生で、その美貌は男女問わずに虜(とりこ)にする。それは俺にとっても同じだったつい先日

――夕麻ちゃんに殺される夢を見るまでは。
その夢を見てから、俺は彼女を見ると畏怖するようなっていた。
そんな時、彼女の視線がこっちを向いた気がした。その碧眼と視線が合った瞬間、今まで感じた事のない感覚が胸に去来していた。まるで蛇に睨まれた蛙のような、圧倒的実力差を持つ相手と対峙したような感覚。
彼女と自分には接点はないはずと思い返していると、いつの間にか彼女は視界から消えていた。
「なあイッセー！　今日俺の部屋で秘蔵コレクション見ようぜ！」
「そうだぞイッセー！　思春期の男子がエロいことをしないなんて失礼だ！」
この二人は松田と元浜。俺はこの二人と合わせて不名誉なことに変態三人衆と呼ばれている。まあ白昼堂々エロいＤＶＤとか広げてるのが原因なんだろうけどな。
ちなみにイッセーてのは俺のあだ名だ。
「あー……俺いいわ。そんな気分じゃないし」
そう言った俺を二人は心配そうに見る。
「イッセー、お前最近元気ないけど大丈夫か？」
「付き合いも悪いしよ」
「悪いな。どうもそういう気分にならなくてな」
あの夢を見てからというもの、どうも性欲が沸かないのだ。というより、女の子に殺される夢のせいか、女の子そのものへ忌避感が生まれていた。
（俺、一体どうしちまったんだ……？）

二人の誘いは断ったものの、家に帰る気にはなれなかった俺は、あてどもなくそこらを歩いていると、いつの間に辺りは暗くなっていた。
「帰るか……」
暗くなったため体の内にあふれる力を感じながら、家へと足を向け

る。街灯もないのに鮮明に見える光景に不安を感じながら歩いていると、突如としてとてつもない悪寒に襲われた。
「ほう、こんな地方都市で出会うとは思わなかったな」
その言葉を発したのはスーツを着た男。素人でも分かるほどの殺意をこちらに向けている男を見た瞬間、俺は全力で走り出した。
今までとは比較できないほどの速さでがむしゃらに走る。どこに向かうかも考えず、ただこの場から遠ざかることだけを考えて走った。
気がついた時、俺は公園に立っていた。よりによってその公園は俺が夕麻ちゃんに殺された場所だった。
そう思ったとき、上から黒い羽が落ちてきた。
「逃すと思っているのか？　下級の存在はこれだから困る」
声を聞いて振り返ると、さっきのスーツ姿の男が背中から黒い翼を生やして降り立ったところだった。
「おまえの主の名前を言え。こちらもこんなところで邪魔をさせるわけにはいかんのでな。場合によっては手を打つ必要がある」
「あ、主って何のことだよ!?」
主と言われても、普通の男子高校生の俺には主なんていない。
「……もしや、おまえ『はぐれ』か？　ならばその困惑している様にも納得がいく」
一人でブツブツ呟く男を見ながら、俺はどうしようもなく不安だった。もしこの続きがあの夢と同じだったら……。
「周囲に仲間らしき気配もなし。魔力を使う様子もない。ならお前は『はぐれ』なのだろう。――なら、殺しても構わんだろう」
物騒な結論を出したスーツの男がこちらに向けて手をかざすと、その掌に光が集まり、光でできた槍になった。
（殺される！）
夢と似た状況から、そう確信し、恐怖のあまりその場にうずくまる。その一瞬後に、下げた頭を光の槍が掠めた。
「む、外したか。運の良い奴だ」
運良く外れた事に安心したけど、その直後にまた手に光を集めてい

る男を見て、安心はあっさりと吹き飛んだ。
（し、死にたくねえ！）
その思いだけで立ち上がって、後ろに向かって走り出す。その一瞬前まで俺の居た所に光の槍が突き刺さった。
「逃げても無駄だ。恐怖を引き伸ばすだけだぞ」
そんな言葉に耳を傾ける余裕もなく、植えられた木々の合間を走る。
伸びた枝に制服を引っ掛けて破りながらも、木を貫いて飛んでくる光の槍を避けながら走る。
「はっ、はっ、はっ！」
息が荒くなり走るのが苦しくなったところで、木々を抜けて道路に面したところに出た。
そこで助けを求めようとしたが、運悪く人通りはなかった。
「良くぞここまで逃げた。褒めてやろう。だが、ここまでだ」
スーツの男が翼を広げて木々を飛び越えて来た。その手にはこちらに致命傷を与えられるだろう光があった。
「こ、こんなところで死んでたまるか！」
再び走り出そうとしたとき、足に激痛が奔り、俺はその場に倒れ込んだ。
「がっ！　な、何だ？」
痛みを感じる足を見ると大きな切り傷が出来ており、近くには光の槍が突き刺さっていた。
それを我慢して立ち上がろうとしたが、体の内側を焼くような感覚に襲われ、思うように体が動かない。
「なんだこれ……超痛え……」
叫ぶ力も起きず、地面に転がる俺の近くにスーツの男が降り立つ。
「そうだろう。光はお前らにとっては猛毒だからな。流石にかすり傷程度では死なんか」
男はそう言って手に新たな光の槍を作りだす。
必死で逃げようと手足を動かすが、体は少しも前へ進まない。
「これ以上足掻いても見苦しいだけだ……ぬぉ!?」

頭上を何かが通り抜ける音がすると、その後ろで爆発が起きる。重い頭を動かして振り向いて見ると、男の手から煙が上がっており血を流していた。
「その子に触れないでくれるかしら」
今度は前から声がしてそちらを向くと、紅髪の彼女がそこに立っていた。
「その紅い髪……グレモリー家の者か……」
「リアス・グレモリーよ、墜ちた天使さん」
さっきよりも恐ろしい雰囲気を発する男に対しても、リアス先輩は一切表情を変えなかった。
「この子は私の眷属よ。手を出すというなら容赦はしないわ」
「グレモリーの名に免じて今日の事は詫びよう。だが、次に同じような事があれば殺してしまうかもしれんぞ。精々目を離さないことだな」
「余計なお世話よ。この町は私の管轄なの。滅されないだけでも幸運と思いなさい」
「その言葉、そのまま返そう、グレモリーの次期当主よ。我が名はドーナシーク。再び見(まみ)えないことを願っているぞ」
そう言った男は羽ばたきの音と共に飛び立っていった。
それを見送っていたリアス先輩は視線を切るとこっちを向いた。
「大丈夫かしら、兵藤一誠くん？」
「足が物凄い痛いです……後、なんで俺の名前を？」
「自分の眷属だもの。名前ぐらい知ってるわ」
リアス先輩は怪我をした足に近づいてかがみ込む。
（眷属？）
痛みで朦朧(もうろう)とする頭が気になった単語を捉えた。
「あの……さっきの男も言ってましたけど、眷属って一体……」
「それはここでは説明できるような事ではないわね。立てるかしら？」
そう言われて初めて気がついたが、さっきまであった耐え難い苦痛がいつの間にか和らいでいた。これなら何とか立つことはできそう

だ。リアス先輩の手を借りてなんとか立ち上がる。
「それで、ここじゃできないって言いましたけど……」
「ええ。そうね……部室に行きましょう」
「部室ですか？」
リアス先輩が何の部活に所属しているのかは知らないが、この時間では学校はもう閉まっているんじゃないのか？
「ええ、オカルト研究会の部室よ」

あれから数分後。俺は駒王学園の旧校舎――オカルト研究会の部室に居た。
ここに居るのは俺とリアス先輩の他に三人。
黒髪をポニーテールにした三年生、姫島朱乃先輩。
同じ二年生のイケメン、木場裕斗。
一見小学生に見える小柄な一年生、塔城小猫。
そして俺はそこで常識を一変させる事を聞いた。
空想上の存在だと思っていた天使・堕天使・悪魔といった超常の存在が実在し、相争っていること。
彼女であった天野夕麻が堕天使であり、俺は一度彼女に殺されていること。
その理由が俺の身に宿る神器（セイクリッド・ギア）と呼ばれる存在であること。
そして一番重要なことは、死んだ俺がこうやって生きているのは俺の死にたくないという想いをきっかけに呼び出されたリアス部長のおかげであるということ。
だがそれでも一つだけ納得できない事があり、思わず俺の神器（セイクリッド・ギア）である赤い籠手に包まれた左腕を目の前の机に叩きつけてしまった。
「……イッセー？」
俺のいきなりの行動に驚いたリアス先輩が恐る恐る声をかけるが、

今の俺にはそれは神経を逆撫でするだけだった。
「確かに死にたくないとは願いました。けど、誰も悪魔にしてくれなんて頼んでないです！」
俺は恐ろしかった。夜であるため今も体に満ちている異常な力が、悪魔という『化物』の力だという事が。
しかも下僕というポジション。リアス先輩は美人だが、それとこれとは話が別だ。
「それについては謝るわ。でも、死ぬ寸前だったあなたを救うには悪魔に転生させるしか方法はなかったの」
「その結果、また殺されそうになったじゃないですか！　これじゃ命が幾つあっても足りませんよ」
これは転生させられたすぐ後にさっきの事を教えてくれたら避けられたはずだ。
「悪魔と堕天使は確かに仲が悪いけれど、もし出会ったとしても殺し合いになる事は希（まれ）よ。悪魔も堕天使も数が少なくなっているから、下手にいざこざを起こせば戦争になって共倒れになるのはお互いに望むところではないから」
「じゃあ、なんで俺は殺されかけたんですか？」
「おそらくだけど、『はぐれ悪魔』と勘違いされたのね」
それはあのドーナシークという堕天使も言っていた。
「はぐれ悪魔というのは、自らの主を裏切り、主なしで行動する転生した下僕悪魔たちの事よ。彼らは悪魔からも追われる身だから、天使や堕天使に殺されても争いの火種になることはないわ」
事情も分からない内にそんな奴らと間違えられて殺されかけたのか。
「さて、これからのあなたの事だけど――」
「結構です。俺は悪魔として生きる気はありません」
俺は悪友たちとバカやって、いつか結婚できればそれでいい。……結婚の方は前途多難だが。
「無理よ。あなたはもう悪魔なの。人間として生きていく事は出来ないわ。悪魔の寿命は１００００年。人間とは比較にならない程長命

なのよ？」
（……何だって？）
音を立てて椅子から立ち上がる。もう一秒だってここには居たくなかった。
怪訝そうな視線を無視して出口に向かう。
「どこへ行くつもり？　まだ話は終わってないわ」
その言葉を聞いて、俺の中の何かが音を立てて切れた。そして内に抱えた不満が溢れ出す。
「ふざけないでください……！　人を勝手に悪魔にして、１００００年なんて長すぎる年月を生きるような体にして、その上まだ俺の事を拘束するつもりですか？　俺は普通に生きていたかったんですよ。『化物』として生きているぐらいなら人間として死んだ方がましだった！」
部屋の扉を開け、外に出る。
「もう二度と俺に関わるな!!」
最後にそう言い残して、部室の扉を思い切り閉めた。

「――部長、どうしますか？」
イッセーの居なくなってしばらくしてから、私の右腕とも言える存在である姫島朱乃が意見を求めてきた。
「しばらく放っておきましょう。今は色々あって混乱しているんだわ。はぐれ悪魔のことは伝えたのだから、勝手な事はしないでしょう」
「分かりましたわ」
私の意見に賛同する朱乃。裕斗も小猫も異論はなさそうだった。
だけど、後になってこの時の私は見通しが甘かったことを知る。普通であったならこれで良かった。だけど彼の神器（セイクリッド・ギア）は例外に属する物だった。
彼の神器（セイクリッド・ギア）は神器（セイクリッド・ギア）の中でも別格である神をも倒す力を持つ神器（セイクリッド・ギア）――神滅具（ロンギヌス）と呼ばれる１３種の神器（セイクリッド・ギア）の一つ――赤龍帝の籠手（ブースト・ギア）。

三大勢力が結束してようやく封印できた、神をも超える強さを持つ二天龍の片割れが封じられた、力を極大まで倍加していく神器（セイクリッド・ギア）という途方もない力を持っている事を、今の私たちは知らなかった。

オカルト研究会の部室を出てから延々と走り続け、家の近くの住宅街に入ったところで足を止めた。

「くそっ！　なんでこんな事に！」

苛立ちから左拳をブロック塀に叩きつけると、ブロック塀が簡単に砕けた。それをやった俺の左腕は赤色の籠手に包まれていた。

「元はといえばこいつがあったせいで……！」

いっそのこと壊れてしまえと、何度も何度もブロック塀に籠手を叩きつける。だけど壊れるのブロック塀だけだった。

「くそっ、くそっ！」

「そこの悪魔で龍（ドラゴン）な少年、荒れてるねえ。何か悪いことでもあったのかい？」

声がした方を振り向くと、闇夜に溶け込むような黒一色の和装の裾と長い黒髪を風にたなびかせた中性的な容姿をした『なにか』がそこに居た。

Encounter

「こんなに綺麗な月が出てるのに、辛気臭い顔をして……何があったか私に話してみる気はある？」

その服装を簡単に説明するなら和装――剣道や合気道などの道着が近い。目の前の奴はそれに更に振袖をコートのようにして来ていた。

こう表現したが目の前の前の衣装は黒一色でそれにアレンジを加えたものであり、正式なそれではなかった。

「お前……誰――いや、何だ？」

目の前の黒い人に見える何かはさっき襲った堕天使どころかリアス先輩よりも強い威圧感を纏(まと)っていた。

しかし態度は普通の人と違わない。だから分かった。こいつは絶対的な強者だという事が。

「何、ね……初見でそう言われるとは思わなかった。まあこの場合は君の同類かな？　ロウとでも呼んでくれ」

「あんたも下僕悪魔なのか？」

「否(ノー)。そっちじゃない方。左腕の方だよ」

俺の左腕にあるのは赤い籠手。俺の神器(セイクリッド・ギア)。

「あんたも神器(セイクリッド・ギア)を持ってるのか？」

「是(イエス)。そして私も君と同じく、神器(それ)に人生を狂わされた者だ」

ロウと名乗った人間――神器(セイクリッド・ギア)は人間にしか宿らないそうなので、人間なのだろう――は、和服の袂(たもと)から煙管(キセル)を取り出したところではたと動きを止めた。

「っと、学生さんの前で吸うのは止めておくか。それに最近は分煙だのなんだのうるさいし」

それでもキセルを仕舞うことはなく、指の間でくるくると回し始める。

「さて、話してごらん少年。それだけで変わる事もある」

そう促されて、俺は夕麻ちゃんに殺されてから今までの事を話した。

「成程ねぇ……災難だったね。神器（セイクリッド・ギア）を持っているだけで殺される奴なんてそうはいないよ」
ロウは悼（いた）むような憐（あわ）れむような表情で見る。
「だけどそれもしょうがないか。――そう言わざるを得ないね。そんな神器（セイクリッド・ギア）を見せられたら」
俺の左腕の赤い籠手を見据えてそう言うロウの目は険しい。
「これ、そんなにやばい物なのか？」
「そりゃあもう。数ある神器（セイクリッド・ギア）の中でも極めつけ。何せ全１３種しかない神殺（ロンギヌス）しと呼ばれるカテゴリに属するぐらいだ」
「ロンギヌス……」
神話には余り詳しくない俺でも名前ぐらいは聞いたことはある。
「使いこなせれば神をも殺せる力を手に入れられるほどの力だ。殺すという手法も決して悪とは呼べない。もし誤って暴走させればこの町ぐらいなら簡単に消し飛ぶぐらいだからね」
（それにしても、普通神器（セイクリッド・ギア）は第二次成長期頃には発現するものだけどな……）
そう聞かされて、不安が一層大きくなる。もしかしたら俺はあの時死んでた方が良かったんじゃないか？
「迷ってるね？　まあそうだろう。普通の精神構造をしているなら自分に爆弾になる可能性があると聞かされて平常心を保てる人は少ない。だが安心しなさい。力はキチンと制御できる。詳しい事はあなたに宿る存在に聞くといいよ」
「俺に宿る存在？」
「あら、気づいてない？」
ロウは首を傾げると腰掛けていた塀から降りてこっちに近寄ってきた。
「君の神器（セイクリッド・ギア）、名前は赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）と言うんだけどね。これはとあるドラゴンを封じた神器（セイクリッド・ギア）なんだよ」
「ドラゴン……そんなのまで居るのか」
世界には人間が思っている以上に知らない事があるんだな。
「そうドラゴン。その中でもこれに宿っているのは極めつけに厄介な

存在。なにせ神と天使、悪魔、堕天使の三すくみの戦争を自身と同等な存在との喧嘩で停戦に追い込むくらいには厄介だ。それだから神器（セイクリッド・ギア）に封じ込められちゃったんだけどね」

そう言いながらロウは手先で弄んでいたキセルで赤い籠手（ブースティッド・ギア）を叩く。

「起きなさい、ドライグ。寝すぎよ」

それをきっかけとしたのか、赤い籠手の緑色の宝玉が光を放った。

『――誰かは知らんが随分な言いようだな。俺はだいぶ前から目覚めていたぞ。ただこいつの力が弱くて表に出てこれなかっただけだ』

籠手から響く力を感じさせる声。これが俺の中にいるドラゴンの声か。

「なんだって構いません。後で彼に自分の力の使い方を教えてあげなさい、赤い龍（ウェルシュ・ドラゴン）。白い龍（バニシング・ドラゴン）に出会う前にね」

『それぐらいは言われんでもするさ。俺としてもあまり宿主に死んで貰いたくはないからな』

「ならいいでしょう。少年、神器（セイクリッド・ギア）についての事はこいつに聞きなさい」

「あ、ああ……」

話についていけなかったが、話は勝手に進んでいった。

「さてここで質問（クエスチョン）。少年、君はこれから一体どうする？」

「どうするって……」

そもそも、何ができるのだろうか。

「選択肢を絞ろうか？　そうだね――」

1．このまま悪魔として生きる。

2．悪魔なんて無視して今までのように生きる

3．ここで死ぬ

「では、考え時間（シンキングタイム）、スタート」

ロウの提示した選択肢について考える。

1は悪魔である事を除けばそう悪くもないかもしれない。昇格できれば自分も上級悪魔という貴族になれる可能性があるという。もしかしたら人間だったままよりいい生活が出来るかもしれない。

２は俺が一番望む事だ。悪魔の事なんか忘れて今までのように何も知らずに平穏に暮らす。だけど、悪魔と神器（セイクリッド・ギア）という得体のしれない力がある事を除けばだ。

それに、俺が生きていると分かったらまた堕天使が現れて俺を殺そうとするかもしれない。そんな時、家族や友達が巻き込まれない保証はない。

３は……これが一番後腐れがないのかもしれない。父さんと母さんは悲しむだろうけど、本来なら俺はもう死んでいたはずなんだから。

でも、俺はこれを受け入れる事はできない。死ぬ間際に死にたくないと願ったからかは分からないけれど、俺は死ぬという事に極度の抵抗がある。

もし選ぶとしても最後の最後だろう。

となると残った選択肢は１か２。だけど、そのどっちもが簡単には受け入れがたい。

（ついこの間までは彼女で一喜一憂してたってのに、なんで生き方まで考えなきゃいけないんだ……）

そう思って恨みがましい視線を左腕に向けると、何を思ったのか俺に宿る存在（ドライグ）が声を発した。

『俺はお前の生き方にそこまで干渉する気はないが、死にたくないのなら力だけは付けておけよ。白いのとの戦いだけは避けられんからな』

「なんだよ、その白いのって」

『白龍皇という俺と同格の存在だ。俺たちは喧嘩の末に神器（セイクリッド・ギア）に封印されたが、その因縁はまだ続いている。歴代の赤龍帝と白龍皇の神器（セイクリッド・ギア）の所有者は会う度に殺し合いを続けてきた』

俺の神器（セイクリッド・ギア）は呪いのアイテムだった。教会に行けば外せるだろうか。死んでも迷惑な奴らだ。なんでこんなのの意識が遺（のこ）ってるんだろう。

それは今は後回しにするとして……だとすると普通の人間として生きていくのは難しいか。だとすると１……。

（あんな啖呵（たんか）を言ったのに戻れない……）
　そもそも戻りたくもない。死ぬ前の俺なら美少女に囲まれる生活になるから望むところだったかもしれないけど、今の俺は女の子が少し怖いので、美少女に囲まれる生活は遠慮したい。
「選択肢、４――」
　そうやって悩む俺をじっと見ていたロウが唐突に口を開く。
「今の自分をこんな目に遭わせた世界に対して復讐（ふくしゅう）する――」
「復、讐……」
　これからどうするかを悩む俺にとって、復讐という言葉はストンと胸の内に落ちた。
「君は憎くないかい？　君をこんな世界の裏側に引き込む神器（きっかけ）を与えた神が。神器（セイクリッド・ギア）を持っているだけで危険視して君を殺した堕天使が。再びの生の対価に従属を強要する悪魔が」
　はいかいいえかで言ったら憎くないはずがない。そのせいで今の俺はこんなにも悩んでる。
「だったら復讐してもいいと思うんだよ。目には目を。歯には歯を。右の頬を打たれたら左の頬を打ち返しなさい。やられたらやり返すのは生物としてごく自然な事だよ」
「やられたら、やり返す……」
「それに、聞くところによると下僕悪魔には凶暴なはぐれ悪魔の駆除を命じられたり、下僕悪魔同士を戦わせる娯楽もあるそうだよ。確か君の願いは『死にたくない』だったよね？　だとしたら、悪魔になるのは少し危険じゃないかな？」
　確かにその通りだ。でも――
「はぐれ悪魔になると討伐命令が出るんだろ？」
　悪魔として生きるよりもそっちの方が死ぬ危険性が高いだろう。
「なら悪魔になる？　朝鮮半島の南北間よりも切迫してる三大勢力の一員に？　もし戦争が起こったりしたら、君たちは最前線の一『兵士』だよ？」
「ぐっ……」
　日本人の俺にとっては分かりやすい例えを出されて言葉に詰まる。

そんな俺を見て、ロウは穏やかな笑顔を浮かべた。
「どうやら口を出しすぎたみたいだ。ごめん、困らせるつもりはなかったんだけど」
ロウは謝って俺に背を向けて歩き出した。
「最後に一つ。直(じき)にこの町に一人のシスターが来る。その子は君と同じ――いや、それ以上に神器(セイクリッド・ギア)のせいで人生を狂わされた子だ。話してみる事で何か得られるものがあるかもしれないよ」
俺の他にも神器(セイクリッド・ギア)のせいで人生を狂われた人がいた。その子が一体どういう風に育ったのか。それを知りたいと思った。
「君がどういう選択をするにしろ、それは君の命。君だけの生だ。誰かに選択を求められても、最終的に決めるのは君自身だ。せめて、最期の瞬間に君が後悔しないように過ごせるように祈っているよ」
ロウが去って、俺は一人取り残される。
俺は考えの纏まらない頭のまま、家への帰路についた。

家に着いた俺は夕飯も食わずに自室に戻ると、ベッドの上で横になる。
『おい相棒、落ち込んでるとこ悪いが話をしてもいいか』
そんな俺の心に話しかけてきたのは当然俺の神器(セイクリッド・ギア)に宿るというドラゴン。名前は確かドライグって言ったか。
「うるさい。誰が相棒だ」
俺がこうなっているのも大元まで遡ればコイツのせいだ。しかも宿主に戦いを強要させるんだから質が悪すぎる。さっさと成仏しろ。
『お前の怒りももっともだがな。だからこそ話しておく必要がある』
その言葉を聞いて俺は自分の左手を見る。手の甲が緑色に発光していて不気味だ。

『確かに俺という存在に気付いたこれまでの宿主も当初は混乱していたが、その内慣れた。だからそこは置いておいて話をさせてもらうぞ』
「話って、さっきの『白いの』の事か」
『そうだ。正式には白龍皇アルビオンと言う、俺の永遠のライバルだ』
俺からしたら迷惑でしかない。出来ることなら会わずに済ませたいぜ。
『そうなる事も無かったわけじゃないが、大抵は出会っていた。中には白龍皇を二代に渡って倒した奴もいるぐらいだ』
「それで、白龍皇がどうしたってんだよ。言っとくがな、俺はお前たちの喧嘩に巻き込まれるつもりはないからな！」
そう宣言すると、ドライグはクククと笑った。
『それはお前の好きにしろ。どうせ強制はできんからな。だが、俺の能力（ちから）ぐらいは教えてやろうと思ってな』
「お前の力？」
『神器（セイクリッド・ギア）の力とも言えるがな。赤龍帝（ブーステッド・ギア）の籠手の力は１０秒ごとに力を倍にする事と倍加した力を他へ譲渡する力だ』
１０秒ごとに倍か……長いな。
『本来の俺ならそんな待ち時間は要らないがな。一瞬で力を何倍にも高めることができた』
それってもう無敵なんじゃないだろうか。
『そうでもないさ。一瞬で倍にできると言っても、持続するのは一瞬だ。その分、十秒ごとに上げれば倍加した力の持続時間は長くなる』
「それで、お前はそれを俺に聞かせてどうしたいんだ？」
『お前は死にたくないのだろう？　なら、俺の力を使えるようになるのは損ではないぞ？　それに、ドラゴンは力を引き寄せる。俺が目覚めている以上、争いは避けられんさ』
「ちょっ……少し待て！」
しかし、俺の呼びかけにはドライグは応えず、手の甲の光も消えていた。
それから何度も呼んでも返事はなく、色々聞かされて疲れていた俺

はいつの間にか眠っていた。

Ｓｉｓｔｅｒ

学校の帰り道、ロウに言われたシスターを探そうとしたのだが……。

「手がかり無しで見つかるはずないよな……」

ノーヒントで見つけるとか相当運が必要だろ。そして俺に運がない事は明白である。

「きゃうっ！」

可愛い悲鳴に後ろを向くと、シスターの格好をした女の子が地面に大の字になっていた。

転んであの体勢になったという事は、思い切り顔面を地面に打ち付けただろう。

（見つけちゃったよ、シスター……）

使い切った運が回復してきたのか？

「だ、大丈夫ですか……？」

最近芽生えた女の子に対する苦手意識もどこぞへ吹き飛び、心配になって転んだ時に外れたヴェールを拾って声をかける。

「あぅぅ……はい、大丈夫です。ありがとうございますぅ」

起き上がった女の子を見て息を呑む。綺麗な金髪にグリーンの瞳。それを見た俺は彼女に思わず見蕩れてしまった。

が、その直後に彼女の胸にかかるロザリアを見た瞬間、全身に悪寒が走りそんな気分は吹き飛んだ。

悪魔にとって十字架は忌避すべきものである事は知っていたが、ここまでとは思わなかった。

「あの……？」

ヴェールを差し出した姿勢のまま固まっていた俺を心配してか、シスターさんはおずおずと声をかけてくれた。

「あ、ごめん」

声をかけられた事で硬直は解けたものの、なんて声をかければいいのか分からない。初対面の相手に神器（セイクリッド・ギア）の事を教えてもらうとか無理じゃないか？

「ええっと……この町には旅行で？」
「いえ、今日からこの町の教会に赴任する事になったんです。けど道に迷ってしまって……それと私は日本語が得意ではなくて道行く人とは言葉が通じず……」
（ん？）
だったら何故俺には言葉が通じてるのだろうか。悪魔の力か？
けど話が通じるのは好都合だ。
「教会の住所って分かる？」
「あ、はい。ええと……」
聞かされた住所は俺でも分かる場所であり、そこにはちゃんと教会があることも知っていた。
「ここの教会、もう潰れてるはずなんだけど？」
それを聞いた瞬間、シスターの表情が一変した。驚いたのであったら納得できたが、その表情から読み取れるのは恐怖だった。
「どういう事か説明して貰えるか？」
「はい……」

立ち話もなんなので、近くにあるファーストフード店に向かう事にした。その途中で転んで怪我をしている子供が居た。
近くに親が居て、擦りむいて少し血が出ているだけなので放っておこうとしたが、シスターはその子供に近づいて膝を着く。
かがんだ彼女は泣く子供に二三言葉をかけると、傷口に手をかざす。すると淡い緑色の光が輝いた。それと同時に俺の左腕が疼（うず）きだした。
中二病ではない。恐らくはあの光――多分彼女の神器（セイクリッド・ギア）と共鳴しているんだろう。
数分も経たない内に、傷は綺麗さっぱり消えてしまった。
「ありがとう、お姉ちゃん！」
それを見た母親はそそくさと立ち去ってしまったが、子供の方は去り際に手を振りながらお礼を言った。

その事を伝えてあげると、彼女は嬉しそうに笑った。
「それが君の神器（セイクリッド・ギア）？」
そう尋ねるとシスターは驚いた顔をした。
「はい。そして、これが私がこの町に来た原因でもあります」

店内に入った俺たちはまず注文した。その際に彼女は自力で注文しようとしたのだが、結局言葉が通じずに俺が注文した。その後も包装の剥がし方や食べ方も分からない少女に色々教えた。
（シスターがファーストフードなんて想像できないしなぁ……）
注文した物を食べて一息吐いた後、俺は彼女の話を聞く。それは『聖女』として祭り上げられ、『魔女』として逐（お）われた少女の物語だった。
生まれてすぐに捨てられた彼女は、教会兼孤児院で過ごすことになる。
彼女に転機が訪れたのは八歳の頃。偶然怪我をした犬を不思議な力で治したことが教会の関係者に見つけられる。
それ以降、彼女はカトリック教会本部で人々の怪我を癒すようになる。
彼女に不満はなかった。生来が優しい彼女にとって、人々の怪我を治すのは喜びであった。
しかし、不満がないわけではない。聖女と呼ばれた彼女はその立場故に、優しくしてくれる者は居ても親しくしてくれる者はいなかった。
そしてその日々も終わりを迎える。何かを治した事で始まった彼女の暮らしは、同じく誰かを治した事で終わりを告げた。
ある日、彼女は傷ついた悪魔を見つけ、それを治した。
これが周りに知れ渡り、聖女と崇められた彼女は一転して魔女と恐れられ、教会を追放された。
行く宛ても無い彼女を拾ったのは堕天使を戴（いただ）く極東の『はぐれ悪魔祓い（エクソシスト）』の組織。

神を信じ、神に人生を捧げた少女は、神を裏切った者たちの元に辿り着いた。
しかし、何より彼女がショックだったのは、彼女が異端とされたとき、誰も庇ってくれる人が居なかった事である。
「……私の祈りが足りなかったんです。主は未熟なシスターである私に修行を与えてくれるんです。だから友達だってきっといつかできます」
そういう彼女の顔を俺は直視できなかった。
(なんでだよ神様……なんでこんなにもあんたを信じてる子に対して何もしてやらないんだよ!)
彼女はこのまま行けば堕天使の所へ行く。俺を殺したのと同じ堕天使の所へだ。奴らは神器(セイクリッド・ギア)を危険な物だと見ている。そんな奴らの所で彼女が幸せになれる訳が無い。
神は彼女を救わなかった。なら、彼女を一体誰が救える?
「……俺、兵藤一誠って言うんだ。イッセーって呼んでくれ。君の名前は?」
「あ、そういえば自己紹介がまだでしたね。アーシア・アルジェントと言います」
「それじゃあアーシア。唐突で悪いんだけどさ、俺の話も聞いてくれるか?」
「はい、なんでしょうか」
そして俺はアーシアに話し始めた。ここ数日の出来事――堕天使に殺されたこと。神器(セイクリッド・ギア)を宿している事が分かったこと。そして、悪魔に転生したことを話した。
俺が悪魔と知った時は流石に驚いたアーシアだったが、それで逃げられる事はなく、最後まで話を聞いてくれた。
「それでさ、アーシア。神器(セイクリッド・ギア)って一体なんだと思う?」
俺はこれを聞いておきたかった。同じ神器(セイクリッド・ギア)に人生を歪められた者として、これだけは聞いておきたかった。
「えっ……やはり、神様からの贈り物、ではないでしょうか?」
シスターであるアーシアはこう答えた。アーシアとは少ししか会

話していないが、とても彼女らしいと思った。
「でもさ、そのせいでアーシアは言葉も通じない国の堕天使の所に来て、俺は一度死んで悪魔になってるんだぜ？　いくら試練だって言っても、人間死んだらそこで終わりだろ？」
「それはそうですが……」
アーシアは言葉を言い渋る。ここに至ってなお、彼女は神を信じてるのだ。その祈りが真摯であるほど、俺の中で憤りが膨らんでいく。
恐らく彼女を追放した奴らよりも信仰が深い彼女を何故神は見捨てたのか。
神様じゃない俺にはその理由は分からない。でも、神様じゃないからこそ彼女にできる事がある。
「なあアーシア、お前には夢ってあるか？」
その質問に、アーシアは掠れるような声で、しかし力強く答える。
「お友達と一緒に、仲良く過ごしたいです……！」
目が僅かに潤んでいるのはこのままではその夢が叶わないと思っているからだろう。彼女はこのままだと堕天使のところに行くことになる。そうしたら普通の人間とは関われなくなるだろう。
だが良かった。その願いなら俺でも叶えられる。
「アーシア、君さえ良かったら俺と友達になってくれないか？」
同情からでは無い。確かに一心に神様を信じるこの子が報われないのは嘘だと思った。
けど俺はそんな事よりも、ここまでのほんの僅かな時間だけ見た彼女のコロコロ変わる表情をもっと見てみたいと思った。
アーシアを見ると、ポロポロと涙を流していた。
「わ、悪い！　やっぱ、俺なんかと友達じゃ嫌だったよな！」
よく考えれば女の子に嫌われる事に定評のある俺だった。そんな常識を忘れるぐらいな事になってもそこは変わってなかった事を忘れていた。
「あぁ！　違うんです。これは嬉しくて……お友達になって下さいなんて言われたことなくって」
（良かった。ここで拒絶されてたら立ち直れなかった）

俺は片手にトレーを持って、もう片方の手でアーシアの手を握る。
「それじゃ、遊びに行こうぜ」
「はい！」

「ふぅ……どうだアーシア、楽しかったか？」
あれから僅か一二時間ほどゲームセンターで遊び、日が暮れた公園のベンチにアーシアと二人並んで座っていた。
「はい。今までで一番楽しかったです！」
彼女の顔は満面の笑みが浮かんでいる。これだけで遊んだ甲斐があった。財布の中が空っぽになったけど。
「でも、これから私どうしましょう？　行く宛てもありませんし……」
「それならうちに――」
「見つけたわ、アーシア・アルジェント」
バサリという羽音と共に、黒い羽を散らして俺を殺した女が空から降りてきた。
「天野夕麻！」
「私の本当の名前はレイナーレよ。下級悪魔になってまで生きてるようなあなたには呼んで欲しくないけどね、イッセーくん？」
完全に馬鹿にした口調でそう言うと、夕ま――レイナーレはアーシアに視線を向ける。
「一向に来ないからどうしたかと思えば、まさかこんなのに誑(たぶらか)かされてるなんてね。来なさい、アーシア。そんな薄汚い悪魔に関わってはいけないわ」
「それもこれも全部お前のせいだろうが！」
ベンチから立ち上がり、アーシアを庇うように前へ出る。それと同時に神器(セイクリッド・ギア)も出現させ、昨日練習した通りに起動させる。

『Ｂｏｏｓｔ！』
それを見た堕天使はせせら笑った。
「それ、龍の手？　どこにでもある三級神器じゃない」
（おい、どういう事だよドライグ？　お前は神滅具とかいう凄い神器じゃなかったのか？）
『龍の手は能力を二倍にするドラゴン系の神器だ。赤龍帝の籠手と見た目がそっくりだからな。よく間違われる』
つまり、赤龍帝の籠手の下位互換か。
『だが、これはチャンスだぞ。相手は油断している。時間を稼げ。そうでもしないと今のお前に勝ち目はない』
（分かった）
ドライグの言葉に頷いて、レイナーレに向き直る。
「お前、アーシアをどうするつもりだよ？」
「下級悪魔が話しかけないでくれる？　それに、そもそも教えるわけないでしょう。死にたくなかったらさっさとどこかへ行きなさい」
そう言いながらレイナーレは手に光の槍を作りだす。
（ドライグ、駄目だ！　会話が続かない！）
くそっ！　俺には女の子とのトークスキルはないって言うのかよ！　堕天使だから子が付くかどうかは知らないけど。
「さあアーシア、来なさい。あなたは私の計画に必要なの」
アーシアは俺の服の裾を掴む。その手は震えていた。
「アーシアの代わりに俺が答えてやるよ。お前らのところに行くのは嫌だってよ」
そう答えた瞬間、俺の足元に光の槍が突き刺さった。
「次は当てるわ。分かったならさっさとアーシアを渡しなさい」
「……へ、やなこった。人殺しに友達を渡すわけないだろ」
言葉だけなら強気だが、背中には嫌な汗がダラダラ垂れる。
（俺、一回あの槍で死んでるんだよな）
見ているだけで怖い。だが、アーシアのためにもここで逃げるわけにはいかない。
「イッセーさん……」

「大丈夫だ、アーシア。アーシアは俺が守る」
（おい、ドライグ。俺はもうあいつを倒せそうか？）
『あいつは堕天使の中でも大したことはなさそうだから二三回倍化すれば十分だと思っていたが……いかんせん元が悪すぎる。確実に倒したいなら後少し時間を稼げ』
俺が弱すぎるって事ですね！
『それと、下手に攻撃を受けるとせっかく高めた力が元に戻るから気をつけろよ』
（ドライグさんそれ言うのが遅い！）
「それじゃあ死になさい」
容赦なく光の槍が振りかぶられた。今度は間違いなく俺に命中するだろう。
「くそっ！」
せめてもの抵抗として、頑丈そうな籠手を盾代わりに前に出す。直後、左腕に衝撃が奔った。
なんと驚くことに籠手に光の槍がぶつかって弾いたようだ。
「バカなっ!?」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）！』
レイナーレが驚いたとき、更に俺の力が倍化した。
『もういけるぞ相棒。奴をぶっ飛ばせ！』
「おう！」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（エクスプロージョン）！』
俺は目の前のレイナーレ目掛けて拳を振り上げて飛びかかる！
その速さは悪魔になった俺の夜の時よりも更に速くて自分でもびっくりしている。
「でりゃぁぁぁ！」
掛け声を込めて思い切りレイナーレを殴り飛ばす！　殺された恨みがあるから女であろうと手加減無しだ。
斜め上から顔面を殴られたレイナーレは頭部を地面に叩きつけてから二三度跳ねて、近くの木にぶつかって止まった。自分でも少し引くほどの威力だ。

「よ、よくもやったわね……！」
木に倒れてかかっていたレイナーレがよろけながらも立ち上がってきた。人間なら頭蓋骨骨折とかなってもおかしくなかったのに。堕天使って人間よりも頑丈なのかね。
「まさかその神器（セイクリッド・ギア）が龍（トウワイス・クリティカル）の手じゃなくて赤龍帝（ブースト）の籠手（ギア）とはね……まあ、そうでなければお前のような下級悪魔が私に敵（かな）うはずもないけど」
「へっ、それが分かったからどうだって言うんだ？　お前はもうボロボロ。一方の俺は力が何倍にも高まってる状態だ。それで俺に敵うと思うな！」
左手を前に突き出してビシッと言ってやった。
『Ｒｅｓｅｔ（リセット）』
ん？　今不吉な音声が流れたぞ。
（あのー……ドライグさん。つかぬ事をお伺いしますが、今のは一体？）
『倍化した力が元に戻ったのを知らせた』
（少しは空気読め！）
だが、誤魔化せば問題は……。
「どうやら時間切れのようね」
バレてるだとー!?
『異形の者なら見れば相手の力量ぐらい普通に分かるからな』
「で、でもそのボロボロの有様で勝てるのか？　立ってるのもやっとじゃねえか」
「ふふ、そうね。でも、私は一人ではないわ」
レイナーレがそう言うと同時に、上からバサバサという羽音と共に三人の堕天使が降りてきた。よく見ればその内の一人はこの間俺を襲った奴だった。
「くっ！」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）！』
慌てて赤龍帝（ブースト）の籠手（ギア）を使用する。だけど、もうこれが赤龍帝（ブースト）の籠手（ギア）だという事は知られている。さっきのようには行かないだろう。

「どうしたレイナーレ。あの様な者に手こずるとは情けない」
「あいつの神器（セイクリッド・ギア）が赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）だったのよ」
「何だと!?」
　それを聞いた堕天使たちは一様に驚いた。そして、全員が一斉に手に光を集め始める。
（まずい。これで勝ち目は消えた）
　素人目に見てもあれはあいつらの本気である。受けたらその場で消滅してもおかしく無いほど強い光。
「赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）の持ち主といってもまだ目覚めたて。当初の指令通りここで殺しなさい！」
　レイナーレの命令に従い、堕天使たちは一斉に光を槍の形に変えて投げてきた。
　もうこれで光の槍を投げられるのは何回目だろうか。その経験のせいか、分かりたくない事が分かってしまった。やけに世界がスローに見える中、ぼんやりと思った。
（あ、これは死んだ……）
　そう思いながらも体は勝手に動く。せめて後ろにいるアーシアだけは庇おうと、アーシアに当たりそうな軌道で飛ぶ光の槍に向けて左手を伸ばす。
　光の槍が赤い籠手にぶつかる。――その寸前、黒い影が間に割り込んだ。
「よしよし、頑張ったな少年」
　黒い和装を着た神器（セイクリッド・ギア）使い、ロウが俺たちを守るように立っていた。
「後は私に任せなさい」

Ｅｓｃａｐｅ

「んー……ここまで大事になるとは思ってなかったな。ここは反省の気持ちも込めて私に任せておきたまえ」
　堕天使四人を前にして、何も気負ったところを見せない態度を取るロウに、堕天使たちは苛立ちを覚えた。
「どこの誰だか知らなけど、邪魔をするようなら殺すわよ」
　レイナーレの最後通牒を聞いたロウは火の着いた煙管（キセル）を吸って紫煙を吐き出す。
「単なる通りがかりなら出てきたりはしないんですけどね。こうなった原因は私だと思いますから、この二人を守る責任が私にできてしまったんですよ」
　至極面倒そうな仕草で煙管を咥えて上下に動かす。
「だったら死になさい」
　レイナーレが手を挙げると、他の三人の堕天使が手に光力を集める。
　それと同時に、対峙する俺たちと等間隔の位置に赤い魔方陣が現れる。
「ああ……更に厄介なことに」
　その魔方陣から現れたのはリアス先輩たち悪魔だった。
「町の外れで騒ぎが起こってると思ったら……堕天使たちが集まって何をしているのかしら？」
　状況を把握したリアス先輩の第一声はそれだった。
「貴様に言う必要はない。これは堕天使の問題よ、悪魔如きが関わらないでもらえる？」
「そういう訳には行かないわ。ここは私が管理する町だし、そこに居るのは私の下僕よ。関係がないとは言わせないわ」
　二人が口論を始め、その間にロウが小声で話しかけてきた。
「――少年。合図したらそこの少女を連れて公園から逃げなさい」
「お、おう」
　その間にも二人の口論はヒートアップしていき、二人の側の人たち

も険悪な雰囲気を高めていた。
「……まあいいわ。あなたたちの狙いはそのシスターかしら？　なら彼女を連れてさっさとこの町から出て行ってくれる？」
（な、何だって!?）
今、リアス先輩は事を穏便に収めるためにアーシアを差し出そうとした。
「話が早くて助かるわ」
そして堕天使と悪魔が揃ってこっちを向いた時だ。
「振り返らずに行け、少年。お姫様を守って上げるのは男の役目だよ」
「分かった！」
ロウからの合図を受け、俺はアーシアの手を引いて走り出した。
「逃がすな！」
「待ちなさい！」
二人の声を背に受けて俺は振り返る事なくアーシアの手を引いて走る。
「――行かせないよ？」
後ろで聞こえたロウの声に頼もしさを感じながら、俺は公園を駆けた。

「裕斗、追って！」
「はい、部長！」
眷属の中で一番足の速い裕斗に命じてイッセーの後を追わせる。
「――行かせないよ？」
だけど、正体不明の人間が煙管を口から離し息を吹くと、口から真っ黒な煙が大量に吹き出して辺りを覆い隠した。
視界が利かない中で数度の金属音がし、何かが倒れ込む音がする。
その直後に無数の羽音と共に黒煙が吹き払われる。
辺りが見えるようになると、裕斗が黒い人影の足元に倒れており、堕天使の一人――コートを着た男が居なくなっていた。

「朱乃、イッセーを追って頂戴」
　このままでは堕天使の男によってイッセーが殺されるかもしれない。
「はい、分かりましたわ」
　朱乃は頷いて悪魔の翼を広げて飛び立つ。
「おっと、行かせませんよ」
　黒い人は煙管を逆さにして管を指で叩いて先端から黒い塊を落とす。それが地面に落ちた瞬間、辺り一体を包む結界が張られた。
「これで私を倒さない限りこの中からは抜け出せません。追うのであれば私を倒していけ」
　私たちを閉じ込めた人間は愉快そうに笑う。
「邪魔をしないで。堕天使が一人居なくなっているのが分からないの？　下手をすればイッセーはそいつに殺されるわ」
　私がそう言うと堕天使共がクスクスと笑う。それが私の神経を逆撫でする。
「あんなの程度に殺されるようでは彼に先はありませんよ。人が成長するには試練が必要です」
　それを聞いて、私はなんとなくだがこいつは堕天使をわざと見逃したのかと思った。
「……もういいわ。手っ取り早くあなたを先に殺しましょう。そうすればこの結界は解けるのでしょう？」
「ええ。ですが――」
　そこで人間は鋭い視線で私たちを睨みつける。
「貴様ら如きが私を倒せると思うなよ。本気で殺したかったらまとめて掛かって来い」
　そのあからさまな挑発に私たちは乗った。今だけは堕天使と争うことなく、目の前の人間を倒すが間違っても堕天使と手を組んだという事ではない。
　――敵の敵が味方とは限らないのだ。

俺は今、アーシアを抱きかかえて走っていた。
逃げる最中に力を倍化させてたから、もうアーシアでは付いて行く事も出来ないほど俺の足は速くなっていた。もう人間の範疇は超えているだろう。
だけど、そんな俺を追っている奴がいた。
公園を出てからしばらくしてからだろうか。いつの間にか後ろの空から羽音が迫っていた。
抱き上げたアーシアに確認して貰ったところ、どうやら堕天使の一人が追って来ているようだった。
（これじゃあこの前と同じじゃねえか！）
逃げてばかりじゃ倍化した力に時間制限がある俺だといつか捕まる。だから出来るだけ早い内に叩いて起きたかった。だけど、何も持っていない俺じゃ空を飛んでいるあいつを攻撃できない。
（ドライグ、何か遠くを攻撃できる方法はないのか？　ビームとか！）
『できなくもない。だが、それをするのには今のお前じゃ力不足だ』
できるんだビーム！　でも今の俺だとダメですか！
「なら、どこか狭いところに……」
辺りを見回すと、もうすぐこの町の出口だった。なら近くには隣町に続く道があり、その途中には小さなトンネルがある。そこなら余り高さもないので迎え撃つ事が出来るはずだ。
「アーシア、少し急ぐ。しっかり掴まっててくれ」
「はいっ！」
迎え撃つだけの余裕を作るため、俺は走る速度を更に上げた。

「よしっ、準備万端！　かかって来いや！」
アーシアを抱えて長い距離を走ったから疲れてはいるが、改めて倍化（ブースト）し始めてからそろそろ一分経ちそうなので、さっきから考えれば今来てくれれば丁度いい感じで戦えると思う。
アーシアはトンネルの端に下がってもらっている。
そう思って待ち構えていると、トンネルの外で何かが光った。それ

を良く見てみるとそれは光の槍だった。
それに気付いて身を捻ったが、光の槍は俺の左肩に突き刺さった。
「痛ッッッ～!!」
全身を奔る激痛を歯を食いしばって耐える。ここで崩れ落ちたら倍化（ブースト）が解除されるからだ。
「イッセーさん！」
アーシアが駆け寄って俺に傷口に手をかざすと、緑色の光が全身を覆い、痛みが引いて傷が塞がっていく。
「アーシア、助かっ――伏せろ！」
お礼を言おうとした時、もう一度光の槍が飛んできたので、アーシアを押し倒すようにして地面に伏せさせる。
すぐに起き上がると、この前俺を襲った男――ドーナシークがトンネルスレスレに浮かんでいた。
「再び会ったな。今度は助ける者は居ない。ここが貴様の死に場所だ！」
「うるせえ！　お前なんかに殺されてたまるかよ！」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（エクスプロージョン）!!』
倍化を止めた俺はドーナシークに向かって飛びかかる。高さは５メートルはあったが、倍化された俺の身体能力はその高さをジャンプできた。
「何!?」
跳んで来るとは思わなかったのか、ドーナシークは光の槍を手に出して驚く。俺はその面を思い切りぶん殴ってやった。
「ぐぉっ！」
ドーナシークは声を上げて地面に落下した。着地した俺は少し離れた場所に倒れているドーナシーク目掛けて駆け寄りながら拳を振り下ろす！
「舐めるな小僧！」
ドーナシークがこっちに手を向けると、その手から閃光が発せられた。
「うっ！　目が……」

近くで強い光を見た事で視界が効かなくなる。それだけではなく、全身が少し焼けるように痛かった。
「悪魔に我ら堕天使の光は猛毒！　軽く浴びせただけでも下級な貴様ではかなり効いただろう？」
目がくらんだ俺の腹に激痛が奔る。恐らくは光の槍だろう。
二度目の激痛に今度は耐えられず、俺はその場に倒れた。
「さて、これで後はアーシア・アルジェントを連れて帰るだけだな。全く、神器（セイクリッド・ギア）一つ手に入れるのに大事になってしまった」
ドーナシークが立ち上がる音がし、俺が倒れている横を通り過ぎて行く。アーシアの所に行くつもりなのだろう。
（神器（セイクリッド・ギア）を手に入れるって……？）
『成程。あの女が狙われた理由は内に宿した神器（セイクリッド・ギア）か。悪魔さえ治す神器（セイクリッド・ギア）は貴重だからな。引き抜いて自分たちの力にでもするつもりなのだろう』
朦朧（もうろう）とした意識の中で思った事をドライグが拾い上げてくれて、その疑問に答えてくれた。
『だがいいのか相棒？　神器（セイクリッド・ギア）を引き抜かれた人間は死んでしまうぞ？』
その言葉を聞いて、力が抜けていた手足に力が戻る。
（アーシアが死ぬ？　それはダメだろう）
ただそれだけ思って、腹に刺さった光の槍を抜いて、よろよろ立ち上がる。
「早く来い。あの男は死んだ。貴様を守る者は誰も居ない！」
「いやぁ！　離してください！」
二人の言い争う声を頼りに足を動かす。どうやら二人は俺が立ち上がった事にまだ気づいていないようだ。
ゆっくりと、音を立てないように進み、声がするすぐ側にまでやって来た。
まだはっきりしない視界には二つの人影が見えていた。声ではどっちがどっちかは分からないが、霞んだ視界でもよく分かる。
アーシアの綺麗な金髪と、堕天使の薄汚い黒い羽の違いは！

「アーシアに手を出すんじゃねえええ!!」
「バカな、あの傷で立ち上がったと――ぬぁぁぁ!!」
大声を出してようやく気付いたドーナシークの顔面にもう一度、力一杯ぶん殴ってやった。姿はよく見えないが壁に激突して気絶したらしい。
「イッセーさん!」
倒れそうになった俺をアーシアが抱き止めて再び神器（セイクリッド・ギア）の力で治療してくれた。
元に戻った目でアーシアを見ると、泣きそうな表情をしていた。
「……なんか、俺の方がアーシアに助けて貰ったみたいだな」
「そんな事ありません。イッセーさんはちゃんと私を助けてくれました」
「じゃあ、それでもいいか。助け合うのが友達なんだし」
そう言うとアーシアは泣きそうな表情から笑顔に変わった。
「はい、そうですね」

「じゃあ、行こうか」
一応追って来られないようにドーナシークを着ていたコートで後ろ手に縛り上げると、アーシアに手を差し出す。
「でも、いいんですか。私のために……」
アーシアが気にしているのは俺の家族や友達の事だろう。
「いいんだよ。どうせいつかは別れることになってたんだし」
本音を言えば良くはない。だけど、アーシアを守るためにはこれでいいんだとも思えた。
でも、優しいアーシアはそれを気にするだろう。だから――
「ほらっ」
「あっ」
少し強引に、だけど優しくその手を取る。
「行こうぜ、アーシア」

そして彼女の手を引いて、俺は生まれ育った町を後にした。

「ふむ……向こうも終わったようですね」
煙管を片手に、ロウは遠くを見る。
彼の周りには木場裕斗に加え、塔城小猫。そして堕天使のミッテルトとカラワーナが倒れていた。
リアス・グレモリーと姫島朱乃は未だ立ってはいたが服こそボロボロになっていて、レイナーレは戦いに加わらなかったため無傷だったが、それだからこそ心に負った衝撃は一番大きかった。
ロウは一歩も動かず、それどころか手足さえ動かさず、煙管の黒い煙で剣や盾などの武器、巨大な体の一部を作り、それらを自在に操る事で戦ったのだ。
「これで時間稼ぎはそろそろ十分でしょうか。少し回復に時間がかかる傷を負わせられましたし。後は――」
ロウは戦いが始まってから初めて、レイナーレに視線を向ける。
「んー……ま、放置しても問題ないか」
しばらくレイナーレをジッと見ていたロウだったが、視線を逸らすとそのまま彼女たちに背中を向けた。
「それでは、私はこれで失礼させてもらいますよ」
「待て！」
リアスは立ち去る背中に滅びの魔力を投げつける。しかしそれは戦いの中で何度かあったように、ロウの口から出てきた煙が身代わりになってロウには届かない。
そして煙が消えた時、そこには既にロウの姿はなかった。
「一体なんだったの……？」
リアスはしばらくロウが居なくなる直前まで立っていた場所を見ていたが、首を振ってレイナーレに視線を向ける。

「堕天使さん、色々あったけど、この町からは出て行って貰えるかしら？　さもないとあなたを消滅させなければならなくなるの」
「……いいわ。もうこの町に用はない。仲間を連れてすぐに出て行くわよ」
　レイナーレはロウとのやり取りで彼我の戦力差を把握していた。自分たち四人が束になっても、リアス・グレモリ一人にさえ敵わないと。
（でも、これでいい気にならないことね。私は『聖女の微笑（トワイライト・ヒーリング）』に代わる神器（セイクリッド・ギア）を見つけて、それでアザゼルさまやシェムハザさまのお役に立つのよ！）

アサルト・フェニックス
Ｔｒａｉｎｉｎｇ

「せいッ！　やあッ！」
俺は木に向かって拳を交互に突き出していた。
生まれ育った町を出てから早一週間、俺とアーシアは近くにあった山で生活していた。
山と言ってもそこまで標高が高いわけではなく、人里離れているわけではないが、全く手入れはされていないため人が滅多に来ない。
俺はそこで体を鍛えていた。
これは俺の神器（セイクリッド・ギア）、赤龍帝の籠手（ブースティッド・ギア）の能力が本人の基礎能力に依存するからである。
「イッセーさーん。ご飯の準備できましたー」
アーシアに呼ばれて、イッセーは繰り返し前へ突き出していた腕を止めた。

「イッセーさん、今日のご飯は煮込み野菜のスープです」
「……そ、そうなんだ」
若干どもったのはアーシアの料理の腕に問題があるわけではなく、最近それればかりしか食べていないからだ。
しかも野菜と言っても山に生えていた食べられる野草で、調味料なんかもないので味気ない。
それでも食べられるのは他に食べる物がないから――というより、アーシアが作ってくれたからなんだろうと思う。
「すいませんイッセーさん。私、こんなものしか作れないくて……」
俺の顔が引きつったのを見逃さなかったアーシアが顔を曇らせる。
「いや、アーシアが悪い訳じゃないんだ！　ただ、育ち盛りな元男子高校生としてはたまには肉も食べたい訳で……とにかく、アーシアが悪いわけじゃないんだ」
料理のできない俺としてはアーシアが料理をできたのは大変助

かっている。
　アーシアを慰め、スープ（他に何も無い分量だけはある）を飲み干すと、俺は修行の続きをするべく立ち上った。
「イッセーさん。少し休んでからの方が……」
「悪いアーシア。俺は一刻も早く強くなりたいんだ」
　この前は堕天使を撃退できたとはいえ、あの時アーシアがいなければ死んでいた可能性の方が高い。
　自分が死ねばアーシアは今度こそ一人になる。それを恐れているイッセーは人間では体を壊してしまうようなハイペースで体を苛めていた。
「それでも休息は必要だぞ、少年」
　イッセーが歩き出そうとした直前、周りを囲む木立の中から声が聞こえた。
「誰だ！」
　イッセーは誰何（すいか）の声をかけると同時に神器（セイクリッド・ギア）を起動させる。
「ふぅん、反応は良くなったね。でも、声で相手を判断できないのは減点。声だけで敵か味方か判別でいれば、すぐに攻撃できる」
　イッセーの対応を分析しながら木立から出てきたのは黒一色の和装に身を包んだ正体不明の神器使い――ロウだった。
「……随分質素な食生活を送ってるね君たち」
　空になった鍋――落ちていたのを使えそうだったから拾った――を見て、ロウは憐れむようにそう言った。
「仕方ないだろ！　今の俺たちは一文無しなんだよ！」
　荷物さえ置いてきてしまったから服しかないんだよ。
「……今度から差し入れ代わりに何か持ってくる……ああそうだ、渡すものがあったんだ」
　そう言ったロウは、いつの間にか旅行かばんを手にしていた。
「あの……それは私のですか？」
「そうだと思うよ。落ちてたから拾っておいた」
　それは逃げる際に置いてきてしまったアーシアの荷物だった。
「ありがとうございます」

「これぐらいお気になさらず。それで、今君たちは何をしてるの？」
「強くなるために体を鍛えてるんだ」
そう答えるとロウは二三度顔を縦に小さく振った。
「なるほど。君の神器（セイクリッド・ギア）の能力なら妥当な特訓だ。体は資本がこれほど当てはまる事はそうそうないだろう。でも、ここだとできる事にも限界があるでしょ？」
確かに、こんな森の中でできる事は走りこみと筋トレ、木に対してのパンチの練習ぐらいしかない。
体を鍛えるだけならそれだけでもいい。でも、俺の目標を体を鍛える事じゃなくて、誰にも負けないように強くなる事だ。
ここでも確かに体を鍛える事はできる。でも、強くなるために必要な『実戦経験』は得られない。
それが分かっているのか、ロウは続けてこう言った。
「だから、私が君をそれが得られる場所へ連れてってあげる」
その提案は俺に取っては渡りに舟だった。
「頼む」
「オッケー。ところで、そっちの子はどうする？　一緒に連れてく？」
アーシアを差してロウが尋ねる。
「今から行く場所は主に低級の魔物しか生息してない所だけど、強いモンスターもいるかもしれない。もしそれに出会ったとき、君は彼女を守れる保証はない。――もう一度訊くよ。君は彼女に付いて来てほしい？」
その質問に俺は言葉に詰まった。
本音を言えばアーシアには付いて来てほしい。だが、俺のわがままでアーシアを危険に晒すことは出来ない。
「行きます」
俺が悩んでいると、強い意思を感じられる言葉が耳に届いた。
その声の主――アーシアに俺とロウは振り向いた。
「いいのかい、お嬢さん。ここから行く場所はもしかしたら命の危険があるかもしれないんだよ？」
「はい。それでも私はイッセーさんについて行きます」

強い意思を感じさせる目でロウを見据えて、アーシアはそう言った。
「ふぅ……」
ロウは煙管を咥えて紫煙を吐いてから、こっちを見た。
「少年、これは連れてくしかない。このお嬢さん、何が何でも付いてくるって目をしてるよ」
そう言われてアーシアを見ると、綺麗なグリーンの瞳には強い意思が感じられた。
「アーシアの事はちゃんと守るからな」
「はいっ」
「それじゃあ話がまとまったところで、早速行きましょうか！」
どうやって行くのかと思ったが、その疑問はすぐに解消された。
「転移準備開始――完了」
ロウの吐いた煙が複雑な図形を描き、それが足元に蟠(わだかま)った。
「転移、開始」
黒煙が立ち込め俺たちの視界を奪うと、不思議な感覚に襲われた――。

「はい、到着～」
ロウの声を聞いて目を開けると、さっきとはまた違う森の中に立っていた。
「ここは？」
「さっき言った魔物が沢山いる森だよ」
一瞬だった。足を一歩も動かしていないのに、俺たちはさっきまでとは全然違う場所に立っていた。
「ここなら戦う相手がいるのか」
「いるよ。でも、一応知性がある相手だから、誰彼(だれかれ)構わず喧嘩吹っかけるのはやめてね」
「わかってるよ」
何も無闇矢鱈(むやみやたら)に戦いたいわけじゃない。

「相手は私が見繕ってあげますから。勝手したらダメだよ？」
それぐらい、釘を刺されなくても分かってる。
「それじゃ、早速行こうか」
ロウはそう言うなり森の中に向けて歩き出す。辺り一面森なのに、今自分がどこに居るのか分かっているみたいだった。
「おい、ちょっと待てよ！　アーシア、行こう」
「はい」
俺ははぐれないようにアーシアの手を握り、こっちの様子を見ないロウの後を追った。

「うん、ここでいいかな」
そう言ってロウが立ち止まったのは湖の前だった。
「ちょっと待ってて。今呼ぶから」
「呼ぶ？　何をだよ」
「それは君の修行相手に決まってるでしょう？」
修行相手……湖から？
（まさかいきなり水棲のモンスター的な相手と戦わされるのか？）
そんな俺の不安を知らないロウは湖に向かって呼びかけ始めた。
「おーい、ディーネちゃんやーい」
その声が水面を揺らすと、水が逆巻いて湖の中から何かが現れた。
「……こいつ、は？」
現れたのは綺麗な水色の髪と透明の羽衣を纏った――戦場帰りの傭兵かと思うほどの筋骨隆々の存在だった。
「ご紹介します。彼女はウンディーネのディーネちゃんです」
俺の思わず漏らした呟きに反応して、ロウがこの歴戦の戦士を紹介してくれた。て――
「こいつ女かよ！」
しかもウンディーネだ。俺のイメージの中でのウンディーネは大人のお姉さんだった。

「……ウンディーネも強くないと生き残れないんだよ」
そう言うロウは苦笑いしていた。どんな世界でも戦わなければ生き残れないのか。
「という訳でこれがあなたの最初の対戦相手です」
「嘘だと言ってくれよ……」
戦わなくても分かる。今の素の俺がディーネちゃんと戦ったら間違いなくミンチにされる。
「安心しなさい。ディーネちゃんも武者修行中でね。修行相手を探してたから……死ぬことだけはないと思う」
最後の言葉が不安過ぎる！
「だ、大丈夫ですイッセーさん！　怪我をしたら私が治します！」
「アーシア……！」
ああ、アーシアだけが俺の救いだ。
「ああ、そのお嬢さんの神器（セイクリッド・ギア）は回復系だっけ。――なら多少ハードでも大丈夫だね」
そしてこいつは鬼だ。
「お嬢さん、できればで良いんだけど、もしディーネちゃんが怪我した時は回復してあげてくれる？」
「はい、イッセーさんのお相手をしてくれる方ですから」
アーシアの優しさが眩しい。でも勘弁してください。
「よし、それじゃあディーネちゃん、存分にやっちゃって！」
ロウの声と共に、ディーネちゃんがこちらにゆっくりと近寄って来た！
「くそぉぉぉ！　赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）アアア！」
俺はやけくそ気味に叫ぶと、ディーネちゃんに向かって殴りかかった。

「……あー、あー、あー……ありがとうな、アーシア」
怪我を治して貰った俺は声を出す練習をしてからアーシアにお礼

を言う。
何故声を出す練習をしたかと言うと、あれから三時間ぶっ通しでディーネちゃんと組手をしている最中ずっと叫び続けていたので声が枯れてしまったのだ。
それにしてもアーシアの神器（セイクリッド・ギア）は凄い。喉の炎症まで治せるんだから。
「お疲れ様ー。はい、水とおにぎり」
そう言ってロウが水筒を差し出し、サランラップに包まれたおにぎりが乗った木のお盆を差し出してきた。
「ありがとな、助かる」
正直お腹がペコペコだった。
「味の保証はしないぞ。おにぎりは塩だけだから。具なんて用意できない」
だったらなんで米は用意できるのかが疑問だったが、それよりも腹が減ってたので、水で口をすすいでから（ディーネちゃんに殴られた時に口の中を切って出血したからだ）包みを剥がしておにぎりに齧り付く。
疲れた体が塩分を欲しがってたのか、白米に塩を振っただけのおにぎりも美味しく感じられた。
「それで、調子はどう？」
「散々だ」
ディーネちゃんマジで強い。三回倍化した俺よりも強かった。
そのパンチは俺が避けた後ろにあった木をへし折り、そのキックは水面を割る。そして鍛え上げられた鋼の肉体はこっちの打撃を物ともしなかった。
「ウンディーネ恐るべし……」
あそこまで強くなってもまだ強くなる必要があるのかと思ってしまうぐらい強かった。堕天使なんか目じゃないぜ。
「ここに住んでるウンディーネは肉体派だからね」
あれを肉体派という言葉で片付けていいのか。
「で、君の当面の目標は彼女に勝つことだね。贅沢を言えば神器（セイクリッド・ギア）

無しで」
「すいません無理っす」
　悪魔の体になって身体能力が上がったとはいえ、ディーネちゃんに完全に生身で勝つのは無理じゃなくても相当時間がかかると思う。だってディーネちゃん俺より一回り以上大きいんだぜ。
「そうだ。休憩がてら、君のもう一つの力について話そうか」
「もう一つの力？」
　おにぎりを食べ終わり食後の休憩をしていると、少し離れた場所で煙管を吹かしていたロウが前触れもなく口を開いた。
「そう、君の悪魔としての力」
「……」
　それを聞いた俺は押し黙る。
　悪魔の力。それは俺から人間としての全てを奪ったものだ。
　そんな俺の気持ちが顔に出てたのか、ロウは微苦笑した。
「気持ちはわかるよ。でも、使う使わないは今は置いといて、話だけでも聞いてくれる？　それにほら、こうも言うでしょ？『敵を知り、己を知れば百戦危うからず』。もし悪魔と戦う事になった時、今から私がする話はきっと役に立つと思う」
　ロウの言う事も尤もだったので、俺は素直に頷いた。
「納得してくれた所で話を始めましょうか。悪魔の使う力。それは魔力と呼ばれてる。魔力っていうのは悪魔なら誰でも持ってる力だ」
「ってことは、俺にもあるのか？」
　元は人間で体にドラゴンを宿してはいるが、今の俺が種族的には悪魔に分類される事は疑いようがない。
「……うん、あるよ」
　なんとも歯切れの悪いセリフだった。
　不信に思って問い詰めてみると、なんと俺の魔力はあるにはあるが無いよりマシ程度しかないそうだった。
「えー……気を取り直して。それで、魔力っていうのは悪魔の意思によって色々なことができるんだよ。攻撃・防御・補助、一通りなんで

もござれだ」
　詳しく聞くと魔力というものは動力（エネルギー）のようなものであり、それを魔方陣で制御することで様々な現象を引き起こせるんだとか。火や水を生み出す事もできるらしい。
「血筋ごとに特殊能力がある悪魔もいるけど、基本的な攻撃方法は『弾丸のように撃ち出す』『炎や水などに変換して攻撃する』の二通りかな。下級相手なら回避も簡単だけど、上級――その中でも上位の最上級悪魔になると地形が変えられます」
「怖っ！」
　できる事なら一生会いたくない相手だ。
「――それで、どうする少年。魔力を使う練習する？」
「いや、今はいい」
　悪魔の力に頼りたくないというのもあるが、向いてなさそうな魔力に時間を割くより、体を鍛えた方がいいと思ったからだ。
「成程ね。それはいいと思うよ。一つの事に集中するというのは悪くない」
　その考えを伝えると、ロウもその考えを肯定してくれた。
「でも、一応教えておくよ。魔力の扱い方は難しく考えず、ただ真っ直ぐ思うことだ。神器（セイクリッド・ギア）も魔力も大切なのはイメージ力。想像の羽を広げれば、できない事などあんまり無い！」
　一際強く放たれた言葉は、俺の胸の中にストンと落ちた。
（イメージ、か……）

「だけど、あんまりって事は出来ないことはあるんだな」
「死者蘇生とか時間遡行とかは無理だもの」

Ｔｒｉｃｋ

ブォン

鍛え抜かれた拳が耳元を掠め、風圧が髪を揺らす。

剛拳を紙一重でかわした俺は懐に潜り込み、左の拳を思い切り突き出す。だが、距離が近いために相手を倒せるだけの威力はこの拳に込められてはいない。

『ＪＥＴ！』

だが、その拳は後押しされるように急加速し、相手の腹に突き刺さる。

「ぐ……見事」

賞賛の一言を俺に贈り、目の前の強敵（とも）はとうとう膝を着いた。

「はい終了。アーシアちゃん、治療お願い」

「はい！」

ロウの声で緊張状態にあった体を弛緩させ、アーシアが俺のパンチで倒れたディーネちゃんの腹部に神器（セイクリッド・ギア）の緑色の輝きを当てる。

「お疲れ、イッセー君。まさか一週間でディーネちゃんを倒せるようになるとは思わなかったけど、最後のは一体どうしやったの？」

ロウの問いかけに、左腕の赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）を見せる。赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）はこの間までと少し形を変え、肘の近くに噴射口が追加されていた。

「これで腕を加速させてパンチの威力を高めたんだ」

「なるほど。多段ロケットみたいなものだね」

ふむふむと頷きながら、ぺたぺたと赤い籠手を触るロウ。そこに宿っているドライグが不満そうに唸り声をあげた気がした。幸いにもロウはすぐに手を放してくれたため何事もなかった。

「兵藤一誠」

後ろから涼しげな透き通るような声がかけられた。振り返ってみるとアーシアに治療を済まされたディーネちゃんがそこに立っていた。

今の声はディーネちゃんの声で、声だけは俺の持っていたウン

ディーネのイメージと一緒で、それが外見とのとてつもないギャップを生み出していた。
「今の一撃、見事だった」
「正直卑怯な気もするけどな」
　今のは普通の人間には逆立ちしたって真似できないことなので、少し卑怯だなと思っていた。だけどディーネちゃんは笑って首を横に振った。
「そなたは自身が持つ力を活かしたまで。それを卑怯に思う必要はない」
　そう言ってディーネちゃんは俺に右拳を突き出してきた。
「だが、一度見た以上、次はそう簡単には食らわぬ。再戦を楽しみにしているぞ」
「ああ。俺もだ」
　突き出した拳に俺も自分の左拳をぶつける。
「ふむ。それにしてもそなたは将来有望そうだ。どうだ？　私の婿に――」
「だめです～!!」
　ディーネちゃんが何事かを言いかけたその時、アーシアが大声を出してそれを遮り、俺とディーネちゃんとの間に両手を広げて立つ。
「イッセーさんは渡しません！」
（あれ、おかしいな。話の流れが読めない）
　俺とディーネちゃんは互いの健闘を称えあってたはずなのに、いつの間にか渡す渡さないの話になっていた。ところで一体何を渡すのだろうか。
　必死の表情でディーネちゃんをにらんでいるアーシアだが、ディーネちゃんはアーシアの頭を優しく撫でて湖に向かって振り返った。
「ではな、兵藤一誠。私はまだそなたと戦いたいが、後の予定が詰まっているそうなのでな。助け、もしくは手合せの相手が必要な時はいつでも呼ぶがいい」
　呼ぶというのは召喚のことであり、魔力の運用法のわかりやすい一例としてロウに教えてもらった魔力による現象の一つだ。悪魔は本

来呼び出される側だと思うんだ。
　そしてディーネちゃんは湖を輝かせて帰って行った。
「さて、ディーネちゃんを倒せたお祝いに、今日はパーっといきましょう」
　今日のメニューはロウが仕留めた牛のような生き物のステーキだ。
「肉なんて久しぶりだな」
　脂が焼けるじゅうじゅうという音を聞いているだけでよだれが出そうだ。
「この人数だと大型獣を仕留めても食べきれないからね。こんな環境じゃ保存もできないし、においを嗅ぎ付けて周りの獣も寄ってくるから、食べない部分は撤いておいたけど」
　そんな理由もあり、肉を食べるのは本当に久しぶりだ。普段食べてるのはほとんど野菜でたまに魚。主食にロウが町で買ってきたと思われるパンだ。今の俺は成長期がほとんど終わってるから耐えられるけど、中学生の頃だったら無性に肉が食べたくなってただろうな……。
「しっかり食べなさい、二人とも。動物性たんぱく質は貴重だよ」
　火の通り具合を確認しているロウの言葉に、俺は一も二もなく頷く。
　ちなみに、ロウはアウトドア生活が長いのか、屋外での料理が得意であった。味付けが塩コショウのみなのが玉に瑕だ。
「言われなくてもしっかり食べるって」
「はい」
「んー……焼けたみたいだね」
　ロウは肉を火の上から下ろして木でできた大皿に乗せて、ナイフで切り分けてからそれぞれの皿に盛った。
「それじゃ、食前の祈りを――」
　これはアーシアが一番長い――というより、俺たちが短すぎる。いただきますの一言で終わらせるのは日本人ぐらいだろう（ロウもいただきますで済ませてたからあいつも日本人なんだろう）。

「イッセー君、明日からはまた新しい相手と練習してもらうから」
ロウが唐突に切り出したのは食事を終えて、片付けを済ませた時である。
「次はどんな相手なんだ？」
戦うのは別に好きではないが、また見たことのない生物に会えるのは少しわくわくする。ディーネちゃんもウンディーネの女だってことを除けばいいウンディーネだった。
「サラマンダー。火蜥蜴（ひとかげ）とも言うね」
「サラマンダー……っていうと、ドラゴンみたいな奴か？」
俺がゲームのイメージからそう発言すると、突然ドライグが声を発した。
『無関係とは言わないが、ドラゴンとしてはあんな奴らと一緒にしてもらいたくはない』
「まあ、間違ってるとは言わないけど。実質はドラゴンの亜種の末裔の傍系ってところかな？」
ドライグの声に被さりそうなタイミングでロウが苦笑混じりにそう教えてくれた。ドライグの声は基本的には俺にしか聞こえないのでロウにも聞こえてないのだろう。
「ほとんど別物ってことだな」
ロウに返事をしているように見えてドライグにも受け答えつつ、明日会えるであろう火蜥蜴（サラマンダー）の姿を想像した。

●

私、リアス・グレモリーは実家に呼び出されて、婚約者のライザー・フェニックスと引き合わされていた。
「お父様、話が違います。結婚は私が大学を卒業してくれるまで待ってくれるという話だったはずです！」
今の私はライザーと結婚する気はさらさらなかった。親同士が決めた婚約者が気に入らないということ以前に、今の私はまだ結婚その

ものをしたくなかったからだ。
「リアス、わかってくれ。悪魔の駒（イーヴィル・ピース）のおかげで悪魔の人口は増加傾向にあるが、まだまだその数は少ない。純血の悪魔ともなればその数は更に少ない。そんな中、純血の悪魔同士の結婚はこの緩やかな危機に対する希望になりえるのだよ」
「私を広告塔にすると言いたいんですか！」
冗談ではない。私は結婚する相手ぐらいは自分で決めたい。そんな大人たちの勝手な都合で決定されては堪ったものではない。
「リアス、グレモリー卿にあまりわがままを言うんじゃない」
同席している私の婚約者ということになっているライザーが私をたしなめる。
彼はフェニックス家の三男であり、グレモリー家時期党首の私と結婚するということは、彼は恐らく婿養子としてグレモリー家に入籍することになるはずだ。今のうちにお父様と親しくなっておきたいのだろう。
私はそんな彼のことがあまり好きではなかった。彼が私に向ける（特に胸に向けた）視線は時折いやらしいものが混じっている。
「ならリアス、上級悪魔らしく、レーティングゲームで決着をつけるとしよう。君が勝ったなら婚約破棄だ。その代わり、俺が勝ったら即結婚だ」
その提案は対等のように見えて、実はこちらに随分と分が悪い。
レーティングゲームは今の悪魔たちが好んでいる、下僕悪魔同士を戦わせるゲームなのだが、このレーティングゲームに公式に参戦できるのは成人してから。
私は未だにそれを経験していないのに対して、ライザーは十戦して八勝しており、残る二敗は家同士の関係で譲ったもので、事実上の無敗。不死鳥（フェニックス）の再生能力はそれほどまでに驚異なのだ。
「……わかったわ。その勝負、受けましょう」
だけど、今の私にはその勝負に乗るしか道はなかった。
「勝負はいつにする？　俺は今からやっても構わないが、君の方はそうもいかないだろう。そうだな……十日でどうだろう？」

ライザーの提案を聞いて、私の脳裏に一つの考えが閃いた。
この提案は私に取ってはどう転んでも不都合にはならない。そう考えて私はその考えをライザーに告げた。

●

「うわぁぁぁん、熱いよぉぉぉ!!」
思わず情けない悲鳴を上げてしまうほどの熱波が後ろから迫ってくる。その熱さは岩石を舐め溶かすほどの熱量を持っている。
『くはははは！　どうした、駆け出しの赤龍帝！　この程度で怯むようでは先はまだ長いぞ！』
ロウから紹介されたサラマンダーのラマさん（別の動物だとか言っていけない）は予想を超える大きさだった。体は五メートルを優に超える巨体であり、口は縦に開けたなら俺を縦に丸呑みできそうなほど大きい。
そこから吐き出される炎は岩石をあっさり溶かして人間の肉なんて簡単に炭化できそうだった。そしてその範囲はちょっとした小川並みだ。
「もうこれ戦うとかいうレベルじゃないぞ！」
逃げるだけで精一杯だ。しかももし近づけたとしても俺の胴より太い手足や尻尾には高温の炎が点（とも）っている。
「こんなのどうすればいいんだよ！」
そして一番の問題は服だ。いつ火が着くかと気が気でない。今の俺はこれ一着しか持ってないんだぞ！
「だから言ったでしょ。オーラを体の表面に集めるんだって。もしくは神器（セイクリッド・ギア）の範囲を全身に広げろ」
そう言うロウは体を薄暗い何か――おそらくあれがオーラなのだろう――をまとって数百度はあるラマさんの上に座っていた。
「そもそもオーラってなんだよ！」
「生きてる存在が発する気配的なもの。気とも表現される」
そう言われてもわからない。

「もっとも、これは言葉で言ってもわからない。これを引き出すのに必要なもの、それは命の危機だ」
さらっとえげつないことを言われた。
「というわけでラマさん、死なない程度に炙っちゃって」
『火加減は心得ている。どんどんいくぞ小僧！』
「ひ、人殺し――!!」

「これがサラマンダーの子供なんですね。まだ小さくて、炎もまだそんなに熱くないんですね」
イッセーが死にかけている間、アーシアはラマの子供と戯(たわむ)れていた。

●

「お呼びですか、ライザーさま」
「よく来たな、イザベラ、カーラマイン。お前たちに頼みたいことができた」

Ａｔｔａｃｋｅｄ

「ぬおわぁぁぁ！」
今日も俺はラマさんの吐く炎に追いかけられていた。
『こら小僧、少しはかかってこんか！』
「そんなこと言われたって！」
逃げ続ける俺に業を煮やしたラマさんは俺の行く手に炎を放って逃げ場を封じる。
『うむ、最初からこうしておけばよかったな。それでは行くぞ』
ラマさんは少しずつ空気を吸い込み、灼熱の息吹に変えて吐き出す。
逃げられない。死ぬ。そう思った瞬間、体の内から急に力が湧き出した。きっと火事場の馬鹿力的なものなのだろうが、単純な力では目の前に迫る炎の壁は突破できない。
その時、この前ロウが言っていたアドバイスを思い出した。
（オーラを体の表面に集める。今俺の内側にあるものがオーラだとするなら、それを体の表面まで持ってくる！）
そう意識した直後、俺は人間など軽く焼き焦がしてしまうほどの熱を持った炎に飲み込まれた。

●

「イッセーさん！」
イッセーさんが炎に包まれたのを見て、私はいてもたっても居られずイッセーさんに駆け寄ろうとしました。ですが、そんな私の腕を誰かが掴んで私を引き留めます。
「待った、ウェイト。あの中に飛び込んだら熱量で死ぬよ？」
「でも、イッセーさんが……！」
ロウさんの言っている事は理解できますが、私は居ても立ってもいられません。
「大丈夫だって。死ぬようだったら私が助けてたから。ほら、よく見なさい」
ロウさんが指さした先を見ると、炎に包まれたイッセーさんが腕で

顔を庇うようにして立っていました。

●

「し、死ぬかと思った……」

結果だけ見れば、俺はあの炎に耐えることに成功した。だけどタイミングが遅かったせいか、制服の肘から先は炭化して崩れ去ってしまった。

「ラマさん、一度中断で。おーいイッセー君、こっちまで跳んで来なさい」

ロウに呼ばれたので、まだ倍化されていた脚力を使って思い切りジャンプして真っ赤になっている岩の地面を飛び越える。

「アーシア、一応回復してあげて。もしどこか火傷してて、感染症にでもなったら大変だもの」

「はい！」

アーシアの放つ緑色の光に包まれて、俺は緊張が解けたせいかその場にへたり込んだ。

「イッセー君、お疲れ様。ようやくオーラの使い方がわかったみたいだね」

にこやかに笑うロウに反発しそうになるが、ぐっとそれを腹の内に押し込めた。

「ああ、なんとかな」

「オーラは防御だけじゃなくて攻撃にも使える。そこらもおいおい練習するとして、しばらくは休憩ね。ラマさんもお疲れ様です。しばらく休んでもらって構いませんよ」

『そうだな。久しぶりに火を吐きすぎて少々喉が痛い。炎症止めの薬草でも食んでくるとしよう』

そう言ってラマさんは振り返って森に歩いて行った。

（サラマンダーも炎症とかあるんだな）

「まあ、体内まで燃えてるわけじゃないからね」

「普通に心を読むなよ」

●

「ここか？」
「そのようだ」
「目標の名前はなんと言ったか……」
「兵藤一誠。リアス・グレモリーさまの『兵士（ポーン）』らしい」
「それがどうしてこんな所にいるのやら」
「彼は元は何も知らない人間だったそうだ。突然の変化を受け入れられなかったのだろう」
「だからこそ、強引にでも連れ戻すように指示されているのか」
「そうかもな。さあ、そろそろ行くぞ」

●

「吸ってー、吐いてー、止めてー。今、オーラを感じられてる？」
　息を止めているため喋れず、頷いて返答にする。
「じゃあ、今度はそれを広げてみよう。薄く息を吐いて。遠くにゆっくりと意識を向ける感じ」
　言われた通りに薄く息を吐きながら、体の内にあるオーラを薄く広げていく。薄く広がったオーラはまず近くにいるロウやアーシアの所まで広がると、それぞれ別の感覚が返ってくる。ロウは鈍く冷たく、アーシアは柔らかく暖かい。
「それが簡単な気配察知。原理としてはソナーみたいなものだね。試しに限界まで広げてみて。ただし、一つ一つ正確に捉えようとするんじゃないよ。脳が情報量を処理しきれないでパンクするからね。あくまでも広げて、感じるだけ」
　ロウの言う通りにオーラをさらに広げ、この森に生きる数ある生命の息吹を感じ取る。温かみに溢れる気配の中でロウの気配だけが異様な雰囲気を保つなら、更に二つの異分子が紛れ込むのを感じ取った。
「ッ――！」
　そこに意識を集中しようとしたところで、頭に痛みが走る。

「限界かな。今日はここまでにしておこうか」
　それを限界だと察したロウが止めるが、それを首を振って否定する。
「違う……何か別のものがいた。生き物だけど、ただの生き物じゃない」
　あの気配には覚えがあった。今の俺と似通った気配。
「そう、あれはきっと悪魔だ」
「どっちから？」
　ロウは声音を真剣なものに変えて尋ねてくる。
「えっと……あっちだ」
　ロウは俺が指差した方に向き直ると、しばらくじっと見つめた後に舌打ちした。
「こっちの位置はもう悟られてるな。走って来ているという事は気付いたことに気付かれたという事で……――追っ手か」
　追っ手。それを聞いた瞬間についに来たかと思った。今までは穏やかに暮らせていたが、この日がいつか来ることは分かっていた。
「グレモリーの眷属にはいなかったな相手だね。数は二。どうするイッセー君？　一人で二人を相手する？」
「……そう言うってことは、一人は引き受けてくれるのか？」
　こちらを試すように笑いかけるロウに対してそう言い返すと、ロウは愉快そうに笑った。
「いいよ。その言い分に免じて一人は引き受けてあげる。ただし、二人同時にかかってきたらの場合だけど」
「十分だ」
　そもそもロウが俺を助ける理由はないのだ。手を貸してくれるだけでもありがたいと思わなければならない。
「赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）！』
　出くわす前に神器（セイクリッド・ギア）を発動させ、能力を倍化させながら待つこと二分。ついに二人の女悪魔が現れた。
「兵藤一誠だな」

「ああ」
顔の半分を覆う仮面を着けた女性に訊かれたので、素直に答える。どうせごまかしても無駄なんだろうからな。
「我が主、ライザー・フェニックスさまの命により、お前をリアス・グレモリーさまの元へ連れて行く。抵抗するならば容赦はしない」
俺はそれに拳を構える事で応える。無論、連れて行かれるつもりはない。
「……そうか」
俺が抵抗すると分かって仮面の女性が構える。だが、もう一人の甲冑を装備した女性は腰に差した剣を抜こうともしなかった。
「そっちの人は来ないのかい？」
二人同時にかかってきてもらいたいわけではないが、途中で割り込んで込まれても困る。
「一対一に水を差すほど私は野暮ではない」
「なら、私も手出しはしないよ。その代わり、負けても助けてあげたりはしないからね」
ロウはアーシアの近くまで下がって煙管を咥える。
「アーシアを守ってくれるだけでいい」
これで二度目の負けられない真剣勝負だ。アーシアを庇いながら戦って勝てる自信はない。
「ライザーさまの『戦車（ルーク）』、イザベラ。参る」
「赤龍帝、兵藤一誠」
武士のようにお互いに名乗りを上げて、ほぼ同時に動き出した。
イザベラは真っ直ぐ拳を伸ばしてくる。その拳は確かに速いが、ディーネちゃんの拳打と比べると迫力に欠ける。焦る事なくよく見て交わして、反撃の拳を突き出す。
「ぬっ」
カウンター気味に放たれた拳をイザベラは首を傾けて避けて、すぐに距離を取る。
「予想より大分できるようだ……。なら、こちらも本気で行かせてもらう！」

イザベラは体を不可思議に揺らすと、ボクシングでいうフリッカーのようにムチのような打撃が飛んでくる。
予想できない角度からの拳をカードするのは容易ではなかったが、一発の威力がそれほどでもなかったので大したダメージではない。
「ぐっ！」
そう思っていたら、拳に気を取られた隙に、腹部に蹴りが命中した。
「このっ！」
あまり攻撃を受けると倍化がリセットされてしまうため、腕を大きく振って距離を取らせる。
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）！』
これで発動してから二分。これだけ時間が経ったなら十分だろう。
「いくぞ、ドライグ」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（エクスプロージョン）！』
音声と共に緑色の宝玉が一際強く輝く。これで準備は整った。
「貴様……なんだその力は？　先ほどまでとは桁違いな……」
「行くぞ」
一歩踏み込み、拳を突き出す。ただそれだけの動作だが、倍化されたおかげで左拳は人間では視認できないほどの速さでイザベラへと伸びる。
「ぐぉ……っ！」
間一髪のところで胸の前で腕を交差させ、攻撃を防ぐイザベラ。だが、攻撃はまだ終わっていない。
『ＪＥＴ（ジェット）！』
籠手の肘の部分からエネルギーが噴出し、イザベラを吹き飛ばす。
吹き飛ばされたイザベラは木に体を強く打ったが、倒れる様子はなかった。だが、腕は折れているだろう。もう戦えないはずだ。
『Ｒｅｓｅｔ（リセット）』
倍化が終了したので、すぐに倍化を再開させる。
「次はお前か？」
剣士の方に向かって話しかけると、剣士は腰の剣を抜いた。
「力の桁違いな増幅……！　それが赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）の力か……」

剣士が戦慄した表情で問いかけてきたので、そうだと頷く。
「ならば、即攻で倒させてもらう！」
剣士が走り出すと同時に、彼女が手に持った剣が炎を発する。
「せいっ！」
裂帛の気合と共に振り下ろされる刃を籠手で弾く。左腕の肘から先を覆っているこの籠手は防具としても優秀で、刃どころか炎も防ぐ。
それを数合続けて、じわじわ力が倍化するのを待つ。
「伏せなさい、イッセー君」
ロウがそう声を発したのが聞こえた瞬間に身を屈めると、その直上を刃が通り抜けた。
「なにっ!?」
「シーリス!?　何故お前がここに居る？」
（新手か！）
突如現れた救援を目にして、慌てて下がる。
「リアス・グレモリーさまの話から同行者がおり、その者が手練だと分かったので応援に向かうようライザーさまに言われたのだ」
「そうか……。本来なら一対一でいきたいところだが、相手が神滅具（ロンギヌス）とあってはそうもいかないか」
二人の剣士が同時に迫る。どちらに対処するのか迷った瞬間、俺と相手の間に線を引くように黒い一閃が通り抜けた。
「二対一になったから、私も手を貸すよ」
煙管を片手に気負った感じもなく、ロウがこちらに向けて歩いてきた。
「倍化にかかる時間稼ぎはしてあげる。そうだね……五分ぐらいまでなら保たせられると思うから、ギリギリまで倍化してもいいよ」
赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）の倍化には限度はないが、その力を扱う俺の体には限界がある。今の俺が倍化しても耐えられる時間は２００秒だ。
「任せた」
「任された」
ロウは全く気負うことなく、二人の悪魔剣士に対峙した。

Smoke

「さてさて。御嬢さん方、これからは私があなたたちのお相手をさせていただきますね」

これから起こるのは――いや、既に起こっているのは殺し合いだというのにもかかわらず、ロウは気負いなく立っている。

それは紛れもない自然体だが、戦場という不自然な状況では逆に不自然だった。白鳥の群れの中にカラスが一匹紛れ込んでいる違和感。

闇夜に溶け込むような漆黒の和服の裾を風になびかせ、煙管を片手で弄んでいる姿は優雅ささえ感じられる。

だが、ここは戦場。艶(あで)やかさなどとは無縁の場所だ。それだけならただ蹂躙されるだけだ。しかし、ロウという存在はただそれだけの存在ではない。

「誰かは知らんが、邪魔をするなら容赦はせん！」

「……」

声と共に放たれる一刀と無言のままに振るわれる一閃。迫る二本の刃は容赦なく、左右から挟み込むようにロウの首を狙う。

「ふぅー……」

それに対してロウが取った行動は煙管を加えて煙を吐き出しただけ。だが、ロウが吐き出した煙は煙突から出たかのように黒々としており、それは刃がその中を潜り抜ける直前に硬質な輝きを帯びた盾へとその姿を変えた。

「何っ!?」

「ぬぅ……」

刃が弾かれて二人は思わずたたらを踏む。そこに黒煙が吹きかけられる。黒煙はその形を矛(ほこ)に変え、二人を串刺しにするために迫る。

だが、相手もそれをむざむざと食らうような弱者ではない。

二人が自らの主より賜(たまわ)った『悪魔の駒(イーヴィル・ピース)』は『騎士(ナイト)』。その特徴はスピードだ。

二人は軽やかなステップで迫る無数の矛先を回避し、ロウを挟み込むように左右に分かれて走り込む。

さて、どちらから対処したものだろうかと僅かに逡巡したロウの隙を突くように、燃え立つ刃を持つ炎の剣を振りかざしたカーラマインが突っ込む。
それに対してロウは再び煙を盾に変えることで防御する。今度は盾が来ることがあらかじめわかっていたからか、カーラマインが吹き飛ばされることはなかった。
そしてロウがカーラマインの対処をしたのとほぼ同じ瞬間、反対側からシーリスが大剣を横薙ぎに首を切断する軌道で振るわれる。
振り返る動作さえ惜しんだロウが身を屈めて大剣の刃を頭上を通過させると、上からカーラマインの炎剣が振り下ろされる。もう煙で防御するには近すぎる距離だ。
振り下ろされた炎剣によってロウの頭部が二つに裂けるかと思ったが、ロウは常に持っている鉄製の煙管で剣を弾き、低く飛ぶように跳ねて二人から距離を取った。
ロウは空中で姿勢を変え、一際大きく口の中から黒煙をまき散らす。辺り一帯に広がった煙は渦巻きながらひとつの形を模っていく。
そして作られたのは黒い東洋系の細長い体を持つ龍だ。
「行きなさい！」
ロウが鋭く声を発すると、龍は大きく口を開けて二人の剣士に向かって砲弾のように突進する。
人間一人ぐらいなら丸のみにしてしまえそうなほど大きな咢を、二人は危ういところで回避する。が、それを追うように龍はすぐさま体をくねらせて方向転換を行う。狙われたのはカーラマインの方だった。
「くっ！」
咢をかわした後に迫り来る、自分の皮膚を切り裂こうとする爪を剣で弾くカーラマイン。危機的状態にある仲間を一顧だにせず、シーリスはロウとの距離を詰める。
「あら、お仲間を助けてあげないの？」
それを訝しんだロウが大剣の刃を避けながら尋ねる。

「貴様を倒せばあれも消えるのだろう？」
確かにその通りであるので、ロウはなんとも言えずに苦笑する。
「そうだけど、ちょっと淡泊すぎないかな」
自身に対して致命傷を負わせるだけの殺傷力を持った大剣を目の前にしても、ロウの態度に変化はない。体を軽く傾けて、微妙に狂ったテンポでステップを刻みながら大剣を回避していく。
煙で武器を作ろうとしないのは、発動の媒体となっているであろう煙管が龍の制御のためかタクトのように振るわれているからだろう。
しかし、防戦一方で攻撃をされるがままであるにもかかわらず、ロウにはまだ余裕が感じられた。
今のロウは龍を遠隔操作しながらシーリスの剣を避け続けている。例えるなら携帯ゲーム器で遊びながらサッカーをしているようなものだ。集中力がいつまで続くかは見当も付かないが、そう長く続くものでもないだろう。
しばらく拮抗した状態が続いたが、二対一という数の面で不利なロウが拮抗を崩すと思われた。だが、その拮抗を最初に崩したのはカーラマインだった。
「むっ!?」
龍との幾度目かの交錯。何度も鋭い爪を受け止めていたせいで炎剣が刃の中途でぽっきり折れてしまったのだ。
「隙有り」
それを見たロウが鋭く煙管を一振りすると、龍はとどめとばかりに大きく口を開けて飛びかかった。それに対し、カーラマインは腰に差していた短剣を引き抜く。
「吹け、炎の旋風よ！」
熱さを持った旋風が吹き荒れ、煙でできていた龍をあっさりと吹き散らした。
「あ、あれ？」
そこで始めてロウが表情を変えた。間の抜けたような表情で冷や汗が一筋流れる。煙を自在に操るロウにとって、風とはとても相性が悪いのだ。

「くっ！」
だが、龍が消された事で制御の必要がなくなったため、ロウは新たに煙を吐いて無数の剣を作り出し、シーリスを牽制して距離を取った。
「そういえばフェニックスは炎と風を司る悪魔だっけ。炎はともかく風は相性悪いなっ！」
先ほど作り出した剣を一斉に撃ち放つも、カーラマインが再び起こした熱風に吹き散らされる。
「くはー、もう限界。火種が尽きた。イッセー、残りは任せた」
煙管から燃え滓（かす）を落としながら、肩から力を抜いて大きく後ろに飛び退（すさ）る。
「おう！」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（エクスプロージョン）!!』
開いた隙間を埋めるようにシーリスに向かって駆け込んで、左腕を大きく振りかぶる。
「どりゃぁぁぁ！」
倍化を始めてから今まで経過した時間はおよそ三分。
その力を左拳に込めてシーリスを、防御のためにかざされた大剣ごと殴り飛ばした。大剣は途中で折れ砕け、腹部に拳が突き刺さると不快な感触が返ってくる。
「シーリス！　――おのれ！」
カーラマインは短剣を振るって熱風を巻き起こす。だが、この程度の温度にはもうすっかり慣れた。ラマさんの炎の方がよっぽど熱かった。
「この程度、今更効くかよ！」
全身からオーラを放出して熱風を吹き払う。
「イッセー、掌にオーラを集めて放て！」
入れ替わるように後ろに下がったロウからの言う通りに、左手に赤いオーラを集中させ、掌をカーラマインに向け、右手で手首を握って安定させる。そして撃ち出すイメージを思い描いて力を込めると、掌から赤い光弾が飛び出した。

光弾はカーラマインに激突すると大爆発を起こした。
「……やったか？」
左手を突き出したままの体勢でそう呟くと、ロウが歩み寄ってきた。
「それフラグ……と言いたいところだけど、やったみたいだね。姿が見えない」
確かに爆煙が晴れた後に誰もいなかった。最初に倒したイザベラも、もう姿は見えなかった。
「逃げたのか？」
「――というか、戦闘不能になったら強制的に転送されるように術式を仕込んであったみたいだね。何にせよ、これで一安心かな」
ロウがそう言うことは分からないが、取りあえず危機は脱出したらしい。
「でも、また来るだろうね。最低でも彼女たちの主様がまだ残ってるだろうし。でも、今日のところは大丈夫でしょう」
それなら良かった。力をほぼ最大まで二回も倍化させたからへとへとなんだ。
「念のため私が寝ずの番しておいてあげるから、君たちは安心してお休みなさいな」
「ああ、そうさせて貰う……」
今は一刻も早く休みたい。これ以上は一回も倍化できない。
●
「イッセーさん、無事ですか!? 怪我してませんか？」
今まで隠れていたアーシアが駆け寄って来る。
「アーシア、大丈夫だ。怪我はしてない」
「それならいいんですが……」
アーシアは俺が手合わせすると必ず心配する。心配してくれるのは嬉しくもあるが、申し訳なくもある。
「一応回復させてくださいね」
緑色の光が体を包み、体の節々の痛みが消えていく。だが、アーシ

アの神器（セイクリッド・ギア）では疲労までは回復できない。
「悪い、アーシア。疲れたから寝させてもらうな」
「それでは、一緒に寝ましょうね」
俺とアーシアは一緒に寝ている屋外では寝る場所が限られるので仕方ないのだ。だが、ロウはいつもどこにいるのかは分からない。しかも寝ているかどうかも定かではない。
（ライザー・フェニックスか……）
まだ見ぬ相手。新たな驚異。どうやら俺はまだまだ平穏に暮らすことはできないようだ。

●

（さて、面倒なことになった）
まさかフェニックスが出てくるとは思いもしなかった。
フェニックスの特性は不死。ほとんど無敵の存在だ。現段階の兵藤一誠では太刀打ちできないだろう。
（どんな因果か因縁かは知らんが、全く……リアス・グレモリーはどうやら厄介事がついて回る星巡りらしいな）
振り回される身としては堪ったものではない。
（さて、兵藤一誠は一体どうなるのだろうか）
負けて捕まるか勝って逃げ延びるか、二つに一つ。果たしてどうなるかは彼次第。
「せめて可能性を五分五分（フィフティ・フィフティ）にまで上げるお手伝いぐらいはしますかね」
吐き出した紫煙が月を覆い隠すように広がった。
「先行き不安で前途洋々とは行かないけれど、それでも私がすることは変わらないわ」
あの日出会った私の希望。それを取り返すためなら何だってしてみせる。

「さて、追っ手が来ました。あなたはどうしますか？　一つ、更に逃げる。二つ、更に強くなって撃退する」
「……」
　ロウの質問に、俺はしばらく悩んでから結論を出した。
「二つ目だ。どうせ逃げてもすぐに追いかけられる。だったら強くなって、二度とそんな気が起きないように叩きのめす！」
　その答えにロウは満足な笑みを返す。
「じゃあ、これからしばらくはスパルタで、私自ら鍛えて行くよ」
「頼む！」
「じゃあ、早速行くよぉぉぉ……」
　ロウは煙管に火を入れて咥えるという、臨戦態勢を取る。
「と、いきなりかよ！」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）！』
「戦いはいつ始まるかわからないからね！」
　大量に撒き散らされた黒煙に対して、イッセーは神器（セイクリッド・ギア）を起動させて立ち向かった。

○　●　○

「おのれ、兵藤一誠……！　よくも俺の眷属をやってくれたな……！」
　自らの眷属を傷つけられたことに対して怒りを露わにするライザー。
「この借りはこの俺直々に返してやろう……！」
　ライザーは怒りを炎に変え、炎の翼を大きく広げた。

○　●　○

「ぐ、お、ぁぁぁぁぁぁ……」
　一誠は傷だらけになって倒れこむ。

「イッセーさん！」
「アーシア、回復しろ」
冷たく言い放つ私を、アーシアはキッとにらみつける。
「ロウさん！　こんなの酷いです！　イッセーさんが死んじゃいます！」
一応死なないように調節はしている。
「死なせたくないのならそうならない様に回復しなさい。これはあなたにとっての修行でもあるんだよ」
高く上げた煙管を振り下ろすと、辺りに滞空していた煙でできた剣群が一斉に落下する。
アーシアを巻き込む規模で降り注いだ黒い剣は、赤いオーラによって弾き飛ばされた。
「アーシアに……手を出すんじゃねえよ！」
自分に向けて放たれる殺気。中々いい感じに仕上がってきただろう。
「そう、それでいい。どうせ今のあなたたちではフェニックスには敵わない。二人合わせてようやくの互角。でもまだ足りない。さあ、殺す気でいくから、死ぬ気でかかって来なさい！」
煙管を一振りし、宙に漂った煙を新たに剣に変え、煙管を再び振ってそれらを一斉に突進させる。
一誠は自分に直撃するコースの剣を籠手で弾くと、一気に加速して距離を詰める。
「このっ！」
思い切り振るわれる拳を数歩下がって避ける。そして空振って体勢を崩したところに放ったハイキックが顎を捉えて脳を揺さぶる。
「かっ……！」
更に一誠の頭上に無数の剣を構築。更に一誠から数歩離れるとそれらが重力に従って落下する。
「ぐぁぁぁっ！」
急所を外して剣が突き刺さる。
「イッセーさん！」

「はい、そこまで」
駆け寄ろうとしたアーシアの直上から鉄杭を落として簡易的な檻としてアーシアの動きを封じる。
「何を……？」
「そこから回復させなさい。戦闘中に近寄る余裕があなたには無い。遠くからでも回復できるようになるのがあなたの課題だよ」
理論上はできると立証されていることだ。そうでなくてもやる気さえあればどうとでもなるだろう。
「そうでなければ死ぬだけよ。相手が私かフェニックスかどうかの違いがあるだけだ」
煙を強く吐き出し、無数の三日月状の刃に変えて吹き付ける。
「――ッ!!」
辛うじて籠手で体幹を守るが、腕や足に傷を負う。
「さあ、回復させないと。失血で死にますよ」
「んっ――！」
アーシアは緑色のオーラを手の平に集めると、その手を一誠へと向ける。すると緑色の光が一誠に向かって飛び出した。
飛び出した緑色の光に包まれると、一誠の傷が徐々に回復していった。
「じゃあ、続けていくぞ」
煙を薄く吐き出し、続けて攻撃をする準備を取る。
「殺す気でいくから、精々死なないように努力なさい」
私は煙に力を通して刃に変えると、一誠に向けて撃ち放った。

○　●　○

「お兄さま」
「レイヴェルか。今度は俺の眷属を全員連れて行く。お前も含めてだ」
「……今回のお相手はそれほど危険なのですか？」
「……イザベラ、カーラマイン、シーリスがやられた。こちらも生け捕

りなどという生ぬるい手をとってはいられん」
「お兄さまは結婚も間近だというのに……」
「そいつさえ倒してしまえばそれも叶う。安心しろ、レイヴェル」

○　●　○

「うおお！」
右手からオーラの弾丸を散弾状にして飛ばし、迫り来る黒剣を弾き飛ばす。
「せやっ！」
左手からは固く圧縮した弾を飛ばす。弾丸は煙が形を変えた盾を弾き飛ばし、ロウへと向かう。
「お次は手を変えてみましょうか」
ロウは手元の煙管を一回転させると、煙管の先端である火口が赤々と燃える。
そして、普段なら吸うはずの吸い口を咥えて思い切り吹いた。すると火口から炎が吹き出してこっちに迫る。
「くっ……」
迫る熱波をオーラで防ぎ、手の平にオーラを集めて大きな弾丸を作る。
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ！』
更にそこに倍化した力を譲渡して巨大化させて投げる。
大きすぎるせいか速度も飛距離もそれほどではないそれは地面に落ちると大爆発を起こし、炎どころか辺り一体を吹き飛ばしてしまった。
「……少し休憩にしようか」
吹き晒しになった地面に一人立つロウは服をはたきながらそう言った。
「再開するときは不意打ちするから。それまでドライグと少し話していなさい」
そう言ってロウは立ち去った。

「やっぱり倍化が解けると大変だな。どうにかならないのか、ドライグ？」
　木に腰掛けながら左腕の籠手に向かって話しかけると、籠手の宝玉が点滅しながら返事をしてきた。
『手はあるがな。禁手（バランス・ブレイカー）というものがあってな。その段階に至れば俺の力を宿した鎧を纏うことができ、そうすれば倍化するのに時間なんぞかからん。奴とて相手にもならなくなるだろう』
「それはどうしたらなれるんだ？」
『歴代の赤龍帝はすぐになれたんだがな。正直に言うとお前には才能が欠片もない』
　な、なん……だって？
「才能がないのはいいとして、結局どうしたらなれるんだよ？」
『地道に力を付けていく他にないな。いざとなれば体の一部と引き換えに使わせてやろう』
　なんともおっかない話だ。できることならそれは最後の手段として取っておきたい。
『体の一部を払うだけの価値はあることは保証してやろう。この力さえ扱えればたとえフェニックスとて簡単に打倒できるさ』
「そうか。できることなら自力でそうできるようにしたいな」
『俺としてはどちらでも構わんさ。どの道を行くかはお前次第だ』
「おう」
　目標を新たに決意を固めると、頭上からガサガサという木の葉が擦れる音がした。
「アーシア！」
　近くに居るアーシアを抱えて飛び退く。その直後に黒い弾丸が降り注いた。
「不意打ちにも対応できるようで安心安心。じゃあ、続けていくよ」
　煙を使って大剣を構築し、両手で握って斬りかかってくる。
　籠手と大剣で数合打ち合ってから、ロウは大剣を投擲する。
「ふっ！」
　それを左の正拳突きで弾き飛ばす。すぐに右の手にオーラを集中

させ、左腕を引くと同時に右腕を振ってオーラの球を飛ばす。
山なりに飛んだ赤い光球はロウが持つ煙管にあっさりと弾かれる。
「お前の遠距離攻撃は弱すぎる。そのままでは下級の天使や悪魔ぐらいしか倒せない」
ロウは言葉を紡ぎながら煙管を振って複数の鉄球を構築する。
「だからあなたが格上相手に狙うとしたらそれは乾坤一擲（けんこういってき）の一撃のみ」
鉄球をこちらに飛ばしながら、ロウ自身も接近してくる。
左腕で弾き飛ばした鉄球が鉄球にぶつかるように狙って殴り飛ばす。
鉄球同士がぶつかって金属音と共に煙となって消える。その煙は撚（よ）り集まって巨鳥の姿を取ると、上空から襲いかかってくる。それと同時に下からはロウが走り込んで来る。
上と下。どっちに先に対処するかを少し悩んだが、まず驚異度の高い巨鳥を落とすべく、巨大なオーラの球を作って飛ばす。
しかし、オーラの球が激突する一瞬前に巨鳥は煙に変わり、無数の小球になって重力に従って落ちてくる。
「くっ……」
一度大量にオーラを放出したせいですぐに次の球を出現させることができず、左腕を盾にして自分の体を庇う。頭を庇ったせいで腹部ががら空きになり、無防備になったそこに蹴りが命中した。
「フェニックスは不死身。倒したと思っても再生するよ。次の行動をすぐに起こせるにしておかないと」
更に飛んでくる蹴りを痛みを堪えながら腕でガードすると、ロウはすぐに後ろに下がった。
「うーん……結構マンネリになってきたかな。もっと驚異を与えたいんだけど、私のこの力ではそろそろ限界かな」
ロウは煙管を通常の用途で用いて一息吐く。
「かと言って、彼女を呼ぶのはまだ早いし……悩みどころだね」
目を伏せて悩みながらも攻撃の手は休めることなく、煙管を振るって攻撃を仕掛けてくる。

「取りあえず、できるだけ最大で行ってみましょうかね」
煙管を咥えて大きく息を吸い、最大限まで大きく吐き出す。
辺り一体を包み隠すほどに広がった煙はすぐに圧縮されると、すぐに巨大なドラゴンの形を取る。
「行け」
5メートルを超える大きさのドラゴンは木々をなぎ倒して駆け出し、こちらに近づいてくる。
「おわっ！」
機関車のような暴力的な突進を間一髪の所で飛び退いて避けるが、その余波だけで吹き飛ばされた。
「どうした。本当の龍王だったら破壊力はこれ以上だ。今の一撃で死ぬことも有り得る」
煙管を振って再びドラゴンをこちらに嗾(けしか)ける。ドラゴンは飛び上がってこっちに向かって落ちてくる。
煙でできてるとはいえ、ドラゴンの質量はそれなりにあるのか、地を抉りながら土を跳ね飛ばす。
ほど近い所にいたアーシアが巻き込まれないように抱えながて飛び退く。その俺を追いかけるドラゴンに牽制のオーラの球を放つが、赤い光球は体表に当たって霧散する。
「これには私の力のほとんどを費やして作られている。並大抵の力では倒すことは敵いませんよ」
ドシンドシンと音を立てて駆けてくるドラゴンだったが、足をググッと曲げると低い軌道で跳躍してくる。
「ぐっ！」
高速で迫る爪を体を倒して避けようとするが、アーシアを抱えている分動きが遅れて肩を掠めた。だが、アーシアがすぐに肩を治療してくれて傷はすぐに塞(ふさ)がった。
ドラゴンは木々に突っ込みながら突進の勢いを殺し、多少よろけながら方向を変え始める。
（やるなら今しかない！）
アーシアを脇に避けながらドラゴンに向かって駆け出す。

『Ｅｘｐｌｏｓｉｎ！』（エクスプロージョン）
倍化が始まってからこれで三分。倍化できるギリギリの時間だ。これで決められ無ければ俺はあれには勝てないだろう。
「せ、あああぁぁぁ!!」
『ＪＥＴ！』（ジェット）
左腕の籠手からオーラの噴射を行い、ドラゴンに真っ直ぐ突き進み、その額に拳が突き刺さる。だが、返ってくる感触は硬く、ドラゴンの体はビクともしない。
「でりゃぁぁぁ！」
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ！』（トランスファー）
右の手の平にオーラを集めて力を譲渡、最大まで高めたそれを思い切りドラゴンへと叩きつける。
赤い光球は閃光と共に大爆発を起こす。
「おわっ！」
「イッセーさん！」
その余波で吹き飛ばされて地面に転がると、アーシアが駆け寄ってくる。だけど俺はアーシアを手で制す。
「まだ倒せてないかもしれない」
「その心構えは立派だけど、ちゃんと倒せてるよ。というか、あんなのくらって無事な相手なんてほとんどいないって」
煙管から灰を落としながらロウがため息混じりに呟く。
「まあ、あれが倒せたなら辛うじて及第点かな。後は相手がフェニックスだってことだけだけど……まあ、そこはアーシアちゃんに頑張ってもらうしかないかな」
……フェニックス。無限の再生能力を持つ悪魔の一族。精神が折れない限り体の傷は回復し続けるらしい。だから勝つためには相手が諦めるまで倒し続けないといけないらしい。
「まあ、存在そのものを消し飛ばせるぐらいの火力があれば別だけど、今のお前じゃそれは無理でしょう」
というわけで、できるだけ勝率を上げるためにはアーシアの協力が不可欠らしい。

「そろそろ襲撃される頃だろうし、できるだけ体を休めておきなさい。
フェニックスとの戦いは長期戦。体力なくしては勝てないよ」
勝つために必要なのは強い心。
ロウが言ったその言葉を胸に刻んで、俺たちは戦いに備えた。

「はふぅ……」
ロウから少し身を守るためのレクチャーを受けたアーシアは、その後の軽めのトレーニングを終えた後、汗を流すために湖に来ていた。
もっとも、湖の水はそのままだと冷たいので、木桶に貯めて火蜥蜴（サラマンダー）の子供が温めてくれている。
「ありがとうございます」
アーシアがお礼を言うと、火蜥蜴は可愛く鳴いた。
アーシアは木陰で衣服を脱ぐと、清潔な布を火蜥蜴が温めたお湯に浸して体を拭い始めた。
シャワーも浴びることもできない生活であったが、質素な暮らしに慣れているアーシアにとっては然程苦ではない。
十分ほど時間をかけて体を拭い終えると、もう一枚の乾いた布で体を拭いてから服を着始める。
その途中、木の葉が擦れる音がして、一人の男が現れる。
「赤龍帝はこっちじゃなかったか。だとすると向こうか、もう一人の方か……――それにしても、中々の女だな」
茂みを掻き分けて出てきた赤いスーツの男――ライザー・フェニックスを見て、アーシアはしばし呆然とした。
「キ……キャァァァ!!」
着替えを見られたアーシアは大声で悲鳴を上げる。すると、隣りにいた火蜥蜴がライザーに向けて火を吹いた。
「ぐおっ!」
その存在に気づいていなかったライザーはその小さな火球を顔面に受けるが、すぐに炎と共に再生する。
「魔獣風情が、よくもやって――」
顔の傷が再生したライザーが見たのは、緑色に輝く魔方陣と目の前で飛んでいる青い子龍。
「蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）だと!? まさか、召喚したのか!?」
蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）は滅多に人に懐かないが何故かアーシアには懐いた。そ

のため、ロウが彼女の護衛役として契約させたのだ。
そして、蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）を間近に見て驚愕したライザーへと、至近からの雷撃が直撃した。
「ぐおおおッ！」
○　●　○
「アーシアの悲鳴！」
アーシアから僅かに離れた森の中でそれを聞いたイッセーは駆け出そうとしたが、現在の状況はそれを許してくれなかった。
「さっさと行け。ここは私が足止めしていてあげる」
ロウが構わず行けとイッセーに告げる。
居てもたってもいられないイッセーとしてはロウの提案には一も二もなく頷きたかったのだが、この状況はそれを許してくれそうになかった。
今の二人は十人以上の女性に囲まれており、火花を散らしているような状況であり、今自分が抜ければロウは一人でこの人数を相手することになる。
「――優先順位を間違えるな。お前が救うべきは俺か？　アーシアか？　選択を誤れば一生後悔することになるぞ」
その言葉に籠（こ）められた言葉では言い表せない重みを感じ取ったイッセーは無言で頷く。
「意見はまとまった様だけれど、私たちがあなたをむざむざと行かせると思うかしら？　赤龍帝」
イッセーたちを取り囲んでいる女性の中で一番年上と思われる美女がそう言うと、イッセーとロウは不敵に笑う。
「当然――」
「無理矢理押し通るに決まってるだろ！」
イッセーは周りから見えないように隠していた籠手に包まれた左手をロウの肩に置き、ロウは振袖の袂から出した煙管を咥える。
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ（トランスファー）！』
イッセーは密かに倍化させていた力をロウに譲渡すると、ロウはその力を使って辺り一帯を覆い隠すほどの煙幕を創り出す。

その煙に紛れて、イッセーはアーシアの元に駆けていく。
無論、取り囲んでいる彼女たちもそれをむざむざと見逃すはずがない。だが、辺りを――延(ひ)いては彼女たちを包んでいる煙はロウが創り出し、今もそのコントロール下にあるものだ。いわば、この煙はロウの手足。彼女たちはロウの手の内にいるに等しい。
よって、彼女たちは体にまとわりつく煙に身動きを封じられて、イッセーを見す見す見逃すことになる。
「さて、このまま――」
縊(くび)ってやろうかと考えたところで、突然吹いた強風に煙が散らされた。
「まだ煙の外に誰かいたようですね」
吹き散らされる感覚からそれを察したロウは、まだ制御下にある煙を出来るだけ圧縮し、できるだけ風の影響を受けないように鋭く細い針のような形状にしてから適当に狙いをつけて打ち出した。
針のような形に収斂させた煙は風に軌道をずらされながらも、強風を引き起こした十二単を着た少女を狙うも、横から打ち込まれた火球に吹き飛ばされる。
「く――」
再び煙を生み出そうとして煙管を咥えたロウだったが、その直上から水の瀑布が落ちてきた。
ロウは間一髪のところで回避行動を取るも、煙管を口から離してしまう。すぐにそれを空中で拾ったものの、煙管は僅かに瀑布に呑まれてしとどに濡れてしまった。
「これで、それは使えないでしょう？」
風を起こし、水を降らせた十二単の少女をロウは憎憎しげににらみつける。
「舐めた真似を……！」
ロウは煙管をひと振りして水気を切ると、着ている振袖の袂(たもと)に仕舞い、顔を俯かせて一言だけ呟く。
「殺すわ」
それだけで人を殺しかねないほどの殺意を辺りに発散すると、それ

を感じ取った周りの少女たちが僅かに後ずさる。
「能力の発動媒体を封じられたのによくそのような事を言えますね」
魔導師のような姿の女性がそう言うと、更にその後ろにいたドレスを着た少女へ振り返る。
「レイヴェルさま、ここはよろしくお願いします。私は逃げた赤龍帝を」
「ええ、わかりましたわ。お兄さまは問題ないと思いますが、相手は赤龍帝です。気をつけなさい、ユーベルーナ」
「はい」
ドレスの少女――この場を頼み、魔導師の女性――ユーベルーナはイッセーを追って飛んでいく。
それを見送ったロウは煙管が無いせいか、細く息を吐いて天を仰いだ。
「全く、煙管に水をかけるなんて……いくらなんでも非常識が過ぎるんじゃないかしら？　使い物にならなくなったらどうしてくれる」
「それは失礼しました。ですが、あなたの能力を封じるにはそれが一番手早いと思ったので」
飾りの付いた扇（おうぎ）で笑みの形に歪む口元を隠しながら、レイヴェルはロウを見下ろし、ロウはレイヴェルを冷めた目で見返す。
「気に入りませんわね、その目。あなた、今の立場をわかっているんですの？　周りを十人以上の悪魔に囲まれ、力は使えない。それで私たちに勝つつもりですか？」
「別に、私が勝つ必要はないんですけどね。本来これはあいつの戦いであって私の戦いではない。勝とうが負けようが、それは私になんら影響を及ぼさない」
諭すように、言い含めるように聞かせるレイヴェルを変わらぬ冷めた瞳で見ながら、ロウはなんの感情を伺わせない声を発する。
「でもまあ、負けるつもりは微塵もありませんよ。この中でも八人ぐらいなら純粋な体技だけで倒せるでしょう」
なので――と前置いて、ロウは煙管を仕舞ったのとは逆の袂から黒い骨組みの飾りのない扇を取り出す。

「やれるものならやってみろ、悪魔ども」
レイヴェルがしているように扇で口元を隠し、ロウは挑発的な言葉を投げかける。
「……いいでしょう、そこまで言うのなら――やってしまいなさい！」
レイヴェルの号砲を聞いて、ロウを取り囲む少女たちが動き出し、ロウは開いた扇をゆるりと振り上げた。
○　●　○
「アーシアァァァ、大丈夫かぁぁぁ！」
森を駆け抜けたイッセーはアーシアのいる湖に出ると、そこで信じ難いものを見た。
着衣が乱れている涙目のアーシアと、その彼女に襲いかかろうとしていた赤いスーツの男。そして地面には蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）と火蜥蜴が倒れていた。
その光景を見た瞬間に、イッセーの中で何かがプツンと音を立てて切れた。
「この野郎……アーシアに何をしやがった!!」
「貴様、赤龍て――グハッ！」
イッセーは怒りと森を駆け抜けた勢いを左拳に全て乗せて、赤いスーツの男の顔面を全力で殴り飛ばした。
「アーシアに手を出して、明日の朝日が拝めると思うなよこの野郎！」
地面に転がるライザーを再び怒りの鉄拳を振り下ろそうとしたその時、イッセーのいた場所が突然爆発した。
「ライザーさま、ご無事ですか？」
それを起こしたユーベルーナが地面に倒れたライザーの下に跪（ひざまず）く。
「ああ、無事だ」
頬を腫らしたライザーは立ち上がると、イッセーが立っていた爆心地を見る。
「あいつは吹き飛んだか？」
頬の腫れが見る見る引いていくライザーが尋ねると、ユーベルーナは首を振った。
「どうでしょう。咄嗟のことでしたので手加減もできませんでした」

爆発の勢いは人間を吹き飛ばせる程度には強く、未だに爆煙も晴れていない。
「もし死んでいたら、リアスにどう説明したものか……」
もしイッセーを殺した場合、婚約は破談にするとリアスから言われているので、そうなった場合のことを考えると今でも気が重いライザーだった。
「せめて頭が残っていたら『涙』で癒すこともできるんだが――」
「イッセーさん！」
アーシアの悲鳴がライザーの声を遮り、イッセーに向けて聖女の微笑（トワイライト・ヒーリング）の回復のオーラを飛ばす。
「ほう、今のは回復の力か？　これはまた珍しいな。リアスの手土産に丁度いいか？」
ライザーはアーシアを値踏みするような目で見下ろし、それに気づいたアーシアはその視線に居心地の悪さと不快さを覚えて震える。
「ライザーさま、これからリアスさまとのレーティングゲームを控えていることをお忘れですか？」
敵に塩を送る――しかも滅多に存在しない回復の力は敵に回すと厄介だと感じたユーベルーナが主を諌（いさ）める。
だがライザーは薄ら笑いを浮かべてアーシアへと歩み寄っていく。
「この程度、ハンデには丁度いいだろう」
そう言ってアーシアの腕を強引に掴むライザー。
「やめて、離してください！」
「暴れるな、大人しくしていれば危害は――ッ!?」
ライザーの腕に急に痛みが走る。慌てて引いて腕を見ると、肌が焼け爛（ただ）れたようになっていた。
「これは一体――」
自分の身に何が起こったのかと驚いたライザーがアーシアを見ると、彼女が首から提げて手の中に持っているものが目に入った。
「十字架だと……貴様、シスターか!?」
相手が「はぐれ」の元人間だとはいえ、悪魔と共にいるものが敵である神に属する人間だとは思わなかったライザーは面食らった。

その隙にアーシアはロウから教わっていた悪魔に対する対処法（ただしイッセーがいない場合に限る）の一つ、聖書を暗唱し始める。
これは一般的な悪魔祓いに則ったやり方であり、相手が魔王クラスでなければ少なからず効果は発揮されるだろう。
「ぐっ」
「っ！」
二人の悪魔を頭痛が襲うが、上級悪魔であるライザーに対しては余り効果はない。
「それをやめろ！」
すぐにアーシアの口と十字架を持つ手を抑える。
「んー！　んー！」
アーシアはその手から逃れようと必死に身を捩る。
「くそ……暴れるな！　ユーベルーナ、こいつを拘束しろ――」
「だから――」
その声がライザーの耳に届くのと同時に、まだ辺りに浮遊していた粉塵を吹き飛ばすほどの力の奔流が生まれる。
その発信源は衣服をボロボロにしてゆっくりと立ち上がるイッセーだった。
「アーシアに触るなって、言ってんだろうがぁぁぁ!!」
『Welsh Dragon Balance Breaker!!!』
赤いオーラの奔流が弾け、ライザーたちの視界を赤く塗り潰す。
その光が収まったとき、イッセーの姿は龍を模した赤い鎧に包まれていた。
「禁手、『赤龍帝の鎧』！　相手が不死だろうがなんだろうが、アーシアに手を出す奴は許さねぇ！」

○　●　○

「この力の波動は……そう、とうとう至ったのね」
離れた場所からイッセーの力の爆発を感じ取ったロウは、扇で口元を隠しながらそう呟く。

「さて、不死鳥(フェニックス)のお嬢さん、私はあちらに向かいますけど、お嬢さんはどうします？」
「あ、ああ……！」
ロウに話しかけられたレイヴェルは地面に座り込んで立てず、怯えるだけだった。
それも無理はない。何故ならロウは今しがた、彼女の仲間であるライザーの眷属悪魔たちを一方的に打ち倒したところでもあり、
彼女自身もフェニックスでなかったら重傷は免れないほどの手傷を負わされている。
「――それでは、失礼させてもらうわ」
ロウはそんなレイヴェルを僅かに悲しそうな顔で一瞥(いちべつ)すると、この場を立ち去った。

Welsh Dragon

「うおりゃぁぁ!!」
『JET(ジェット)!』
イッセーが踏み込むと同時に、背中を始めとして体の各所にある噴出口からオーラを噴出して一気に加速し、瞬(またた)く間にお互いの距離を詰める。
「歯を食いしばれぇぇぇ!」
「うごっぁ!?」
イッセーは渾身の力を拳に込めてライザーを殴り飛ばす。
殴り飛ばされたライザーは近くの木に体をぶつけて止まった。
「ライザーさま! おのれよくも――!」
ユーベルーナがイッセーに火球を撃ち込むが、赤龍帝の力を具現化させた赤い鎧を突破することは適わなかった。
「邪魔だ!」
イッセーはユーベルーナに向かって右腕を突き出してオーラを飛ばす。
「くっ――あぁぁぁっ!!」
即座に張られた防御の魔方陣ごと、オーラの弾丸はユーベルーナを吹き飛ばす。
「ユーベルーナ! ――おのれ……!」
ライザーは炎の翼を広げ、全身に炎を纏う。その姿は正しく火の鳥(フェニックス)。
「フェニックスと称(たた)えられた我が一族の業火! その身で受けて燃え尽きろ!」
「うるせぇぇぇ!」
ライザーが宿したのは骨をも残さぬ地獄の業火。まともに喰らえば鎧を纏ったイッセーでもただでは済まない熱量を秘めているが、イッセーは躊躇(ためら)わずその炎の中に突っ込んだ。
「この程度の炎で、今の俺がどうにかなるわけ無いだろうがぁぁぁ!」
そう叫んで炎をまとったライザーと拳を打ち付け合う。その衝突

で発生した衝撃波が炎を吹き飛ばし、周囲の森へと飛び火した。
「キャァァァ！」
「しまっ……アーシア！」
飛び散った火の粉――それでも人を灼くほどの熱量はある――にアーシアが巻き込まれそうになるも、横合いから放たれた衝撃波がそれを相殺する。
「ふぅ……間一髪。イッセー、アーシアは気にしなくてもいいよ。全力でやりなさい！」
しかし、森の中から扇を手にしたロウが現れ、周囲に引火した火を衝撃波で吹き飛ばしながらアーシアを庇うように立つ。
「おう！」
それを受けてイッセーは両手にオーラを集中し、赤い光球をそれぞれの手から放つ。
「デカい！　しかも二つだと!?」
先ほどユーベルーナに放ったものとは比べ物にならないぐらいの大きさの光球二つを前に、ライザーは防御を諦めて回避を選択し、炎の翼を羽ばたかせて上昇する。
だが、それを予測していたイッセーは更にその上を取った。
「うりゃぁぁぁ！」
「ぐぅぅぅッ……！」
イッセーの回し蹴りがライザーの脇腹に突き刺さり、地面へと吹き飛ばす。
そこでさっきイッセーが投げたオーラが爆発を起こし、ライザーを爆圧で押し上げる。
「もう一回……落ちやがれぇぇぇ！」
跳ね上がって来たライザーへと、イッセーの組んだ両手が腹部を狙って振り下ろされる。
「ぐ、ぐおおお……！」
大地に叩き伏せられたライザーは唸り声を上げる。
フェニックスの特性は不死。いかなる傷もすぐに回復するライザーだが、イッセーの主な攻撃が素手での打撃というのは、彼にとっ

て相性が悪かった。
打撃というのは刃物や魔力と比べて外傷を与えにくいため、あらゆる傷を治すフェニックスの回復能力では癒えにくいのだ。
そしてそれ以上に、殴られるということに慣れていないライザーの精神にダメージを与えていた。
「あまり舐めるなよ……赤龍帝（せきりゅうて）ェェェ！」
ライザーの怒りに呼応して、纏う炎が熱量と規模を更に増す。彼の上級悪魔の中でも有望視されている実力は不死だけに頼り切ったものではないのだ。
「この辺りを焼き払う気ですか……」
そんな事をされては堪らないロウは扇を振るって結界を展開し、周囲への延焼を防ぐ。だが、それもいつまで保つかはロウも不安になった。
「さて、これもいつまで続くことやら……」
ロウが自分の希望とは違う展開を半目で見ながら呟く通り、イッセーとライザーの戦いは泥仕合になりつつあった。
鎧と炎を纏っての近距離での殴り合い。その距離が近すぎるためお互いに避けることもままならず、お互いの拳は頬や腹に幾度となく突き刺さっていた。
殴り合いだけで言うなら鎧を纏っているイッセーの方に分がある。しかし、イッセーの鎧――『赤龍帝の鎧（ブーステッド・ギア・スケイルメイル）』は強大な力を与える反面、厳しい時間制限とそれに見合った反動がある。
禁手（バランス・ブレイカー）はその全てが例外なくその発動中は使用者の体力などを大量に消費する。
およそひと月に渡るサバイバル生活でイッセーの体力は相当なものになっているが、初回発動であるということも相まって鎧は長くても１０分しか保たないだろう。戦闘を考慮すれば更に短くなるだろう。
そして、鎧が解除されたならその後の数時間は赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）すら使用できなくなる。そうなったらイッセーに勝ち目は潰（つい）える。
もっとも、赤龍帝の鎧（ブーステッド・ギア・スケイルメイル）があれば大抵の敵は１０分以内に撃破

することが可能だろう。
　しかし、相手は不死と呼ばれるほどの再生能力を持つフェニックスだ。こと持久戦において、これ以上に厄介な相手はいないだろう。
　フェニックスを倒す方法は二つ。精神を折るか、圧倒的な力で再生できないほど消し飛ばすか。
　どっちの難易度が低いかといえばどっちもどっちだが、強いて言うならば前者だろう。だが、ロウがイッセーに選ばせたのは後者であった。
「せ、りゃぁぁぁ！」
　イッセーはライザーへ渾身のローキックを放ち、足の骨を折って跪(ひざまず)かせる。
（ここだ！）
　イッセーは距離を取り、両手を合わせて前へ突き出す。
『ＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔ
ＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔ
ＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔ!!』
「食らいやがれ、ドラゴンストライク！」
　全身のオーラを手の先へ集め、それを今まで温存した倍化能力——禁手(バランス・ブレイカー)状態では任意で倍化を発動できる——で限界ギリギリまで高め、ライザー目掛けて一気に撃ち出す。
　これがイッセーの切り札にして必殺技。数日で一度しか使えない大技は、ライザーに防御も回避も許さず、ロウが張った結界を薄布の如く吹き飛ばすほどの爆発を赤い閃光と共に全てを吹き飛ばした。
「こ、これは予想以上……」
　爆風に揉みくちゃにされながらも自身とアーシアを守り切ったロウが冷や汗を流しながら呟く。
　ロウの張った結界のおかげで被害が抑えられたものの、それがなかったら周囲が更地になっていたであろう破壊の爆圧は、まるで隕石の落下地点の如く周囲をなぎ倒していた。
　こうなる様にしたのは彼ではあり、赤龍帝の特徴である倍化能力にかけて一撃必殺を選択させたものの、少し予想を超える破壊力であっ

た。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
それを引き起こしたイッセーは爆風に飛ばされることもなく立っていたが、赤い鎧は既に身に着けておらず、疲労困憊といった様子でなんとか立っている状態だった。
「さて、フェニックスの方は……」
まだ生きているのかと辺りを見回してみると、爆心地にほど近い場所で火種が灯った。
注視するとそれが人型だということがわかり、その火が消えると表面的には無傷に見えるライザーが姿を現した。
「これが赤龍帝……末恐ろしい存在だな」
フェニックスの特性で傷は癒えたが、力の限界が来たのか完治し切らなかったのか、よろめきながらライザーは立ち上がり、イッセーに向かって歩みを進めていく。
「これが悪魔の味方になってくれる保証がない以上、お前はここで殺しておこう！」
右手に残ったなけなしの精神力で炎を灯し、立つのがやっとな様子のイッセーを殴打する。
たとえ規模が小さくともフェニックスの炎だ。生身のイッセーでは耐え切れずに炭か灰に変えてしまうであろう一撃を、イッセーは倒れこみながら躱して逆に右の拳をライザーの顔面にめり込ませた。
「がっ！　貴様、まだこんな力を――」
予期せぬ反撃を受けて倒れこんだライザーの上に、イッセーが覆い被さってくる。イッセーは既に立つ力も残ってなかった。
「くっ……退け！　俺は男とくっ付いて喜ぶ趣味はない！」
イッセーを押しのけようとするライザーだが、彼にもそこまでの力は残っていなかった。
「俺にだってねえよ……！」
掠れ掠れの声で言い返しながら、イッセーは体を起こす。しかし、ライザーの上からは退かない。
「いいか、これから俺はお前を殴る」

籠手すらなくなった左手を握り締めて、イッセーはライザーに宣言する。
「アーシアを泣かせた罪は重いぞコラァァァ！」
未だに収まらない怒りを拳に乗せて、イッセーはライザーの横っ面を殴打した。
そこから数分間、イッセーはライザーをマウントポジションを取ったまま延々と殴り続けた。
これは相手が不死だからという理由ではない。単純に、こうでもしなければイッセーの気が収まらなかった。ただそれだけのことである。
「いやあ、愛されてるねえ、アーシアちゃん」
「は、はぃ……」
その光景を見て茶化すようなロウの言葉に、アーシアは顔を真っ赤にして俯き、それをロウは初々しくて好ましいと思うのであった。
○　●　○
殴る。殴る。殴る。イッセーはマウントポジションからライザーを殴打しまくる。それは一切の容赦がなく、ライザーに意識があるかどうかも定かではない。だが、それでもイッセーは殴り続ける。
「……あれ？　イッセーくんってばもしかして意識飛んでる？」
機械的なまでにライザーを延々と殴り続けるイッセーを見て不審に思ったロウが近寄ったところ、イッセーの目からは光が失われていた。
「ストップ。イッセー、ストーップ。あ、駄目だ聞こえてない」
やんわり言葉で止めようとするロウだったが、意識を飛ばしたイッセーがそれで止まるはずもない。
「アーシア、ちょっとこの子止めて。私が止めるとただじゃすまなくなる」
ロウがこの状態のイッセーを止めるとなるとどうしても力尽くになり、怪我をさせない保証はない。
「は、はい！　イッセーさん、落ち着いてください！」
イッセーがアーシアを落ち着かせている間――イッセーはアーシ

アが声をかけるなり大人しくなった――、ロウはライザーの様子を伺った。
「あららー……綺麗に――いや、醜く気絶されてますね」
ライザーは顔を腫らして白目を剥いていた。
「今なら簡単に殺れるかしら？　――ま、する必要はないか」
このまま放置するわけにもいかないので、ロウはライザーを地面に埋めることにした。武士の情けで顔は出してある。
「でも、これ以上ここに留(とど)まるのも限界かな。そろそろ場所を変えるとしましょう。最後にティアたんに会わせたかったんだけどな」
発生したストレスを解消しようとして煙草を吸おうとしたものの、煙管が使えないことを思い出して更にストレスが深まった。
「行き先は追々定めるとして、さっさとこの場を去るとしましょう。薄汚い気配も混ざっていることですし」
辺りの気配を探って不快な気配を感じたロウは、扇を一打ちしてイッセーとアーシアを連れてこの場から転移した。

○　●　○

「チッ。赤龍帝だけでなく、他にも余計な虫が付いてるみたいだね。でも、君は必ず僕のものにしてみせるよ」

ヒーリング・シスター
Ｆｉａｎｃｅｅ

「あれから一ヶ月……洒落にならないほどの火傷を負っていたイッセーも無事に回復して、今は鎧の持続時間を高めるために暇さえあれば鎧を着せています。――なんでもないのに鎧を着てるとかマジシュール」
「やかましいわ！」
「へぶっ！」
　草を生やしそうなロウの独白を聞いて、思わず手が出た。
「こちとら部分解除を覚えるまでトイレにも行けなかったんだぞ!?」
「切実な危機が人間の成長を促す。俺はお前を危機に陥れるためにいるのだ！」
　笑顔でこんな事を言うこいつの性格は最悪だと思う。
「それにしても……これ、どうにかならないの？」
　ロウが煙管で指し示したのは花束を始めとする大量の贈り物だ。
　今の俺たちはマンションの一室を借りて、そこ結界でガチガチに固めて気配が決して漏れないようにして生活しているのだが（ちなみにロウが一晩でやってくれた。こいつが何者なのかが一番の謎だ）、暮らし始めてからしばらく経ったある日から、唐突にこれらが贈られてくるようになったのだ。
「間違いなくストーカーの仕業ね。とっとと誅殺（ちゅうさつ）しましょう」
　口調がゴチャ混ぜなロウであり、それだから性別もわからないが、言ってることは一貫して物騒であることは疑いようがない。
「だって相手はアーシアだよ？　相手がどんなにアレでも優しくしちゃうような女の子だよ？　絶対騙されて人気の無い所に連れ込まれて何かされてようやく悲鳴を上げるような子だって」
　その喩えが合っているかはともかく、アーシアが優しすぎるというのには同感だ。
「……ん？　ところでそのアーシアちゃんは？」

「確か買い物に行くって……」
一人で――と言おうとしたとき、嫌な考えが俺たちの脳裏を過った。
それをアイコンタクトで確かめ合った瞬間、俺とロウは扉を開けるのも惜しんで10階にある部屋のベランダから飛び出した。
○　●　○
アーシアは普段、外に出られない俺とロウ（ロウがなんで外に出られないのかは知らない）に代わって、食材の買い出し等の雑務を一手に引き受けている。
もっとも、アーシアを一人で出歩かせるわけにも行かないので、護衛兼荷物持ちとして、ロウがどこからか用意した人形（ゴーレム）を連れているが、その戦闘力は決して高くない。
それでも普通の人間相手には負けることはないが、俺とロウは贈られた物から一つの共通した考えがあった。
（あれ？　これなんか悪魔の気配がする）
この前のことがあったため、居ても立ってもいられないなった俺たちはアーシアを見守るべくベランダから飛び出して、今は空中にいる。
「イッセー、もう少し安定させて」
「鎧からのオーラ噴射で空を飛ぶのは難しいんだよ！　ドライグの補助ありでやっとなんだ！」
「翼はないのか。ドラゴンだろう？」
『成長すればいずれ生える。それよりも、相棒は――いや、なんでもない』
ドライグが言おうとしたのは俺が悪魔だということだろう。けど、それを嫌がる俺に気を使ってくれたのだろう。気の利くドラゴンだ。
白昼堂々空を飛んでいたら目立つと思うだろうが、上を向いて歩く人はほとんどおらず、ロウが意識を逸らす魔法を使っているので誰にも気づかれていない。
「この際ぶつからなければいい。全力でアーシアの元へ飛ぶんだ！
正直あの子が傷つけられたら私も切れるわ！」

「俺はもっと切れる！」
『変な張り合い方をするな』
　ドライグが呆れたように呟くが、俺は反省しない！
「見つけた！　十時の方向。距離４００！　誰かと一緒にいるみたい！」
　ロウの言葉にスッと頭が冷え、言われた方向を見る。距離があってもなお目立つ金髪を見つけて、鎧から噴出するオーラを強める。
　そしてロウの言う通り、その前には誰かが立っていた。
「相手はイケメンだ――滅びろ」
「同じく」
（この勢いのままラリアットすれば首が飛ぶかなー。殺しはしないけど）
「イッセー、ステイ。まずはアーシアを回収しなくては。すぐ側を通り過ぎた際に私がかっ攫う」
「お前、俺のことを乗り物扱いしてないか？」
　サーフボードみたいに乗られているんだが、今更だがおかしいよな？
「だって私空飛べないし。さあ、ハイヨー、イッセー！」
「馬じゃない！」
　ところでドラゴンの魂を宿しているだけなのに、どうして俺もドラゴンなんだろうか？
『俺の力が強いからな。魂が共鳴してドラゴンに近づいていくのさ』
（成程な）
「喋ってないでサッサと行くぞー。そろそろ雰囲気的にまずいから」
　ロウの言葉に促されて見てみると、イケメンがアーシアの手を掴んだところだった。
「くっ……！　どうするロウ!?　このままだとアーシアに変な虫が！」
「作戦はこうだ！　一、俺が飛び蹴りでハンサムを倒す。二、お前がアーシア確保。三、俺がお前のしっぽみたいな頭飾りに捕まって逃亡する」

「よし、それで行くぞ！」
アーシアから手を離せこんちくしょおぉぉ!!
『……ついて行けないな』

○　●　○

「ディオドラ・アスタロトねぇ……」
アーシア救出作戦は多少問題があった（ロウの回収に失敗したが、俺よりも先に戻っていた）が無事成功し、アーシアからイケメンについての話を聞いた。
ロウがさっき呟いたのはそのイケメンの名前である。
「アーシアが教会を追われる原因になった悪魔で、その恩を返すために探していてようやく見つけた……か。ストーカーだな」
ロウの基準ではそれはストーカーに入るらしい。
「それにしても、アスタロト、アスタロトねぇ……」
「アスタロトがどうかしたのか？」
さっきからイケメンの名前に引っかかっているのか、何度もその名前を呼ぶロウにどうしたのかと訊ねてみる。
「……アスタロトっていうのは、上級悪魔の一族の一つで、現四大魔王のベルゼブブの生家だ。それが大怪我して教会の側に倒れてアーシアに会って治療されるなんて……そんな偶然は物語の中にしか存在しないよ」
ロウの言葉の真意が伝わったのか、アーシアが息を呑む。
「つまり、そいつは態と怪我をしたって言いたいのか？」
「上級悪魔が人間界に出るなら護衛を兼ねて眷属を連れるのが普通よ。それに、純血の上級悪魔なら並大抵の相手に倒されるなんてことは無いし、たとえ怪我をしてても教会には近づかないはずだ」
つまり、と一拍空けて、ロウは心底軽蔑したように吐き捨てた。
「アーシアが教会を追放させることになった一件は奴の狂言だ。理由は知らん」
それを聞いたアーシアは手で顔を覆う。

「……まあ、奴が底抜けの馬鹿という可能性は否定できないんだが。だとしても、アーシアが堕天使と一緒にいたのに助けないような奴にアーシアは渡さんがね」
「その通りだ！　アーシアは誰にもやらん！」
　アーシアに手を出すなら、相手が神でも殴り飛ばす！
「イッセーさん……！」
「大丈夫だ、アーシア。何があっても俺がアーシアを守るからな」
「はいっ！」
「……私が蚊帳の外な件について」

○　●　○

「おのれ、赤龍帝……よくも僕の体に傷を付けてくれたな……！　この借りはアーシアを貰うついでに返して貰うぞ！」

○　●　○

「さて、夜逃げするか」
「夜逃げって」
　なんだか俺たちが悪いことしたみたいじゃないか。
「ん？　だったらここに残る？　居場所が割れてて、さっきそいつに向かって一発かましてきたのに、イッセーくんはそれでもここでのほほんと暮らせるのかな？　アーシアちゃんにストーカーを耐えて過ごせと？」
「よし、夜逃げしよう」
　安定した生活もアーシアには変えられない。
「ならそういうことで。でも、相手が悪魔だから朝に逃げた方がいいか？　契約期間まだ終わってないんだけどな……まあ、使い道は色々あるからそれは構わないとして――」
　ここから去るのはもう既に決定している様子のロウを前に、俺とアーシアは顔を見合わせる。
「荷造りした方がいいみたいだな」
「そうですね」

俺はこの前まではほとんど着の身着のまま、アーシアもほとんど物は持っていなかったのだが、思いの外ロウの気前がよく、ここに住居を構えるに当たって色々買ってくれたのだ。
ちなみに何故かと聞いたところ、黙って万札がみっちり詰まった財布を見せたので黙るしかなかった。なんでそんなに金を持っているのかは俺も聞けない。
「……あいつ、ここ以外に行く宛があるのか？　そろそろあいつについて詳しく訊いた方がいいのか？　――ドライグはどう思う？」
荷造りをしながら左腕に宿るドライグに話しかけてみる。
『やめておけ』
すると、帰ってきた答えは真剣にそれを静止する言葉だった。
「……まずいのか？」
念のために声を潜めて訊ねると、ドライグは俺にしか聞こえない声でその理由を口にした。
『あいつのオーラはお前も察知しているだろう？　あれは辛うじて人間かもしれないが、ほとんどあっち側の存在だぞ』
「あっち側？」
『決して関わってはいけない類（たぐい）の存在だ』
「……」
言葉が出ずに、静寂が辺りを包む。
『余り深入りはしないことだな、相棒。その闇は赤龍帝（ブーステッド・ギア）の籠手の中にもある。引っ張られたら堕ちるぞ』
まだ春先にも関わらず、背中を冷たいものが奔った。
「……だったら、なんであいつは俺たちを助けたんだ？」
ロウがドライグの言うような存在だったら、俺たちは今ここでこうして居られないだろう。
『それが奴の残った人間らしい部分というところだろうな。裏を返せば、奴のあの面まで無くなってしまえば、あれは完全に人間ではなくなる。口調が一定してないのもその表れだろう。あいつには自己というものがもう不安定になっているのさ。いずれは壊れるだろうな』
「それは、どうしようもならないのか？」

『原因が分からんからなんとも言えん。だが、あそこまで行けば、もう手遅れだろう。できる事ならサッサと別れろ』
「これまで散々世話になったっていうのに、見捨てろって言うのか？」
『お前の願いはなんだ？　忘れたわけではあるまい。奴と関わり続ければ、遠くない将来死ぬことになるぞ』
　死。それは確かに、俺が最も恐れることである。
『長生きしたいんだったら、この世には関わってはいけないモノがあるのさ』
　ドライグの重みのある言葉に何も言えずに沈黙していると、突如辺りの空気が変わった。
「これは……結界!?」
　修行中に何度かロウが結界を張ったときと同じ感覚だったからわかった。だけど、いったい誰が!?
『くそっ！　やられた！』
　扉の向こう側でロウが悪態をつき、直後に爆音が響く。
「赤龍帝の籠手（ブースティッド・ギア）！」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）！』
　禁手（バランス・ブレイク）化できる様になったが、あれには時間制限がある。現状がわからない今はこっちで対処するしかないだろう。
　向こう側の気配を探りながら部屋の扉を開けると、ロウが大勢のフード姿の少女たちに襲われていた。
　そんな中、俺に気づいたロウはこっちを向いて必死の表情で叫んだ。
「イッセー、あいつやりやがった！　結界に俺たちだけ取り込んでアーシアだけ連れて行きやがった！　――よくもまあそんな七面倒なことをやるもんだ」
　自分に襲いかかってくる少女の内の一人の手首を掴み、そいつを振り回すことで周りの少女たちを押しのけると、手にした少女を放り投げてこっちに近寄ってきた。
「さっきの話、本当か!?」
　アーシアが連れ去られたなら、すぐに助けに行かなくてはならな

い。
「こんな嘘吐くか。でも、結界の強度がかなり厄介だ。それなりに腕の立つ悪魔二人か三人がかりってところか。そいつらを何とかしないと結界は解けない。だけどそいつらは結界の外と、今の私たちなら完全に手詰まりだね」
「じゃあ、どうすればいいんだよ？」
　こうしている間にもアーシアが大変な目に遭っているかもしれないのに。
「あんまりこの手は使いたくないんだけど……最上階とっておいてよかったわ」
　ロウはため息を吐くとまっすぐ上を指差した。
「禁手（バランス・ブレイク）化して結界ごと天井をぶち破りなさい。それまでの時間は稼ぐ」
　ロウの言った内容を聞いて、確かに最上階でよかったと思う。
「わかった！　――ドライグ！」
『Ｃｏｕｎｔ（カウント）　Ｓｔａｒｔ（スタート）！』
　俺が禁手（バランス・ブレイカー）になるまでは、一分近い時間がかかる。それまでは普通の神器（セイクリッド・ギア）としての機能は使えない。つまり、自分本来の力で凌がなくてならない。
　これは今後の成長次第で縮まるらしいが、今はその時間が異様に長く感じる。
「早く……早く……！」
「焦るなイッセー。アーシアにも自衛の手段を与えてないわけじゃないよ」
　常と変わらない冷静な声で、ロウが振袖の袂から和傘を引き抜いた。
「ちょ、それどうなってるんだよ」
「異空間と接続してある」
　なんてことない様に言いながら、こっちに向かってきた魔力弾を開いた和傘で受け止め、宴会芸のように傘布の上で転がし始めた。
「お・か・え・しっ♥」

傘を閉じると、魔力弾はそのまま傘の周りを螺旋状に回り始め、ロウが傘を振るうとそれらが、元々それを放った相手に返っていった。
「さぁて、敷金返って来ないことは確定したし、八つ当たりも兼ねて派手にやりますかね！」
ロウがそう宣言してローブ姿の連中に傘を突きつけると、その先に黒いオーラが点った。
「さあ、この部屋の対価はあなたたちの命で支払いなさいな！」

Ａｎｇｅｒ

「Ｌｅｔ，ｓ　ｐａｒｔｙ！」

黒いオーラが和傘の石突から弾丸の如く飛び出す。その連射速度はマシンガンに匹敵し、部屋に無数の弾痕を穿つ。

「アハハハハッ！　逃げてばっかり居ないでさ、少しは反撃したらどう？　一方的じゃつまらない。必死に抗い、砕けて消えろ！」

歌うようにロウが叫ぶと、傘を螺旋状にオーラが取り巻き、それが真っ直ぐ突き出されると今までのオーラ弾を超えるほどの大穴が穿たれる。

「いつまで逃げるつもりなの？　逃げてるだけじゃ勝てないよ？　それとも単なる足止めかい？　だったらさっさとお死になさいな！」

和傘を横に一閃。取り巻くオーラは石突から真っ直ぐ伸びて、敵を胴体数人まとめて両断する。

しかし、大振りしたその隙を突くように、ローブ姿の相手の中でも特に動きが早い二人が左右から駆け込んでくる。

「少しはやる気になったかな？　それでもそれは迂闊な行動。煙に巻かれてさようなら！」

いつの間にか煙管（キセル）を咥えていた口の端から吐き出された煙は、鋭い二条の槍になって敵を貫く。

それを見ていた敵のリーダーと思しきローブ姿の人影が、部屋いっぱいに広がる火炎を放った。

「その程度、そっくりそのまま返してあげるわ」

ロウは左手に持った扇を広げると、緩く扇（あお）いだだけで火炎を押し返すほどの強風が生まれた。

「さてさて、そろそろさっくり殺してしまいましょう」

ロウは半透明の膜で炎を防いだローブ姿の人影たちに、煙管と扇、雨傘を向けると、そこから伸びた黒いオーラが敵を貫いた。

「ふん……イッセー、時間は？」

「丁度だ」

『Ｗｅｌｓｈ（ウェルシュ）　Ｄｒａｇｏｎ（ドラゴン）　Ｂａｌａｎｃｅ（バランス）　Ｂｒｅａｋｅｒ（ブレイカー）!!!』

「ドラゴンストライク！」
赤い鎧を纏うと、上へ向けて特大の魔力弾を放って結界を天井ごと撃ち抜いた。――上に何も無いことを祈る。

○　●　○

ロウが襲撃を受けるのと同じ頃、アーシアは一人の悪魔と対面していた。
「ディオドラさん、どうしてここに……？」
今のアーシアがいるのはロウの確保した仮住まいだ。ディオドラが居るはずもないのに、何故か彼はここにいた。
「君をあのドラゴンの魔の手から救いに来たんだよ、アーシア」
そう言うディオドラの顔は酷く優しい表情をしていた。だが、アーシアはそれを素直に受け取ることができなかった。今のディオドラの表情はかつてのアーシアに馴染み深かった表情――人々を癒せる聖女と祭り上げて、悪魔を治せると知るや否やすぐに魔女と呼び手のひらを返した人々が浮かべていたものと、同じだった。
「必要ありません。私はイッセーさんに囚われているわけじゃありません。私は自分の意思でイッセーさんと一緒にいます」
故に、アーシアはディオドラをキッパリと拒絶する。だが、ディオドラがここで素直に諦めるような悪魔なら、今ここでこうしていないだろう。
「そうか……なら仕方ない。力尽くで連れて行こう」
そう言ってディオドラは実力行使に出る。かと言って、アーシアもそれを予想出来なかったわけではない。
既にロウが護衛にと言って付けてくれた人形（ゴーレム）は街中で遭遇したときに破壊されているのだ。
ディオドラが伸ばした手をアーシアが払い除ける。それを受けてディオドラの眉がピクリと動く。
「アーシア、余り抵抗しないで欲しい。僕は君に手荒な真似はしたくないんだ」

手元に魔方陣を展開しながらディオドラはアーシアに優しく話しかける。それを見て、アーシアもロウから教わった防衛策である、召喚形式の魔方陣を展開する。
「来てください、ラッセーくん！」
召喚の魔方陣から現れるのは青い体のドラゴンの子供。成長すれば人間の少女の護衛としては破格と言われた蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）の子供だ。
ラッセーはディオドラを見るや否やすぐに雷撃を放つ。
元々異性には厳しいラッセーだが、ロウの躾（しつけ）によってアーシアに近づく男には問答無用で雷撃を叩き込めと仕込まれている。躾の方向性が完全に間違っていると言わざるを得ない。
ディオドラは予想すらしていなかったアーシアからの反撃を、咄嗟に展開した魔力の盾で防ぐが、その閃光に視界を焼かれて目が眩（くら）んだ。
「この程度、アスタロト家の次期当主である僕に通じるものかッ！」
雷撃を防ぎきると、霞む視界で前を見ながら攻撃用の魔方陣を展開する。だが、その目に映ったのはアーシアではなく、固く握られた拳だった。
「破ぁッ！」
ラッセーに続いて召喚されたディーネちゃんの拳がディオドラの顔面にめり込み、壁まで吹き飛ばす。
「ウンディーネのディーネ。契約により馳せ参じた」
拳を下ろし、アーシアに向き合ったディーネちゃんは胸の前で拳を手のひらに打ち付けて一礼する。
「お願いです、ディーネちゃん。あの人から私を守ってください。イッセーさんが来るまでで構いません」
「よかろう。その後で美味いものでも貰えるならば喜んで引き受けよう」
「このっ……使い魔風情が！」
よろよろと身を起こして自分に向かって後ろを向いているディーネちゃんに魔力を放つ。だが、ディーネちゃんはそれを振り向きながらの回し蹴りで軌道を捻じ曲げる。

「この程度か？　兵藤一誠の拳は今よりもっと重かったぞ？」
そう言いながら距離を詰め、再びディオドラに拳を振り下ろす。身長差のせいで頭を上から打ち付けるようになった拳だが、ディオドラに当たる数センチ前で何かに当たって跳ね返される。
「ただの拳、来ると分かっていれば僕が食らうはずもないだろう？」
魔力の壁で攻撃を防いだことにご満悦な様子のディオドラ。一方ディーネちゃんは攻撃を防がれたことに顔色を変えずに、魔力の壁に手を当てて短く息を吐き出す。
「フッ――」
ディーネちゃんの全体重が乗った掌底がゼロ距離から魔力の壁に力を伝え、それを真っ向から打ち破る。
「何ッ!?」
まさか破られるなどとは微塵も思っていなかったディオドラは、続いて放たれた拳を腹に受けて悶絶する。
「ぐぁぁぁ！　このっ、このぉぉぉ！」
床に膝を着きながらも、ディオドラは憎々しげな視線でディーネちゃんを睨み付け、円錐状に圧縮した魔力を放つ。
「ぬぅ!?」
後ろにアーシアが居るため避けられないディーネちゃんの体に、円錐状の魔力が突き刺さる。だが、その背後――アーシアのそのまた後ろに大きな影が出現する。
『召喚されたはいいが……狭いなここは』
部屋の中で窮屈そうに身を屈める火蜥蜴（サラマンダー）――ラマさんがぼやきながらディオドラを見下ろす。
「ひっ！」
巨体に見下ろされたディオドラは思わず悲鳴のような声を漏らす。
『成程な。どうやら、燃やしてしまっても構わん輩らしい』
ラマさんはすぅっと息を吸い込み、アーシアを庇うように前足を動かす。それに合わせるように、アーシアの頭上に陣取るラッセーが電撃を迸らせ、ディーネちゃんが右拳を構える。
怯えるディオドラが渾身の力で魔力障壁を張った直後、ラマさんの

吐き出した火炎とディーネちゃんが正拳突きと共に打ち出した水流。そしてラッセーの雷撃が障壁の表面で弾ける。
話は変わるが、ここで科学の問題。
Q．水を電気分解して発生した気体に、火を近づけたらどうなるでしょうか？
A．爆発する。
部屋という密閉空間で発生した爆発は、部屋の中にいるものを種族関係なく襲う。
そんな中、一番脆いアーシアは間違いなく命の危険が存在したが、高熱に強いラマさんが自分の体を使ってアーシアを守り、その頭上にいたラッセーも同じく彼女を庇う。
「ぬん！」
ディーネちゃんが外壁に穴を空けて空気の入れ替えをすると、ようやくアーシアも無事に動ける環境になった。
「皆さん、大丈夫ですか？」
ディーネちゃんに回復のオーラを飛ばしながらアーシアが尋ねると、誰もが問題ないという旨の言葉を返した。
『さて、そこの輩の処遇はどうす――』
突如強大な魔力が発生し、晴れつつあった黒煙が一気に吹き飛ばされる。
「クソクソクソクソクソッ！　僕を、アスタロト家のディオドラを！魔物程度がァァァ！」
叫び声と共に魔力が無秩序に放たれ、アーシアたちを壁際まで押し退ける。
「アーシアを渡せ！　そいつを手に入れるために、僕はわざと――」
アーシアとの出会いをネタばらししようとした時、ディオドラの両肩にそれぞれ一つの手が置かれる。
「この僕に、気安く触るなァァァ!!」
振り返って手の主に魔力を叩き付けたディオドラ。だが、その魔力は赤い鎧にいとも簡単に弾かれる。
「よう、うちのアーシアが世話になったみたいだな」

「世話になったから礼をしないといけないね」
そこに居たのは赤龍帝の鎧（ブーステッド・ギア・スケイルメイル）を纏ったイッセーと黒一色の和装に身を包んだロウ。そして、二人はディオドラの肩に置いたのとは別の手を固く握りしめていた。
「「遠慮せずに受け取れ!!」」
下から掬い上げるようなアッパーがディオドラの顎を打ち抜き、そのまま高く上がったディオドラは天井に突き刺さった。
「はぁぁぁぁぁぁぁぁ――」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ――!!』
その下で、イッセーは再現なく力を倍化し続け、そろそろ臨界というところでロウがディオドラの突き刺さった天井の穴を広げてディオドラを落下させる。
「でりゃぁぁぁ!!」
落ちてきたディオドラの腹部に掌底を打ち込み、そして倍化した力を一気に手のひらから発散させる。その瞬間、それを遠くから見ていたアーシアには、イッセーの手のひらに赤い花が咲いたように見えた。
赤い花――極限まで高められたオーラに触れたディオドラの胴体をゴッソリと消滅した。悪魔であってもショック死は確実な現象だったが、宙に浮いたディオドラの頭部が誰かに掴まれた瞬間、その意識は強制的に覚醒させられた。
「ぎ、ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ!!?」
首から下を丸々失った現実を直視し、痛みも合わさってディオドラは大声で泣き叫ぶ。
「うっさい。少し静かにしなさい」
だが、それもロウが少し頭を強く――指が脳に食い込むほど強く握ることで静まった。
「あー……はいはい。成程、そういうこと」
ロウが何事かを納得して頷いた後、ディオドラは首だけで命を保て

る筈もなく、すぐにその生に幕を落ろした。

○　●　○

「ふーん……そっか、もうそこまで来たんだねぇ」

ディオドラの頭を潰してから、ロウは腕組みをしてから何事かをブツブツ呟き始めた。

「そうなると、私もあんまり悠長にしてられないかな。そろそろ行動を起こす必要があるかも」

ロウは一人で納得すると、こっちに向かってくるりと振り返った。

「イッセー、アーシア。私、しなくちゃいけない事が出来たから、ここでお別れするわ」

ロウは唐突にそう言うと、袂から一枚の黒いカードを取り出してこっちに向かって放り投げた。

「それ、好きに使っていいよ。普通に暮らす分には一生大丈夫だと思う」

「お前、いきなりどうしたんだよ？」

いつ別れるかは決めておらず、ドライグも早く別れた方がいいと言っていたが、それがいきなりとなると驚く。

「別に、どうもしてないわ。本分に立ち返っただけだよ。あなたたちの事はほんの気まぐれの暇潰しで、何より優先することがあって、今からそれをするために動くだけだよ」

そう言い残して、ロウは現れた時と同じように突然いなくなったのであった。

第二章　交錯のヘブンリイドラゴン
Ｗｅｌｓｈ×Ｖａｎｉｓｈｉｎｇ

さて、ここで昔から伝わる二匹のドラゴンの話をしよう。
二匹のドラゴンは並大抵の神を凌ぐほどの力を持っており、赤と白――二匹合わせて二天龍と呼ばれていた。
二天龍はとても仲が悪かった。お互いの存在が相反するものであるためか、それとも理由が他にあるのか。それを知るものは今となっては当龍・も含めていないが、とにかくよく喧嘩をしていた。
喧嘩といえども、それは神ほどの力を持ったドラゴンの喧嘩だ。山は砕け、川は吹き飛び、大地には大穴が空くといった、地形を変えるほどの大喧嘩だった。
そしてある時、いつもの様に喧嘩をしていた二匹はそれを第三者――神と天使・堕天使・悪魔――によって止められることになる。
その理由というのが実に迷惑な話で、先に挙げた三大勢力が戦争をしている最中、その戦場で喧嘩をし始めたのだ。
その何とも傍迷惑な行為に抗議したところ、貴様ら程度が俺たちの喧嘩を邪魔するなという、何とも傲慢な回答をしたのだが、それが三大勢力の怒りを買ってしまう。これが好き勝手にしていた彼らの落日を決めることになった。
その言葉に腹を立てた三大勢力はなんと驚くべきことに、さっきまで戦争をしていたのにも拘らず協力し合い、戦いに横やりを入れた二天龍を打ち倒し、その魂を神の作った神器セイクリッド・ギアに封印した。

だがしかし、これにて一件落着と落ち着いたわけではなかった。
彼らの魂が封印された神器セイクリッド・ギアは人間を宿主にする。そして二天龍は神器セイクリッド・ギアを通じて彼彼女らと会話をすることが出来たのだ。
ここからが問題。一番迷惑な話。

なんと、二天龍は神器セイクリッド・ギアに封印されてもなお、宿主の人間同士が代行するという形で戦いを始めたのだ。
しかもそれもまた周囲に盛大な被害を出して、宿主も早晩没するというのだから誰にとっても救いのない話だ。
だが、その戦いは二天龍が出会うと必ず起こる。
なんで神器セイクリッド・ギアに宿る魂の存在に引きずられてそんな事するんだと周囲は常々思っていたが、それの理由は実際のところ誰にもわからないというのだから本格的にどうしようもない事だ。

そして、現在も二天龍――赤龍帝と白龍皇は新たな宿主を得た。
赤龍帝ドライグは日本に住む普通の少年、兵藤一誠に。
白龍皇アルビオンは魔王ルシファーの末裔、ヴァーリ・ルシファーに。
方や最弱の赤龍帝。方や最強の白龍皇。
二人の出会いは今まで通りの騒乱を生むのか、それともまた違った結末を迎えるのか。
どちらにせよ、巻き込まれた者は堪ったものではないだろう。
強大な力を持つドラゴンと関わって、無事でいられた者など数えられるほどしかいないのだから――

ドラゴン・アタック
Ｂｌａｃｋ　Ｃａｔ

ロウが居なくなって一ヶ月が経った。
俺たちは適当な住居を見つけて、そこで暮らし始めていた。金はロウから与えられたのを使ったが、収入の無い身としては仕方ないのだ。
トレーニングは続けているが、それもロウと一緒にいた頃ほどではない。
「なんだかなあ……」
今の俺は間違いなく幸せなのだが、なんだかその幸福が怖い。トレーニングを欠かせないのはそのせいかもしれない。
「このまま何事もなければいいんだが」
『残念ながらそれは難しいだろうな』
俺のささやかな願いは一瞬で否定された。
「ドライグ……たとえそうだとしてももう何事も無いって思わせてくれよ」
『俺にとって昔から因縁のある存在がまだ出てきてないからな』
その言葉を聞いて、俺は前にドライグから聞いた名前を思い出す。
「白龍皇……アルビオンって奴か？」
『ああ。奴との因縁は体を滅ぼされ、神器（セイクリッド・ギア）に魂を移してなお続いている』
「俺からしたら迷惑な話だよ」
こんな力は要らなかった。可愛い嫁さんを貰えればそれでよかったのに……どうしてこうなった？
○　●　○
「アーシア、今日は何を買うんだ？」
アーシアを一人にするのが不安なイッセーは、日々の買い出しに同行していた。
荷物持ちは筋トレ代わりになると言っているイッセーだが、それが

建前なのは言わずもがなである。
「今晩の夕食の食材と、そろそろお米がなくなって来たのでそれも買おうかと」
「荷物持ちについて来てよかったな」
すっかり所帯染みている二人ではあるが、資金源がロウだと考えると少し微妙な気分になる。
よって、それを理解している二人は娯楽用品を一切買わない。
仲睦まじい様子で並んで歩く二人。それを遠くから見ている影があった。
「ふふーん、あれが今の赤龍帝なのね。なんだか隣の金髪ちゃんと親しげな様子だし？　ちょっとちょっかいかけてみようかしらん？」
建物が並んでいることでできた路地から二人を覗く影は、そう呟くと路地の奥に姿を消した。
○　●　○
「丁度卵のタイムセールに間に合ってよかったですね」
「タイムセール時の主婦が強すぎる……」
なんであそこまで鬼気迫る必要があるんだろうか。そこまでして半額の卵お一人様ワンパックが欲しいのだろうか。
疲れた体に米の重みがズッシリとかかる。
（今日は早く風呂に入って寝たい……）
ある意味での戦場にため息を吐いたとき、突如不思議な感覚に襲われた。
（これは結界か!?）
ひと月ぶりだが体は覚えていたようで、直ぐに辺りを見回すが、敵らしい影は見当たらない。
いや、それどころか人っ子一人見当たらなかった。
異常事態だと思った俺は荷物を下ろして赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）を発動しながら、注意深く辺りに気を配る。
「そこかッ！」
何と無く違和感を感じた場所に向かって、落ちていた石を投げつける。

「にゃうッ!?　いきなり何するにゃ！」
　砕けた建物の陰から出てきたのは和服を着崩した猫耳がついた黒髪巨乳のお姉さんだった。
　それを見て、俺は警戒心を強めて身構える。
「先手必勝おおお！」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（エクスプローション）！』
　そして倍化を一度止めると、猫耳お姉さんに向かって殴りかかる。
「みぎゃぁぁぁぁぁぁッ!?」
　しかし、振りかぶられた拳は惜しい所で空を切った。
「い、いきなり殴りかかるなんて何考えてるにゃ！」
「黒髪巨乳人外は俺の敵だ！」
「黒髪巨乳になんの恨みがあるにゃ!?」
　殺された恨みがあるんだなこれが。
「ちょっと待つにゃ！　私は赤龍帝ちんと戦うつもりはないにゃ！」
「俺を赤龍帝って呼んで戦わなかった奴はいない！」
「なら私がその一人目にゃ。――……それに、私が手を出すとあいつに怒られるしねー」
「何か言ったか？」
「何でもないにゃん♪」
　小声でぼそっと呟いた一言が気になったが、笑って誤魔化された。死ぬ前ならさぞ嬉しかっただろう。
「じゃあ、お前は何しに俺に会いに来たんだよ」
「知らないの？　二天龍って各勢力から注目の的なのよん？　迷惑的な意味で」
（おいドライグ。お前今まで何してきた？）
『ドラゴンなんてそんなものだ。――大体そんな奴らは討伐されるのが常だが』
　三大勢力に喧嘩売って神器（セイクリッド・ギア）に魂封印された人が言うと説得力があるなー。
「だったらもう用は済んだろ？　早く結界を――いや、様子を見るだけだったら結界を張る必要なんて無いだろ」

「あ、バレちゃった？」
　その言葉を聞いて、即座に赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）を発動させる――が、倍化が十分貯まる直前に、いきなり押し倒された。
「実はねん。私、強いドラゴンの子供が欲しいのよ。それで、君みたいな人型のドラゴンは珍しいから」
「か、から？」
　美女に押し倒されるという男としては魅力的な状況なのだが、彼女の瞳の剣呑な輝きが興奮を妨げる。
「あなたの子胤が欲しいんだにゃん」
　どうしよう、子供が欲しいと言われた。男なら一も二もなく頷くべきなのだろうが、相手が自分を殺した奴と同じ黒髪巨乳だと思うと背筋が凍る。
「それじゃあ早速……」
「さ、させませんー！」
　その時、俺の上に乗っていた女性が誰かに突き飛ばされた。
「イッセーさんは渡しません！」
　俺の上から黒猫のお姉さんを突き飛ばしたのはアーシアだった。
「結界張ったのにどうして入って来られたにゃん!?」
「通りすがりのロウさんに助けてもらいました」
　……勝手にいなくなったはずの人間と簡単に遭遇したという話を聞くと、どうしてこうも腹が立つのだろう。
「あー彼女さん来ちゃったにゃー」
「いや、俺はアーシアの彼氏じゃ――」
「イッセーさんに手をだすなら私を倒してからにしてください！」
　一応否定しようとしたが、それは途中でアーシアの大声で妨げられる。……別にいいんだけどさ。
「はっはー。彼女さんが怖いから私はトンズラするにゃー」
「あ、待てよお前！」
　別に要件もなかったが、逃げる相手は引き止めたくなるのが人間なので、思わず声をかけてしまった。
「黒歌――それが私の名前だにゃん。次会うときはそう呼んでちょ、

赤龍帝ちん」
黒髪猫耳の女性――黒歌と名乗った彼女は着崩した和服の袂から紫色の煙を出すと、それに紛れて消えてしまった。それと同時に、俺たちの周りに人が現れた。
「イッセーさん、大丈夫ですか？　何もされませんでしたか？」
通行人の邪魔にならないように落とした荷物を拾って立ち上がった俺にアーシアが心配そうにして声をかけてくる。
「ああ、大丈夫だ。アーシアのおかげで何もされないで済んだよ。ありがとう」
不安そうにするアーシアの頭を優しく撫でる。
「良かったです……それじゃあ、帰りましょうイッセーさん」
「ああ」

○　●　○

「当代の赤龍帝は中々良い男ねー。女慣れしてそうになかったし、ヴァーリよりも期待が持てそうね。味見できなかったのは残念だけど、それはまたにするとするにゃん」
黒歌は会ってきた赤龍帝の事を思い出して舌なめずりする。
彼女の種族は猫？と呼ばれる猫又の上位種族であり、強力な力を持つが、それ故に数は少ない。だから彼女は強い子が欲しいと繁殖相手にドラゴンを望んでいるわけだ。
まあそんな事は今はどうでもいいだろう。彼女の心情は私にとっては毛ほども考慮する必要のないことだ。
「――黒歌」
「にゃッ!?」
背後から声をかけると、黒歌は飛び上がるほど驚いた。どうやら気配を紛らわせていたのが効いていたらしい。
「あんたかにゃ……いきなり後ろから話しかけないでくれる？」
「わざわざ前に回ってから話しかけろと？」
これは皮肉ではなく本心を口にしたのだが、黒歌は苦虫を噛み潰し

たような顔をした。
「……まあいいにゃ。それよりも、なんであんたが邪魔したにゃ？自分に関係ないことは不干渉があんたのスタンスじゃなかったかにゃ？」
　それは確かに黒歌の言う通りです。
「――そも、お前が赤龍帝の所に行くことになった原因は私でしょう。ならば私が責任を取るのは当然ではないか？」
「あっそ。直接邪魔しに来なかっただけありがたいと思うべきかしら？」
「私に向けての感謝など不要。これ以上ちょっかいをかけるなと釘は刺しておくけど」
　私としては彼には彼女がお似合いだろうと思う。
「感謝なんかしてないわよ」
　どうやら発現の意図を読み取り間違えて発したらしい私の言葉を律儀に訂正しつつ、黒歌ははだけた和服から露出している肩を竦めた。
「……相変わらず、和服が似合わないな。体に凹凸が多いと和服は似合わないと聞く。どう？　望むならその体の前面についた余分な脂肪を切り落として差し上げましょうか？」
「サラッと怖いこと言うんじゃないわよ！」
　親切心から出た言葉だったのだが、どうやら気に障ってしまったらしい。
「そもそも、あなたはなんで和服を着ているのですか？　最初に会った時は着てなかったはずだが？」
　ふと疑問に思ったので訊ねてみたところ、黒歌は何故だか突然がっくりと肩を落とした。
「ふふ……こいつがこういう奴だってわかってた事にゃ。だから落ち込む必要なんて全くない……」
　なんだろう。黒歌と会話するとどうしてこう意思疎通ができないのだろう。
「話を変えていい？」

「その方が精神的に良さそうだにゃ……」
よろめきながら立ち上がる黒歌を少し心配に思いながら、黒歌に声をかけた本題を切り出した。
「白龍皇の奴はいつ頃あいつに仕掛けるつもり？」
「数日中には戦いを挑むと思うわ」
「はぁ……当代の白龍皇が戦闘狂っていうのは本当なのね」
黒歌の返答を聞いて嘆息する。
「なんで戦闘なんていう非生産的なことが好きなんだか」
「ヴァーリは――今の白龍皇の名前ね――最強に成りたいのよ」
それを聞いて、俺は哂わずにはいられなかった。
「最強――ハッ！　んなもんこの世界で一番競う価値の無いものだろうが。頂点は不動にして鉄板。それは世界の裏事情を少しでも知ってる奴なら誰でも知ってる常識だと思ったが？」
「ヴァーリはそれを覆したい人種なのよね」
ああ、革命者という奴か。なら気持ちは少しはわからんでもない。
「さて、ヴァーリは果たして最強になれる器の持ち主か。黒歌、お前から見てどう？」
個人的には強さになんて興味はないが、自分の目的からすると少々気にかけておいた方がいいだろう。
「才能は十二分にあると思うにゃ。なんたってルシファーの末裔だし？」
「才能なんぞ犬にでも食わせておけ。そんなの幾らか命を切り売りすればどうとでもなる」
「その発想が怖いにゃ」
まあ常識的発想ではないのは認めよう。
「だったら、あんたが最強になるのに必要な要素って何よ」
私の中では最強は不動と決まっていると言っただろう。だが、次点を争うだとするなら……
「絶望だな」
「絶望？」
私の言葉を復唱する黒歌に向かってそうだと頷く。

「そう。絶望。または不幸。または挫折。順風満帆な人生からは強さは生まれない。踏んで蹴られて転がされて叩きのめされて。そこから這い上がり立ち上がって来た奴だけが強さというものを掴める」
「この世には生まれながらの強者っていうのもいると思うけど？　たとえば、今の最強みたいに」
「そう。確かにそういうのは居る。だから最強を競うのは無意味だって言ってるの。どんなに頑張っても生物に肉体という器がある以上、そこには成長限界ってものが存在しているんだから。レベル１の魔王にレベル９９９のスライムは勝てるかもしれないけど、レベル９９９の魔王にレベル９９９のスライムは勝てないでしょう？　むしろ勝てたら駄目だろう」
「なんで龍探検で例えるにゃ」
　理由は特にない。強いて言うなら龍繋がり。
「んん？　なんで私は最強談義なんてしてるんだっけ？」
「いや、あんたがヴァーリは最強になれるのかって聞いたんでしょうが」
　ああ、そうだっけ。でもそれはもういいや。
「ところで、妹との仲は回復した？　って、聞くのは野暮ね。この前気絶させた私が言うことじゃねーや」
　グレモリーの眷属悪魔になっているとは知らなかったので少し驚いた。尤も、向こうは私のことは覚えてなかったみたいだが。一回顔合わせただけだから無理もないか。
「……白音、どうだったにゃ？」
　白音というのが妹の名前だったか。
「元気そうだったよ。まあ、このまま世界がお前らの思う通り順当に回れば十中八九死ぬだろうが」
　姉と違って、あれはそこまで強くない。
「そっか……」
　のっぴきならない理由から姉妹離れ離れとなった彼女たち。その結末に一枚噛んでいる私としては思うところが無いわけではないが、それについては何も言うまい。

私が口出しすると悪化する公算の方が高いし。
「心配なら手元から離さなければ良かったのに。あの時なら私も手を貸したよ？」
「あの子をあんたみたいな奴と一緒にいさせられるはずないでしょうが」
随分と嫌われたものだ。慣れてはいるが。
「それじゃ、私はもう行くわ」
「×」
×立ち去ろうとした背中にかけられる言葉。今ではもう呼ぶ者はすっかり居なくなった、俺の本当の名前。
「その名は捨てた。今の私はロウ。二度とその名前で呼ばないでくれ」
振り返らずに発したその言葉を黒歌はどう受け取ったかはわからないが、黒歌はしばらく黙った後、私に再び声をかけた。
「またねにゃん、×」
二度目の訂正はせず、私は黙って黒歌の前から立ち去った。

「さて、それじゃあそろそろ俺の敵に挨拶に行くか」

○　●　○

トレーニングであるロードワークをしている最中、体は温まっているはずなのに背筋を悪寒が駆け抜けた。

（ああ、これはまた何かが起こる予兆か）

それは平穏を諦めがちな第六感が齎（もたら）したものだと思ったので、トレーニングを早々に切り上げてアーシアの待つ家に帰ることにした。

○　●　○

「ただいまアーシア。何か変わったことはなかったか？」

家に帰ってすぐに嫌な予感が的中していないことを祈りながら訪ねると、予想通り変わったことはあったとアーシアは言う。

「これが郵便受けの中に入ってました」

怪しい。今の俺たちの家を――安い骨董アパート――知ってる奴なんているはずがない。誰にも教えていないのだから。

アーシアが渡してくれたのは普通のはがきだ。ただし、消印は押されてない。直接ここの郵便受けに投函（とうかん）したのだろう。

表を見ても宛名――俺の名前はあるけど差出人の名前はない。というか俺の名前しか書かれてない。

だが、はがきを裏返すと、そこにはこんな事が書かれていた。

『赤龍帝、兵藤一誠殿

私は貴殿との一対一を所望するものである

指定する場所に指定した時間に来られたし

――白龍皇、ヴァーリ・ルシファー』

そこまで確認したところで手紙をちゃぶ台の上に伏せる。

「アーシア。ちょっとしばらくどこかに出かけようか。アルバイトして稼いだ金もあるし」

肉体労働（アルバイト）は体を鍛えられるし、金は手に入るしで一石二鳥だ。だが、身分的には高校生な俺では日雇いとはいえ、あまりやりすぎると怪しまれる危険性があるから多くても週に三度までだ。

「それは嬉しいんですけど……そっちはいいんですか？」
手紙を指差して訊ねるアーシア。俺は手紙をアーシアの目に映らないように体の後ろに隠して気にしなくていいと首を振った。
そして手紙を握り潰すと、オーラ（最近薄々魔力じゃないかと思い始めたが、その違いがわからないので気にしないことにした）を炎に変えて、はがきは燃えて灰に変わった。灰はそのままゴミ箱に捨てる。
「手紙なんて来てなかった。そうだろ？」
笑いかけながら言うと、アーシアも納得してくれたようで笑顔を返してくれた。
「そうですね。それでイッセーさん、どこに行きましょうか？」
現実逃避の思いつきで言ったことだが、アーシアが行きたいと言うならそれも良いだろう。
「なら、遊園地にでも行くか」
この近くには有名ではないがそれなりに大きな遊園地があり、アーシアといつか行ってみたいと考えていたのだ。
（あはは、楽しみだなー）

○　●　○

「……来ないな」
約束の期日。ヴァーリは指定した場所――河川敷でイッセーを待ち受けていた。
「すっぽかされたんじゃねえの？」
ヴァーリの仲間の美猴がそう思うのも無理はなく、もうヴァーリが指定した時間からは一時間も過ぎている。
ちなみに、今のイッセーといえば――
「イッセーさーん」
「アーシアー」
メリーゴーランドに乗っているアーシアに手を振り返しているところだった。実に微笑ましい光景である。

しかし、千里眼的な能力を持ち合わせていないヴァーリがそんな事を知る由もなかった。
「この国には――」
ヴァーリが美猴の言葉を受けてやや唖然としかけたところ、同じくヴァーリの仲間であるアーサーが口を開いた。
「かつて、宮本武蔵と佐々木小次郎という二人の剣豪がいたと聞きます。その二人が決闘する際、宮本武蔵はわざと決闘に遅れたという話があります」
「つまり、これが赤龍帝の策略で、奴はわざと遅れて来るつもりだと？」
「その可能性はあります」
ヴァーリはそれに納得したが、アーサーの考えは大いに間違っていた。
そもそもイッセーは全く戦う気がなく、出来ることなら一生遠慮したいのである。
「なら、もうしばらく待つか」
そう言って来るはずもないイッセーを待つヴァーリ。果たして彼がイッセーに出会うのはいつになることやら。

○　●　○

「う、あああああ……」
黒い人影に顔面を鷲掴みにされ壁に押し付けられた男がうめき声をあげる。
「また木っ端構成員ですか……運が無いな、私は」
黒い人影はため息を一つ吐くと、掴み上げていた男を無造作に投げ捨てる。
「この程度の情報ならもう集め終わった感はあるし、そろそろ幹部の一人か二人でも捕まえようかね」
投げ捨てられた男と同じように。冷たい地面に転がる男たちをまるで地面であるかのように踏みしめる黒い人影。

「ま、いいや。時間は十分あるのだし、一つ一つ、潰して行くことにしましょう」
黒い人影はクスクスと笑い声を漏らし、夜の闇の中に消えていった。

○　●　○

「今日は楽しかったですね、イッセーさん」
「そうだな、アーシア」
遊園地の帰り、俺とアーシアは並んで河川敷を歩いていた。
「あ、今晩のお夕飯どうしましょう」
「コンビニ弁当でも買って帰るか？」
「今日は仕方がないのでそうしましょう」
そして二人は河川敷から外れて近くにあったコンビニへと足を進めた。

○　●　○

「ヴァーリの奴いつまで待ってる気にゃ？」
「もう夜なんですけど……」
「ルフェイ、お腹空いたから何か作ってにゃ」

○　●　○

遊園地に言った翌日。毎朝のトレーニングの一つであるロードワークをこなしていると、河川敷の中程で声をかけられた。
「待っていたぞ、赤龍帝」
ワイシャツ姿のイケメン野郎。――間違いない、敵だ。
『相棒、そいつが白龍皇だ』
こいつが噂の白龍皇……なるほど、確かに俺とは全然違うな。
「俺は白龍皇、ヴァーリ・ルシファー。散々待たされたんだ。早速相手をして貰おうか――！」
若干怒っているような声音の白龍皇は、背中から光の翼を出した。
恐らく、あれがあいつの神器（セイクリッド・ギア）なのだろう。

事ここに至っては逃げられないだろう。応戦するしかない。
「ドライグ！」
『応！』
それを見て、俺はすぐに左手に籠手を出現させる。だが、目の前の相手にはそれだけでは足りないだろう。
『Ｗｅｌｓｈ（ウェルシュ） Ｄｒａｇｏｎ（ドラゴン） Ｂａｌａｎｃｅ（バランス） Ｂｒｅａｋｅｒ（ブレイカー）！』
『Ｖａｎｉｓｈｉｎｇ（バニシング） Ｄｒａｇｏｎ（ドラゴン） Ｂａｌａｎｃｅ（バランス） Ｂｒｅａｋｅｒ（ブレイカー）！』
俺が赤い鎧を纏うのと同時に、相手も白い鎧を纏う。元が並び称される二天龍――神器（セイクリッド・ギア）に封印されてもなお、似てる存在という事なのだろうか。
「では、君の力を見せて貰おうか！」
その声と共に打ち出される魔力弾。かなりの威力を秘めているだろうと推測できるそれを踏み込みながら躱して、右の拳打を放つ。
並大抵の人間の顎なら軽く砕ける力と速さなのだが、一歩下がるだけであっさりと避けられた。
「中々速いな！　なら、これでどうだ？」
翼を広げて大きく飛び退いた後に放たれた魔力の砲弾。
万が一にも受けるわけにもいかないので、近づく前に下がって避けようとしたのだが、その動いた分を詰めるように砲弾が軌道を変えた。
「誘導弾!?」
これは避けられない。なら、迎撃するしかない。
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』
「でやっ！」
倍化を発動させて魔力弾を思い切り殴って四散させる。
「遠距離からでは簡単にはいかないようだな。ならば！」
ヴァーリは光の翼を大きく広げると、一瞬で俺の視界から消えた。
『左だ、相棒！』
ドライグからの忠告に従って左に目を向けると、白い鎧がこっちに迫っていたのが見えた。

「うおっ!?」
必死に身を仰け反らせると鼻先を白い拳が掠めた。
「あっ……ぶねえなこの野郎！」
「がっ！」
身を仰け反らせた姿勢から無理矢理拳を上に突き上げると、うまい具合に相手の顎に命中した。
強制的に仰け反り状態にしたヴァーリの脇腹に右回し蹴りを放つ。
「ぐっ……！」
回し蹴りは見事脇腹に命中した。だが、当たる直前で後ろに飛んだのか、手応えが軽かった。
後ろに向かって飛んでいくヴァーリに向かってオーラの弾丸を飛ばす。
こっちは相手のとは違って誘導することはできないが、吹き飛ばされている今なら当たると思った。
しかし、ヴァーリは急上昇して弾丸を躱す。どうやら向こうは俺と違って自由に飛べるらしい。
「ドライグ！」
『ＪＥＴ（ジェット）！』
一方の俺はと言えば、ドライグの補助があって全身からオーラを放出してようやく飛ぶことが出来る。
そんな俺とヴァーリの空中戦闘はより自由度が高いヴァーリに分があった。
加速力ならほぼ互角なため、なんとか攻撃を受けずに済んでいるが、同時に相手への攻撃も当たらない。
『相棒、奴の攻撃を受けるな！　俺の力が倍化と譲渡なら、奴の力は半減と吸収だ！　触れられたら力を持っていかれるぞ！』
丁度ドライグと対になっている能力。ここまで来ると二天龍の仲が悪いのも当然だと思えてしまう。
幸い体技では俺の方が秀でているのか、相手の攻撃は紙一重で避け続けられていた。
だが、遠距離での打ち合いでは圧倒的に向こうが優勢であり、鎧に

ガンガン当たってところどころへこんでいる。
『相棒、これは地上に降りたほうがいいのではないか？』
それは確かに考えた。だが、それだとこっちの攻撃が万に一つも当たらなくなる。
（あ、今でも全く当たってない）
なら、飛んでいても仕方ないので地上に降りることにした。いや、降りるという表現は正しくない。正確には自由落下だ。
重力にしたがって落下すると、地面に着いた足が地面を砕く。そうしてできた岩石をヴァーリ目掛けて投げ始めた。
無論、投げているのはただの岩なので当たっても大したダメージは与えられないだろうが、どうせ当たらないのなら何だって同じだ。
だが、鎧を着て能力値が上がっている俺が投げる岩は砲弾ぐらいの威力はあるため、そう何度も当たりたくはないだろう。
それと、これならオーラと違って疲れがある程度抑えられるし、残弾が無くなったらアスファルトを砕けばいいだろう。
何より触れられたらアウトらしいので、ちまちま外から削っていくことにしたのだ。
後は持久力がどっちが高いかだが、ただ相手の攻撃を走って避けて、岩を拾って投げるという動作の俺と、空を飛び回って魔力を飛ばしてくるあいつならどっちが先にへばるかは体力が同じであるなら一目瞭然だ。空を飛ぶのはそれだけでエネルギーを消耗するのだ。
「つまらないな。もっと真っ向から挑んで来い！」
「俺の行動方針は『いのちをだいじに』なんだよ！」
あいつは『がんがんいこうぜ』みたいだけどな！
「ならば、こちらから行くまでだ！」
精神的な限界に来たのか、ヴァーリは光の翼を大きく広げるとこっちに向かってまっすぐ突っ込んできた。
（よし、今だ！）
ここが勝機だと思った俺は抱えていた岩石をヴァーリ目掛けてまとめて放り投げると、両手を地面に着くクラウチングスタートの姿勢を取る。

（能力からすると俺と奴じゃ持久戦に向いているのはあっちだ！　あいてが短気でよかった――これで決める！）
　力を全部ここで使い切る気で噴射口にオーラを溜め、更に倍化能力も発動させる。
『Ｂｏｏｓｔ!!』
「いっくぞぉぉぉ!!」
『ＪＥＴ（ジェット）！』
　全身から後ろに向けて赤いオーラが放たれる。それと同時に俺は急加速して、世界が線にしか見えなくなる。
　これはある意味捨て身の技だ。何せ自分でも制御できない速度で真っ直ぐ突っ込むだけ。避けられたら最後、俺は地面に轍を刻みながら転がっていき、何かにぶつかるまで止まることはないだろう。
　だが、この状態でも前を見ることと、それに合わせて僅かに軌道修正することはできる。
　俺の急加速に驚いて右に避けようとするヴァーリに合わせて、横に伸ばした左手に溜めたオーラを爆発させ、無理矢理軌道を捻じ曲げる。
　そのせいで体に急激なＧがかかるが、そのおかげでヴァーリを視界の真ん中に捉えることができた。
「ぐ、おおおぉぉぉぉ!!」
「食らいやがれ、コメットタックル！」
　後ろにオーラが放出されている見た目から名付けられたこの技は、全速力で逃げるヴァーリに追いつき、その背中に思いっきり衝突した。

Ｇｏ　ｔｏ　Ｈｅｌｌ　!!

「ぐはっ!」

背中に強い衝撃を受けて、ヴァーリが苦悶の声を上げる。

イッセーはヴァーリに衝突したが、勢いはここで終わらない。というよりも地面に激突するまで止まれないのだ。

ヴァーリに激突したイッセーはすぐに地面に向かって落ちるように下に向けて力を込め始めたが、そろそろ地面だと思ったところで地面とは違う何かに激突した。

それは固いものではなく、むしろ抵抗無くイッセーとヴァーリはそれを突き抜け、それから僅かに時間が経ってから柔らかい地面に激突した。

そこからイッセーはすぐに立ち上がろうとするのだが、それはうまくいかなかった。

大気中とはまるで勝手の違う環境に、イッセーは何が起こったのかわからずに目を凝らして周りを見る。

「ごぼっ!?」

イッセーが出したのは驚きの叫びのつもりであったが、実際に口から飛び出たのは空気の塊だった。

イッセーとヴァーリは川に落ちてしまったのだ。

ここでイッセーとヴァーリに一つの問題が発生した。

二人は現在鎧の姿だ。尤も、その鎧は自身に宿ったドラゴンの力が形を成した物であり、一般的な鎧とは違って体の一部のように軽いため水に沈むということはない。

だが、それは鎧だ。生命にとって呼吸が必要である以上、隙間は必ず存在し、そこから中に水が侵入する。

イッセーは泳げないわけではないが、それは水着を着ているのが前提条件だ。鎧を着た状態では満足に泳げない。

もう一方のヴァーリと言えば冥界に海が無いためか、泳いだことなどほとんど無く、翼を広げて飛ぼうとしているが、空中と水中では勝手が違うのかうまく行かず、数日前の雨で増水し流れが速くなってい

る川に二人まとめて流されていった。
すわ、このままでは海まで流されてしまうと思ったイッセーだったが、その体が突然何かにかかって止まった。
「ふぃっしゅ」
イッセーが何事かと思った直後、気の抜けたような言葉と共に体が持ち上げられ、ヴァーリ共々水中から引き上げられる。
「がはっ！　ごほっ！　はっ、はっ、はっ」
川から引き上げられたイッセーは何度か咳き込むと、荒く息をする。
「魚じゃない……」
残念そうに呟いたのは相も変らぬ黒装束に身を包んだロウ。
「な、なんでお前がここに……？」
「それはこっちの台詞ですよ。何河童の川流れの真似事してるのさ。網切れたし責任取れ」
ロウは足元に転がっているヴァーリを思い切り踏みつけると、ヴァーリの口元から水が吐き出された。
一見救命行為に見えなくもないこの行為だが、白龍皇（ディヴァイン・ディバイディング）の鎧（スケイルメイル）を砕いているので相当な力で踏んでいる。
「あ、遂に出会ったんだね。ご愁傷様。でもこの有様だと勝ったのはイッセー君の方かな？」
「止めを刺したのはお前だと思うぞ……」
何せ、今現在進行形でロウの足はヴァーリの鎧を貫通しているぐらいだ。
「まあお前らに全力で戦われるとこの町無くなっちゃうからやめてね。普通に迷惑だから」
「それはそっちに言ってくれ」
戦う気が全くないイッセーはそう言って鎧を解除する。
「あ、ヴァーリがやられてるぜぃ」
「しかもロウまでいるにゃん」
「黒歌さん、お知り合いですか？」
「その人物にヴァーリが踏まれているみたいですね」

そんな三人（内一名気絶）に、美男美女の四人組が近寄って来た。
「げ、黒歌」
その中で唯一見覚えのある猫耳を生やした女性を見て、イッセーとロウは揃って顔をしかめた。
「げとはなんにゃ。げとは！」
当然、そんな扱いをされた黒歌は怒ったが、イッセーはロウと黒歌が知り合いだったことに驚いてそれをスルーした。
「面倒いわー。なんで魚を捕らえようとしただけなのにこんな事になるんだか……」
「この川、魚いないと思うぞ……」
イッセーは言葉にしたこと以上に、川で網を使って魚を取ろうというロウの考えが信じられなかった。
「仕方がない、スーパーで買った特価グラム９８円の切り落とし肉でも焼いて食べるか……」
ロウは残念そうに呟くと、近くに設置してあったＢＢＱ（バーベキュー）コンロに火を点け始めた。
「何故にマッチ……」
普通火を点けるならチャッカマンとかライターとかを使うだろうと思うイッセーだったが、煙管愛用者のロウはマッチを好んで使用してた。
「さて、ご飯も炊かなくては」
「まさかの飯盒（はんごう）だと!?」
完全にキャンプな雰囲気を出しているが、ここは町中の河川敷である。
「ルフェイ、皿出すにゃん」
「えっ？　黒歌さん、まさかたかる気ですか？」
黒歌の発言にその隣にいた魔女の様な三角帽子を被った少女が目を丸くして驚く。
「ないわー。偶然居合わせただけなのに飯たかるとかないわー」
黒歌に残念なものを見る目を向けるロウだが、その口元は微妙に釣り上がっており、注意深く見ればからかってるのがわかる。

しかし、動揺している黒歌はそれに気づかない。
「……ほれ」
そんな黒歌に向かってロウは全力で何かを投げつける。
「にゃッ!?　……財布？」
額に直撃した物を拾い上げながら黒歌が呟く。
「それで追加の食材でも買ってきなさい。そしたら食わせてやる。財布の中身は好きにしていいよ」
「わかったにゃー！」
ロウから許しを得ると走ってスーパーへと向かう黒歌。それを仕方ないなと言いたげな目で見ていたロウへと、イッセーが疑問を投げかける。
「あんなこと言っていいのか？」
「あの財布には1，000円しか入れてないから。その程度使われても問題ない」
変なところで手回しのいいロウである。
「そっちのお嬢さん方も、ご一緒にどう？」
そこに居たから目に付いたので、等閑（なおざり）な態度で残された三人を誘うロウ。
「おう、わりぃな」
「お言葉に甘えて」
「あ、私お手伝いします」
案外あっさりとロウの提案を受け入れた三人はロウが用意していた折りたたんで持ち運べる机に食器を出す。
「プラスチック製か。落としても割れないし、安いから経済性にも丁度いい選択だね」
「紙皿と迷ったんだけどよぅ。旅暮らしだといつ補充できるかもわかんねえからな」
「ティーカップが陶器なのは譲れませんが」
「拘りは大切だね」
「あの、こちらもう焼いてもいいでしょうか？」
「あ、先に油引いてねー」

その光景を見て、イッセーが思わず叫んだ。
「打ち解けるの早っ！」
念の為に言っておくが、彼らは初対面である。
「ところで、あいつはいいのか？　仲間なんじゃないのかよ」
気になったイッセーがヴァーリを指差して訊ねる。
「多分しばらく起きねえだろうから、寝かしといてやってくれや。あいつ、お前さんを待ったから昨日寝てねえんだよ」
「え、あいつ寝ないで俺のこと待ってたのか」
何それ怖いとイッセーは思った。何故出会ったこともない人物にそこまで執着されているのだろうと。
「あいつ結構あの戦いを楽しみにしてたんだぜぃ？　まさかすっぽかされるとは思ってなかったみてぇだけどな！」
「それでも俺は謝らない」
（だって戦いたくないんだもの）
「そんな戦闘バカはほっといてお前も手伝いなさい。そろそろアーシアも来る頃だよ」
「ちょっと待て。なんでアーシアまで……」
「あ、イッセーさーん！」
噂をすれば影がさすということわざの通り、ロウが言ったすぐ後にアーシアが姿を現した。
「アーシア、どうしてここに？」
「イッセーさんの帰りが遅いので心配になって来ました」
ロウが呼んだわけじゃないのに何故ロウはアーシアが来るのかがわかったのかと疑問に思ったが、ロウ相手では考えるだけ馬鹿らしいのでやめた。
「よー、アーシアちゃんお久ー」
「あ、ロウさん。ご無沙汰してます」
「大分日本語上手になったね。これなら日本でも十分にやっていけるよ」
ロウとアーシアが談笑を始める中、ヴァーリの仲間である美猴がイッセーの肩を叩いた。

「あの金髪の姉ちゃん、お前のコレ？」
　そう言って小指を立てる美猴。それを見たイッセーは一瞬ポカンとしたが、すぐに理解して顔を赤くして否定した。
「ふーん。なら、そういう事にしといてやるぜぃ」
　今にもニヤニヤ笑い出しそうな美猴を見て、イッセーは美猴を殴りたくなる気持ちを必死で抑えた。
「あの、お肉が焼けましたけど」
「あ、悪い。はい、遊んでないで皿持って並んでー。すぐに野菜焼くから肉はすぐに撤去したい」
「ならなんで焼いた……？」
「個人的に肉野菜肉肉野菜肉野菜肉肉の順番で焼きたい派なの。それで肉を焼きすぎると野菜に味が移る」
　ロウの妙な拘りにイッセーが絶句した時、盛大な擦過音を立てて黒歌が戻ってきた。
「人の事を忘れて何先に美味しく頂こうとしてるにゃ！」
「魚を買ってきている段階で貴様に反論の余地はない」
「にゃ!?　何故それを！」
「猫が魚買ってこないわけないじゃない」
「ぐっ……！　反論したいけどその通りだから反論できない」
「はは、ざまぁ」
「……何だこの空気」
　この場のノリについて行けないイッセーはそれだけ漏らすと、ロウが用意していた予備の皿を持って肉を貰う列に並ぶのであった。
○　●　○
「はっ」
「あ、ようやく起きた」
　ヴァーリが目を覚まして起き上がる頃には、すっかり日は高く昇っていた。
「俺は……負けたのか」
「いや、良くて引き分けじゃね？　個人的には無効試合だよ」
　自分の発言に口を挟んだ声の主に顔を向けると、その顔面に水の

入ったペットボトルがぶつけられた。
「……良い子の皆は危ないから真似しちゃダメだぞッ」
「ごまかし方が露骨すぎるにゃ」
明後日の方向を指さしておどけるロウであったが、当然そんなことでさっきの出来事が消えるわけがない。
ペットボトルをぶつけられたヴァーリは気にしておらず、膝の上に落ちたペットボトルを拾い上げてその中身を一口飲んだ。
「それで、川に落ちてから俺はどうなったんだ？」
それ以降の記憶がプッツリ途切れているヴァーリは、近くにいた美猴にこれまでの経緯を尋ねた。
「お前らが川に落ちた後、あの黒いの……ロウって奴がお前らを網で引きずりあげてよ。んで、あいつはその後お前を踏みつけてた」
「何故だ？」
誰からの挑戦も受けると公言してこそいないものの、いついかなる時、いかなる相手でも戦うと決めているヴァーリであるが、初対面の相手にそんなことをされる覚えがなかった。
もっとも、これが三大勢力に属する者であれば不思議ではないが、だとしたら自分がこうして呑気に寝ていられたはずがないとヴァーリは思った。
「さあ？　本人に直接訊いてくれよ」
ヴァーリに尋ねられて初めてそれを疑問に思った美猴は、首を傾げて親指でロウを指した。
「そもそもあれは誰だ？」
和服は体のラインが出やすいのだが、その上にもう夏なのに黒い振袖を外套のように羽織っている上、そもそもの体つきが中性的であるロウの性別は一目ではわかりかねたため、あれという呼称を使ったヴァーリの質問に対して、美猴は再び首を傾げた。
「オレっちもよく知らねえんだけどよ。黒歌の知り合いみてえだぜぃ」
「そうか」
それっきり興味を無くしたかの様にロウから視線を外して立ち上

がる。
「兵藤一誠」
「俺はもう戦わないからな」
　話しかけただけで警戒心をあらわにするイッセーを見て、ヴァーリは苦笑する。
「俺も今すぐには再戦は申し込まないさ」
「永遠に申し込むな」
　当然といえば当然だが、イッセーはヴァーリに辛く当たっている。
「そんな事を言わずに、またやりたいんだがな。宿命付けられたライバルなんて滅多にいるもんじゃない」
「そんなこと俺が知るか。そもそも、その因縁はこいつらのであって俺には関係ない」
　自分の左腕を指差して不貞腐れているように呟くイッセー。ドライグそのものに対する不満はないが、二天龍の因縁などについては物申したいことがたくさんあるのだ。
「釣れないな」
　少し残念そうに呟くヴァーリ。彼はイッセーとの戦いを本気で楽しみにしていたのだ。
「ヴァーリさま」
　そんなヴァーリにルフェイが駆け寄ってきた。
「『禍の団（カオス・ブリゲード）』の方から連絡です。至急冥界に集まるようにと」
「いきなりだな。至急と言っても誰もがすぐに集まれるわけではあるまい」
「転移を使えば一瞬だぜぃ？」
「美猴、それやったら確実に見つかって大騒ぎになるから」
　ただでさえ今まで敵対する勢力が隣にある冥界は警戒網が厳重であり、人間界であればレーダーを上空に張り巡らせているようなものだ。
「なら私が送るよ？　私なら冥界の感知網ぐらいくぐり抜けられるし？」
　ことも無さげにそう提案するロウをその場にいる全員が見た。作

り笑顔が張り付いているその表情からは本心を図ることは誰にも出来なかった。
「……頼めるか？」
僅かに考えた後に発言を、ロウは容易く了承する。
「あいあい、お安い御用ですよ。それで、早速――」
ロウが表情を無表情に変えた瞬間、周囲の雰囲気が一変する。
そして地面を覆うように黒い魔方陣が一面に展開される。
「転移――開始」
●●●
世界が一瞬黒で塗り潰され、塗りつぶされる前と後では光景が変わっていた。
空の色は紫という冥界の色。ロウは見事一瞬で冥界へと転移してのけた。――ただし、少しミスっていた。
「おいロウ……」
なんと、イッセーとアーシアまで一緒に冥界に転移させてしまったのだ。
「なんで俺たちまで……」
ロウに文句を言おうとしたところで、イッセーはふと気づいた。
「転移させた本人はいないのかよ！」
さて、これが過失か故意かは確認しようのない事だが、イッセーはとにかくロウに再会したら一発殴ることを心に決めるのであった。

ストレイ・キャッツ
Ｉｓｓｅ　ｉｎ　ｔｈｅ　Ｈｅｌｌ

どうも、兵藤一誠です。何故だか死ぬまで一生来る予定のなかった地獄……もとい冥界に来ています。というか向かわされました。

というのも、冥界に行く予定のある方々――ヴァーリチームの転移に巻き込まれてしまったという、なんとも間抜けな原因なのですが……帰ったら転移を行った張本人であるロウを一発殴っても許されると思うんだ。

「どうすりゃいいんだ……冥界から帰る方法なんて思いつかないぞ……」

冥界？　地図でいうとドコ？　そもそもここは地球の上？　それとも地下なのか？　実は異世界とか？

「あの……」

本気で悲観していると、ここに来る原因となった白龍皇の仲間である少女、ルフェイ・ペンドラゴンがおずおずと話しかけてきた。

（この子はテロリストって感じしないなぁ……）

魔女っぽい三角帽を外せば普通の女の子で通りそうだ。

「私たちの要件が済んだらですけど、その際に一緒に人間界へお連れしますけど……」

「是非お願いします！」

地獄に仏とはまさにこの事か。感動のあまり俺は彼女の両手を掴んでお願いした。

（無事に帰れるんだったらたとえ悪魔の手だって借りてやる！　――あ、俺も一応悪魔か）

「ありがとうございます、ルフェイさん」

俺と一緒に冥界に転移させられてしまったアーシアも俺と同じようにルフェイの手を握る。その際に何かを言っていたようだが気のせいだろうか？　ルフェイの顔色が若干青くなった気がするのだが。

「えっと……それでですね。私たちは所属しているある組織の命令で

冥界に来たんですけど、今からその集合場所に向かわなくてはならないんです。ですので……」
慌てたように話題を変えるルフェイの言いたいことを先読みして頷く。
「はぐれたら困るからついて来いってわけだな。わかった」
こちらとしてははぐれて帰れなくなることだけは御免被りたいので、言われずともついて行く気であった。
「そういえば、お前たちが所属してる組織ってなんなの？」
あんな戦闘狂（ヴァーリ）が所属してるぐらいだから、ろくな組織ではないんだろうなと考えていた通り、帰ってきた答えはとてもとても物騒なものだった。
「今私たちが所属している組織の名前は『禍の団（カオス・ブリゲード）』と言いまして……その、三大勢力に対してのテロ活動などをしています」
対象が三大勢力じゃなかったら速攻でおさらばしていたと、後になって思うのであった。今だって逃げ出したい気持ちで一杯だけどね！

○　●　○

ヴァーリたちについて行くこと歩いて２０分。目的地を聞いたわけでもないのに、そのかなり近くに飛ばせるロウへの驚きが隠せない中、どう取り繕っても廃墟としか言えない建物に着いた。
「ここか？」
「指示された座標はここになっています」
展開した魔方陣に浮かぶ文字列（日本語じゃないから読めない）を見て、ルフェイはヴァーリの確認にそうだと返す。
「どう見ても誰かが居るようには見えないんだが」
崩れた壁の隙間から中が伺えるが、どこにも人影は見受けられなかった。
「赤龍帝ちん、居るのは地下にゃ」
足元を見ながら黒歌が仙術で生命の気配を察知した結果を口にする。
「なるほど、日陰者にはお似合いだな」

ヴァーリは一言呟くと廃屋の中に歩を進めた。
「俺は外で待ってた方がいいんだろうか？」
一緒に行って仲間だと思われたくない。
「やめといた方がいいにゃん。もしここに来た相手に出会ったら、出会う相手によっては殺されるわよ？」
「物騒だな！」
テロリスト集団ならそれが当たり前なのだろうか。テロリストなんて嫌いだ。
「黙ってついて来るにゃ。見つからないようにお呪(まじな)いをかけてあげるわ」
手を招き猫のようにして笑顔を作る黒歌。少しでも可愛いと思ったのは負けた気がするから内緒だ。
「この業界でのお呪いはご利益あるだろうな……」
何せ悪魔やドラゴンが普通に存在するからな。だけど字面が怖い。呪(のろ)いって読めるし。
「そういえば、お前には猫耳が生えてるけど、ひょっとして化け猫なのか？」
今まで流していたがふと気になったので尋ねてみた。
「まあそうにゃ。正確には猫又の希少種の猫？にゃん」
「ね、猫しょー？」
猫又には聴き覚えがあるが、そっちについては聞き覚えがなかった。
「付け加えるなら転生悪魔でもあるけどねー。君と一緒ではぐれ悪魔にゃん」
「ああ……」
なんかとても納得できた。はぐれって言葉がこれほど似合う女もいないだろう。
「……なんか引っかかる物言いだにゃ」
「お前が誰かに従うのが想像できない」
こいつが従順だとか冗談キツいわー。冗談でも想像できない。
「なんですと！」

思うところをそのまま口にしたが、黒歌に強い調子で反論された。
「黒歌、そこまでにしておけ。つまらないことは早く済ませたいんだ」
ヴァーリは心底退屈そうな顔をして廃墟の中に歩いて行った。
（こいつ、団体行動とか苦手だろ）
○　●　○
廃墟の地下は陰鬱で暗く、伏魔殿（パンデモニウム）とはこんな場所を言うんだろうなと思った。
もっとも、ここに居るのは悪魔だけじゃないみたいだ。見るからに魔とはかけ離れた――むしろ相反するオーラを発している槍を持ってる奴もいるからな。というかあの槍怖い。
「あれは……」
「アーシア？」
その槍を見て呆けたように見つめるアーシアの視界を、スーツの袖に包まれた腕が遮った。
「どうやらあなたは教会の関係者だったようですね。でしたら、あれをあまり見ない方がいい。意識を持って行かれかねません」
「どういう事だ？　お前はあれが何か知ってるのか？」
アーサーに長身の男が持っている槍について尋ねてみる。
「あれは神殺しの槍――最初の神滅具『黄昏の聖槍（ロンギヌス・トゥルー・ロンギヌス）』ですよ。神殺しと銘打っていますが、聖なるものなので当然悪魔にも有効です」
「あれが聖槍……」
名前だけなら俺でも聞いたことはある。それなら教会出身のアーシアにとっては感慨深いものがあるだろう。だけど、それがテロリストの手にあるって……教会関係者が聞いたら卒倒しそうだな。
「あなたたちは前に出ない方がいい。あの聖槍の持ち主……曹操に見つかると色々面倒ですからね」
聖槍の持ち主は曹操と言うらしいが……何というか、同じ組織だと言っても、そんなに仲が良いわけではないようだ。
○　●　○
話し合いが始まると、険悪な雰囲気はより一層強くなった。今は言い争いで済んでるが、一触即発の雰囲気で今すぐ乱闘になってもおか

しくない。
（これ、本当に同じ組織の人間なんだろうか。日本の議会でもここまで仲悪くないと思うんだが）
「敵対する相手が共通していることで、ようやく組織として集まっているだけですからね。いつ分裂してもおかしくないです」
……それ組織になった必要あるのかな。
「簡単に説明しますと、この組織『禍の団（カオス・ブリゲード）』は旧魔王派、英雄派などの幾つかの派閥があるんです」
ルフェイが説明してくれるそうなので、その言葉を注意して聞くことにする。
「まず、旧魔王派は冥界を追われたかつての魔王の子孫とそれに協力する悪魔の方々。英雄派はかつての英雄の子孫を始めとする神器（セイクリッド・ギア）使いで構成されています。ちなみに、私と兄のアーサーはヴァーリさまのチームに所属する前はここに所属していました」
（ああ、ペンドラゴンってそういうことか……）
しかし……なんだろう。どっちとも仲良く出来そうにない。破天荒のヴァーリチームが一番仲良くできそうな印象なのがこの組織の危うさを表していると思う。
「その他には正当な組織に馴染めないはぐれ魔法使いなどがいますが、前の二つに比べて規模が小さいので余り気にされておりません」
声（こえ）が小さいと無視されるのはどこの組織でも一緒なんだろうか。
「ん？　あそこに居る女の子は誰だ？」
円形にくり抜かれた地下には有象無象が犇（ひし）めいているが、その中に一人だけ浮いている存在が居た。
椅子にペタリと座り込んでうつらうつらしている女の子。悪鬼羅刹が集まってる中で場にそぐわないことこの上ない。
（しかし、あの格好際どすぎるだろ。前面無しで胸はシール？って日本だったらアウトだな）
「ああ、彼女はオーフィスさんです。『禍の団（カオス・ブリゲード）』のトップですよ」
「と、トップぅ！　あれがぁ!?」
思わず大声を出してしまった瞬間、この場の視線が全て俺に集まっ

た。
アーサーは目を伏せている。申し訳ない。
でも、ヴァーリは薄く笑ってるし美猴と黒歌は腹を抱えて笑っている。やばい、全員まとめて一発殴りたい。
「ヴァーリ、彼は一体誰だい？」
周りが困惑する中、聖槍を持った男、曹操がヴァーリに質問を放った。
「赤龍帝だ」
ヴァーリの言った回答で、俺に向けられた視線に敵意が上乗せされた。この場の雰囲気が辛い。今すぐにでも帰りたい。
（ヴァーリの奴を殴るのはもう一発追加しよう）
「赤龍帝が何故白龍皇である君と一緒にいるのかな？」
「成り行きだな」
確かにその通りだがそれは何の説明にもなってない。当然不満は続出だ。
「――面倒だ」
ヴァーリがボソッと呟いたのは紛れもない本音だった。――ホント、何でこいつら組織になってるんだろ。絶対ヴァーリは一匹狼が向いてるだろ。
「俺、帰っていいかなぁ……」
俺はただ巻き込まれただけなのに、どうしてこんな事になっているのか。
（今度会ったらロウを全力全開（フルブースト）で殴り飛ばす）
俺はそれを心に決めた。
○　●　○
結局、何故だかあれよあれよという間に組織に組み込まれました。当然バックれます。
（誰がテロ行為なんてするか。俺はアーシアと平和に暮らすんだ！）
「という訳で、そろそろ人間界に帰してくれ」
テロとか死んでもしたくない。
（まあもう一回死んでるんですけどね！）

「すいません。まだ帰れないんです」
「なんですと!?」
　ルフェイさんそりゃないですよ。
「これから赤龍帝ちん勝手に連れて来た罰で、悪魔のパーティの見張りだなんてつまんない任務を課せられたにゃん」
「一応言っておくが、俺のせいじゃないからな！」
　悪いのは全部ロウだ。強いて上げるならヴァーリもか。俺は悪くない。
「まあまあ、少しは付き合ってもバチは当たらないぜぃ？」
　美猴が肩に腕を回してくる。
「いや、悪い予感がひしひしとしてるぞ！」
　会いたくも無い奴と会うことになる予感が第六感にビリビリ来てる。
「大丈夫だってば！　見つからなければ戦闘にはならないだろうしょう」
　間違いない、それはフラグだ。
「嫌だ！　俺は嫌だぁぁぁぁぁ！」
　明後日の方向に向かって走り出した俺を美猴と黒歌が両脇から引き止める。
「まあまあ」
「やめろ、離せ！　帰る！　俺は帰るんだぁぁぁ！」
「イッセーさん！　私、帰ったらロウさんから転移術を習いますね！」
　アーシアの言葉に全俺が泣いた。
（ああ、アーシアだけが俺の癒しだ……）
「あの、よろしかったら私が少し教えましょうか？」
「あ、はい。お願いします！」
　金髪美少女同士が仲良くしてる。アーシアにはそういう無害そうな子と仲良くなって欲しいです。
　ところで最近どうも好みがスレンダー系に偏って来た気がする。
……絶対にロリコンにはならないと信じたい（願望）。
「それじゃあ行くか」

今まで黙っていて、口を開くなりシレっとそういうことを言うヴァーリに殺意が隠せない。元はといえばお前のせいだろうが！
（よくわかった。俺とこいつは絶対仲良くなれないと思う）
これが宿敵というものか……！
『そうだ相棒。俺もアルビオンの奴とは初めて会った時からどうにも反りが合わなくてな。その時に俺はこいつとはこの世には一生仲良くできないと思ったよ。俺とあいつが仲良くなるのは価値観が崩壊しない限り無理だろう』
『言ってくれるな赤いの』
突然聞こえる聞き慣れない声。それはヴァーリから発せられていた。
『なんだ白いの、起きてたのか。今まで何も言わなかったからまだ寝てるのかと思ったぞ』
『起きるのが遅かったのはお前の方だろうが赤いの。今までぐーすか寝ておってからに』
『それは宿主が極めて資質が低かったからだ！　俺のせいではない！』
つまり俺のせいですねごめんなさい！　俺だって好きで資質が低かったわけじゃないやい！
『それも含めて貴様の責任だろう』
『転生する先を選ぶのは神器（セイクリッド・ギア）のシステムの領域であって俺の知ったところではない』
……本当に仲が悪いなこいつら。伊達に神器（セイクリッド・ギア）に魂を移しても喧嘩してないってか。
（こいつらに喧嘩するほど仲が良いって言葉が当てはまるなら相当な仲良しだけど……それはないな）
二天龍が言い争う声をＢＧＭに、悪魔がパーティを開くという城に向かうのであった。……本当に行かなきゃ駄目ですかね？

Devils party

「でかい城だなあ……」
鬱蒼と茂る森の中から、見上げると首が痛くなるほど高い城を見上げる。
「それじゃ、よろしくにゃん」
黒歌が自分の使い魔だという黒猫を放つ。
(そういえば、俺には使い魔っていないんだよな)
アーシアにはラッセーがいるというのに。
この場にいるのは俺と黒歌と美猴だけ。残りは興味がない上に偵察に向いてないので、森の外側で待機している。
(しかし、俺が選ばれた理由が素の力が一番小さいからっていうのが納得できない)
確かに事実だけど。
(というか俺、アーシア以下だったんだな……泣きたい)
「てかこれ、ただのパーティだろ? こんなの見張る必要あるのかよ」
「だから罰なんだにゃん。どうでもいいパーティじゃなきゃ私たちに戦闘か破壊以外の任務が回ってくることなんてないにゃ」
こいつら、汎用性ないんだな。俺も人のことは言えないけど。
「……暇だにゃ」
「……暇だなぁ」
「気持ちはわかるけどまだ十分も経ってないぞ」
こいつら堪え性なさすぎだろ。確かに監視には向いてないな。
「大体よぅ、パーティを覗き見ってごちそうの前で待てをされてるみてえで我慢できねえんだよ」
――猿だ。躾のなってない猿。それに頷く黒歌は野良猫だ。
「でもご馳走は食いたいな……」
ご馳走なんて久しく食ってないからな……。
「黒歌、ちょっくらちょろまかして来てくれよ」
「私の猫はそんなに重い物は運べないにゃ。ただの猫なのよ? むしろ手癖の悪さ的には猿の領分でしょう?」

「いや、流石にパーティの中に入ってったらバレっからな？」
確かに。いくら気配を消すのがうまいとはいえ、真っ只中に行ったら気づかれるだろう。
「ていうか、悪魔のパーティなんて朝まで続くなんて普通よ？　ずっと見てるなんて無理」
「ああ……悪魔って夜行性か」
確かに悪魔に成り立ての頃は昼は辛かった。今ではほとんど元通りだが。
「――あ、ヤバ」
ふと、黒歌が焦った声を出す。
「どした？」
「使い魔が妹に見つかった……」
肩を落とした黒歌を見て、美猴が指を差して笑い始めた。こいつには人の心ってものがないんだろうか。
「妹って誰だよ」
黒歌の妹も同じ悪魔だったのか。それに、こいつは転生悪魔なんだから猫又でもあるのか。
「黒歌の妹は白音っていうんだけどよぅ。実はこいつがはぐれ悪魔になったのもそれが原因でよぅ――」
「黙りなさい！」
黒歌の右ストレートが美猴の顔面を捉え、その体を吹き飛ばす。見事な一撃だった。
「な、何するんだよぅ!?」
「これ以上人の秘密をペラペラ話すようなら殺すわよ？」
あ、これはガチだ。黒歌は本気で怒っている。
「それで、今その妹さんはどうなってるんだ？」
当初の問題を尋ねてみると、黒歌は美猴に向けていた怒りの表情から一転して慌てた表情になる。
「もうそこまで来てる……こうなったら」
突然やや冷酷に見える表情に変わった黒歌を見て、俺は何となく二人の関係がわかってしまった。

（黒歌は妹が好きだけど、姉妹仲は悪いんだな……）
そうでなければ妹に一喜一憂するこの女があんな表情を妹に向けようとは思わないだろう。
（しょうがない）
一応監視中なので誰かに見つかるのは――もう見つかっているようだが――まずいだろう。
俺は神器（セイクリッド・ギア）を発動させて倍化を始める。
そうして待つこと数十秒後。近くの茂みがガサガサと揺れ始め、人影が現れた。
（今だ！）
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（エクスプロージョン）！』
「当て身（あてみ）！」
「はうっ」
あっちがこっちを確認する前にダッシュで近づき、首に手刀を打ち込む。結構強くやらないと効果がないのは自分の体で実証済みだ。
（おのれロウ……！）
思い出したら腹が立ってきた。だが、そのおかげで黒歌の妹だという少女を気絶させることに成功した。
気絶したことによって体から力が抜けて倒れそうになる少女の体を受け止める。
「白音ええええええ!?」
その直後に慌てた黒歌によって奪われる。いや、姉が妹の心配をするのはいいと思いますよ。けどお前そんなキャラじゃなかっただろ。
（それにしても、この子どこかで見たことがあるような……）
白い髪に幼い体つきの、紛れもなく美少女に分類されるであろう少女。俺は彼女の名前を知っていた。
「塔城小猫ちゃん？」
そう、塔城小猫ちゃんだ。駒王学園一年生であり、オカルト研究会所属。――つまり、リアス・グレモリーの眷属悪魔だ。
（あ、やば……）
そう思ったところで、再び茂みがガサガサと揺れる。それが聞こえ

た瞬間、俺は反対側の茂みの中に飛び込んだ。
その直後、二度と聞きたくもなかった声がさっきまで俺がいた場所から聞こえた。
「黒歌……！　あなた、小猫をどうするつもり？」
その声の主は俺を悪魔にして蘇らせた張本人、リアス・グレモリー。嫌な予感はここに的中した。
（よし、黒歌に気を取られている隙に逃げ出そう）
俺はもうあのヒトとは二度と顔を合わせないと決めているんだ。
「ちょっと近くに来たから様子を見に来ただけにゃん。そしたらこの子が私の使い魔を見つけて勝手に来ただけにゃ。でもせっかくだから頂いてくことにするわ」
おや、これは誘拐ではないのだろうか。いや、姉妹だからいいのか？
（そもそも、何でこいつらは離れ離れになったんだ？）
そこらの事情が気になった俺は逃げ出すのを中断して茂みから二人の会話に聞き耳を立てることにした。
（でも、念の為に赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）は具現化させておこう）
「今更何を！　あなたは一度この子を捨てたくせに！」
「私が魔力・妖術・仙術を使えるハイスペック猫？って言っても悪魔の追撃からお荷物抱えて逃げきれるほど思い上がってないにゃん。私だって自分の命は惜しいし？」
「勝手な事を！　力にとり憑かれて主を殺したのはあなたでしょう!?」
「だって上からあれこれ言ってきて邪魔だったんだもの。そりゃ拾ってくれたのには感謝してたからある程度は我慢してたけど？　それにだって限度ってものがあるわ」
「そのせいで小猫は悪魔たちから迫害に近い扱いを受けて、あなたに捨てられたこともあって、私に会った時には感情さえ無くしていたのよ!?」
うん、二人の会話を聞いた第三者の立場から言わせてもらおう。――小猫ちゃんへのとばっちりが酷い。

俺には黒歌が主を殺した理由はわからない。あの黒猫のことだから「ついやっちゃったにゃん♪」とか言いそうだが、まあそれは置いておこう。

置いて逃げたのもわかる。俺もはぐれとして悪魔に追われていた身だ。そんなに攻撃を受けたわけじゃないが、ロウが居なければとっくに捕まっていたことは想像に難くない。

主殺しなんて下克上をやらかした黒歌に差し向けられた追手の数は俺の比じゃないだろう。そして、戦えない相手を庇いながら戦うというのは想像以上に辛い。

仮想アーシア（砂を詰めた袋）を守りながら戦うというロウの特訓は、自分一人に気を配ればいいというわけではないので神経は倍疲れる。

なので黒歌が小猫ちゃんを置いて逃げたのは納得できなくても理解できる。

そして、悪魔たちの小猫ちゃんに対する扱いは完全に八つ当たりだろう。

恐らく姉がああなったから妹も～という事なかれ主義なんだろうが、被害者としては堪ったものじゃないと、赤龍帝（ブーステッド・ギア）の籠手を保持していたことで殺された俺は思う。

そして、今の小猫ちゃんがあるのはリアス・グレモリーのおかげという事になるのだろうが……正直飴と鞭、もしくは天国と地獄。または北風と太陽――は違うか。

つまり何が言いたいかというと、周りから虐められたところを助けられると懐かれる。これをウラシマ効果とか吊り橋効果だとか言った気がする。

つまり、それは恩という名の首輪なんじゃと、ディオドラというクズの塊――昔アーシアに助けられたのが狂言だというのが奴の記憶を読み取ったロウの証言からわかった（サラッと記憶を読めるあいつが一番不思議だ）――を見てしまった俺は思ってしまうのである。

（知らない間に悪魔不信になってるなぁ……）

信用という文字をゴミ箱にダンクしてきたようなロウから生存戦略を習ったせいか。

（けどそれらに一切関わりのない俺はそれらを全力でスルーしたい）
今更第三者が関われるような問題でもないし、俺も関わっているほど余裕があるわけではない。当事者だけで解決してもらいたい。
後どうでもいいけど猫又だから小猫って捻りもないよね。
「そんなあなたに小猫を任せておけないわ！」
あ、最初から交わる余地がなかった交渉という名の言い争いが決裂した。
（よし、今度こそ逃げよう）
再び決心したところで、黒歌の放った一言が俺の動きを止めさせた。
「眷族にした人間に逃げられた悪魔なんかに妹を預けておけると思う？」
そう言われたリアス・グレモリーは黙り込んだ。茂みの向こうにいるためどんな表情をしているのかはわからないが、大方痛いところを突かれて怒っているのだろう。
（それよりも、俺って悪魔にされたのがグレモリーだなんて言ったっけ？）
後から知ったことだが、グレモリー家の時期党首が下僕悪魔にした赤龍帝に逃げられたことは裏の世界じゃ割りと有名なことらしい。
相手が赤龍帝という事もあってリアス・グレモリーが非難されているのだが、それってつまり俺が原因なのだろう。
「この子は私がいただいて行くにゃ。仙術を使える猫？なんてレア種族だもの。連れて帰っても誰にも文句なんて言わせないにゃん」
「何を勝手なことを！　その子はあなたのせいで仙術を使うことに対して強い抵抗を持っている。それなのにその原因であるあなたがそれを使わせるように強要するなんて……横暴にもほどがあるわ！」
「能力があるのに制御する方法を知らない方がよっぽど危険だと思うけど？　何かの弾みで暴走したらそれこそ目も当てられないわよ？」
「その子はそんなに弱くないわ！」
それを最後に今度こそ会話が終わり、次の段階に移行しようとしていた。

「美猴、白音お願い！　傷つけたらぶっ殺すわよ！」
「それが人にものを頼む態度かよう？　それに大切な妹なら投げるんじゃねえよ！」
小猫ちゃんが美猴に投げ渡されたのを切っ掛けに、黒歌とリアス・グレモリーが魔力の波動をぶつけ始めた。余波で俺の隠れていた茂みも吹き飛ばされた。
しまったと思う暇もなく、黒歌だけ見てればいいものの、目敏くこっちに気づいたリアス・グレモリーが驚きの表情をこっちに向けてきた。
「兵藤一誠!?」
「俺の平穏のため！」
名前を呼ばれた瞬間オーラを飛ばす。
（気絶したら俺がテロリストといた事実を忘れるかもしれない！）
だが、敵もそこまで弱くない。咄嗟に展開した魔力防壁にオーラ弾は弾かれた。
「赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）！」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（エクスプロージョン）！』
倍化を停止させ、リアス・グレモリーに向かって殴りかかる。籠手に包まれた左腕で魔力防壁を破壊し、右の拳を腹に叩き込む。
その予定だったのだが、魔力防壁が壊れた瞬間に後ろに飛び退いていたため右の拳は空を切った。
「隙有り――！」
そこに黒歌からの援護射撃が放たれ――違った。あいつ俺を気にせず攻撃してきやがった！
黒歌の放った魔力とは違った感じの攻撃を俺は横っ飛びで避けたが、リアス・グレモリーはまともに受けて地面に落ちた。どうやら気絶したようだ。
「フーッ、フーッ！」
威嚇する猫のような鋭い呼気を漏らす黒歌。
「お、悪魔たちが近づいて来てんな」
美猴の言葉を聞いて城のある方向を見ると、確かに空を飛んでいる

悪魔たちが居た。
「おい、逃げるぞ黒歌」
「ここまで来たら徹底抗戦に決まってるでしょう!?」
「よし、俺っちも付き合うぜぃ！」
「決まってねえよ！　それとお前は付き合うな！」
　興奮した黒歌は何故かやる気満々であり、それに釣られて美猴までやる気になった。
（誰か助けてくれぇぇぇぇぇぇぇぇ!!）
　その思いが天に届いたのか、空間を切り裂いてアーサーが現れた。
「三人とも、いくらなんでも騒ぎ過ぎです。引きますよ」
「助かった！」
「今からが面白いトコなのによ」
「……仕方ないにゃん」
　アーサーの言葉の冷静さが上手く作用したのか、黒歌も一先ず落ち着いたようで、アーサーが再び開いた空間の裂け目に入っていく。
　しかし、この時俺たちは忘れていた。美猴が黒歌の妹である白音こと現塔城小猫を抱えたままだと言う事に――

Ｃｏｍｂａｔ

さて、あの後どうなったのかを説明しよう。
小猫ちゃんを誘拐してしまった俺たちは、今は禍（カオス・ブリゲード）の団の拠点の一つである寂れた古城に居る。
眷属を奪われたリアス・グレモリーは当然怒った。そして彼女を奪還しようとしているらしい。
しかも彼女の兄は現在の魔王らしく、ヴァーリたちがテロリストだということもあって、悪魔の大群を引き連れてくるそうだ。
それを聞いた禍（カオス・ブリゲード）の団の旧魔王派がやる気を出して全面戦争の構えを取っている。
このまま行けば新旧悪魔の激突は必至だ。
「で、そのきっかけになってしまったイッセーくんは今どんな気持ち？　ねえ今どんな気持ち？」
「伝説の（ドラゴンが宿った）左！」
「あべしっ！」
争いの気配を嗅ぎつけて駆けつけてきたというロウを、倍化無しの全力で殴り飛ばす。
ちなみにさっきの話の向こうの悪魔のことはロウから聞かされたことだ。
「と・い・う・か！　そもそもの発端はお前だろうがコラァァァァァッッッ!!」
「たわばっ！」
俺の追撃のボディーブローがロウの腹を抉る！
「そうだね。だから、俺はあの姉妹猫の復縁に尽力するよ」
打撃を受けても平然としているロウが肩ごしに親指で差したのは、向かい合ったまま会話の無い、やや困惑した様子の黒歌と無表情な小猫ちゃん。
「ところで何であの二人姉妹なのに髪色違うの？　白音っちアルビノ？　それともストレスによる若白髪？」
俺が知るか。

「復縁させるならサッサとやれよ。そろそろ悪魔が襲ってくるって戦々恐々なんだぞ」
「それはお前とアーシアだけだろ。他なんてむしろやる気満々だよ」
それはあいつらが異常なだけです。なんて理由も無く戦えるのか。
「では早速――」
ロウが動き出す。しかしその動きは何故か無数の残像を伴っていた。
動きが決して速いわけではない。なのに何故かそこには残像が生まれていた。そしてその流れるような動きで黒歌の首筋に注射器を刺した。
「はぅッ!?」
「動くと針が折れるよー」
「にゃぁぁぁ!? いきなり現れて何してるのあんたー!」
「素直になるお薬を注☆入。アルコールもミックスしておきました♪
あ、マタタビの方がよかった?」
鬼かこいつ。あとそういう問題じゃない。
「そして適当な部屋に閉じ込めまして――」
何故か床から黒い壁がせり出してきて、止めに上から黒い天板が降ってきた。
「仲良くなるまで出てこれないのでこれで復☆縁☆確☆実♪」
「ノリノリでなんて酷い事をしてるんだお前」
仲直り（強制）って。あの姉妹はそこまでしないと駄目なんですか？
「うん、ムリ♡」
あの姉妹の関係複雑そうだもんね……
「さ、私たちも迎撃に行くよ。そもそもお前が原因なんだから、責任取ってあの姉妹が話し合う時間ぐらい稼ぎなよ」
「……まあ、自分の蒔いた種だからやるけどよ。――これで名実ともにテロリストだな……」
「乙」
そういえば、こいつはテロリストにサラッと混ざってるけどいいん

だろうか？
「大丈夫大丈夫。私の悪名度はこんなテロリスト集団（カオス・ブリゲード）より高いわ」
薄々気付いていたがこいつは極悪人だったようだ。面倒なので付き合いを遠慮したい。
（まあそれをこいつが汲んでくれるわけがない）
今だってここに居るんだもの。何の前触れもなく突然に。
「相手が悪魔ならアーシアに聖書を暗唱させてまとめて攻撃もありだよね」
「こっちだって悪魔大勢だよ！」
俺とかも悪魔だよ！　死なないけど辛いわ！
「じゃあ一人一人潰して行きますか。ヴァーリたちはどうするつもりだって？」
「ここで大人しくしてろってさ」
これ以上余計なことするなって。
「あいつら、本当に残念よねぇ……それなら、彼女らとの戦いになるのかな？　うぅん、一方的ぃ」
彼女らとはグレモリー眷属のことだろう。双方の戦力がわからないのでなんとも言えないが。
「正直ヴァーリ一人で余裕。コカビエル程度に負ける奴らなんて相手になりません！」
……コカビエルって堕天使の幹部だってアーシアから聞いてたんだけど。あいつ（ヴァーリ）ってそんなに強いの？
「むしろ今のお前が引き分けに持ち込めただけで驚いてる。ま、覇龍（ジャガーノート・ドライブ）無しだったからも要因の一つかな」
「覇龍（ジャガーノート・ドライブ）？」
「ドライグに聞け。――さ、虐殺虐殺（ジェノサイジェノサイ）♪」
明るい声音で怖いことを言いながら、ロウは外へと歩いて行った。
「アーシア、あの二人のこと頼んだ！」
俺はアーシアに一声かけて、その後ろを早足で追いかけた。
○　●　○
「にゃ、あ、あ、あ……」

目の前で顔を赤くして身を捩らせる疎遠な姉を見て、小猫は少し心配になった。
正直なところ、姉と一緒にいるという昔は当たり前のことが今では嫌だったのだが、状況の移り変わりについて行けなくてそれどころじゃなかった。
「し、し、し――」
「し？」
「白音ええええええええ!!」
黒歌は叫び声を上げると同時に、小猫に向かって飛びかかった。
○　●　○
外に出ると、そこは戦場だった。魔力が飛び、悪魔が死ぬ。純粋な殺し合いの場だった。
俺の人生はこんな事とは無縁だと思っていたため、正直見ない振りをしたいが流石に無理です。
「ここは戦場の中心から離れて……いや、わざと離してあるのかな？」
様子を見ただけでロウはそう断言する。
「なるほど。主力を向こうに引きつけておいて白音っちの奪還か。なら、戦場から外された奴らで対処しましょうか」
戦場から外された――ということは俺たちか……おや？
「ヴァーリはどこ行った？」
ふと気づいて尋ねてみると、美猴が笑いながら戦場を指差した。まあ、あいつがここで戦わないわけないよね。
「全く、これだから戦闘狂は……ま、あいついなくても迎撃出来るからいっか」
それにしても、何でこいつはサッと現れたのにこの場を仕切っているのだろう。
「こいつとあいつ。これがこう。こうしてこうしてこうかな」
袂から取り出した簪の先端をサッサと動かして魔方陣を描いていくロウ。何をしてるのかと尋ねようとした矢先、ロウが獰猛に笑って簪を地面に投げて突き立てる。
「範囲指定。クライン・キューブ生成。内装確定。――迷宮構築」

直後、地面からせり上がった黒い壁が俺たちを分断した。
○　●　○
「白音、ごめんね。あの時連れて行けなくて。一人ぼっちにしてごめんね」
自分を押し倒し、涙ながらに謝罪を口にする黒歌（あね）を見て、白音（いもうと）は戸惑った。
仙術に目覚めたことで力に呑み込まれ、主を殺して自分を捨てたと思っていた姉に抱かれる感覚は、かつて二人きりで生きていた頃と変わらないものだったからだ。
「姉さま……」
そんな姉の背中に、白音の背中に腕を回した。
○　●　○
「あんっっの黒いの！　何考えて生きてんだァァァァッ！」
叫びと共に苛立ちを乗せた拳を黒い壁に叩きつける。壁には穴が空いたが、すぐにふさがった。
いや、きっと何も考えてないに違いない。あいつはきっとその場のノリで生きている。
（こっから出たらぶん殴ろう）
さて、こっからどうすればいいんだろうか。
そう思ったところにはらりと落ちてきた一枚の紙。
『出会った相手と倒せばここから出られるよ』
こいつの感覚絶対にズレてると思うんですけど。
「じゃ、アーシアも心配だし手っ取り早く済ませますかね」
○　●　○
「どうですか、ルフェイ」
「はい、どうやら空間操作と地形変化の合わせ技（ミックス）のようです。言うなれば、極少の異空間ですね。しかも出口の無いクライン空間……空間の維持ができなくなって自壊するまで外には出られません」
アーサーに尋ねられたルフェイは解析のために展開していた魔方陣を消して答える。
「その上、空間には自己修復能力が付加されています。一瞬で空間の

全てを破壊でもしない限り、力尽くでの突破は不可能です」
「では、ここから出る手段はないと?」
「いえ、起点となっている物を破壊するか、もしくは発動者が意識を失うことで維持することができずに消滅します。今回はそれに加えて、遭遇した相手を戦闘不能にすることで空間から出られるという条件が追加されているようです」
「なるほど。つまり、誰かを倒さなければ出られないということですね」
アーサーは通路の奥を向く。
「行きましょう、ルフェイ。そういうことならここで立ち止まっていても仕方ありません」
「はい、お兄さま」
○　●　○
「ったく、いきなりなんだってんだよぅ。あいつ、一体なんなのかねぇ?」
突然黒い一本道に放り出された美猴は、驚きながらもその道を歩いていた。
美猴はこの空間になんとも言えない居心地の悪さを感じていた。
それがこの空間自体から来るものなのか、ここを創った人物を野生の本能が警戒すべきと伝えているからなのか。
「どっちにせよ、こっから出るには進むしかねぇってか?」
自分の武器である如意棒を肩に担ぎながら進んでいくと、少し開けた場所に出た。
そこは反対側にも道があり、丁度そこから黒髪の女性、姫島朱乃が現れた。
「相手を倒せってことみてぇだな」
「そうみたいですわね」
美猴は如意棒を構え、朱乃は雷を迸らせる。
「好い声で鳴きなさいな!」
「おお、怖いねぇ!　ま、楽しくやろうや!」
●　●　●

「さて、うまい具合に割り振ったと思うけど、これは吉と出るか凶と出るか。どっちに出ようが私の知ったことじゃないけどね」
自分が突き立てた簪の前に仁王立ちして、ロウは独り呟く。
「所詮茶番だもの。どうなろうが私には大した問題にはならないけど……負い目はあるものね」
袂から和傘を引き抜きながら、ロウは煙管を加えて紫煙を吐く。
「どうなるにしろ、久しく全力でやるとしましょう。それが、償いにもならない行いにはお似合いでしょう」
和傘を開き、自分に向かって放たれた攻撃を防ぐと、開いた傘を肩に立てて、攻撃した相手を見た。
「ようこそ、リアス・グレモリー殿。せいぜい時間稼がれちゃってください」
憤怒の表情をしたリアス・グレモリーを無表情で迎えるロウ。
「そこを退きなさい！」
「当然、お断りします」
リアスの放った滅びの魔力とロウの噴出させた黒色のオーラが激突し、彼らの戦端が開かれた。
○　●　○
「で、お前が相手か。イケメン」
「そうみたいだね、兵藤一誠くん」
開けた場所に出ると、そこでは剣を持った元同学年生、木場祐斗が立っていた。
「僕たちは小猫ちゃんを助けに来たんだけど、主の名に泥を塗った君を、これ以上野放しにするわけにもいかない」
敵意と共に刃を向けられる。
「どうしたよ？　この前とはちょっと感じが違うぜ？」
剣を向けられて初めて気づいたが、そこからは隠し切れない殺意が漂っていた。
「……まあ、少し心境の変化があってね。でも、それは君も同じだろう？　最後に見たときとはまるで違う」
「そうだな。主にお前らのせいで――な！」

ここに来る前の間に倍化させていた力を一気に打ち放つ。
放たれた赤い光弾は木場の近くで大爆発を起こす。その規模ならこの狭い空間でなら当たらなくてもダメージは避けられないだろう。
「やっ！」
だけど、木場は多少着ている制服が焦げているものの、本人は至って無傷で斬りかかってきた。
「くっ！」
俺はそれを左腕の籠手で受け止めて押し返す。
木場から意識を離さず、視線だけをさっきまで木場の居た所を見ると、そこには無数の剣の残骸があった。
「無数の剣を創りだす……それがお前の神器（セイクリッド・ギア）か!?」
「そう、魔剣創造（ソード・バース）。如何なる属性の魔剣を創りだすのが僕の神器（セイクリッド・ギア）だ」
その言葉が終わると同時に、地面から刃が突き出して来た。
「うおっ！」
それをジャンプして間一髪で逃れる。だが、そこに壁を蹴って木場が駆け寄り、剣を振るう。
「くっ――赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）！」
『Welsh（ウェルシュ） Dragon（ドラゴン） Balance（バランス） Breaker（ブレイカー）!!』
赤い鎧を纏い、剣を弾く。
「せりゃあ！」
剣を弾かれて体勢を崩した木場に右の拳を放つ。だが、木場は背中に生やした悪魔の翼を羽ばたかせてそれを避けた。
「それが君の禁手（バランス・ブレイカー）か」
「赤龍帝の鎧（ブーステッド・ギア・スケイルメイル）。赤龍帝の力が具現化した鎧だ」
「君は禁手（バランス・ブレイカー）を使った。なら、僕も見せよう」
木場は手に持った剣を正眼に構え、静かに呟く。
「――禁手化（バランス・ブレイク）」

Ｓｗｏｒｄ　Ｄａｎｃｅ

その禁手（バランス・ブレイク）化の変化は静かだった。

膨れ上がったオーラは全て手にした剣に集まり、その形状をより禍々しいものに変えていた。

「禁手（バランス・ブレイカー）――『聖破の降魔剣（ソード・オブ・リベンジャー）』。これで君の相手をしよう」

木場が目にも止まらぬ俊足で駆けてくる。どこから来るかはわからない。だが、攻撃されるタイミングは大体予想できた。なので、その瞬間に後ろに飛ぶ。

さっきまでのやり取りでは木場の攻撃をまともに受けても鎧を突破する事はできなかった。

なので、たとえ禁手（バランス・ブレイク）化していても後ろに下がって威力を軽減すれば、攻撃は鎧を突破する事はないと思っていた。

「はぁッ！」

「――ッ!!」

しかし、刃が通り抜けた脇腹には鋭い痛みが走る。木場の剣が鎧を切り裂いて俺の脇腹に届いたようだ。

「ふっ！」

痛みに顔をしかめる俺を、木場の返す二の太刀が襲う。

『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）！』

瞬間的に力を倍化して一気に飛び退く。それでも切っ先が届いたのか、鎧の胸部が浅く切り裂かれた。

（間違いない。相手の攻撃は俺に通じるようになった。つまり、それが奴の禁手（バランス・ブレイカー）の能力だ）

特に力が強くなったわけでも速くなったわけでもないから、俺と同じ身体強化じゃない。

なら、変わったのは剣の方だ。見た目だけでなく、能力か、それとも出力か。まずはそれがわからないことには太刀打ちできないだろう。

そこまで考えたところで、再び木場が距離を詰めてくる。

その手にした剣を見据えて、俺はある一つの動作を行った。

○　●　○

所が移り変わり、距離的に近くても絶対にたどり着けない場所で、二本の伝説級の聖剣が激突していた。

片やアーサーの持つコールブランド。片やゼノヴィアが持つデュランダル。どちらも名高い伝説級の聖剣である。

伝説の聖剣同士が激突する度、周りには莫大な聖なるオーラが撒き散らされる。

しかし、その度に被害を受けているのはその担い手である二人ではなかった。

「ヒィィィィィ！　余波で体が焼けるぅぅぅぅぅッ!!」

元ハーフヴァンパイア、現悪魔なギャスパーに取って弱点である聖なるオーラはただ浴びるだけで被害を受けていた。最早日光に晒された吸血鬼状態である。なお、彼はデイライトウォーカーと呼ばれる類の吸血鬼であるため日光に晒されても影響はない。

その有様は彼と相対するルフェイが心配になり、攻撃するのを躊躇(ためら)うほどである。

「せりゃぁぁぁぁぁ！」

「ふっ――」

ゼノヴィアが振り下ろしたデュランダルから放たれた聖なるオーラが黒い迷宮を砕きながら突き進み、それをアーサーが振ったコールブランドが空間ごと抉りとる。

「ぎゃぁぁぁぁぁ！」

「きゃあ！」

二本の聖剣の激突は、周りに災害のような被害を出していた。ルフェイもギャスパーもここから一刻も早く離れたいのだが、下手に動けば巻き込まれそうなので動けない。

「はぁぁぁ！」

「はっ！」

脳筋と戦闘狂の激突で被害を被るのはいつだって周囲なのである。

●　●　●

「鬼さんこちら、手の鳴る方へ――」

「大人しく喰らいなさい！」
　リアスの放つ滅びの魔力をひらひらと躱し、時に広げた和傘で防ぎながら、ロウは飄々と笑う。
「そんなにムキにならなくても。姉妹の再会ぐらい許容しなさいな」
「黒歌はその妹を捨てたのよ！」
「だってそうしなかったら共倒れだしぃ？　お前らって上下関係厳しいから下僕が主を殺したら、その存在を許容できないでしょう？　だったら確実に共倒れになるよりも可能性が薄くても生き残れる方法を取るに決まってるよね？　それに――」
　そこで一度言葉を切り、ロウは右手に持った煙管をひと振りして、無数の剣群を創りだす。
「何もしてない白音を、ただ妹だという理由だけで殺そうとした悪魔がどの口で何を言っている？　――コロスゾ？」
　ゾッとするほど冷たい声音が響くと共に、剣群がリアスに向かって殺到する。
「くっ……！」
　それを防御魔方陣でなんとか防ぐリアス。その様子を冷めた目で見ながら、ロウは言葉を吐き続ける。
「そもそも、殺された主にも非があるとは一切考えなかったわけ？　いや、お前らの事情なんて一切知らんし、だからと言って殺していいわけじゃねーですけどね」
　煙管を口に咥えて空いた手に扇を持ち、それを振るって無数の風の刃を放つ。それらをリアスは再び魔方陣で防ぎ、強い口調で問いかける。
「主に非があるって言ったわね。それは一体どういうこと!?」
「説明なんて嫌よ。当の本人に聞け。それに私が言っても信じないでしょうから」
　いつの間にやら口に咥えた煙管をピコピコ上下に動かし、ロウは口の端から紫煙を吐く。
「どうせ真相や闇の中。過ぎたことにいつまでも拘ってもしょうがないだろう？　――かつて闇に葬って、今になってそれを言い出した

私が言うのもなんですけどね」
　言葉を切ると同時に、扇を左手に打ち付けて閉じる。
「私とあなたはその立ち位置からして相容れない。もう会話も必要ないでしょう。後はただ、殺し合うだけ――」
　言葉を切ったロウは閉じた扇を大きく振るい、数は一つになったものの、先よりも巨大な風の刃を飛ばしてリアスの防御魔方陣を切り裂いた。
「ぐちゃぐちゃにしてあげますわ」
　そして、それを連打した。
○　●　○
「ぐ、なんとか成功した……」
　迫る刃に対して俺が取った方法は、両手で自分に向かって振り下ろされる剣を横から挟んで止めることだった。俗に言う真剣白刃取りである。
　両腕を震えさせながら受け止めた成果は、目の前の剣の刃に走る高温の炎だった。
「くっ！」
　俺の腹を蹴って剣をもぎ取って離れる木場だが、もう確認することはし終わっていた。
「確か……お前の力は色んな属性の剣を作る能力だったな」
　その言葉で種が割れたと察したのか、木場は剣先を下げて言葉を返してくれた。
「僕の禁手（バランス・ブレイカー）、聖破の降魔剣（ソード・オブ・リベンジャー）は通常の魔剣を数本分束ねた力を持つ魔剣を創り出すことだ。魔力を注ぐことで更に威力を底上げすることもできる。その分力の消費は通常よりも多いけどね。今君に使っているのは熱刃剣（ヒート・エッジ）という刃に高熱を宿した魔剣だ」
「そこまでネタばらしていいのかよ？」
　手の内が知られるという事はそれだけで不利だ。たとえば、俺の赤龍帝の籠手（ブースト・ギア）。
　倍化に時間がかかることが知られれば相手は短期決戦で来るだろう。そうなれば俺は不利だ。まあ、禁手化（バランス・ブレイク）できるようになった今

では大した問題じゃないけど。
「構わないさ。わかったからといって容易く対処できるようなものでもないしね」
確かに、様々な種類の魔剣を創れるというなら、どれか一つに対処したところで無意味だ。まあ剣しか創れないのは弱点かもしれないけど、それは見ればわかることだからな。
（そんじゃ、試しに一つ……）
『ＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔ（ブースト ブースト ブースト）!!』
息を大きく吸って……吐く！
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ（トランスファー）!!』
一応ドラゴンだということで覚えた（体で）炎のブレスを吐く。倍化した力を譲渡してあるので小部屋を丸々火の海に変えられるぐらいの規模なので、足が速くても避け切れないと踏んだんだが……
「炎凍剣（フレイム・デリート）！」
木場の手にした剣が氷の剣に変わり、木場がそれを振ると、俺が吐き出した炎は凍り付いて砕け散った。炎を凍らせる剣って……流石魔剣。常識じゃ考えられない現象が簡単に起こるな。
（やっぱ直接殴らないと倒すのは無理か）
だが、それがわかってもそう簡単にはいかない。
相手の方が足が速い上に相手の武器が剣のため、間合いもあっちが広いせいでこっちの攻撃は服の裾に掠るのがやっとだ。
見る感じ、当たれば一撃Ｋ．Ｏ．もできると思うのだが、そもそも当たらなければ意味がない。
一応、最大威力の攻撃を放てば防御ごと吹き飛ばせる自信はあるのだが、小刻みにヒット・アンド・アウェイを繰り返してくるため、撃つまでに若干の時間がかかるそれを放つ隙もない。
「くそっ！」
『鎧の修復はまだ余裕はあるが、このままだとジリ貧だぞ。どうする相棒？』
十数回目の空振りの後、鎧の切断面を塞ぎながらドライグが話しかけてきた。

（そう言われてもよ。あいつの動きが速過ぎて目が追いつかないぐらいなんだが）
『だったら頭を使え。奴に攻撃を当てるにはどうすればいい？』
（足を止める……のは無理だとしても、せめて攻撃される方向がわかればなんとかなるんだが……）
『そうだ。なら、こんな広い部屋の中央に止まっているべきではないな？』
そうか！
（ありがとよ、ドライグ！）
礼を言って後ろに向かって走り出す。
突然の俺の行動に驚いて一瞬動きを止めた木場だが、すぐに俺の考えに気づいて俺を止めるために駆け出した。だけど、もう遅い。
目的の場所に向かって飛び込む俺の後ろを剣が空振りする。そのまま俺は転がりながら距離を取り、体を反転させながら立ち上がる。
俺が飛び込んだのはここに来るまで歩いていた通路だった。木場はその入り口で立ち止まっている。
「……考えたね。ここなら真正面から攻撃するしかないし、動ける範囲も制限できる」
通路は幅も高さも大体3メートルぐらいだ。剣を振るには支障がないが、俺の横をすり抜けて後ろに回るのもまず不可能な場所。欲を言えばもっと狭いと完璧だったのだが。
「でも、僕がわざわざ自分が不利な場所に飛び込むと思うのかい？」
「いや」
正直こんな不利な状況に自ら飛び込むのはバカだ。だが、俺は木場がきっと飛び込んでくると考えている。
「でも、お前が来ないならお前はここでずっと足止めだ。俺にとってはそれでも十分勝ちだって言える」
別に俺がこいつを倒すことには何の価値もない。正直あの姉妹が話し合える時間さえ稼げればいいので、むしろこのままの方が都合がいい。つーか来んな。
唯一の懸念材料は鎧の持続時間だが、2、3時間ぐらいは保つから

多分大丈夫だろう。限界ギリギリまで出してるとしばらく神器自体が使えなくなるからあんまりしたくないけど。
「さて、どうするよイケメン。不利を覚悟でかかって来るか？」
　俺が挑発気味にそう言うと、木場は剣を持つ手に力を入れ直す。
（まあ、そう来るよな……）
　それを見て、俺は右腕を引いて、正拳突きの構えを取る。
　きっと、次の一撃で決着が着くだろう。だが、そのためには木場も相当深く踏み込む必要がある。俺の拳が届く距離まで。
　俺の拳か、木場の剣か。先に届いた方が勝つ。そんな場面だ。
だが、俺よりもあいつの方が速い現状、勝つのは十中八九あいつになるだろう。
（だけど、別に攻撃手段は拳だけじゃない。頼むぞ、ドライグ）
『ああ、任せておけ』
　すぐに力の倍化ができるように、ドライグに声を出さずに準備してもらう。
　緊張が高まり、一秒が何秒にも感じられる時間の中、とうとう木場が動いた。
「はあぁぁぁッ！」
　剣を高く上げて木場が走り出す。目にも止まらぬ速度。だが、真正面から来るなら動きを捉えるのは簡単だった。
　その体が通路の中に入った瞬間、俺は右の拳を突き出し、それと同時に力を倍化させる！
『Boost（ブースト）Boost（ブースト）Boost（ブースト）Boost（ブースト）Boost（ブースト）Boost（ブースト）Boost（ブースト）Boost（ブースト）Boost（ブースト）Boost（ブースト）!!』
「赤火拳（しゃっかけん）ッ！」
　拳が前に突き出される動作に合わせて、俺の右拳から炎が噴き出す。
　これぞディーネちゃん直伝赤火拳。ちなみに、ディーネちゃんのは火じゃなくて水で流水拳という。一説によるとダイヤも貫けるとか。
「甘い！」
　しかし、俺の拳から出た炎は木場の振り下ろした氷の剣によって砕

かれた。だが、それも予想通りだ。
「知ってるか？　正拳突きって放った後の姿勢がそのまま反対側での拳の正拳突きの構えになるんだぜ？」
剣を振り下ろして動きの止まった木場に向かって近寄りながら、後ろに引かれた左の拳に力を込める。
「しまっ――」
剣を振り上げつつある木場だが、それが俺に届く前に左の拳を勢いよく突き出す。
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』
「食らいやがれッ！」
木場の剣が跳ね上がる前に、俺の拳が木場の体を吹き飛ばした。

Ｔｅｒｍｉｎａｔｉｏｎ

「退屈でした。ここまで弱いと戦闘じゃなくて作業ね」
　雪駄を履いた両足でリアスを踏みつけながら、顎に和傘の石突を突きつけながらあくびをする。
「てかこれどうしよ。生かす理由も無いし特に殺す必要もないしなー。ねえ、お前はどうされたい？　殺害方法ぐらいは選ばせてあげるけど？　あれ？　それだと殺すことになってるな。ま、それでも私は構いませんけど」
　足元にいるリアスを見ているのかいないのか、相手の反応を一切お構いなしに言葉をまくし立てるロウ。
　踏まれているリアスは喉元に石突が突きつけられているせいで言葉を発することができない。
「んと……どうしようかな。生きるか死ぬか、ど・ち・ら・に・し・よ・う・か・な」
　指を左右に振って迷うロウ。そんなことで自分の生死を決められたくないリアスだが、生殺与奪を握られている現状、彼女には不満を述べる事さえできなかった。
「て・ん・の・か・み・さ・ま・の――あ、神様死んでたっけ」
　この場においては至極どうでもいい事でロウの指振りが止まった瞬間、ロウの構築した黒い空間にひび割れが走った。
「――あ、解除条件の設定間違えた」
　ロウが自らの失敗を悟ると共に、出口のない迷宮は砕け散った。
「あはははー……失敗失敗。戦闘不能で出られるようにしたつもりだけど、全員まとめて出ちゃうように設定されるなんて。どこでミスったかな？」
　首を傾げながら辺りを見回しながらリアスに突きつけていた和傘を広げて上に向けると、そこに向かって雷が降り注いだ。
「傘って、雨粒を防ぐものであって雷を防ぐものではないんだけど」
　それを言うならそもそも戦いの道具ではない。
「リアスから離れなさい！」

衣服が所々破れた朱乃がロウに向かって雷を放つ。
「きゃあ怖い。言われなくても退きますよーだ」
それを避けながらリアスの上からぴょこんと飛び降りた後、ロウは美猴をその黒い瞳で睨めつける。
「美猴、自分の相手ぐらいちゃんと押さえておけよ」
「いやぁ、この姉ちゃんそこそこ強くてよぅ。しかも狭くて如意棒も筋斗雲もろくに使えねえし」
美猴が指差す朱乃はリアスの元へと駆け寄って行き、そこに木場も覚束無い足取りで合流した。
「あら、ごめんなさい。お前の事を考慮に入れずに構築したから。でもそれぐらいのハンデは乗り越えて叩き潰しなさいよ」
「手厳しいねぃ」
「……ま、どうでもいいわ。どっちにしたって私に実害なんてないんだし」
「よし、なら歯を食いしばれ」
それだけ言って目を伏せたロウをイッセーが殴った。
「……何するのさ」
その言い草に胸に手を当てて考えてみろと思ったのはイッセーだけではない。
「お前はろくな事しかしないな！　今回もこの有様だし！　せめて事前に一声かけろよ！」
「私が何かすると善意悪意に関わらずろくな事にならないのは確かだね」
そう言うロウの姿は少しは気にしているようにイッセーには見えた。だが、それでもロウは自重しない。
「ところで、アーサーとルフェイは？」
この場に姿に見えない二人についてイッセーが話題変更も兼ねて訊ねてみる。
「ああ、あいつら……というより、アーサーは相手を含めると被害が大きくなりそうだったから少し離れた場所に居る」
「被害って」

イッセーがそこまで口に出した所で、遠方で莫大な聖なるオーラが立ち上った。
「何だあれ……」
悪魔としての本能で恐怖を覚えるイッセーは、あれと離れた場所に出してくれた事に感謝した。
「さて、どうしますかグレモリー家の次期当主さん？　今退けば見逃してあげますよ？　あっちの二人については保証できませんが、今ここにいる三人はこのまま帰してあげるよ？」
「小猫を置いて、おめおめと帰れるわけないでしょう！」
それを聞いたロウは深々とため息を吐いた。ちなみに、今のが彼女たちへの最後通牒だった。
「よし、なら死ね」
前髪を掻き上げながら、ロウはここに来て遂に明確な凶器を取り出した。
刃物でありながら芸術品とされる、機能美と造形美を併せ持つ、日本特有の武器――日本刀。
「頭部と胴を泣き別れさせてあげるわ。覚悟して死ね」
漆塗りの黒鞘から白刃が姿を現し、それを薄暗いオーラが包む。それを前にして、三人は身を固くして構える。
だが、リアスと木場は既にほとんど戦闘不能の状態であり、残った朱乃も万全な状態ではない。
「雷よ！」
なので、朱乃は一撃で決着をつけるべく、今の自分が出せる最大威力での雷を落とす。
「弱い」
ロウが振り上げた刃を一閃すると、雷がロウを避けて左右に落ちた。その光景はまるで日本刀によって雷が切り裂かれたように見えた。
それを見た朱乃は一瞬驚き、その後に唇を噛み締めた。
「ただの自然現象の模倣程度で私を傷つけられると思ってるの？　まあ思ってるからしたんでしょうけど」

日本刀を片手に、焦ることなく一歩一歩歩いていく。
「――はぁッ！」
決死の表情をした朱乃の手から放たれた雷。先ほどよりも規模が小さいそれを、ロウは無造作に刀で切り払おうとして、それを直前でやめて左手を前へ突き出した。
「――チッ」
短く舌打ちして雷を受け止めた左手を横に振って雷の軌道を逸らすが、そのせいで左袖が僅かに無くなっており、そのせいで露出した、ゾッとするほど白い左手はブスブスと煙を上げていた。
「今の光力だよな？　悪魔である奴がどうしてそれを扱える？　悪魔にとって光力は猛毒のはず……という事は――」
一人でブツブツ呟いていたロウは一人で納得すると、独り言のようにボソリと呟いた。
「転生前は天使か堕天使か何かかな。それが悪魔に転生？　少し興味深いかも……」
近くにいるイッセーにも聞こえないほど小さな声でブツブツ呟いていたロウだったが、首を振ってそれを打ち切った。
「だとしてもどうでもいいか。何であろうと殺すのだから。考えるのはその後でも遅くない」
ロウは刀を両手で握って切っ先を上にして右肩まで上げる。そして地面を蹴って一気に朱乃の目の前まで近づくと、両手持ちした日本刀を振り下ろす。
だが、その刃が朱乃に届く前に、ロウと朱乃の人一人入れないほどの間に光の槍が突き刺さった。
「危なッ！　というかちょくちょく邪魔が入るなあ、おい！　いい加減一人ぐらい殺させろ」
流石にこれには肝を冷やしたロウが慌てて下がりながら上を見上げると、そこには十二枚の漆黒の翼を持つ堕天使がいた。
「堕天使総督アザゼル⁉　あんたみたいな大物がどうしてこんな所にいるんすか⁉」
思わぬ相手の登場にロウは動揺を隠しきれずに狼狽する。この段

階でロウは逃げる算段を考え始めた。
「何、ちょっと不良少年にお仕置きしようと思ってたら知り合いがピンチだったんでな。つい手を出しちまったわけよ」
「堕天使が悪魔を庇う日が来るとは……いや、そこのお嬢さんが居たせいですかね？」
　ロウが切っ先で朱乃を指さして尋ねてみるが、アザゼルは不敵な笑みを浮かべただけだった。
「さて、どうかな。それにしても、お前さんは誰だ？　報告にあったヴァーリの仲間には該当しないようだが」
　ロウはヴァーリの仲間扱いされたことに若干怒りを覚えながら、言葉でそれをやんわりと否定する。
「それはそこの赤龍帝にも言えるだろう？　まあ、私たちはどちらも禍の団（カオス・ブリゲード）にすら所属していないはぐれ者ですよ。ここに居合わせたのはただのめぐり合わせです」
（少なくとも俺がここにいるのはお前のせいだ）
　その言い分を傍から聞いていたイッセーはそう思った。
「てか堕天使総督のお出ましとか。常識的に考えたら後ろで偉ぶってろといいたい」
　実際に口に出して言いながら、ロウは仕方ないとため息を吐いた。
「交渉相手を変えましょう。――アザゼル殿、そちらの方々を見逃し、これ以上この戦場には関わりませんのでここで手打ちにしては貰えないでしょうか。いまなら赤龍帝にも手を引かせます」
　ロウが言っているのはつまりは停戦交渉だ。そちらを見逃す代わりにこっちも見逃せと。内心ではヴァーリが居たなら相手を押し付けるのだがと考えていた。
　おまけのように扱われたイッセーはまあこれ以上戦わないならいいかと傍観する構えである。
「ま、こっちとしては願ってもないけどよ」
「ということは俺はこのまま続けていいのかぃ？」
「やめろバカ」
　余計な事を言った美猴の口をロウが回し蹴りで暴力的に塞いだ。

「それでは、私たちはこれで失礼を――」
「待ちなさい、小猫のことがまだよ！」
　立ち去ろうとしたところで声をかけられて、アーサーたちとどうやって連絡を取ったものかと考えていたロウは、リアスに対して本気で殺意を覚えた。
「それは本人たちの問題です。私たちには至って関わりないことですので言われてもどうしようもありません。というかあなた、今のご自分の身の程をわかっていますか？　お情けで生かされているような分際で生意気な口叩いてるんじゃないわよ。これ以上何か言うようならば誰が邪魔しようと殺しますよ？」
　ロウの放つ本気の殺意の前に、リアスの全身が硬直する。それを見たロウは気を好くしてイッセーと美猴を連れて立ち去った。
○　●　○
「お兄さま、ロウさんから連絡です。『決着が着いているようなら帰って来てくれませんか？』だそうです。それと『相手が生きているなら殺すな』とも」
「わかりました。――そういうことですので、私たちはこれで失礼します」
　アーサーは全身を血に染めて膝を着いているゼノヴィアと、その血を何とか止めようとしているギャスパーに向かってそう声をかけると、コールブランドを虚空に向かって振るい、空間を切り裂いた。
「デュランダル使いはこの程度でしたか。今度は魔剣使いと剣を交えたいものですね」
　そんな呟きを残して、生まれた空間の裂け目へと、アーサーとルフェイは姿を消した。
○　●　○
「一体何があった」
　最初いた場所へと帰ってきた俺は、そこで小猫ちゃんに抱きついて眠りこけている黒歌を見た。
（そういえばロウの奴がアルコール混じりの自白剤注射してたっけ）
　あいつの言うことだから、どこまで本当の事かはわからないけど

な。
「えっと……起こした方がいいかな？」
アーシアに傷を治してもらいながら、押し倒された状態の小猫ちゃんへと尋ねてみる。
「……このままで大丈夫です。お気遣い無く」
その言葉を聞いて安心する。どうやら二人の間にあった蟠(わだかま)りはどうやら消えたようだ。少なくとも悪いようにはなっていないらしい。
「それで、これから君はどうするの？」
このまま姉と一緒にいるのか、それとも主の元に帰るのか。
「……決めかねています。姉と相談して決めようかと」
「そっか」
できることなら姉と一緒にいてもらいたいのだが、そこまで深く生き方に介入するつもりはない。せめて後悔しないような選択をしてもらいたい。
本音を言うと俺に関わらなければどうでもいいです。もう戦いは懲り懲りだ。
「じゃあ、そろそろ帰ってもいいのかな？」
横目でルフェイを見ながら尋ねてみる。ちなみにロウはいつの間にやらいなくなっている。あいつの神出鬼没振りには本当に困る。
「ヴァーリさまが何と言うかわかりませんが、私個人はいいと思いますよ」
「なら早く！　あの戦闘狂が帰ってくる前に！」
（俺は帰りたいんだ！　一刻も早く！　二度と関わり合いにならない内に！）
そんな俺の剣幕に押されたように、ルフェイはこくこくと頷いてくれた。言語って素晴らしい。
「そ、それでは転送しますね」
やや引きつった笑顔を浮かべながら魔方陣を展開するルフェイ。うん、少し大人気なかったと思う。
だが、これでテロとはおさらばだ。俺は人間界に戻るぞロウ――!!
（ふはははは、逃げられると思うなよ兵藤一誠。たとえ私が逃がして

も、運命がお前を逃がさない！）
転送される直前、俺の脳裏にそんな不吉な声が聞こえた気がした。
だけど全力で聞こえなかったことにしたい！

●　●　●

「おのれ、愚昧なる者どもめが……真なる魔王たる我らに逆らうとは……！」
旧魔王派のトップ、シャルバ・ベルゼブブは忌々しげに呟く。
何故なら、同じ魔王の末裔であるクルゼレイ・アスモデウスが現魔王サーゼクスに討ち取られて戦死。全体としても旧魔王派が押されていたからである。
「こうなれば、この私自ら出向いて……」
「まさか。あなたはもうここで終わりですよ」
シャルバは後ろに立った異様な気配を察して振り返る。
振り返ったそこにあったのは、闇より深い黒色と、その中に浮かぶ白い左手――
「貴様――」
「――死ね」
シャルバが何事かを口に出す前に、彼はその左腕に掴まれ、黒に引きずり込まれ――そして、何も残さずこの世から消えた。

エクストラ・ターン
Ｂｌａｃｋ　ａｎｄ　Ｂｌａｃｋ

堕天使のその後

「はぁ……」

堕天使レイナーレはため息を吐く。

というのも彼女はアーシア・アルジェントを巡る一件の後に、そこそこ騒動に巻き込まれていたのだ。

そして、今はその事を報告書にまとめているところだった。

「ええと、まずはコカビエルさまの一件ね」

●　○　●

「おい、そこの堕天使」

グリゴリ本部の通路で後ろから声をかけられたレイナーレは、振り返ると共に驚愕した。

「コ、コカビエルさま!?」

かの大戦を生き残った伝説の堕天使に声をかけられて、レイナーレは萎縮した。

コカビエルといえば研究肌の堕天使が多いグリゴリの中でも武闘派――というか戦争狂で有名だった。

「い、一体何の御用でしょうか!?」

レイナーレはコカビエルに話しかけられたことに驚きながらも、同時になぜ自分に声をかけられたのかを不思議に思った。

「確か、お前はこの前までグレモリーの小娘の縄張りにいたな?」

「は、はい。そうですが……」

「ならばついて来い。案内役にでもなってもらおう」

「は、はい!」

レイナーレは喜んで着いて行くのだが、この後彼女は想像だにできない出来事に見舞われるのだった。

●　○　●

「ほっほーう!　こいつが聖剣って奴ですか!　こんなピカピカ眩し

い剣を俺みたいな奴が使っていいんでしょうかね!?　ダメって言われても遠慮なく使っちゃうんですけどね！」
　手にした聖剣――七本に折れたエクスカリバーの内の一本を手にしたはぐれ悪魔祓い（エクソシスト）のフリードがテンション高く声を上げる。
「……うるさいわよ、フリード」
　レイナーレはバルパー・ガリレイという元司教の手によって聖剣を扱えるようになった自分の配下を煩わしげに見る。
「お前はコカビエルさまの言う通りに町に入り込んだ教会関係者を殺しなさい」
「あいよ！　神に仕える子羊ちゃんを片っ端からスッパンってね！」
　そう言って隠れ家にしている廃棄された教会を出て行くフリードを見送ると、レイナーレは転がっている椅子の中で比較的まともなものに腰掛ける。
「人工的な聖剣使いだなんて……人間の欲望には本当に限りがないわね。穢らわしいことこの上ないわ」
　人間の本質はかつてアザゼルさまたちから知識を掠め取った時から何も変わっていないとレイナーレは思った。
「それにしても、戦争……ね。それをアザゼルさまがお許しになられるとは思えないのだけれど」
　前線で戦ったわけではないが、堕天使であるレイナーレは戦争を身を以て体験している。
　戦争は二天龍によって止む終えず休戦になったものの、それ以降のアザゼルは戦争に対して消極的になり、専ら趣味である神器（セイクリッド・ギア）に没頭している。
（私個人は戦争には反対だけど）
　戦争で一度死にかけているレイナーレは、再び戦争を引き起こそうとするコカビエルには賛同しかねていた。
（けど、私が幹部であるコカビエルさまに意見することなんてできないものね）
　せめてもの抵抗をしてはみたものの、それが身を結ぶかどうかは不明である。

「でも、もう私のやることはもう終わっているものね」
この町の地理を伝えてこの場所と子飼いのはぐれ悪魔祓(エクソシスト)いを提供した段階で私にできることは終わっている。
「これにどう対処するか、見せてもらうわよグレモリー」

●　○　●

ところは変わって駒王学園の旧校舎。校庭に走る光の線とその中央に浮かぶ四本の聖剣(エクスカリバー)を見て、レイナーレは嘆息した。
というのも、後天的に聖剣使いされた配下のはぐれ悪魔祓(エクソシスト)いの内、唯一生き残ったのがフリードだったのだ。
彼の経緯を知れば納得できなくもないのだが、レイナーレにとっては腕は立つが下品な男なので、少々腹立たしくあった。
その全てを黙って見守っていると、学園を包むように結界が張られてリアス・グレモリーたちが現れた。
「よく来たな。サーゼクスの妹よ。貴様の兄はここに来るのか？」
「お兄さまは来ないわ。あなた程度、私たちだけで十分よ！」
「コカビエルを前にして不遜な」
リアスの口上を聞いたレイナーレは反射的に反感を覚える。
(これだから戦争を知らない若い悪魔は)
コカビエルはかの戦争で終始前線に居続け、その上で生き残った豪傑だ。多少才能があるとは言え、戦争も知らない若い悪魔とには天と地ほどの力の差がある。
それを証明するかのように、塔ほどの大きさを光の槍が体育館を貫いた。
「つまらん。サーゼクスが来ないというのなら、俺が戦う必要もない。貴様らには俺のペットで十分だ」
コカビエルが指を弾くと、三つ頭を持つ魔犬――ケルベロスが三頭姿を表す。
グレモリー眷属がケルベロスたちと戦う最中に、四本の折れたエクスカリバーを束ねた聖剣が完成する。
「フリード。それを使って奴らを始末しろ」
「あいあいさー！　ウチのボスは太っ腹だね！　こんな立派で凄い武

器を俺みたいなのに軽く渡してくれるんだからよ！」
　その剣をフリードが手にすると同時に、新たな者がこの場に現れた。
「バルパー・ガリレイ……僕は『聖剣計画』の一員――お前によって無意味に殺された者だ！」
　それはかつて聖剣を使えるようになるための訓練を受け、仲間諸共一度殺された木場だった。
「過去の亡霊が悪魔になって蘇ったか。だが、貴様らの犠牲は無意味ではなかったぞ」
「何だと？」
「貴様らを殺したのはこれを抽出するためだ」
　そう言ってバルパーは懐から光り輝く球体を取り出した。
「これは聖剣を扱うのに必要な因子を抽出したものだ。もう量産体勢が整っているのでもう私には必要ない。欲しければくれてやるぞ」
　バルパーは聖剣使いの因子を木場へと放り投げ、それを木場は優しい手つきでそれを拾い上げる。
「バルパー・ガリレイ……！　貴様だけは絶対に許さない！」
　叫んだ瞬間、木場のオーラが膨れ上がり、それが剣の形に凝縮される。
「禁手（バランス・ブレイカー）――『聖破の降魔剣（ソード・オブ・リベンジャー）』!!　この剣で貴様を殺す！」
「フリード」
「あいよ！　このおっさんを殺りたかったら俺を先に殺れなんてお決まりの台詞を言わせてもらいますよぉぉぉ！」
　殺意と共に魔剣と聖剣が交錯し、辺りに激しいスパークが迸（ほとばし）る。
「聖喰剣（ホーリー・イレイザー）！」
　木場の手にした剣の刃が闇に変わり、エクスカリバーの聖なるオーラを削っていく。
「おいおいおい、こちとら折れたとはいえ名のある聖剣だろうがよ！
　それがどうして悪魔風情の創った魔剣に押されてんだよ!?」
「この剣は同士たちの無念が込められた剣だ！　だからこそ、エクスカリバーだけには負けるわけにはいけないんだッ！」

幾度の接触で闇の魔剣はエクスカリバーの纏う聖なるオーラを打ち合う度に減じさせていった。
「おいおい嘘でしょー！　伝説の聖剣さまがどうしてクズ悪魔のカス剣に敗北するんですかー!?」
「これで終わりだ！」
木場の魔剣が一閃されると、聖なるオーラを失ったエクスカリバーはフリードごと真っ二つに切り裂かれた。
「まさか、エクスカリバーが……」
エクスカリバーが折れたことに余程ショックを受けたのか、バルパーは膝を落として呆然とした。
「ふん、まさかエクスカリバーが敗れるとはな。所詮折れた聖剣ではこの程度か」
その一部始終を高みの見物していたコカビエルが宙に浮かべた椅子から立ち上がる。
「この町を壊す術式が完成するまで少し時間がある。どれ、少し遊んでやろう」
コカビエルが校庭に降り立つと、そこにリアスの滅びの魔力が放たれた。
だが、それをコカビエルは片手で受け止める。
「なるほど。才能は感じられる。――だが、この程度では俺を倒すことなどできん！」
滅びの魔力を打ち払うと、そこに雷が落ちる。
「バラキエルの娘か！　それが悪魔に堕ちるとはな」
バラキエル。それは堕天使の幹部であり、筆頭の武闘派で知られている。
「黙れ！　私はあの者とは違う！」
「リアス・グレモリー。貴様は余程のゲテモノ好きのようだな！」
「私の眷属を侮辱するな！」
リアスが怒り任せに滅びの魔力を放つが、二度目は当たりもせずに躱された。
多勢を相手にしても譲らないコカビエルは、抗戦している中で隠さ

れている重大な事実を口にした。
「仕えるべき主を亡くしたというのに、貴様ら神の信徒と悪魔はよく戦う」
「なんだと？」
コカビエルが口にした言葉。それは神が既に死んでいると事実を指していた。
それを聞いて、教会関係者のゼノヴィアがショックを受け、デュランダルを取り落とす。
「天使は神、悪魔は魔王を失い、堕天使は幹部を除くほとんどが死んだ。今戦争を起こせば三大勢力は揃って共倒れになる。だからもう誰も戦争は起こさない。だが！　このままで終わらせられるか！　あのまま戦いを続けていたら勝っていたのは俺たち堕天使だった！
それを俺一人でも証明してやる！」
コカビエルが声を荒げて叫び、リアスたちに向かって襲いかかろうとしたとき、空から一条の白い光が降ってきた。
「貴様、『白い龍（バニシング・ドラゴン）』かッ！　何をしに来た？」
「アザゼルからお前を連れ戻すように言われてね。大人しくついて来て貰えるか？」
「断る！」
「なら、力尽くだ」
コカビエルと白い龍――ヴァーリが戦い始めるも、白龍皇の相手の力を半減させる力を受けたコカビエルはその力を大いに縮小させられ、為すすべなくヴァーリに倒された。
「さて、そこの堕天使」
「――何よ」
今まで見ているだけだったレイナーレに声がかかり、彼女はそれに憮然とした言葉を返す。
「お前にもついて来てもらうぞ。アザゼルへの経緯の説明をしてもらう」
「わかってるわよ」
ならいいと呟いて、コカビエルを担いで飛び上がったヴァーリの後

を追って、レイナーレは駒王学園から飛び立った。

●　○　●

その後、レイナーレは堕天使総督アザゼルに謁見し、一連の事情を告げた後、三大勢力の和平会談にも付き添うことになるのだが……

「正直、あの時のことは覚えてないのよね」

（時間停止を受けたみたいで、気がついた時にはもう全部終わった後だったし）

なので、和平会談の時のことは書くほど覚えていないのだ。

「でも、アザゼルさまはお変わりなかったわね」

かつての思い出の中と寸分違わぬ姿と、戦場でも変わることのなかった余裕溢れる態度。

（あの方はかつて自分を戦争の最中に救ってくれた時となんら変わりない――）

「どうやったらあの方のお役に立てるのかわからないけど、まずはこの報告書を仕上げましょう」

レイナーレは羽ペンにインクを浸すと、机に向かって文字を書き連ねるのだった。

●　●　●　●　●

黒いのの独白

「オーフィスくぁいいよオーフィスオーフィスをちっちゃな体をはぐはぐしたい長い髪をもふもふしたい首筋をくんかくんかしたい綺麗な肌をぺろぺろしたいあどけない顔にすりすりしたい小さな頭をなでなでしたいオーフィス可愛いよオーフィスオーフィスマジウロボロスオーフィスは俺の嫁――今すぐ攫って誰の手の届かない所に監禁して誰の目にも触れさせない場所で一生面倒見たいぐらい大好きっ！　べ、別に好きって言っても世界を敵に回せるぐらい好きなだけなんだからねっ！

――……はっ、今一体何をしていた？　精神安定剤切らすと意識がちょくちょく飛ぶなー」

ゴッド・バスター
Ｈｏｍｅｃｏｍｉｎｇ

突然だが、最近の俺はよく襲われている。
宝くじが当たって急に金持ちになったというような特別な理由があったのではなく、俺が特別な存在――というと中二病のようだが残念ながら事実だ――であるからだ。
しかも、襲ってくる存在というのも普通の存在でなく、悪の秘密結社の戦闘員のようなのっぺりとした黒い人型の何かを伴った、炎やら光の矢やらを放つびっくり人間であった。
襲われる原因はわかっている。何故なら、誰もが最初にこう口にするのだ。『赤龍帝か？』と。
ちなみにそこで人違いですと言っても結局襲ってくる。なら何故一々確認するのだと小一時間ほど問い詰めたい。
救いといえば、襲ってくる相手はどれも戦った経験の少ないと思われる素人さんと、大した力がない黒子人形だということだ。
おかげで今のところ鎧を纏うまでもなく倒せている。あれは強力な分、使った後の疲れが大きいのが難点なのだ。
「やっ！」
だが、今日の敵は少し手強かった。
影を操って攻撃してくる敵。
問題なのはその影は攻撃を飲み込んでまた別の影からそれを出すという厄介な特性だった。そのせいで自分で自分を殴るなんてことを二三度繰り返してしまった。
「なら、これでどうだ！」
突き出した拳が影の中に飲み込まれた瞬間に合わせてオーラを爆発させる。
「ぐあッ！」
影の中で起こった爆発は影を操っている男を襲ったのか、男は悲鳴を上げて倒れた。

「トドメだ！」
倒れた男の足目掛けて右足を振り下ろすと、何かが折れる嫌な感触が返ってくる。
（よし、逃げる！）
行動不能にしたらとどめを刺さずにすぐに逃げる。だって倒してもまた別の奴が来るんだから倒す意味がない。殺すのもできるだけ遠慮したいし。
（けど、これがいつまでも続くようなら対応を変えないといけないかもな）
そう何度も何度も夜逃げするわけにはいかないのである。
○　●　○
やっとこさ今の住まいに帰って来たのだが、なんだか酷い予感を覚えた。家にアーシアが居なかったら回れ右するところである。
念の為に左腕に籠手を出現させて、自室のドアを開ける。
「ただいま、アーシア」
「お帰りなさい、イッセーさん」
出迎えてくれるアーシア。ここまではいい。
「邪魔している、赤龍帝」
「よう、赤龍帝の兄ちゃん。久しぶりだねぃ」
「なんでお前らがここにいるんだよ？」
ヴァーリと美猴という厄介者二名が居座っていた。
「何の用だ。やっぱ言うな、帰れ」
何の用かと尋ねてみたが、別に聞かなくてもろくでもないことなのは想像がついた。
「まあまあ、そう言わずに話だけでも聞いてくれや」
だが、こいつらはどうやら話をするまで帰ってくれる気は無いようだったので、仕方ないので座って話を聞くことにした。
○　●　○
「北欧神話を知っているか？」
座ってアーシアからお茶を受け取ったところで開口一番にヴァーリの口から飛び出したのは、そんな言葉だった。

「名前と出てくる神様の名前を少しぐらい知ってるだけだけど、それがどうかしたか？」
「その中にフェンリルという、神殺しの狼が存在する」
「うん、大体わかった」
（どうせそれと戦おうって話だろう。こいつらならやりかねない）
　そんな俺の考えを嘲笑うかのように、ヴァーリはそれを遥かに上回ることを口にした。
「それを神仏への対抗策として手に入れておきたい。なので、フェンリルをロキから奪うのに協力して欲しい」
「馬鹿じゃねえのお前」
　聞こえてから言葉にするまでの速度は脊椎反射並みだった。
「ロキってその北欧神話に出てくる神様だったよな？　神仏相手取るために神様に喧嘩売るって本末転倒してるじゃねえかよ！」
　こいつ本当になに考えて生きてるんだろう。少なくとも俺には一生理解できない思考回路をしているのは間違いない。
「てか、神様ってそんな簡単に襲撃できるもんなのか？」
　確かに俺とヴァーリの神器（セイクリッド・ギア）は神滅具（ロンギヌス）と呼ばれているが、実際に神様を殺した例は前に見た聖槍以外は無いと聞く。
「普段なら無理だったろう。だが、ロキは近日中にオーディンを殺すためにフェンリルを連れてとある町にやってくる」
「ちょっと待て」
　ちょっと理解できないところがあったので整理させてもらいたい。
「確かオーディンってのもロキと同じ北欧神話の神だったよな？　それがどうして殺す殺される話になってるんだよ？」
「三大勢力が他の神話体系に和平を持ちかけていることは知っているか？」
「知らん」
　基本一般人として暮らしているのでそういう事は一切知らない。そういう事を聞いてもいないのに話してくるロウも最近見てないしな。
「オーディンはそれを受けようとしているが、ロキはそれが不満なの

さ。三大勢力の神話系統は北欧神話を含む様々な他の神話系統を駆逐していたからな。だから、三大勢力とオーディンの和平会談を阻止しようとしている」
今まで好き勝手やってたくせに突然和平を出されて何様だってことなのかね。
「で、それにどうして俺が協力しなくちゃいけないんだよ。自分たちで勝手にやればいいだろうが」
俺が率直な感想――勝手にやってろと伝えたら、ヴァーリはその整った顔を若干歪ませた。
「神であるロキは言うに及ばないが、目標であるフェンリルはそれよりも強い。全盛期の二天龍に並ぶほどであり、この世界で十本の指に入るほどだ」
「――！」
思わず絶句する。この世界で十番目以内に強い。それはつまり、人間では及びもつかない様な世界各地の修羅仏閣の中で十番以内の強さだ。後二天龍ってそんなに強かったんだ。
『これでも一応三大勢力を相手取れた身だからな』
ドヤ顔してるところ悪いんですけど、ドライグさん結局は負けて封印されてますよね？
「そんなのに勝てるのかよ？」
「まともに戦えばまず負けるだろうな」
それはヴァーリにしては珍しい弱気な発言だった。
「だが、フェンリルには有名な対処法がある。それと奥の手を使えば封じ込めることは十分可能だと考えている。問題はロキだ。かの悪神の強さはフェンリルほどではないが、それでもかなりの強敵だ。それらを同時に相手にするんだ。保険の一つでもかけておきたくなるのさ」
この何事においても自信満々なこの男がここまで言うからには、今回は本当に危ない橋なのだろう。
「……ちょっとだけだからな」
本当なら遠慮したいのだが、この孤高を気取る最強厨の自称ライバ

ルが俺に頭を下げる――実際に下げてないが、比喩的な意味で――のだ。このまま見送るというのは些か寝つきが悪くなりそうだった。
「ただし、こういうのはこれっきりだからな。二度目はないぞ」
「感謝する。――では、早速行こうか」
いきなりだった。こっちの事情とかは考慮に入れてくれないのだろうか。予定なんて一切ないから問題ないけど。
「行くって、どこに行くんだよ」
「三大勢力とオーディンの会見が行われる所だ」
「具体的な地名で頼む」
聞いても判るかどうかはわからなかったが、一応訊いておくことにした。
「――――だ」
その地名は聞いたことがあった。別に有名ではない地方都市。――そこは、俺の生まれ育った町だったのだ。
「この話はやっぱり無しということで――！」

○　●　○

あれから迂余曲折あり、俺はヴァーリたちについてアーシアと一緒に自分の故郷へと帰って来ていた。一度口に出したことはそう簡単には撤回できなかったのだ。
「気が重い……」
間違っても知人に会わないように行動は常に深夜。ついでに唾の長い帽子を被って顔をできるだけ隠すことにする。
「それで、オーディンだっけか。ロキに狙われてる神様ってのは。そいつにでも会いに行くのか」
「それがロキに接触する一番手っ取り早い方法だろうな」
そうは言うけどな、ヴァーリ。お前テロリストって自覚あるか？普通に会いに行ったらその場で戦闘になるぞ。
「だろうな。だから、できるだけ恩を売ることのできるタイミングで会いに行くことにする。――たとえば、今のような、な」

『Vanishing Dragon Blance Breaker!!』

ヴァーリはいきなり白い鎧を纏うと、突然飛んでいってしまった。

その先を見上げると、そこには巨大な馬と狼。それと悪魔がたくさんと天使と堕天使が少し。それと、その中でも一際強い存在感を放つ黒いローブを着た悪そうな男がいた。

「あれがロキか？」

「そうみてぇだな。俺もヴァーリの後を追うかね」

美猴は金色の雲――筋斗雲を出してヴァーリの後を追って飛んでいってしまった。

「お前らは行かないのか？」

「私飛ぶの苦手なのよね。元が猫だから」

「私はそもそも飛ぶことができません」

一緒に居た黒歌とアーサーは動きがなかったので尋ねてみると、そんな答えが帰ってきた。ちなみに、小猫ちゃんとルフェイは別行動を取っている。

小猫ちゃんとあいつらを会わせるのは少しあれなので、それはいいと思う。

「あ、ロキとフェンリルが居なくなった」

ヴァーリの介入によって、ロキという驚異は一先ず去っていった。

「なあ、この後の顔合わせに俺も出なくちゃダメか？」

俺は駒王学園の悪魔たち――特にリアス・グレモリーと顔を合わせたくないのだ。あとこいつらと仲間扱いされたくない。

「決戦の場にいきなり現れても混乱を招きますからね。我慢してください」

アーサーの正論に、俺は言葉もなく俯くのだった。

○ ● ○

場所は変わって駒王学園旧校舎のオカルト研究会の部室。そこにはこの場の主であるリアス・グレモリー。その右腕的ポジションである姫島朱乃。堕天使の総督であるアザゼル。更に駒王学園の生徒会長であり、リアス・グレモリーと並ぶ上級悪魔であるソーナ・シト

リー。それに二天龍であるヴァーリが集められていた。
ちなみにその場に全員いないのは単にスペースの都合であり、それ以外の者はその部屋の外の廊下で待機していた。
仮にも敵対している間柄なので、会話は一切無かった。沈黙が痛い。
「あの……イッセーくん？」
そんな居た堪れない雰囲気の中、明るい茶髪をツインテールにした少女が俺に話しかけてきた。
（はて、こんな美少女は記憶にないんだが、一体誰だろうか）
駒王学園の制服を着ているからここの生徒だとは思うんだが、こんな美少女がいたら俺が気づかないはずがないのだが……
「えっと……どちら様で？」
「わ、忘れちゃったの!?　私、紫藤イリナだよ！　小さい頃よく遊んだでしょ？」
「――すまん、全然覚えてない」
冗談とか無しで、これポッチも覚えていない。そもそも子供の頃に女の子と遊んだ覚えが俺にはない。
「そ、そんなぁ……久しぶりに帰ってきて尋ねてみたら行方不明になってるし、しかもその理由が悪魔に転生したからって聞いて心配してたのにこの扱いはないと思うわ！」
「ご、ごめんなさい」
悪いとは思うが本当に思い出せないのだ。
まあそれはそれとして、俺にはそれよりも優先して聞かなくてはいけない事ができた。
「父さんと母さん、やっぱり心配してたか？」
それはこの町に残した唯一の心残り。俺を産んで育ててくれた両親の事だった。
俺の問いかけを聞いたイリナはコクりと頷く。
「お二人とも目に見えて疲れてて……ねえ、イッセーくん。あなたの立場は理解してるつもりだけど、せめてご両親に顔を見せるぐらいはできないかな？」

「――それはできない」
本心ではイリナの言う通り、俺だって父さんと母さんに会いに行きたかった。
だが、俺はもう変わってしまったのだ。しかも今の俺はよくわからないが狙われている。もし両親が巻き込まれたのなら、俺はそれを一生後悔することになるだろう。
――だが、イリナの話を聞いて、俺は一つの決心がついた。今までずっと考えていたものの、そのままなあなあにしていた事への。
○　●　○
「アザゼルさん」
話し合いが終わったのか、部室から出てきたアザゼルへと声をかける。
「どうした赤龍帝。俺に何か用かな？」
「頼みがある」
「……ま、言ってみな」
アザゼルは俺の言葉を聞いてしばらく考えていたようだったが、話を聞いてくれるようだった。
「俺はあんたの部下に殺されて、そのせいで悪魔に転生したのは知ってるか？」
「報告にあったからな。その償いをしろってことか？」
「大体そんな所だ」
だが、俺に特に何をしろってわけじゃない。
「堕天使って人間の記憶を自由にできるんだろ？」
堕天使レイナーレが天野夕麻としての記憶を消したように。
「確かにできるが……それをどうしろって？」
アザゼルに問いかけられ、躊躇いを振り切って一息で考え抜いた内容を口にした。
「――俺の、兵藤一誠の記憶をこの町の住人から全て消して欲しい」

Ｈａｐｐｙ／Ｅｎｄ

ロキとの決戦までにはまだ間があるとの事で、俺たちは貸し与えられた一室で大人しくしている。
だが、それに素直に従っているのは俺とアーシアぐらいだ。他の奴らは居たり居なかったりしている。
（まあ、あいつらが大人しく一箇所で留まってるわけないか）
そんな普通の精神構造をしているならテロリストなんてやってこんな所までやってきているわけないか。
（それに付き合う俺も人が好いんだろうか）
「イッセーさん、本当に良かったんですか？」
同じ部屋にいたものの、所在なさげにしていたアーシアがおずおずと話しかけてきた。
良かったというのはあの事に関してだろう。
「……心情的にはさておいて、こうした方がいいとは確かだろ。もう会うわけにもいかないんだし」
それに、これ以上両親を悲しませたくはない。
「しかも、今の俺はよくわからんがどっかから襲われてるんだ。もし関係性を利用されて人質にでも取られたらそれこそ後悔する」
（――ん？　その場合は俺の記憶が消えないとダメなのか？）
「イッセーさん」
突然アーシアに頭を掻き抱かれた。
「大丈夫です。私はずっとイッセーさんの側にいます。――だから、泣かないで」
「泣く？」
アーシアにそう言われて頬に手を当てると、そこは僅かに濡れていた。
（ああ、俺は泣いてたのか）
アーシアに言われるまで全然気づかなかった。
「アーシア」
「なんですか、イッセーさん」

「もう少しこのままでいてもいいか」
「はい、いいですよ」
●　●　●
「やっべえ……超顔出し難い。タイミング超しくった。取り込み中みたいだし出直すか」

○　●　○

時が経ち、ついにその時がやってきた。今は会談が行われる高層ビルの屋上にいる。
俺の役割はヴァーリと一緒にロキの相手だそうだ。
ヴァーリはフェンリルが目当てなのでどうするか聞いてみたところ、まあ成り行きで考えるそうだ。こいつら無計画過ぎないか。
「おい、赤龍帝」
神様が相手だという事で入念にストレッチしていると、後ろからアザゼルに声をかけられた。
「こいつを使いな。秘密兵器だ」
そう言って差し出されたのは……金づち（ハンマー）？
「こいつはトールが持つミョルニルのレプリカだ。本来なら神にしか使えないが、一時的にお前でも使えるようにしてある」
「そんな物俺に貸していいんですか？」
それ間違いなく貴重品でしょうそれ。
「一時的にって言ったろ？　持ち逃げしても意味はねえよ」
「いや、要りませんけどねこんなの。日曜大工もしませんし」
装飾が華美で趣味じゃない。
「レプリカとはいえ神様の武器なんだから日曜大工に使うとするなよ……」
冗談ですよ。冗談。
「というか、なんで俺に？」
「前線でメインで体張って戦うのはお前とヴァーリだ。で、ヴァーリは要らんって言ったからな」

消去法なのか。まあ有り難く預かっておくけど、使えるかなこれ。武器使った事ないんだけど。
「というか、このサイズで効果あるんですか？」
ハンディサイズなんですけど。
「オーラを流せば大きくなるぜ？」
「あ、そうですか」
大きさが変えられるとは高性能な武器だ。流石神様装備。
「じゃ、有り難く使わせてもらいます」
「おう、頑張んな」
ミョルニルのレプリカを渡して、アザゼルは去っていった。
堕天使の総督――堕天使だと言うことで警戒していたけどなんだか好いヒトのようだ。
そして、遂にロキがフェンリルを伴って現れた。しかも驚くべきことに堂々と真正面から。
「作戦開始」
この場を仕切る堕天使のバラキエルさんがそう言うと、大きな魔方陣が展開される。戦いの被害を抑えるため、場所を移すためだそうだ。
一瞬の光の後、辺りの風景は岩肌ばかりの場所に変わっていた。
「大人しく転移されるなんて余裕ね」
「先に倒すか後に倒すかだ。どちらでも大した違いではない」
二人のやり取りを見ながら、俺は取り敢えず一発撃ち込むことにした。
「せいやっ」
軽い声と共にオーラ弾を放つが、軽く受け止められた。予想通りだが力の差があるな。やっぱり禁手（バランス・ブレイカー）しないと駄目か。
「アーシア、下がってろ。回復のオーラが届くギリギリの範囲まで」
「はい」
『Welsh（ウェルシュ） Dragon（ドラゴン） Balance（バランス） Breaker（ブレイカー）!!』
アーシアを下がらせて赤龍帝（ブーステッド・ギア・スケイルメイル）の鎧を纏うとロキが驚いたように目を見張った。

「白龍皇に続いて赤龍帝だと！　二天龍が共闘とは、一体何が起こっている？」
「知ったことかっ！」
　ロキが驚いたのを尻目に跳躍し、全身の噴射口からオーラを噴出して飛び上がる。今気づいたが俺ろくに飛べないんだった。
　そんな俺に向けられた今まで見たことのない図柄の無数の魔方陣。できる事なら回避したいが、残念ながらそこまで器用なことはできないので特攻一択だ。
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』
　加速度を増幅させて一気に攻撃を突破し、ついでに魔方陣も破壊した。
「まずはこれでどうだ？」
　ヴァーリが手元に出したのはこの前までとは違う、ロキが使っているものと同じ形式のものだった。――て！
（あの野郎、俺にお構いなしかよ!?）
　ヴァーリの攻撃は広範囲に広がっており、俺も巻き込まれかねない規模だった。打ち合わせもしてなかったから無理もないか。
　辺りに大穴をいくつも開けるほどの攻撃だったが、ロキはほとんどダメージを受けていない様子だった。
「流石は神様って所か」
　これ倒せるのかな。やっぱり貰ったこいつを使うしかないか。
「ミョルニル……のレプリカか？　オーディンめ、そこまでして……！」
　腰に下げたミョルニルを手に取ると、ロキがそれに過敏に反応した。北欧の武器を他のところの奴に使われるのが気に入らないんだろう。
「ならば、こちらも本腰を入れさせてもらおう――！」
　ロキが合図すると、控えていたフェンリルが動き出した。
（うわあ……アレ、絶対ヤバイって）
　かなり距離を置いてるのに尻尾を巻いて逃げ出したいぐらいだ。

だが、こっちにも策がある。
「にゃん♪」
黒歌が自分の独自空間にしまっていた魔法の鎖、グレイプニルを出し、それをみんながフェンリルに向かって投げつける。
ロキが何かしたせいで一時は無効化されたグレイプニルだったが、ダークエルフによって強化されたおかげで無事フェンリルを拘束することに成功した。
これを見てロキも少しは動揺すると思ったのだが、不敵な笑みを浮かべてロキは両腕を広げた。
「スコル！　ハティ！」
ロキの両側の空間が歪み、フェンリルそっくりな大きな狼が出現した。
ロキの言う所によるとフェンリルの子供らしい。親が親なら子も子だよ！
でも俺の相手はロキだ。向こうは任せてロキに集中する。
「せー……のっ！」
掛け声と共にミョルニルのレプリカを振り下ろす。だが、あっさりと避けられて地面を大きく抉るだけに留まった。後ちょっとバチッとした。ちょっと期待と違う。
「ミョルニルは純粋な心の持ち主にしか扱えない。どうやら貴殿に扱えなくはないようだが。迷っていることでもあるのかね？」
「うるせえ！」
雷――って言うよりスタンガン程度の電気を纏ったミョルニルを左から右へ振り回すが、再び避けられてしまった。
（慣れてない武器は扱いにくい！）
当たれば赤龍帝の力で増幅させればそれでいけると思うのだが、当たらないことにはどうにもならない。
「こちらも忘れてもらっても困るな！」
ヴァーリが魔力と北欧の術式を織り交ぜながらロキを狙う。
だが、術式面ではロキが一枚上手なようで、それら全てを迎撃しながら反撃までしてくる。

ヴァーリが撃ち漏らした攻撃をミョルニルで弾くも、このままではジリ貧だ。
「ヴァーリ、同時に左右から攻めるぞ。俺は左、お前は右だ」
ヴァーリに支持すると同時にミョルニルを小さくして腰に下げる。今は邪魔だ。
「了解した」
俺はオーラを噴射させて、ヴァーリは光の帯をたなびかせてロキに向かって左右から迫る。
「二天龍を同時に相手にできるとはな！」
ロキは魔方陣を並べるように展開し、俺たちに向かって巨大な七色に光る波動を放ってくる。
「アルビオン！」
『Ｄｉｖｉｄ（ディバイド）Ｄｉｖｉｄ（ディバイド）Ｄｉｖｉｄ（ディバイド）Ｄｉｖｉｄ（ディバイド）Ｄｉｖｉｄ（ディバイド）Ｄｉｖｉｄ（ディバイド）!!』
「ドライグ！」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』
ヴァーリが半減の力で攻撃を弱めたところを、力を倍化させた俺が跳ね除ける。
「でやぁぁぁぁぁぁッ！」
ヴァーリが攻撃を半減したため、僅かに先行する形になった俺が攻撃を打ち破ったのとは逆の拳を振るうが、また避けられる。
だが、突き出した腕からオーラを放出し体を捻って反転。その勢いのまま回し蹴りを放つ。
「ぐ――！」
回し蹴りはもうちょっとの所で防御魔方陣に防がれたが、その後ろからはヴァーリが既に攻撃の体勢に入っていた。
このまま一撃入る。そう思った瞬間、突如現れたフェンリルがヴァーリに食らいついた。
「何ッ!?」
フェンリルはグレイプニルで動きを止めたはず。そう思って周りを見ると、子フェンリルの一匹がグレイプニルを咥えていた。どうやらあいつがフェンリルの拘束を外したようだ。

（なんて言ってる場合じゃない！）
ここでヴァーリを失うわけにはいかない。そもそも今回の戦いの目的を遂行するにはヴァーリは必須なのだ。
一度腰に下げておいたミョルニルを手に取り、ありったけのオーラを注ぎ込む。
『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!』
「でりゃぁぁぁぁぁぁぁッ!!」
5メートルぐらいにまで大きくなったミョルニルをフェンリルめがけて渾身の力で振り下ろす。
かなり速い勢いで振り下ろされたミョルニルは雷を伴いながらフェンリルの背中に命中したが、フェンリルはそれをあっさりと跳ね除ける。
（くそっ！　ヴァーリから口を離すこともしないのかよ）
ミョルニルを元の大きさに戻すのと同時に、ヴァーリを咥えたままのフェンリルが高速で近づいて、俺に向かって鋭い爪を横薙ぎに振るった。
「がはっ……！」
後ろに急加速したはずなのに爪が届いていたのか、今までほとんどの攻撃から俺の体を守ってくれていた赤龍帝の鎧（ブーステッド・ギア・スケイルメイル）はあっさり切り裂かれて俺の体まで切り裂いていた。
「ごふっ……！」
「イッセーさん！」
俺の口から血反吐が吐き出された直後、アーシアから回復のオーラが届いて傷口が塞がる。だが、失った血までは戻らないのでそう何度も繰り返すのはできない。
「おりゃぁぁぁぁッ！」
この際ヴァーリを吹き飛ばす形でもいいからフェンリルの口から叩き落とそうとミョルニルを横薙ぎに振るうも、素早く頭を下げられたせいで虚しく空を切った。
あの狼、大きさの割に俊敏すぎる。でかくて速いなんて反則だ。

「こちらも忘れてもらっては困るぞ？」
フェンリルからヴァーリを救うこともできてないのに、ロキが雨霰とばかりに魔術の波動を放ってくる。
「誰でもいいからグレイプニルをもう一度フェンリルに使ってくれぇぇぇ！」
ロキの魔術をミョルニルのヘッドで防ぎながら必死に声を張り上げる。とにかくあの狼は厄介極まりない。
「兵藤一誠」
フェンリルに噛まれて腹に大穴を空けているヴァーリが口を開く。
「ロキは任せる」
まあお前はそんな状態だから仕方ないけど、だったらお前はどうするのさ。
「このフェンリルは――俺が責任を持って殺そう」
（頼もしいけどお前当初の目的忘れちゃいませんかね――!?）
そんな俺の思いを他所に、それを聞いたロキが笑い声をあげる。
「ふはははは っ！　既に瀕死の身でどうやってだ？　強がりは白龍皇の名を貶めるぞ？」
「――天龍を、このヴァーリ・ルシファーを舐めるな」
ヴァーリはロキに背筋が凍るような視線を向けると、異様な雰囲気を持つ呪文を詠唱し始めた。それと同時に鎧の宝玉が七色に輝き始めた。
「我、目覚めるは――」
〈消し飛ぶよっ！〉〈消し飛ぶねっ！〉
それと同時にヴァーリのものではない声が響き始める。恨みと怨念に満ちた、それだけで他者を畏怖させる声が――
『あれは歴代の白龍皇の所有者。その残留思念だ』
ドライグの声を耳に入れながら、俺は白龍皇の声に耳を傾けていた。
「覇の理に全てを奪われし、二天龍なり――」
〈夢が終わるっ！〉〈幻が始まるっ！〉
「無限を妬み、無限を想う――」

〈全部だっ！〉〈そう、すべてを捧げろっ！〉
「我、白き龍の覇道を極め――」
「「「「「「「「「「汝を無垢の極限へと誘おう――ッ！」」」」」」」」」」
『Ｊｕｕｇｅｒｎａｕｔ（ジャガーノート）　Ｄｒｉｖｅ（ドライブ）!!!!!』
眩しい光が鎧の宝玉から発せられ、!!更にその鎧も形状を徐々に変えていった。今のヴァーリから感じる力の波動はフェンリルにも劣っていない。
「黒歌！　俺とフェンリルを予定の場所へ転移させろ！」
ヴァーリの声を聞いた黒歌がにんまりと笑って、手をヴァーリに向かって動かし始める。
その直後、ヴァーリとフェンリルを魔力の帯のようなものが包み、黒歌が一緒に転移させたのだろうグレイプニルと共にこの場から溶けるように消えた。
どうやらヴァーリも当初の予定は忘れていなかったようだ。ロキとフェンリルを引き離して、フェンリルを手懐ける手はずになっていた。
（後は、俺がロキを倒せば――）
「きゃ――」
倒せるかという事実に不安を覚えながらロキに向かって一歩を踏み出そうとした時、よく耳に馴染んだ声が聞こえた。
「アーシア!?」
焦って振り返ると、子フェンリルの内一体が後方で回復に徹していたアーシアに襲いかかっていた。
『ＪＥＴ（ジェット）！』
それを見た俺は全力で飛び立つ。だが、俺とアーシアの距離は圧倒的に遠かった。
周りもそれを黙って見ているわけではなく、魔力や剣、聖なるオーラが子フェンリルを襲うが、子フェンリルはそれを体に受けながらも突き進み、アーシアが立っていた場所ごと――アーシアを、飲み込んだ。
「まずは一人、と言ったところか……――む？」

ロキが俺を見て首を傾げる。だが、俺はそれをどこか遠い所のように感じていた。
（アーシアが死んだ。俺が守れなかったら。俺が、弱かったから）
声が聞こえる。胸の奥から恨みと憎しみに満ちた声が。
（アーシアが死んだ。誰のせいで？　俺のせいで。コイツのせいで――！）
声が聞こえる。目の前の相手を滅ぼせと。目に映るもの全てを薙ぎ払えと。
「コロス――！」
そのタメにヒツヨウなコトバは、もうスデにシっている。アトは、それをクチにダせばいい――
『我、目覚めるは――』

Ｊｕｇｇｅｒｎａｕｔ　Ｄｒｉｖｅ

『我、目覚めるは――』
〈始まったよ〉〈始まってしまったね〉
イッセーの口から老若男女混じった不気味な声が響く。
『覇の理（ことわり）を神より奪いし二天龍なり――』
〈いつだって、そうでした〉〈そうじゃな、いつだってそうだった〉
イッセーの口から出る呪文は呪詛のように怨念に満ちていた。
『無限を嗤い、夢幻に憂う――』
〈世界が求めるのは――〉〈世界が否定するのは――〉
それと同時にイッセーの体から血のように赤いオーラが吹き出て辺りを照らす。
『我、赤き龍の覇王と成りて――』
〈いつだって、力でした〉〈いつだって、愛だった〉
宝玉から響く声は一度途切れると、恨みに満ちた声を揃って口にした。
《何度でもおまえたちは滅びを選択するのだなっ！》
徐々に鎧が鋭角なって行き、巨大な翼が生える。その姿はまるで小さなドラゴンだった。
そして、鎧の全身の宝玉から老若男女入り乱れた声が絶叫のように吐き出される。
「「「「「「「汝を紅蓮の煉獄に沈めよう――!!!!!」」」」」」」
『Ｊｕｇｇｅｒｎａｕｔ（ジャガーノート）　Ｄｒｉｖｅ（ドライブ）!!!!』
赤いオーラが一際強く迸り、それだけで周囲が破壊されていく。
「む、白龍皇に続いて赤龍帝も『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』を発動させたか。ならば――」
ロキが両羽腕を広げると影が広がり、そこから体の細長いドラゴン――ミドガルズオルムの量産体が５体姿を現した。
「ぐ、おおおおおおオオオオオオッ！」
それを見たイッセーは咆哮のような声を上げると翼を広げて地面を蹴る。

この場にいる全員の視界から一瞬消えた後、量産型ミドガルズオルムの内の1体の体が爆発したように吹き飛んだ。
そのすぐ傍ではイッセーが雷を纏ったミョルニルを振り抜いた姿勢で滞空していた。
「馬鹿な！　その状態でもミョルニルを扱えるというのか？　覇龍（ジャガーノート・ドライブ）を発動させている際は強い怨念に駆られるはずだ。それを乗り越えて未だ正しい感情を持ち続けられるというのかッ!?」
ロキの考えは3／4ほど正しかった。覇龍（ジャガーノート・ドライブ）にまつわる箇所は全く持ってその通り。だが、今のイッセーの感情は決して正しいものではない。
今のイッセーの感情を占めるのは悲嘆。愛する者を失った悲しみであるため、正しくはなくとも間違ってはいない。
これが復讐にまでなればミョルニルはただの大きさを自在に変えられる鉄槌になるのだろうが、今はまだ辛うじて動作しているのを赤龍帝の力で増幅させている状態だ。
だが、覇龍（ジャガーノート・ドライブ）にミョルニルというのは鬼に金棒を遥かに超える脅威であり、わずか十秒で五体の量産型ミドガルズオルムを撃破した。
そして、イッセーは次の標的をロキへと定めた。
「ぐぎゅあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁアアアアアアッ!!」
「ぬおおおおぉぉぉぉぉぉッ！」
人とは思えない声を出して飛びかかって来るイッセーに向かって、ロキは自分が一度に撃てる最大の魔術を雨のように放った。
「ごぎゅうぁぁぁアアアアアアアッ！」
だが、正面から見るとまるで壁のように見える密度の魔術攻撃を、イッセーは全身の噴射口からオーラを噴射することでなし得た強引な空中起動（マニューバ）で回避した。
「何だと!?」
襲い来る魔術の雨を回避し、ロキに肉薄したイッセーは小さくしたミョルニルをそのヘッドごと手に強く――レプリカとはいえミョルニルが砕けるほどに――握り締めた。

「ぐるぉおおオオぉおぉおぉおぉオオオッ!!」

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!!!』

『Mj?lnir(ミョルニル) Strike(ストライク)!!!!!』

雷電を纏った拳が鉄槌を振り下ろすように振るわれ、幾重に張られた防御の魔方陣を紙のように打ち破り、ロキを殴り飛ばして地面へと叩き付ける。

「……神滅具(ロンギヌス)――聖書に記された神が、人間に神殺しの力を与えたのは……こうなることを予期していたというのか?」

ロキは勢いよく落下すると地面に減り込み、搾り出すように言葉を発した後に気絶した。

「ぐりゅぉおおおお……」

ロキを倒したイッセーは幽鬼のように振り向き、身をグッと屈めた。

あの暴威がこちらに向けられると思った皆はそれぞれ最大の警戒心を向けるが、ロキを一方的に蹂躙したイッセー相手ではそれも虚しく感じていた。

「グ……オオオオォォォォォォォ!!」

「落ち着けバカ」

弓から放たれた矢の如くイッセーが飛び出したが、それが途中で叩き落とされる。

「あー驚いた……いきなり暴走とか心臓に悪い」

まるで角を曲がったら人と対面した程度に驚きながら、どこからともなく現れたロウは構えていた手刀を振り下した。

その手の付近に黒いオーラが漂っていることから、その手刀でイッセーを叩き落としたのだろうと推測される。

「ぐあぁぁぁぁぁ――ッ!?」

イッセーは両手を着いて起き上がろうとしたところで、その途中で動作を止めた。顔を上げて目にしたものが、とても信じられないものだったからだ。
「全く……大切な人ぐらいちゃんと守りなさいよね」
やれやれと首を振るロウがその腕に抱えていたのは、子フェンリルに飲み込まれたはずのアーシアだった。
「ほら、ちゃんと抱えて離すなよ」
そう言ってロウが差し出すアーシアを受け取ろうとする両手からは、鋭い爪は無くなっていた。
「アー……シア……」
涙声でそう呟いたイッセーは、アーシアを強く、だけど優しく抱き寄せるとそのまま気絶し、鎧は溶けるように消え去った。
「やれやれ。私は元来そんなに面倒見がいい方じゃないんだけど。どうしてここまでしちゃうのかねぇ」
不思議そうながらも満足そうに呟くロウ。
「「ウルオオオオオオオオ!!」」
その後ろから、二匹の子フェンリルが迫る。彼らの狙いはロキを倒したイッセーである。
「ふぅ……」
それらを横目で確信したロウはため息を吐くと、ゆるりと右腕を高く掲げる。それと同時に地面に巨大な魔方陣が出現し、そこから無数の鎖が鎌首をもたげて子フェンリルたちに絡みついて動きを止める。
「お座り」
右腕を振り下ろすと、子フェンリルに絡みついた鎖が締まって子フェンリルを地面に縛り付ける。
「フェンリルの子供ね。貴重そうだし貰っておきますか」
鎖に縛られた子フェンリルたちはその巨体をズブズブと地面に展開された魔方陣に沈めていき、そしてこの場から消されてしまった。
「うわっ、すごい抵抗。このままだと抑えきれなさそう。少し削るか？　まあそれは後にして」
ロウは気絶しているイッセーとアーシアをまとめて胸に抱え上げ

ると、地面に小型の魔方陣を出現させる。
「一先ずトンズラさせて貰います。美猴、ヴァーリには後で連絡させてもらいますよ」
ロウはそう言い残すと、魔方陣がパッと光った後に姿を消した。

○　●　○

「う、うぅぅ……ん」
目を開けると、目の前に無造作に伸びた黒髪が簾（すだれ）のように垂れ下がっていた。
「あ、起きた」
「……近い」
間近に見たロウの整った中性的な顔を起き抜けに見せられて、イッセーはなんだか微妙な感じがした。
「三日三晩寝てたぞお前」
上から退きながら言われたロウの言葉に驚く。
「三日！　道理で体が重いわけだ」
「……体が重いのはそれだけじゃないんだけどね」
ロウが小声で何かを呟いたが、俺はそれを聞き取ることができなかった。
「何か言ったか？」
「ま、それは後でいいわ。今はこっちの方が大事でしょう」
ロウは立ち上がって部屋から出ると、程なくして代わりに一人の少女が入ってきた。
「アーシア！」
それは子フェンリルに食べられたはずのアーシアであった。
「よかった……無事だったんだな。でも、どうやって？」
「それが、私にもよくわからなくて。食べられると思ったら何かに足元に引きずり込まれて……」
「ご説明しましょう」
いつの間にかロウが部屋の中に入って来ていた。

「実は、私はロキが現れる数日前からアーシアの影に潜んでいたのです」
「な、何故!?」
何故できるのかというよりも、何故そんな事をしたのかが疑問だった。
「だってお二人さんがイチャイチャしてて入るに入れなかったんだもの。ヒューヒュー」
はやし立てる声が棒読みかつ無表情だった。ていうか覗いてたのかお前。
「で、そのまま出る機会を逸してしまい、戦いが始まってからも出るに出られず居たんですが、やっべどうしよとか思ってたらアーシアちゃんが食われそうになってしまったので慌てて私と入れ替わりで影に引きずり込んだわけです」
「それ、お前が代わりに食われてないか?」
「間一髪転移が間に合いました。まあ、咄嗟だったため座標が適当で戻ってくるのに少し時間がかかりまして。――石の中にいるなんて洒落にならねー」
最後の一言を言ったロウはもの凄く遠くを見ていた。
「そっか」
俺は一つ頷いてから、深々と頭を下げる。
「ありがとう。お前のお陰でアーシアを失わずに済んだ」
「お礼はいいから顔を上げなさい」
ロウの言葉に従い顔を上げると、その顔を全力で殴られた。
「ったく、大切な者はキチッと守れ。今回みたいなことが今度もあるとは限らないんだぞ。アーシアを守れるのは基本的にはお前だけなんだぜ?」
俺がアーシア守るのは単なる気紛れなんだぜと念押しされて、俺は深く反省した。
「さて、今までのことはここまでにして、ここからはこれからの話をしよう」
「これから?」

「うぃ。右腕に力を込めてみて。ああ、少し離れてなさいアーシアちゃん」
アーシアが離れてから、右腕を曲げる感じでグッと力を入れる。
バチッ!!
「ッ!?」
突然右腕に雷が奔り、皮膚の一部が焼け爛(ただ)れる。
「イ、イッセーさん!?」
それを見たアーシアが慌てて回復してくれる。
「やっぱりね。こりゃ重症だ」
その光景を見てロウが面倒なことになったとため息を吐く。
「これ、どういう事だ?」
「お前、覇龍(ジャガーノート・ドライブ)を発動させている最中にミョルニルを握りつぶしただろ?」
うろ覚えだがそんな気がする。
「その時お前はミョルニルに内蔵されていた雷を取り込んだんだよ。ミョルニルに込められてるのは神の雷。いくらあなたが赤龍帝であれ、人間上がりの悪魔じゃ扱うのはほぼ不可能です。だからそれが今あなたの体を傷つけている」
そう言いながら、ロウは振袖の袂(たもと)から赤い梵字の書かれて黒い包帯を取り出した。
「取り敢えず、軽く封印させてもらいますね。それと禁手(バランス・ブレイカー)はしばらく禁止な。この状態でそれを使うと右半身が吹き飛ぶよ」
「そ、それじゃあどうすればいいんだよ?」
これじゃあこの先の生活に苦労するなんてもんじゃない。
「神の雷を制御する方法を学ぶしかないね。その為には――」
再び袂に手を突っ込んだロウは、今度はメモ用紙二枚とサインペンを取り出し、メモ用紙に魔方陣らしきものを描き始めた。フリーハンドで正円とかよく描けるな。
「キュッ、キュッ、キューっと。よし、描けた」
ロウは魔方陣の出来栄えに満足そうに頷くと、その髪二枚を床に置いた。その内の一枚に描かれている文様には何故か見覚えがあった。

「それでは……召喚(サモン)！」
魔方陣が光りだしたのを見て思い出す。これ、悪魔召喚する奴だ。
「今更召喚されるなんて思ってなかったにゃー」
「……同じく」
魔方陣から現れたのは黒白の姉妹猫――黒歌と小猫ちゃんだった。
そういえば黒歌もはぐれ悪魔だっけか。
「お前らも召喚の魔方陣に対しては幾つか対策してるんだろうけどな。私ぐらいになると魔力波長覚えさえすれば個人指定で強制召喚できちゃうわけですよ」
えへんと胸を張るロウだが、これは余り褒められた行為じゃないと思うんだ。
「で、召喚したからには願い事でもあるのかしらん？」
「あるよー」
え、この何でも自分でやるような奴が悪魔に願い事とかあるの？
「イッセーに仙術教えてあげて欲しいのよ。私じゃ教えらんないしー」
仙術？　聞き覚えのない言葉だな。
「一応聞いておくけど、理由は？」
「神様の力を扱えるようになるには、生命力活性化させないとイッセーの方が負けちゃうのよね。だから仙術よ。――まあ、このままだと遠くない未来に死ぬから仙術で周囲の生命力分けて貰って延命しないとという理由もありますが」
「今サラッと聞き逃せないこと言わなかったか!?」
俺の叫びを無視して、ロウは明後日の方向をビシッと差した。
「ユー、京都に行っちゃいなよ！」
「話の流れが全然わかんねぇぇぇぇ！」

「それで、なんで京都なんだよ。あと命についても詳しく」
　ロウが説明をせずにサラッと流したところを改めて聞きなおす。
「京都。それは妖怪の聖地。京都。それは未だ神秘の残る千年魔城。京都。それは日本最大の神秘を誇る一大都市なのだ！　ついでに異空間がある」
「サラッと付け加えたことの方が重要だと思うのは間違ってるか？」
　横で聞いてた黒歌と小猫ちゃんも苦笑いしてるので間違ってないんだろう。
「つまり東京なんていうコンクリートジャングルよりも京都の方が修行に向いているというだけで、京都である必要はないわ。別に富士の樹海でも問題ないけど、そっちの方が好みだったか？」
「ぜひ京都でお願いします」
　こいつのことだ。富士の樹海での修行となったら真っ只中に放り込んで自力で出てこいぐらいの事は余裕で言う。絶対に言う。
「わかれば良し。それじゃあ、後は寿命に関してだね」
　そうだ。俺としてはそっちの方が気になっていた。最近一万年とか有り得ない値になったから余計に。
「まずは『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』について話そうか。あれは全盛期の二天龍の力と同等の力を強引に発揮させるものだよ」
　かつての二天龍と同等……それでロキを倒すことができたのか。
「覇龍（ジャガーノート・ドライブ）は確かに強力だけど、その分代償も大きい。発動者の生命力をごっそり奪って、大抵の場合は何もかも巻き込んで死ぬ。それが覇龍（ジャガーノート・ドライブ）」
　ロウの言うことが本当だとすると、そこには一つの疑問が残る。
「それじゃあ、俺が生きてるのはどうしてなんだ？　それに、ヴァーリも使ってたはずだよな？」
　フェンリルと一緒に転移される前に発動させたアレが覇龍（ジャガーノート・ドライブ）

のはずだ。
（そういえば、あいつはどうなったんだろ。後で黒歌に聞いてみるか）
「お前が生きてるのは悪魔化して寿命が一万年とかふざけた値になってたからだよ。見たところ、ミョルニルを取り込んだ影響も合わせて１％も残ってないみたいだけど」
１％未満……元々が一万だから、１％で１００年か。ようやく人間らしい縮尺だな。
「ヴァーリが使って無事なのは魔力がアホみたいに多いから。それで生命力の代替をしてるみたいだね。――さすが、ルシファーの末裔は恵まれてるね。ケッ」
「不公平さを感じる……」
ロウが毒づいたのと同じように、俺も不満を胸に抱えていた。
「生き物ってのは同じ種族でも全く同じという事はない。平等なんてこの世に何一つないんだよ」
いつものように煙管を吹かすロウの言葉はあっさりと腑に落ちた。
――だって、神様からして不公平なんだから。
「仙術を覚えれば覇龍（ジャガーノート・ドライブ）で削られた生命力も少しは回復できると思うよ。ま、詳しいことは黒歌に聞きなさいな」
黒歌だけなのか。小猫ちゃんはいいのか？
「念のため呼んだだけだから」
そうですか。心読むな。
「ところで、黒歌たちはいいのか？　俺に仙術を教えるのは」
「悪魔として呼ばれちゃったからにはね。仕方ないっしょー」
うわ、嘘くさい。
「そんな律儀な性格してないだろお前」
好き勝手を体現したような存在が何を言ってるんだ。
「あはは、言われちゃったにゃん。見返りが魅力的だっただけだにゃん」
「見返り？」
悪魔の契約には対価が必要とか言われているけどその事だろうか。
「新しい着物を都合してあげるの。今着てるのもかなり草臥（くたび）れてるみ

たいだし」
　ロウも着物を着ているだけあってそういうのには詳しいのだろうか。
「今着てるのもそもそも私が持ってた物だからな」
「へぇ」
　この二人の間には昔何かあったのだろうか。
（多分聞いても二人とも教えてくれないんだろうな）
　特にロウは自分のパーソナリティを一切明かさないからな。
「さて、それじゃあ私はこれで失礼させてもらうぜ」
　話を終えるとロウはスッと立ち上がる。
「お前は京都には来ないのか」
　特に来て欲しいわけではないが、来ないとなるとそれはそれで何かありそうで怖い。
「私が京都に入ると京都中の妖怪に袋叩きにされるんだよね」
（お前、一体京都の妖怪に対して何をしたんだ？）
　少し怖くて聞かない方がいいと思ったので聞かないことにした。

○　●　○

　さて、あの後、ロウの残した魔方陣でアーシアと姉妹猫と共に京都に転移したわけだが……
「どうしていきなり囲まれてんだよ!?　俺たちが京都についてからまだ五分と経ってないぞ!?」
　カラスのような黒い翼を生やした男の人や狐耳の女の人に囲まれるのは想像以上の驚異だ。特に黒い翼にはトラウマが……
「無許可の悪魔が京都に入り込んだらそうなるわね」
「あの野郎……知ってて言わなかったな」
　ロウは親切なようで親切じゃないので親切されたら確実に厄介なことになる。そんなところでバランス取ってもらいたくない。
『貴様ら……何者だ。彼の者とはどんな関係だ』
「彼の者？」

そう聞いた俺の脳裏に浮かび上がったのは黒一色の和装に身を包んだ性別不明年齢不詳住所不定のあいつだった。
（あいつと俺の関係は……なんだ？）
改めて考えると何と表現していいか悩んだ。
間違っても友達と呼べる間柄ではない。
「強いていうなら恩人とか……師弟ってところか？」
そう言った瞬間、俺に向けられる視線がより一層刺々しいものへ変化した。
『貴様！　あの変態の弟子だと!?』
「ちょっと待ったあぁぁぁ!!」
いやいやいやいやいやいや！　確かに俺は昔変態と呼ばれていたけれど！　てかあいつ変態だったの!?
（あっ、あいつが京都に行くと袋叩きに遭うって行ったのはこういうことか！）
「えっと……ちなみにあいつは何したんですかね？」
『知らぬのか？　奴はうちの姫様を誘拐して一日中連れ回した挙句、服装を西洋被れのものにして帰したのだ！　お陰で金がかかって叶わん！』
「ええと……お疲れ様です？」
正直なんて声をかけていいのかわからない。というかあいつは何してるんだ。
『彼の者の弟子とあっては、見逃すわけにはいかぬ！』
「いや、そういう事に関しては一切教わっていませんから！」
あいつのせいで袋叩きに遭うなんてゴメンだ。
『ならば何用でこの京を訪れた？』
「えっと……修行です」
付け加えるなら仙術のと付くが、そこまで説明する義理はないだろう。
『ふむ。確かに異形のものが修行のために京に訪れるのは決して珍しくない。もっとも西洋の悪魔が訪れるのは希であるがな』
「色々事情がありまして……」

死んで悪魔になって主から逃げて不死鳥やら神とかと戦ったり……ホント苦労してるな俺。
『ふむ、そういうことなら貴様らに手出ししないのもやぶさかではない』
「本当ですか!?」
なんだろう。初めて言葉で戦闘を回避できた気がする。
『いや待て』
（え、やっぱ駄目なの？）
一安心していたら、今までとは別の人が待ったをかけた。
『後ろの黒いのと白いの。貴様らに見覚えが……』
『思い出したぞ。確か猫？でありながら悪魔に身を落とした姉妹だ』
この場がざわめき出す。黒歌たちって京都出身だったのか。
「あー……これだから京都には来たくなかったのよ」
「え、そんな素振りしてたかお前？」
だとするとロウは一体何を積んだのだろう。金か？　金なのか？
「白音のお菓子一年分」
……いつもお菓子食べてたもんね、小猫ちゃん。
「……他にも色々あるけど」
「もういいです」
全部聞いてたらキリがない気がしてきた。
（それよりこの場の雰囲気をどうしよう）
敵意まではいかなくとも嫌悪の視線がこちらに向けられている。
何とか取り繕うことは可能だろうか。
「えっと……この二人は俺の先生役でして」
と説得を始めようとしたところで、突然新たな黒い翼を生やした男が飛び込んできた。
「た、大変です!!」
男は慌てた様子で着地を失敗しながら立ち上がる手間も惜しんで大声を張り上げる。
「八坂さまが……八坂さまが誘拐されました！」
『なんだと!?』

今までの比じゃないぐらいの動揺が起こった。もしや八坂さんというのはもしやロウが手を出した相手なのだろうか。
『おい、貴様ら』
「は、はい。なんでしょうか？」
あれ、いつの間にかこっちに向けられる視線がより一層刺々しくなってるぞ？
『今聞いた通りだ。たった今、京都を揺るがす重大な事件が起きている。そんな中、不審な人物を野放しにしておくわけにはいかない。わかるな？』
「言っておきますけど、俺たちはそれには関係ないですよ！」
犯人の仲間にされては堪らないので一応の反論をする。
『関係あろうとなかろうと、この状況では野放しには出来ぬ。今京の妖怪たちは混乱している。そんな中余所者が居ればどうなるか……ついて来てくれるな？』
「はい喜んで！」
面倒事は回避するに限る。
「……居酒屋の店員ですか」

○　●　○

妖怪の人――狐耳の女性に連れられてやってきたのは、京都をそのまま再現した裏京都という異世界だった。
「事が一段落するまではここで大人しくしていただけますかな。この中でなら修行をされても結構です。物を壊されると困りますが」
「は、はい……」
最近攻撃の威力が高くなって、下手に攻撃できなくなっているので釘を刺された気分だ。
「おい、そこの！」
可愛らしい声に呼び止められて振り返ってみると、そこにはたくさんのフリルで飾られた――俗にロリータ風とか言われる――巫女装束を着た狐耳の女の子がいた。

「もしや、母上を攫ったのはそ奴らか!?」
母上……ってことは、この子は誘拐された八坂さんのお子さんなのだろうか。
「い、いえ！　九重（くのう）さま、この者たちは偶然京に来られたので混乱を避けるためにここへお連れしたのです」
「そうなのか……客人、疑って申し訳なかった」
九重と呼ばれた女の子はしょんぼりした様子で頭を下げた。
「別に気にしてないから謝らなくてもいいよ。お母さん、早く見つかるといいね」
本音を言うと九重ちゃんを見て俺も八坂さんを探すのを手伝いたいと思ったのだが、土地勘のない俺じゃ役に立たないだろう。
今はもしもの事態が起こった時のために、雷を制御することに集中したいと思う。
「それでは客人。緊急事態ゆえに大した持て成しはできないが、せめてこの京を堪能していってくれ」
お母さんを誘拐されて気が気でないだろうに……気丈な子だ。
「ううむ……この際彼の者に頼むとするか」
最後にボソッと呟いた一言は聞かなかったことにする。ギリギリまでそんな現実からは目を背けたいのである。

○　●　○

「んーじゃ、早速修行を始めますかね」
案内役の狐耳の女性に連れられた建物の中に入って腰を落ち着けると、黒歌が早速そう切り出した。
「よろしく頼む。それで早速聞きたいんだが……」
修行に入る前に、これだけは聞いておかなければなるまい。
「なんにゃ？」
「仙術って具体的にはどんななんだ？」
ロウの奴は適当にしか教えてくれなかったのである。

●　●　●

「ふんふんふ～ん♪」

薄暗い空間に、軽快な鼻歌が響く。
「腕をもげ、足をそげ、腹をえぐって腸(はらわた)を引きずり出せ♪」
しかし、その鼻歌に付いている歌詞は些か以上に腥(なまぐさ)すぎた。
「君の所に行きたくて、君の居場所が遠くって、邪魔なものが多すぎるから全部まとめて消してあげるの♪」
いや、腥いのは歌詞だけではない。今ロウがいる空間には実際に血の匂いが漂っていた。
「君の手を握りたい、君の足に口づけたい、君の体を抱きしめたい、君の髪を撫で回したい、君の心に触れてみたい♪」
狂(クル)リ狂(クル)リと回る黒い人影は、歌いながら他の人影を討ち倒して行く。
「君のためなら、私のために、この世の全てを呪っても、この世の全てに逆らってでも、想いの果てに心を紡いで皮肉な花を咲かせましょう♪」
歌が一段落した後、血臭漂う空間にピリリという電子音が響いた。
「はい、もしもしい？　あ、九重ちゃん？　何、どうしたの？」
『実はお主に頼みたいことがあるじゃ』
「うんいいよー。可愛い子の頼みならなんだって引き受けちゃう。丁度京都に用事もあったしな。もっとも、お礼はちゃんといただくが、問題はないな？」
『わかっておる。じゃが、前々から言っておるが、お主は間違えておる』
九重の言葉に首を傾げるロウ。果たして自分は何を間違えているのだろうと。
『私の名は九重(ここのえ)ではなく九重(くのう)じゃ。なぜ言って教えたはずなのに間違えるのじゃ』
「……ああ、それはわざとよ。愛称だよ、マスコットネーム」
言われてから言い返すまでの間が長かったため、それはとても言い訳臭かった。

「……あれ？」
　俺は黒歌の指示によって瞑想をしていたはずなのだが、何故か無数のテーブルと椅子のある白い空間にいた。
「あのー……すいません、ここってどこっすかね？」
「……」
　座っている中で一番近くにいた人声をかけてみたけど、虚ろな表情を浮かべるばかりで返事はなかった。
『その者たちは歴代の赤龍帝。その残留思念だ』
「ドライグ」
　ドライグの声は普段とは違って上から聞こえてきた。
「ドライグ、ここは一体どこなんだ？」
『ここは赤龍帝の籠手（ブースト・ギア）の深奥だ。この前の覇龍（ジャガーノート・ドライブ）の影響で開放されたのだろう』
「瞑想したらここについちゃったけど、これ意味あるのかな」
『心を落ち着けるという意味では駄目だろうな』
　ここにいる人たちだと落ち着いているというよりは死んでる感じだし。
『それにここに長居するのはよくないだろう。意識を外側に向けろ。それで出られる』
「わかった」
　ドライグに言われたように意識を外側に向けると、白い空間が徐々に掠れていき――
○　●　○
「という事があったんだ」
「そこら辺のこともロウから聞いてるわ。だから試しに瞑想してもらったんだけど」
　何故ロウはそれを俺に直接言わないんだろうか。
「君の当面の目標はそいつらをなんとかすることね。勝手に覇龍（ジャガーノート・ドライブ）発動させられても困るでしょ？」

その通りだ。またあれを発動したら今度こそ死ぬとロウからお墨付きをもらっている。
「それで、なんとかって具体的にはどういう？」
「さあ？　前例が無いからなんとも言えないのよね。ヴァーリなら知ってるかもしれないけど？」
あの戦闘狂に頼みごとをしたら見返りに戦闘を要求されること請け合いだ。
（いや、強くなるんだからノリノリで協力してくれるか？）
あ、強くなるかどうかの保証もないんだっけ。
「まあ暴走はしなくなると思うわ」
なら十分だ。だって暴走すると死ぬから。
（でも、どうしたものだろうか……）
さっき話しかけても何の反応もしてくれなかったし……
『残留思念だからな。強い想い……怒りや憎しみが神器（セイクリッド・ギア）に染み付いているが、生前の記憶はほとんど残っていないのだろうな……』
呟くドライグの声はどこか寂しそうだった。
（そうだよな。ドライグからすると、昔の相棒だったんだもんな……）
なら、せめて意思疎通ができるように努力を続けよう。

●　●　●

「やって来ました、古都京都」
『『死ねぃ!!』』
京都の敷地内に足を踏み入れた瞬間、烏天狗たちに囲まれ、四方八方から錫杖を突き出される。
「きゃんっ、モテる男は辛いわねー」
などと嘯（うそぶ）いてはみたものの、果たして自分の性別が男女どちらかであったかは自分でも覚えてないのだが。
「今日は私は九重ちゃんに呼ばれて来たんだけど、聞いてないか？」
突き出された錫杖の間をすり抜けると、烏天狗さんたちに向かってここに来た経緯を説明した。
『聞いている！　だが、それとこれとは話が別だ！』
『それと九重（ここのえ）ではなく九重（くのう）さまだ！』

「それはわかってるよー。九重(くのう)より九重(ここのえ)の方が言い易いとかその程度の理由だから許してちょ」
まあ漢字教えてもらった時に誤読してからそのまんま定着してしまったというのがくだらない真相なんだけど。
「それはいいから九重ちゃん呼んでよ。久しぶりにあの尻尾もふもふしたいな」
狐の尻尾はモフるものだと、良妻狐持ちの月の住人も言っていた。
『『『させるかぁぁぁ!!』』』
「ひゃぅんっ」
繰り出される攻撃が激化した。
「それにしても、九重ちゃんかぁ。可愛くなってんだろうな。昔会った時はまだまだ子供だったけど、今だとどうなってるのかね」
そんなに年月は経っていないだろうから、まだまだ子供なのかね。まあ子供が一番可愛いけど。
「また撫で撫でしたいなぁ。あのサラサラした金髪、結構好みよ私」
『『『くたばれ変態めぇぇぇッ!!』』』
変態であることは否定しないけど、あんまり変態変態言わないでもらいたい。羽化したくなるだろうが。
「あらら、殺意が急上昇しちゃって。12歳超えるまでは手を出しませんよ。――私の好みはそれぐらいですしね」
『『『くぁwせdrfgtyふじこlp●×▲■#$%&!?』』』
遂に言語破綻してしまった。煽るつもりはなかったんだけどね。
「この分だと案内は期待できそうにないし、勝手に会いに行きますか」
『『『行かせるかぁぁぁッ!!』』』
「遅い遅い、鬼さんこちら、手の鳴る方へー――キュン♪」
九重ちゃんとどこかで待ち合わせしないとね。裏京都は流石に近寄りたくないものね。

○　●　○

「うーむ……」

歴代赤龍帝の説得は難航していた。だって何を言っても反応してくれないんだもん。
あ、一度アーシアとの話を一番年が近いらしい赤龍帝にしたらリア充爆発しろって殴られた。
それ以降、そいつはアーシアとの話をする度に舌打ちしてくれるようになった。それ以外反応してくれないのは悲しい。
「こうなれば、女性の赤龍帝に対してはセクハラを……」
『流石にそれはやめておけ』
最終手段に出ようとしたところ、ドライグから待ったがかかった。
『あまり恨みを買い過ぎると覇龍（ジャガーノート・ドライブ）の発動に拍車がかかるぞ』
「マジか」
俺のしてきた事は逆効果だったのか。
『まあ、反応してくれるだけマシなのかもしれんがな』
「気長にやるしか無いってことか」
『急ぐとろくな事にならんのは歴代の赤龍帝の末路が証明している』
うわぁ、言葉に重みが。
『そろそろ切り上げた方がいい。長く続けると悪影響がでるぞ』
「お、そうか」
ドライグの忠告に従い意識を外に向けると、姉妹猫が仲良くスキンシップしていた。
（百合（リリィ）い……）
「ちっ、もう戻ってきたのね」
「舌打ちされた!?」
黒歌の奴、誰のお陰で白音ちゃん（こう呼ばれるように言われた）と復縁できたと思ってるんだ。
「ロウのおかげね」
ですよねー。
「ところで俺の心を普通に読むのはやめて欲しいんだが」
「それで、首尾はどうよ」
俺の要望はあっさり無視（スルー）された。
「全然。一人が嫉妬が駆られるようになっただけだ」

「微妙ね……」
俺もそう思う。
黒歌と揃って微妙な顔をしていると、パンッという音と共に部屋のふすまが開いた。
「おお、客人。今暇かの？」
ふすまを開けたのは巫女装束（ただしフリルやレースが過剰に盛られている）を来た九重だった。
あのロリータ風な和服がロウの仕業なんだと思うと、京都の妖怪さんたちの苦労が偲ばれる。だってあの服とっても洗濯とか大変そうだもの。しかもかなり手間暇かかってそうなデザインだし。そもそも巫女装束があんなのでいいのか。
（いや、駄目だからロウが殺されかかってるんだろうな）
まあ、自業自得なので同情はしない。
「九重……さま。暇ですけど、何か用でしょうか？」
「さまも敬語も要らぬ。九重で良い」
一応お姫様ということなので敬語を使ったのだが、本人から要らないと言われてしまった。
「それでな、少し用事ができたので外出したいのじゃが、一人で行くと心配をかけてしまうので、お主らについて来てもらいたいのだ」
「はあ、別にいいけど……」
九重の申し出を受けるのは特に問題はなかったが、それを俺たちに頼むというのは少し違和感があった。
（頼める人はいくらでもいるだろうに、なんで俺たちに頼むんだ？）
そこまで考えたところで、ある一つの考えが脳裏を過ぎった。
「あの、もしかしてお母さんを――八坂さんを助けに行く気なのか？」
間違いなくそれをお付きのヒトに言ったら止められるだろう。きっとロウのせいだと思うけど、ここの人たち九重に対してかなり過保護気味だし。
だとしたら、俺はそれを止めなくてはならないだろう。こんな小さい子に危険があるかもしれないことに巻き込ませるわけにはいかないだろう。

「む……確かにそれもあるがな。私が探すよりも烏天狗たちに任せた方が確実じゃ。それに、私の都合に無関係なお主らを巻き込むような事はせん。もう巻き込む当てはあるしの」
（……ものすごいいやなよかんがする）
脳裏で黒いアイツが高笑いを上げている気がする。俺たちだけ送りつけて結局来るんだとしたら最初から来いって思う。
（もし本当に来てたら一発殴っていいだろうか）
京都に立ち入ってすぐに妖怪たちに囲まれて緊張した恨みで。
「ついでに観光案内もできるが……どうじゃ？」
観光か……そういえば今年の修学旅行って京都だっけか。
（あれ、確か今時は修学旅行シーズンだった気がするが……）
なんだか更に嫌な予感が倍プッシュされたんだが、どうしたもんだろうか。しかもこういう当たって欲しくない時に限って、俺の予感は当たるのだ。
「黒歌、どうする？」
俺一人だけで決めるわけにもいかないので、黒歌にも意見を聞くことにした。
「いいんじゃない？　ここに籠ってばっかりじゃいつまで経っても進歩しなさそうだし」
進歩がなくて悪うございましたね。生命力とかよくわからないものを感じ取れるか。
「む……何か邪魔をしてしまっただろうか？」
俺と黒歌の間に漂った微妙な雰囲気を感じた九重がしょんぼりした顔をしたので、慌てて訂正する。
「いや、そんなことはないから。それで、用事って何なんだ？」
お母さんを探しに行くのではないとすると、こんな非常時に他に何かしなくてはならないことがあるのだろうか。
九重は賢そうな子なので、まさか友達と遊ぶとかどうでもいい理由ではないだろう。
「おお、そうじゃった。ヒト？に会う約束をしておるのだ」
なんで今ヒトに疑問符が付いたのだろうか。イントネーション的

には人間を指しているわけじゃないだろうに、そこで更に疑問符を付けるのか。
　詳しく問い詰めると認めたくない事実が確定しそうなので聞かないでおこう。
「……それ、先延ばしにしかなりませんよね」
　おいおい、生八つ橋を食べている白音ちゃんまで……そんなに俺の考えていることは読み取り易いのだろうか。
「そこのところ、アーシアはどう思う？」
「素直でいいと思いますよ。イッセーさんらしくて素敵です」
　ああ、アーシアの笑顔だけが俺の癒しだ。でも、君も俺が考えてることはわかるのね。
「わかった、付き合うよ。黒歌はどうするんだ？」
　なんだかすっかり馴染んでいるが、黒歌はこう見えてテロリスト集団の一員であるのだ。
「んー……仙術で気配を誤魔化しながらついて行くことにするにゃん。ここでじっとしてるのにももう飽きたしねー」
　まあ、気まぐれな野良猫が何日も部屋に閉じ込められてたら不満の一つも出るわな。むしろ俺の修行の指導って目的があったとはいえ、今までよく保った方だと思う。
「なーんか馬鹿にされてる気分ね。こう見てもその気になれば君をビックリさせるぐらいの礼儀作法でも見せてあげようかしらん？」
「結構だ」
　たとえできるとしても、こいつのそんな姿はむず痒くて見てられないだろう。
「話はまとまったかの？　ならば早く出たいのじゃが、よいかの？」
「おう」
　さて、本当は修行に集中したいけど、この子を放ってはおけないし……
（何はともあれ、誘拐犯は一発ぶん殴ることにしよう）
　こんな小さな子を泣かす奴だ。何されても文句は言わせない。
「それで、どこで待ち合わせしてるんだ？」

「む、そう言えば待ち合わせ場所を決めておらなんだな」
「え」
　それでどうやって待ち合わせるつもりなんだろうか。偶然で遭遇できるほど京都は狭くないぞ。
「きっと大丈夫じゃ。京都を歩いておれば向こうから見つけてくれるじゃろ。初めて会った時もそうであったしな」
　そう言って歩き出した九重を追いかけようと立ち上がったところで、黒歌の耳元（人間でいう方）に魔方陣が出現した。
「ん、何かにゃルフェイ？　――へぇ」
　どうやらルフェイからしい通信を聞いた黒歌は実に悪そうににんまりと笑った。
「どうかしましたか、姉さま」
「ちょっとあっちで色々あったらしくてね。――それに、九尾の御大将を攫った犯人も大体検討がついたにゃ」
　黒歌が小声で呟いたことは、とても重要なことだった。
「それ、一体誰なんだよ？　早く教えた方がいいんじゃ……」
　俺がそう言うと、黒歌は気まずそうに頬を掻いた。
「あー……それがね。犯人、『禍の団（カオス・ブリゲード）』なのよ」
　禍の団（カオス・ブリゲード）。テロリストの集まり。ヴァーリたちも所属している。
……そりゃ言いにくいわ。
「それで今のはヴァーリから監視者を送った仕返しに何かやってたら邪魔してやれって。良かったわね、赤龍帝ちん。これで大手を振って誘拐されたあの子のお母さんを取り替えせるわよ」
「いや、俺にそんなつもりは――」
「ない、なんて言わせないにゃ。つーかもうみんなわかってるからそれ」
　マジですか。
　思わずアーシアと白音ちゃんを見ると、彼女たちもコクコクと頷いていた。
「でも、今の俺は……」
　右腕に巻かれた黒い包帯を見る。今の俺はこれ無しじゃまともに

生活することもできないのだ。そんな俺が何をできるって言うんだ。
「何ができるか、じゃなくて。何をしたいか、ですよ」
「アーシア？」
「イッセーさん、今まで巻き込まれてばっかりで自分の意思で何かしようとしたこと、あんまりなかったですよね？」
「ああうん。確かにそうだね」
巻き込まれただけなのに、一体どれだけの戦いに巻き込まれたことだろう。よし、今度現状の原因になったヴァーリを殴ろう。
「ですからイッセーさん。たまには自分のわがままを通してもいいと思いますよ。日頃の鬱憤を晴らすためにも」
「うわ、超やる気出た」
よし、禁手（バランス・ブレイカー）を使わない範囲で全力で誘拐犯を殴り飛ばそう。
（でもそれ、完全に八つ当たりよね）
（……姉さま、それは言わぬが花というやつです）
「おい、お主ら。ついて来ぬのならそう言ってくれぬかの！」
「あ、すいません今行きます！」
（……また店員みたいです）

Bridge across moon

俺たちは裏京都を出た後、九重の先導で京都の案内されていた。
九重は普通に出歩くと必ず見つかるということで、普通の子供服に帽子という、極一般的な格好をしていた。
それ以外にも黒歌が誤魔化すために色々しているというから、まず見つかるということはないだろう。
そのまま俺たちは金閣寺や銀閣寺、清水寺などの主だった観光名所を巡った。
「ううむ……そろそろ見つけてくれると思うのじゃが」
いくら何でもあちら任せに過ぎる方法なのだが、あちらさんもそれを了承したのだ。大体のルートは教えてるらしいけど。
「あそこに流れておる川が桂川。そこに架かっておる橋が渡月橋じゃ」
九重が指差したのは大きな木造の橋。そこから見える景色は紅葉がとても綺麗だ。
「あの橋の向こうにある湯豆腐屋は絶品なのじゃ。そこで昼餉にせんか？」
「いいな。アーシアも歩き通しで少し疲れてるし、休憩にしよう」
アーシアは基本的に運動をしないので体力がないのだ。
「す、すいませんイッセーさん」
「あ、別に謝らなくても……」
渡月橋に差し掛かったところでアーシアが謝ってきたので、気にしなくていいと言おうと思って振り返ろうとした時だった。
「ちなみに、この渡月橋には渡っている最中に振り向くと今まで授かった知恵を全て失ってしまうと言われておる」
「駄目ですイッセーさん」
九重の解説を聞いたアーシアに強引に前を向かされた。アーシアはこういう迷信というか、言い伝えを結構間に受ける。
そんなアーシアを微笑ましく思いながら歩いていくと、前から見知った顔がやって来た。

「――ッ!!」
俺も一年とちょっとの間袖を通した駒王学園の制服を着ている坊主頭と眼鏡の男子の二人組。
「松田、元浜」
「あ、バカ……!」
かつて親友であった二人の名前を呼んでしまい、それを黒歌に咎められる。
(そういえば、黒歌の術はこっちから話しかけたりすると効力が落ちるって話してたな)
しまったと思うがもう手遅れであり、松田と元浜の視線は俺に真っ直ぐ向けられていた。
「ん?　誰だお前」
「なんで俺たちの名前を?」
その反応を見て俺は一瞬強いショックを受け、そのすぐ後に納得した。
(そっか。約束は守ってもらえたんだな)
「ごめんな。友人に似てたから、つい」
「あ、そうなのか」
「名前まで同じなのか?」
「世の中には同じ顔の人が三人いるっていうから、それなのかもな」
久しぶりの友人との会話は、とてもとても、懐かしい気分だった。
「足を止めさせて悪かった。修学旅行、楽しんでくれよ」
そう言って、おそらく二度と会うことは無いであろう彼らとすれ違う。
(あばよ、悪友……)
だが、思いに耽る時間もなく、俺は更なる衝撃に襲われた。
「ッ!?」
後ろにいたので気づかなかったが、元浜たちの後ろにいる女子たちは、なんとグレモリー眷属のゼノヴィア、それに幼馴染だという転生天使のイリナだった。
向こうは俺を見て警戒したように身構え、俺もアーシアを庇うよう

に一歩前に出る。
「イッセーさん……」
「大丈夫だ、アーシア」
俺を心配そうに見上げるアーシアの頭を撫で返す。
その時、俺の全身を生暖かい雰囲気が包んだ。
○　●　○
「な、なんだ!?」
気づいたら、俺たちの周りには誰もいなくなっていた。
「お前たちの仕業か!?」
ゼノヴィアはカバンから短剣を取り出して構える。
「だったら俺が驚くか！」
こちらも赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）を出して身構える。
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）！』
「ゼノヴィア！」
更にその後ろからはイケメンの木場が駆け寄って来ており、その上からはアザゼルが飛んでいた。
「う、更に厄介なことに……」
ゼノヴィアとイリナから視線を外さずに後退（あとずさ）る。
少し離れた場所から彼らの話を盗み聞きしていると、ここは辺り一体をそのままそっくり模した空間で、俺たちはそこに転移させられたことがわかった。
「それにしても、本当にそっくりそのままだな……違いなんて足元に霧が立ち込めてるぐらいだ」
「そういえば、母上の護衛の者が死に際に残しておった。気づいた時には霧に包まれておった、と」
俺の言葉を聞いた九重が青い顔をして呟く。
その時、渡月橋の向こう側から複数の気配が現れた。
学生服らしき服を着た集団。その先頭に立っている、学生服の上に漢服を羽織り、槍を持っている男が俺たちに話しかけてきた。
「お初にお目にかかる。アザゼル総督。それに赤龍帝。俺は曹操というものだ。一応、英雄派を率いる立場にある」

「ご丁寧にどうも。九重のお母さん返して家に帰れ」
人に迷惑かける奴はとっとと反省しろ。
「おやおや、釣れないな。初対面だというのに嫌われたものだ」
曹操は手にした槍で肩を叩く。その槍は見るからに危険な感じがした。
「あの槍は『黄昏の聖槍(トゥルー・ロンギヌス)』。神滅具(ロンギヌス)の代名詞にもなった最強の神滅具(ロンギヌス)だ。当代の持ち主がテロリストとは皮肉だな」
なんか凄い槍のようだ。解説ありがとうございますアザゼルさん。
「あれが聖槍ですか……」
アーシアはその槍をしばらくジッと見ていたが、すぐに視線を外した。
「おい貴様、母上を攫ったのは貴様らだな？　何が目的だ！」
「あなたのお母上には我らの実験に協力してもらうべくお付き合い願ったのですよ」
誘拐犯の身勝手な言い分って聞くだけでムカつくよね。
グレモリー眷属も戦闘態勢を取る中、曹操は近くにいた小さな男の子に話しかけた。
「レオナルド、悪魔用のアンチモンスターを頼む」
小さな男の子の影が広がり、それが渡月橋の横幅一杯まで広がると、そこから二足歩行の黒い人型の怪物が現れた。
しかもその数は十や二十じゃない。百に近い数の人型の怪物が整列した。
「え、何あれ」
数が多い。多すぎる。しかもまだまだ余裕がありそうなんですけど。
「これは悪魔用のアンチモンスターだ。君たち相手には丁度いい相手だろう」
曹操が手を挙げて下ろすと、怪物の口から光が放たれた。
チュドーン！
光が命中した建物が跡形もなく吹き飛んだ。この威力だと光関係なしに当たったら死ぬだろ。

「――行け」
『ゴガァァァァ!!』
曹操が槍の穂先をこちらに向けると、アンチモンスターたちが大挙して押し寄せてきた。
「黒歌、白音ちゃん。アーシアと九重を守ってやってくれ」
「任されたにゃ」
「……ご武運を」
「イッセーさん。私、全力で回復します」
助かるぜ、アーシア。
「よーイケメン。思うところはあるだろうが、あいつらをどうこうするまでは手出し無用で頼むぜ？」
「危険度としてはあっちの方が上だからね。彼らが片付くまでは君のことは見逃しておくよ。けど、事が済んだ後は――」
木場の視線は俺についていた白音ちゃんに向いていた。
（それは俺は関係ないんで勘弁してもらいたい）
「よし、かかってこいや怪物どもッ！」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（エクスプロージョン）!!』
気合の入った声を上げると共に、俺たちは倍化を停止させて怪物たちを迎え撃つ。
『ふっはっは、空気を読まずに邪魔させてもらいますよー』
「へっ？」
だが、俺は思わず空から降って来た声に動きを止めた。それは俺だけでなく、この場にいる全員がそうだった。
何故なら、頭上に空を覆い尽くすほどの黒い魔方陣が展開されていたからだ。
『キュッとして――』
そしてその魔方陣が一気に小さくなり――
『ドカーン!!』
そこから黒い何かが俺たちと英雄派の丁度真ん中に落ちた。
「ハァーハッハッハ！　天にも地にも呼ばれてないが、幼女に呼ばれて即、推☆参！　漆黒系意味不明正体不詳キャラ！　通称ロウことこ

の私、ここに降臨！」
　起き上がって見ると、普段と違って花魁（おいらん）風の格好をしたロウが仁王立ちで高笑いしていた。
「やかましい！」
（いきなり現れてなんだこいつ）
「君は、各地で俺たちの邪魔をしている者かな？」
　曹操がロウを注意深く見据えながら尋ねると、ロウは小首を傾げた。
「そうかも？」
「なぜ疑問形……」
「なぜなら自覚がないから！」
　こいつ最悪だな。
「私にやられたというならそれは相手の方に問題があるわ。だって私があなたたち『禍の団（カオス・ブリゲード）』は全滅させるって決めてるから！」
「サラッとおっかないことを言ったぞこいつ」
　テロリスト相手なのが唯一の救いである。
（あれ？　それだとヴァーリたちも対象になるんじゃ……）
「なおヴァーリチームは除く。だってあいつらただの戦闘狂だし！」
　それはそれで問題だと思うがな！
「というわけで――」
　ロウは背中から木刀を取り出した。
（お前、実は京都観光満喫していなかったか？）
　そうでなかったらこいつは木刀と花魁の衣装を持参して来たことになる。そんなの嫌だ。
「くたばれ♥」
　並んだ怪物たちに向かって横薙ぎに一閃する。そこから伸びた黒いオーラが怪物をまとめて断ち切った。
「嘘ぉ！」
　まさか一撃で全滅させるのかよ！
「どんどん逝け」
　怪物を全滅させたロウは連続で木刀を英雄派に向かって何度も振

る。
その度黒いオーラが木刀から飛び出すが、簡単に避けられていた。
「このっ……大人しく倒されろっ」
上段に掲げた木刀に黒いオーラが収束し、振り下ろすと同時にそれらが無数に別れて英雄派の面々に襲いかかる。
奴らはそれを回避しようとするが、なんと驚くことにロウが放ったオーラはそれを追いかけるように動いた。
(追尾性能あり!?)
ロウの技巧に感心しながら攻撃の行方を目で追う。
「ふぇッ?」
ロウが無駄に可愛らしく驚いた。それは、ロウの攻撃が霧のようなものに防がれたからだ。
「ディ、絶霧(ディメンション・ロスト)!? 神滅具(ロンギヌス)が二つも三つもまとめて来るな!」
まあ世界で13種しかない神滅具(ロンギヌス)が三つも集まれば厄介だよな。その内一つを所有している俺が言うことじゃないが。
「あ、違う違う。三つの神滅具(ロンギヌス)っていうのは曹操の持ってる黄昏の聖槍(トゥルー・ロンギヌス)、さっきの絶霧(ディメンション・ロスト)、そこのガキの魔獣創造(アナイアレイション・メーカー)の三つよ」
あの魔獣を出したのも神滅具(ロンギヌス)なのか……。
「しかし……どうするか。遠距離攻撃は届かない。なら近接攻撃しかないけど……」
どう見ても動きにくいよねその格好。
「ぐぬぬ……こうなったらあいつらの所まで下がって巻き込むか」
「お前ホント外道だよな」
(そこは嘘でも共闘とか言えよ)
しかし、ロウは花魁風の格好をしていたため、動きが相当遅かった。
さらばロウ、貴様のことは忘れない。
「隙有りだよ!」
そのロウの後ろから白髪の男が剣を持って襲いかかった。
「ふぬっ!」
振り下ろされた剣を振り返りながら木刀で受け止めるロウ。しか

し、明らかに強度が違うため木刀はミシミシと嫌な音を立て始めた。
「ああっ、1，000円もしたのに」
情けない悲鳴を上げるロウであったが、木刀が折れた瞬間に飛び退いた。
「ま、即席の武器じゃこの程度か。なら、今度はこれで！」
ロウは腕を降って袖口から扇を取り出すと、一閃して無数の風の刃を飛ばした。
「っと！」
白髪の剣士は手に持った剣でロウの攻撃を防ぐ。
「ふっ！」
「なんのっ」
ロウは再び振るわれた剣を扇で受け流すと、そのまま右腕を取って体を地面に押さえつけた。
「合気鉄扇術……!?」
「ま、昔取った杵柄って奴だけどね。手習い程度だけど、普通の人間相手には結構有効よ？」
あんな動きにくそうな格好でよく技を極められるものだ。いや、アイツは普段から結構動きにくい格好をしていた。
「そう、普通の人間だったらこれで決まりだろう。だが、僕たちは生憎と『普通の人間』じゃない！」
そう叫んだ白髪の剣士の背中から銀色の鱗のようなものに包まれた腕が生えた。
「のわぁぁぁッ!?」
目の前に銀色の腕が生えてきたので、ロウは身を仰け反りながら白髪の剣士から慌てて離れた。ちなみにその際に腕を脱臼させていた。
「このっ、もっと動き易い格好するんだった」
完全に自業自得なのでかける言葉がない。
「く、やるね……」
外れた肩を継ぎながら、白髪の男は立ち上がって三本の腕それぞれに剣を握る。
「その腕……ドラゴンのものか。『龍（トウワイス・クリティカル）の手』だな？」

「そう。僕のこの腕は龍（トウワイス・クリティカル）の手。その亜種さ」
あれの背中から生えた腕は神器（セイクリッド・ギア）なのか。色んなものがあるんだな。
「さあ、ここからが本番だ」
「えー、ガチな魔剣三刀流の相手だなんてしたくないんだけど……」
三本の魔剣に対して、ロウは扇に加えて和傘を手に持った。
「斬り合いになんぞ付き合えるか」
ロウは傘を前に突き出すと、先端の石突からオーラが飛び出す。
「ふんッ」
白髪の剣士はそれを右手に持った剣で弾くと、左の剣と背中の剣を使ってロウを責め立てる。
「よっ、ほっ、はっ」
和傘と扇で三本の剣をいなすロウではあるが、激しい攻めに押され気味であり、慣れてなさそうな格好だということも合わせてかなりよろめいていた。
「わわっ」
一歩下がろうとしたところで裾を踏んだロウが転んでしまいそうになった。
「隙有り！」
そこに白髪の剣士がロウに目掛けて右手に持った一際禍々しいオーラを放つ剣が振り下ろされた。
「――まだまだだね」
ロウは受身を取りながら両足を白髪の剣士に向けて足を上げる。
「ぬっ!?」
その足の間から、黒い刃が無数に飛び出した。
「スカートの中には秘密が一杯なのよ？　――まあこれスカートじゃないけど」
和服の裾を持ち上げながらおどけるロウ。あいつなんで戦闘中に萌え動作を挟めるんだろう……心情的に。
「よっと。危ない危ない。後で衣装の調節しておかなきゃ」
逆立ちを間に入れながら立ち上がると、裾を持ち上げながらやれや

れと呟いた。
「これ以上は分が悪いかなー。そもそも私雑魚相手には無双できるけど、強者相手には弱いんだから」
ロウは取り出した煙管を咥えると、煙を大量に吐き出した。
「後は彼らにでも任せるとするかな」
そして、その煙を突き抜けて俺と木場にゼノヴィア、イリナが飛び出した。
ロウは煙でこちらからは煙に紛れてやってしまえと指示してきたのだ。
正直ロウの言う通りにするのは誰もが嫌だったが、好機であったため、全員一斉に駆け出した。
木場が神速の勢いで白髪の剣士に斬りかかる。だが、その神速の一閃は白髪の剣士の簡単な動きだけで回避した。
「ふっ！」
「やっ！」
そこにゼノヴィアとイリナも加わるが、白髪の剣士は単身で三人と拮抗していた。
俺も援護したいところだったが、俺が割り込めそうな雰囲気ではなかった。
「イッセー、こっちに譲渡なさい。まとめて始末してくれるわ……！」
「お、おう……」
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ（トランスファー）！』
少し身の毛もよだつ発言をするロウへと、恐る恐る倍化した力を譲渡をする。
「すぅー……はぁぁぁぁぁ――」
ロウが吐き出した大量の紫煙は、八つの首と尾を持つ蛇の姿を取った。
「さて、少々キャパシティギリギリだが……襲えッ！」
八つの蛇の頭が鎌首をもたげ、ロウが煙管を振り下ろす動作に合わせて英雄派の面々に襲いかかった。
「はっ！」

そんな中、曹操が手にした槍を一閃させる。その槍の先端は開いており、そこから金色のオーラが出て刃になっていた。
その刃は八つある内の蛇の首の一つが切り飛ばされた。
「甘いわ。煙なんだから斬られた程度でどうにかなるとでも？」
切り落とされた首が再生する。
「なら、操っている君を倒せばいいだけだ」
「おっと、お前の相手は俺がするぜ」
ロウに攻撃を仕掛けようとした曹操を、金色の鎧を纏ったアザゼルが攻撃する。二人はそのまま下流の方へと向かっていった。
（嵐山の景色が変わっていく……）
二人を少しの間目で追ったが、それだけでかなりの被害が出ていた。ここが異空間でよかった。
『ゴギャァァァァ！』
いつの間にか新しいアンチモンスターが出現していた。
「何度来ようが無駄無駄無駄！　その程度の魔獣、何体居ようが同じことだ！」
だが、そのアンチモンスターたちはロウの煙の蛇の八つ首に次々引き千切られていく。
しかし、こうなると俺のやることがない。
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）！』
せいぜい力を倍化させるぐらいだ。
「赤龍帝、覚悟！」
だが、どうやら高みの見物というわけにもいかず、俺の前には剣や槍を持った数人の女の子が近づいてくる。
「くそっ、今はあんまりやり合いたくないないんだけどな！」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（エクスプロージョン）！』
倍化を停止させ、女の子たちを迎え撃つ。
「はっ！」
先制攻撃として、左手からオーラを衝撃波のようにして放つ。しかし、それはあっさりと回避されてしまった。
（ちっ、右腕が使えないのは痛いな）

もし封印である包帯が破れでもしたら、戦っている余裕はなくなるだろう。
赤龍帝の籠手（ブースステッド・ギア）が出ている左腕で攻撃を弾く。
「はぁ！」
真正面から振り下ろされた剣を、籠手で覆われた左腕で受け止める。
そして動きの止まった女の子を右の掌打で吹き飛ばす。
（手のひらに柔らかい感触！）
と思った瞬間にアーシアから回復のオーラが届いた。……真意を考えると怖いので真面目にやろう。
「うりゃ！」
左腕に炎を纏わせると、その左腕で手刀を放って剣や槍を途中で断ち切る。そして武器を失った女の子をパンチやキックで気絶させていく。
『Ｒｅｓｅｔ（リセット）』
「うげっ」
一定時間が経ったことで能力の倍化の効果が切れてしまった。
「せやッ！」
しかも運悪く、一人だけ残っていた女の子が後ろから攻撃してきた。
「……てい」
しかし、その女の子はいつの間にか近づいて来ていた白音ちゃんに吹き飛ばされた。
「ありがとう。助かった」
「……いえ、お気になさらず」
この子に助けられる日が来るとは夢にも思わなかったな。
「だぁぁぁ――もう！　こんな無限プレイやってられっか！　スコル！　ハティ！」
ロウが叫ぶと同時にあいつの影が二つに分かれ、そこから二匹の狼が飛び出した。
（て、あれ小さくなってるけど子フェンリルじゃん！）

そういえば薄れ行く意識でロウが子フェンリルを捕まえていた覚えがある。
「目標はあの不格好な魔物たち！　まとめて殺せッ！」
ロウの指示を受けた子フェンリルたちは見失うほど速く飛び出し、アンチモンスターたちの体を食いちぎっていく。
煙でできた八つ首の蛇と二匹の子フェンリルのアンチモンスターを倒していくスピードは、少年がアンチモンスターを生み出すスピードを超えていた。
「はい、チェック！」
アンチモンスターがほとんど消滅した瞬間、煙でできた八つ首の蛇がアンチモンスターを生み出し続ける少年を襲った。
その内の幾つかは発生した霧や周囲の英雄派によって止められるが、その内一つが少年の間近まで迫った。
「チェック・メイト――」
ロウがそう呟いた瞬間、最後の蛇の頭が吹き飛んだ。
「危ない危ない。チェックメイトにはまだ早いよ」
間一髪のところで割り込んできた曹操が聖槍で蛇の頭が吹き飛ばしたのだ。
「くっ……」
ロウが悔しそうに歯噛みした瞬間、煙でできた八つ首の蛇が霧散する。どうも維持するのが限界に達したようだ。
「ここは引き時かな。――だが、祭りの始めとしては上々だ。アザゼル総督！」
曹操が戻ってきたアザゼルに向かって声をかけると共に、英雄派たちが徐々に霧に包まれていく。
「我々は今夜、京都と九尾の御大将と使い、二条城で大きな実験をする！　是非とも制止するために我らの祭りに参加して欲しい！」
曹操の口上が終わると、霧はどんどん濃くなっていき、前すら見えないほど霧が立ち込めた。
「お前ら、空間が元に戻るぞ！　武装を解除しておけ！」
アザゼルの声に従い、赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）を解除すると同時に、周りが一

気に明るくなった。
視界が効くようになると、周囲には普通に人たちが歩いている普通の景色に戻っていた。
だが、英雄派の面々は姿を消しており、ロウはいつの間にか俺の近くにいて、珍しくも普通の格好をして何食わぬ顔をしていた。
（あの霧の中で着替えたのか？　というか、なぜ今更普通の格好を？）
もしや目立たないためだろうか。確かにロウは今まで人目のある所ではあの格好はしてなかったからな。
「……姉さま、逃げましたね」
あ、本当だ。黒歌の奴、逃げやがったな。
まだ近くにいないかと周りを見回していると、何かを殴る音が聞こえた。
「京都で実験だと……ふざけるなよ若造が！」
アザゼルは完全にキレている様子で鉄柱を横殴りしていた。
「母上は何もしてないのに……どうして？」
泣きそうに体を震わせる九重をロウが優しく抱きしめた。
「子供泣かすとか胸糞悪いことしやがって……本気でキレたぞおい」
九重を撫でる手は優しく、しかし怒気を宿らせた声音で呟くロウ。
珍しいことに、俺はロウの意見に賛成だった。
「あいつら、絶対にぶっ潰してやる……！」

「それじゃ、お前さんらがここにいるのはただの偶然ってことだな？」
渡月橋での一戦の後、アザゼルにとっ捕まえられて尋問されていた。
「その通りです」
正直ここに来たのはロウの指示だから、仕組んだ者がいるならそれはロウだろう。
そのロウといえば泣き疲れた九重を膝の上で寝かしている。あと、格好はいつも通りに戻ってる。
「つまり、あいつらが何をしようとしてるのかもわからねえってことだな」
「はい。というか、俺はあいつらのことを今日初めて知ったぐらいで」
前に見たことはあるけど、本当に見たことがあるだけだ。
「そういえばあいつもそんなようなこと言ってたか」
そうですだから無関係です勘弁してください。
そうやって問い詰められる俺の隣で、白音ちゃんとイケメン木場が話していた。
「……すいません、祐斗先輩。私は今は帰るわけにはいかないんです」
「理由を聞いてもいいかな？」
「……姉さまです」
……ちょっと話が気になったのでアザゼルと一緒に聞き耳を立てることにした。
「小猫ちゃんのお姉さんというと……黒歌だよね」
「……はい。姉さまをこの手でふん縛るまでは帰るわけにはいきません」
あれ、なんか物騒なことが聞こえた。
「……ついでにイッセーさんも連れて帰ります」
あれ、更におっかないことが聞こえた。
「そう……待ってるから、頑張ってね小猫ちゃん」
周りは敵ばかりだった。もう信頼できるのはアーシアだけだ！

「さて、いきますか」
夜もすっかり老けた頃、ロウも含めた四人で二条城へと赴くことになった。
ちなみに黒歌は姿を眩ませて以降、影も形も見えない。
「待て、私も行くぞ！」
さて二条城に向かおうとしたところで、巫女装束に着替えた九重がロウに飛びついた。
「いや、危険だって！」
この子にまで何かあったら責任が取れない。
「ま、大丈夫でしょ。この子の面倒は私が見るよ」
ロウは九重をひょいと抱き上げると肩車する。
「大丈夫なのか？」
「子守は慣れてるし、私はこっちの方がやる気が出る。問題ないぞ」
お前の精神には問題ある気がする。
「そんなことより、お出迎えみたいだぜ」
ロウがそう言うや否や、足元に生ぬるい霧が立ち込めた。
「っく――また異空間かよ」
霧が晴れた後、京都に良く似た別の空間に転移させられた。
「ロウは……いないな。白音ちゃんだけか」
「……みたいですね」
「二条城は……あっちか」
遠くで高くそびえる建物を見ると、その方角に一つの人影があった。
「英雄派か!?」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）！』
英雄派の制服を着た男は俺たちから離れた所で立ち止まると、大仰な態度で話し始めた。
「ようこそ、赤龍て――」
「先手必勝！」
相手が口を開くと同時にオーラを放つ。

倍化中は攻撃とかすると途切れてしまう危険性があるが、この程度なら大丈夫なのだ。
「なっ……卑怯な！」
チッ、避けられたか！
「卑怯卑劣は強者の余裕だぁー！」
禁（バランス・ブレイカー）　手のできない俺がまともに相手なんかするか！
「喰らえぃ！」
右のストレート。左のフック。ローキックからのアッパー。パンチとキックの連撃を放つも、敵もうまく躱していく。こんちくしょう。
「やるな赤龍帝！　ならば、俺も本気を出そう。禁（バランス）……」
「……すきあり」
「ごふっ！」
白音ちゃんの遠慮容赦のない鉄拳が英雄派の構成員を吹き飛ばす。
……骨の折れる音がした。
「……さ、行きましょう」
「イエスマム」
最近この子からオーラを感じる。抽象的な意味で。
――一方
「子供を誘拐した奴に必要なのは地獄だ。というわけでアーシアちゃん、回復よろしく。いやー、回復役がいると拷問が捗（はかど）る。さじ加減が適当でいいという意味において」
「私、怪我してる人を治したくないと思ったのはこれが初めてですよ……」
ロウの所業にアーシアがまた一つ成長してしまった。
「覚えておきなさい。善意は時に人を傷つけることもあるのよ」
「この場合は少し違うと思います」
傷つけているのは間違いなくロウの悪意だ。
「ま、聞き出せそうな情報は手に入れられたからいいか」
ロウは構成員をそこらに打ち捨てると、二条城に向かって歩き出した。

「全く……目的自体はどうでもいいけど、やり方が気に食わない。意地でも邪魔してやるわ」

二条城の前に到着した時、そこにはロウたちとグレモリー眷属の面々も到着していた。

「ところで、そこの銀髪のお姉さんはどうしたんだ？」

近くの電信柱に手を着いてげーげーやってる美人さん。残念な気配がプンプンする。

「彼女はロスヴァイセさんって言うんだけどね。昼間お酒を飲み過ぎちゃって」

「悪酔いか……」

アーシアの力でも酔いは覚めさせることはできないからな……

「水飲ませろ水。血液中のアルコール濃度を薄めろ」

「なんか経験あるみたいだな」

「ま、酒を飲んだことがないとは言わないけど」

あるんだ。成人してるようには見えなかったけど。

「さ、全員揃った所で行きましょうか」

ロウが率先して城門を蹴り開けた。自動で開き始めてたのに……

ロウを先頭に二条城の中を進んでいくと、本丸御殿で曹操を始めとする英雄派の面々と遭遇した。

「俺たちの中で下位から中堅程度の使い手とはいえ、禁手（バランス・ブレイカー）使いを倒すとはね」

不意打ちだったから余裕でした。

「母上！　九重です、返事をしてくだされ！」

九重が見ている先には着物姿の綺麗な女性がいた。頭部には狐の耳があり、幾本もの尻尾も生えていた。

（あれが九重のお母さん――八坂さんか）

だが、九重が幾ら呼びかけてもその女性は虚ろな表情で佇んでいるだけだった。

「精神操作でもかけられてるみたいだな。何が目的だ」

「言っただろう。我らの実験に付き合ってもらうと――！」

曹操が聖槍の石突を地面に打ち付けると、八坂さんが悲鳴を挙げて変貌を始めた。
変貌した後は10メートルぐらいの金色の獣。大妖怪、九尾の狐。
「九尾が相手だなんて……また死にそうな目に遭うのは嫌なんだがね。九重ちゃん、アーシアの所まで下がってなさい」
肩車をしていた九重を下ろすと、八坂さんを見上げてため息を吐く。
「おい曹操！　お前たちは一体何が目的なんだ？」
「わざわざ九尾の御大将を誘拐して、京都に似せた異空間まで作ったんだ。それにも意味があるんだろう？」
「ああ。俺たちはこの都市と九尾を力を使って、この空間にグレートレッドを呼び出そうとしている」
「グ、グレートレッド？」
聞き覚えのない単語が聞こえた。呼び出すってことは生き物か何かだろうか。
『真なる赤龍神帝（アポカリュプス・ドラゴン）』。グレートレッドってのは真龍と呼ばれている黙示録に登場する龍のことだよ」
俺の疑問を聞いたロウが説明してくれた。
「次元の狭間と回遊しているだけの無害なドラゴンなんだが……一体そいつを呼び出してどうする気？」
「うちのボスが故郷に帰るのに邪魔なんだ」
曹操の返答を聞いたロウは、それを鼻で笑い飛ばす。
「お前がそんな殊勝な者ではないだろうに。人の身で異能の者を超えることをお題目に掲げている貴様らがオーフィスにそこまで義理立てする意味もないだろう」
「ふっ……確かに、俺たちには俺たちの目的がある。当面の目的は赤龍神帝に『龍喰者（ドラゴン・イーター）』がどこまで有効かの検証かな」
『龍喰者（ドラゴン・イーター）』？　やけに物騒な名前だが……
「……まあいいわ。どちらにせよ、あなたたちをこのまま見逃すわけにもいかないのだし――」
ロウが喋っている最中、俺の横から莫大な聖なるオーラが立ち上っ

た。
その根元には青髪の聖剣使い――ゼノヴィア！　悪魔が聖剣使っていいんだろうか……
「九重のお母さんは返してもらうってことで――死ね」
ロウが立てた親指を下に振り下ろすというジェスチャーをすると同時に、まるで巨大な剣の刀身のような聖なるオーラが振り下ろされた。
振り下ろされた聖なるオーラは波のように前方をごっそり消し飛ばしていった。
（鳥肌立った……）
あんなの食らったら死ぬどころか跡形もなく消滅する。アーシアにも治せないぞ。
「今、俺の横を聖なるオーラが駆け抜けて行きました……」
あ、ロウが冷や汗を掻いてる。無理もない。あと一歩隣に剣が振り下ろされてたからな。
「でも、これであいつらもケガぐらいはしたと思うんだが……」
死んでくれても一向に構わないが、流石にそんなに簡単な話ではないだろう。
などと思いながら廃墟になった建造物を見ていると、その中から手が伸びてきた。
「うわっ、ゾンビかよ」
下手なホラーよりも怖い。
「追★撃！」
勢いよく飛び上がったロウが、和傘を逆手で持って手が突き出した場所に突き刺そうとする。
上から降って来た傘の石突と地面から飛び出してきた槍の穂先が衝突する。
発生する衝撃と閃光。それによって吹き飛ばされたロウは和傘を広げてふわりふわりと降りてきた。ピンクボールか。
英雄派の面々は瓦礫の中から這い出してくると、それぞれ腕を回す、首を鳴らすなどの思い思いの動作を取る。

「いやー中々の一撃だった。さて、じゃあこっちも実験を始めようかな。――ゲオルグ！」
曹操が合図すると、魔法使いのようなローブを羽織った青年が手を突き出す。
するとゲオルグの周囲に多種多様な魔方陣が無数に出現し、それらが一斉に動き始める。
そして八坂さんが輝き始め、その下に巨大な魔方陣が展開される。
「本格的に始めやがったな。妨害してみるけど、本職じゃない私にどこまでできるか……」
ロウは手にした足元に簪を突き刺すと、そこから黒いラインが幾何学的な模様を描きながら八坂さんの足元に展開されている魔方陣に取り付いて侵食し始める。
「曹操。奴の干渉で術式に悪影響が出ている。このままではグレートレッドを呼び出すには至らないかもしれない」
「わかった。なら排除しよう」
曹操がロウに向かって聖槍を向ける。向けられたロウは不敵な笑みで応える。
「やれるものならやってみろ。――こいつらを倒せるのならな！」
「ここに来てまさかの人任せ！」
俺たちの後ろ――アーシアたちと同じ位置まで下がって言うな。
「ジークフリート、ジャンヌ、ヘラクレス、誰とやる？」
白髪の剣士は木場とゼノヴィアを両手に持った剣で指した。
「それじゃあ私は天使ちゃんと銀髪のお姉さんね」
「じゃあ俺はあの白いチンチクリンかよ。赤龍帝も貰っていいか？」
どうやら俺の相手は筋肉質な巨漢のようだ。まだ金髪のお姉さんの方がいいんだけど。精神的に。
「って、それじゃあ私が一番大変な相手じゃないの」
悪いなロウ。相手さんのご指名なんだ。
「本調子じゃないからあんま戦いたくはないんだけどな！」
本調子でも戦いたくはないけどな！
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）！』

「……諦めましょう」
「はっはー！　そんな釣れないこと言うなよ。楽しくやろうぜ！」
（楽しくない。全然楽しくない）
　振り下ろされる豪腕を避け続ける。時々軽い攻撃を放つが相手はビクともしない。
「硬っ……お前本当に人間かよ？」
「英雄の魂を受け継いでるってのは、普通の人間とは違うんだよ！」
　勢いよく振り下ろされた拳を紙一重で避けると、殴られた場所が爆発した。
「痛っ！　な、なんだ一体!?」
「これが俺の神器（セイクリッド・ギア）、『巨人の悪戯（バリアント・デトネイション）』!!　攻撃と同時に相手を爆発させる神器（セイクリッド・ギア）よ！」
　じょ、冗談じゃない。そんなもの生身に食らったら死ぬ。アーシアがいてもなくなった体の一部を元に戻せるかどうかはわからないんだぞ？
「……てや」
　俺を追うヘラクレスの横から飛び出た白音ちゃんがローキックを放つ。
「おっ!?」
「今だ！」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（エクスプローション）！』
　ローキックでよろめいたヘラクレスの顔面を殴りつける。
「ぐっ！　やるじゃねえか！」
　結構本気で殴ったのにあんまり堪えていない様子で、ヘラクレスは両腕を振り上げた。
　それに気づいた俺と白音ちゃんが飛び退いた後、周囲を吹き飛ばすほどの大爆発が生まれた。
「うあぁぁぁぁぁぁ！」
　直撃は避けられたものの、爆発が大きかったせいで吹き飛ばされてゴロゴロと転がる。
「イッセーさん、大丈夫ですか!?」

吹き飛ばされたせいでアーシアの近くまで吹き飛ばされてしまったようだ。
「大丈夫だ。アーシア、もっと離れててくれ！」
「おら行くぜぇぇぇっ！　禁手化（バランス・ブレイク）ウウウウウ！」
ヘラクレスの体が光り始め、それが収まったと思ったら全身からミサイルのような突起が生えた姿へと変わっていた。
「喰らいやがれ！『巨人による悪意の波動（デトネイション・マイティ・コメット）』オオオオオ!!」
そして全身のミサイルが一斉に発射される！
「くそっ！」
こっちに向かって飛んでくるミサイルをオーラの弾丸を放って撃ち落としていく。
だが、それも徐々に追いつかなくてなっていき、そして一発撃ち落とし損ねてしまった。
（でも、あの程度なら避けられ――しまった!!）
今、俺の後ろにはアーシアと九重がいた。今ここで俺が避けたら二人に当たってしまう。
「く――お、おおおぉぉぉぉぉ！」
せめてもの抵抗として全身のオーラを防御に回す。その直後、俺に一発のミサイルが直撃した――

Ｄｏｕｂｌｅ　ｌｉｍｉｔ　ｏｖｅｒ

「イッセーさん!!」
アーシアの悲痛な叫びが上がる。
それに釣られてロウが視線をイッセーの方に向けると、イッセーがミサイルを受けて吹き飛んでいる所だった。
「ちっ――白音、イッセーをアーシアの連れてけ！　そいつはこっちで引き受ける！」
ロウは取り出した煙管をひと振りすると、煙でできた狼たちがヘラクレスに向かって殺到した。
「ぐはは！　この程度が俺に効くか！」
だが、ヘラクレスはそれを簡単に吹き飛ばした。しかし、その爆煙の中から二つの影が飛び出した。
ヘラクレスに吹き飛ばされた煙の狼と似た狼。スコルとハティ。二匹の子フェンリルだ。
「ぐおっ！　このわんころ共が！」
ヘラクレスが二匹の子フェンリルにかかりきりになっている隙に、白音がイッセーをアーシアの所へ運んだ。
「……お願いします。まだ生きてますが……」
白音の言葉を最後まで聞かずに、アーシアはイッセーの治療を開始する。
「イッセーさん……イッセーさん！」
アーシアは全力を振り絞ってイッセーの治療に全力を注ぐ。
今のイッセーは爆発によって腹に大穴が空いており、そこから血液どころか内臓が露出していた。
「死なせません、絶対に！」
アーシアの必死の治癒の甲斐もあり、イッセーの腹の傷は何とか塞がった。
「ふう……」
イッセーの呼吸が落ち着いたのを確認すると、アーシアはゆっくり立ち上がる。

「アーシアさん?」
白音の制止の声に全く反応を示さず、アーシアはゆらりとヘラクレスに歩み寄っていった。
その瞬間、ロウの背筋にゾクリと悪寒が走った。
「スコル!　ハティ!　すぐそこを離れろっ!」
ロウの叫びを聞いた子フェンリルたちが飛び退いた瞬間、赤い閃光が瞬いた。
「ぐおおおおおぉぉぉぉぉッ!?」
その瞬間、ヘラクレスの全身から血が吹き出した。
「この雰囲気……さっきの赤い閃光……いきなり傷を負ったヘラクレス……間違いない」
ロウが曹操の槍を防ぎながら、何事かを確信する。
「厄介なことになりました……禁手化(バランス・ブレイク)、しかもその亜種ですね」
慎重に考察を続けるロウが見る中で、アーシアは矢の形になったオーラをヘラクレスに向けて飛ばす。
「調子のんじゃねえええええッ!」
それをヘラクレスのミサイルが迎撃するが、赤い光矢はそれをすり抜けてヘラクレスの体に命中。そこから血液が吹き出す。
「ぐおっ!　くそっ、こりゃ一体どうなってんだ!?」
何が起こっているのかわからないといった様子のヘラクレスは異様な雰囲気を放つアーシアを恐れるように一歩後退る。
(確かアーシアちゃんの神器(セイクリッド・ギア)は『聖母の微笑(トライワイト・ヒーリング)』だったか。だが、今のあれは性質が全く別物だ)
「効果は防御無視のダメージ付与といったところでしょうか。随分とまたエグい能力を発現したものですね」
(イッセーくんがやられたことが相当ショックだったのねえ。果報者だなバカ野郎)
「あの禁手(バランス・ブレイカー)。そうね、『魔女の嘲笑(ダスク・ペイン)』とでも名付けましょうか」
(問題はどう見ても正気じゃないことよね。下手に止めようとするとこっちが危険だ)
「よそ見は危ないよ!」

「わっと」
曹操の槍を間一髪で避けると、大きく飛び退いて距離を取る。
「あら、こっちはなんだか大変なことになってるわね」
「こっちはもう終わったよ」
「ちっ、もうやられやがったか。もう少し粘れって悪魔たち」
投げ捨てられた四人を見て、ロウは露骨に舌打ちする。
「アーシアも止めなくてはならんというのに。手が足りないってば……」
ロウは気絶して倒れているイッセーを横目で見る。
(アーシアを無傷で止められるとしたらお前ぐらいなんだから、サッサと起きろよ。兵藤一誠)
イッセーに内心でエールを送ると、曹操たちに向かって煙管を一閃した。
○　●　○
『……おい。おい、サッサと起きろ。……起きろ!』
「ガッ!」
頭に強い衝撃を受けて跳ね起きる。
『ようやく起きたか、この間抜け』
俺を起こしたのはどうやら赤龍帝の残留思念の中で唯一反応してくれるこいつの様だ。
「俺、どうしてここにいるんだっけ?」
ここに来るまでの経緯が思い出せず、首を傾げる。
『馬鹿が。あれを見ろ』
残留思念が指差した方を見ると、そこには外の様子が映し出されていた。
「あれはアーシア!」
そこに映し出されていたのはアーシアが赤い光を放ちながら、英雄派の面々と戦っている光景だった。
「一体何が……」
『お前がやられたせいで禁手(バランス・ブレイク)化したんだよ。そのせいで今は暴走状態ってわけだ』

「俺のせいで……」
　こうしてはいられない。早くアーシアを助けに行かなくては。
『おい待てよ。今のお前じゃ足を引っ張るだけだぜ』
「そうかもしれない。けど、俺は行く」
『なぜだ。お前は何故彼女を助けようとする。お前が最も嫌う戦いをしてまで』
　なぜ？　そんな事は決まってる。俺がアーシアを助けたいからだ。
『なぜお前は彼女を助けたいと思う？　成り行きで一緒にいるだけで、元々は赤の他人だろう』
　確かにそうだ。だが、今では掛け替えのない人だ。
『最後に聞こう。現赤龍帝、兵藤一誠。お前は何のために戦う。なぜ彼女を助けようとする？』
　そんなのはもう決まっている。
「俺はアーシアが、ここまで俺と一緒に来てくれたあの子のことが好きなんだ。だから、俺はあいつのためならなんだってしてみせる」
『――上出来だ』
　その言葉が聞こえるのと同時に、右腕に雷が迸り始める。
「これは……」
『ミョルニルの雷は本来、正しい心の持ち主にしか扱えない。お前がそれを手に入れたことで、ミョルニルの雷を制御できるようになったんだよ』
「そうなのか……」
　だが、少し不思議だ。
「お前、どうしてそこまで世話を焼いてくれるんだ？」
『ああ？　俺にそんな気はねえよ。ただ単に北欧出身の俺が向いてるってだけでお鉢が回ってきただけで、俺個人的にお前に含む所はねえよ。ただ、理由を付けるとするなら――』
　そこで一度言葉を切り、アーシアの映る映像を差した。
『好きな女は守ってやれよ。それは俺たちが出来なかった事だからな』
　その言葉を最後に、俺の意識は浮上していった。

○●○

「ぐあっ！」

「ロウ！」

実質四対一の状況に限界が来たのか、ロウはヘラクレスのミサイルを撃ち落とし損ねて爆風に吹き飛ばされた。

「痛つつ……せめてアーシアちゃんが協力してくれるならまだマシだけど……」

当のアーシアといえば、攻撃一択、防御ガン無視。あちらに向かう攻撃もロウが処理する始末である。

「人手が足りない……猫の手でも借りたいとはこのことか」

「……呼びましたか？」

猫という言葉に白音が反応する。

「あなたはお仲間を助けなさいな」

「な、なら私が！」

「子供に戦わせるほど私堕ちぶれちゃいないわよ」

九重に優しく微笑みかけて、ロウはゆっくりと立ち上がる。

「ま、後一踏ん張りしますかね――」

煙管を口に咥え直した時、倒れているイッセーから赤い雷が立ち上った。

「ふう……全く、随分と待たせてくれるわね」

それを見たロウは咥えた煙管を放して深々と紫煙を吐き出した。

「それじゃ、後はお任せしていいかな？」

『おう、サンキューな』

声はロウに応えると、赤い稲光がアーシアの近くに静かに落ちた。

「アーシア、もう大丈夫だ。後は俺に任せてくれ」

「あ……」

イッセーに優しく頭を撫でられたアーシアは、既に限界を迎えていたせいか、眠るように気を失ってしまった。

「ロウ、アーシアを頼む」

「はいはい、承りました」

ロウはイッセーからアーシアを受け取ると、白音たちがいる場所ま

で後退する。
一方のイッセーは英雄派の面々と正面から向かい合う。
「はっ。一度やられたのに懲りもせず立ったって、もう一度同じ目に遭うだけだぜ！」
ヘラクレスは全身からミサイルを放つ。
それを見て、イッセーは静かに一言呟く。
「『禁手化（バランス・ブレイク）』――」
イッセーは赤龍帝の鎧（ブースティッド・ギア・スケイルメイル）を纏うと、右腕を勢いよく振った。
すると轟音を伴った赤い雷撃が飛び出し、ミサイルを全て叩き落とした。
「おもしれえ！　なら、今度はさっきの倍で行くぜ！」
体から覗く突起の数が増え、それが再び一斉に発射される。
イッセーはそれを右腕から放つ赤雷で撃ち落とす。だが、今度は撃ち落とすだけでなく、同時に強く踏み込み、ヘラクレスに向かって飛び込んだ。
「はあッ！」
『Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）Ｂｏｏｓｔ（ブースト）!!』
赤雷を纏った一撃がヘラクレスの腹部に叩き込まれ、その衝撃でヘラクレスは吹き飛ばされて瓦礫に突っ込んだ。
「ヘラクレス！」
「流石は赤龍帝といったところね。なら、これはどうかしら？
『断罪の聖龍（ステイク・ビクティム・ドラグーン）』！」
ジャンヌが手を振ると、無数の聖剣が生み出され、それらは幾重にも重なりドラゴンを形作る。
「聖剣は悪魔でもあるあなたに取っては天敵！　かすり傷でも致命傷よ！」
聖剣で作られたドラゴンが鎌首をもたげ、イッセーに向かって襲いかかる。
「横槍失礼」
しかし、それはロウの作り出した煙の龍によって防がれる。

「そっちは五人いるんだもの。少しぐらいは手助けしてもいいよね？」
ロウは片手に煙管を持ちながら、イッセーに向かってウィンクする。
「ありがとよ！」
イッセーはお礼を言って、組み合う二頭のドラゴンの脇を通り抜けて曹操たちへと接近する。
「なら、僕も行かせて貰うよ！」
背中からドラゴンの腕を四本生やしたジークフリートが背中の腕に持った魔剣を振るった。
嫌な予感を感じたイッセーが横に飛び退くと、イッセーが一瞬前まで立っていた場所に大きなクレーターが穿たれた。
「ドンドン行くよ！」
ジークフリートが剣を振るう度に、空間に裂け目が生まれ、空間が抉られ、氷柱が突き出す。
それらをイッセーは紙一重で避けながら、徐々にジークフリートとの距離を詰めていく。
だが、距離を詰めていくにつれ、攻撃を避けきれなくなっていき、鎧の破損も増えていった。
そして遂に、イッセーがジークフリートの剣の間合いに踏み込んだ。その途端、ジークフリートの六本の腕、その全てがブレる。
高速で振るわれた六本の腕がタイミングずらして襲いかかる。
六つの刃の波状攻撃を避けきれないと判断したイッセーは腕をクロスし、オーラを集中させることでそれを防ごうとしたが、ジークフリートの持ってる剣は悪魔祓い（エクソシスト）の使う光の剣を除けば、どれも名高い魔剣ばかりだった。
禁手化（バランス・ブレイク）によって力を数倍に引き上げられたジークフリートの一刀は、赤龍帝の鎧を砕くのには十分な威力を秘めていた。
「ぐっ！」
イッセーの左肩が裂け、鮮血が飛ぶ。
だが、それを代償として、イッセーはジークフリートを自分の間合

いに捉えた。
「で、りゃぁぁぁぁッ!!」
『ＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔ!!』
赤雷を宿した右拳が雄叫びと共にジークフリートの腹部に向かって放たれる。
それをジークフリートは交差させた魔剣の側面で受け止めた。
だが、拳は止められてもそこに宿された雷までは止まらない。
神の雷は魔剣を伝い、ジークフリートの本体を襲う。
「ぐっ!」
体に流れる電流にジークフリートが身を強ばらせ、その隙にイッセーの左回し蹴りがジークフリートを吹き飛ばす。
(あと一人!)
ジークフリートを蹴り飛ばしたイッセーは残された曹操に向かって駆け出す。
「はっ!」
曹操の槍が伸び、イッセーの眉間に向かって迫る。
「ぐっ……!」
自分の頭部を串刺しにしようとする槍の切っ先を身を反らすことで何とか避ける。
しかし、姿勢を起こした時には目の前には槍を構えた曹操が迫っており、攻撃を繰り出そうとしていた。
「く、ぁぁぁぁぁぁッ!」
それをイッセーは全身から雷撃を放つことで迎撃するが、曹操はそれを間一髪のところで回避した。
「これが君がこの前手に入れた神の雷か……避けるのが一瞬でも遅かったら黒焦げになっていたな……」
「はぁ、はぁ、はぁ……」
全開で雷撃を放ったせいで肩で息をするイッセー。
「だが、まだそれを扱い切れていないようだね」

曹操の言う通りである。扱うどころか今し方使えるようになったばかりなのだ。今のイッセーでは単純に放出するしかできない。
曹操と睨み合っている内に、ヘラクレスとジークフリートも立ち上がってきた。
「くっ……」
さっきので倒せたとは思っていないイッセーだったが、三人まとめて相対すると、改めてその強さが見てわかった。このままでは勝てないと。
「君と戦うのはヴァーリと同じぐらいに楽しめそうだ。もう少しお相手してもらおうか」
曹操は槍を肩に担いだ体勢で一歩前に出る。
(俺の相手は自分一人で十分ってか？　くそっ！)
イッセーは心中で毒づいた。
本来であれば3対1でなくなったことを喜ぶべきなのだろうが、こっちは必死になっているのに、相手はまだまだ余裕。それどころか楽しんでいるように見えるのは屈辱の極みだった。
曹操が槍を構え、イッセーが一歩踏み出そうとしたその時、空間を裂くような音が鳴り響いた。
曹操はそれを聞くとゲオルグに向かって振り返る。
「どうやら実験は成功のようだ。ゲオルグ、『龍喰者（ドラゴン・イーター）』を召喚する準備を……」
そこまで言って、曹操は突如言葉を切り、次元の裂け目を見た。
「いや、違う。グレートレッドではない？　それにこの闘気は……」
曹操がそこまで口にしたところで、次元の裂け目から緑色のオーラを纏った体の細長いドラゴンが現れた。
「西海龍童（ミスチバス・ドラゴン）、玉龍（ウーロン）か！」
宙を泳ぐように飛ぶドラゴンの背中から、小さな人影が飛び降りる。
「久しぶりです、闘戦勝仏殿。まさかあなたがお出でになるとは」
「よう聖槍の。九尾の姫さんと会談しようとした矢先に拉致とはやってくれるじゃねえか」

高所から難なく着地して、曹操と話し始めた幼稚園児ほどの大きさの猿を見て、イッセーは困惑した。
「な、何だあれは……」
「初代孫悟空。うちの美猴のご先祖様にゃん」
後ろから聞こえた返答を聞いて振り返ると、そこには長く行方知れずだった黒歌が立っていた。
「お前、今までどこに居たんだよ」
「闇に紛れてコソコソしてたにゃー。こう見えてもお尋ね者なわけだし？」
イッセーと黒歌が話す間に、闘戦勝仏こと初代孫悟空は自分に襲いかかったジークフリート、ゲオルグ、曹操を跳ね除けていた。
「くはは、流石は闘戦勝仏。では、こっちはこっちに集中させてもらいますかね」
ロウは煙の龍の維持をやめると、地面に突き刺した簪の側に跪いて指を添える。
それと同時に簪から伸びる黒いラインが増え、全方位、地面を覆い隠すように広がっていく。
「これは……？　この空間の制御を乗っ取る気か!?」
「ご明察。ついでに九尾の御大将も返して頂きますよ」
闘戦勝仏と五大龍王の一角という増援が来たことで旗色が悪くなったのを悟った曹操は撤退を決心した。
「おい、このまま無傷で帰れると思ってんのか！」
京都で散々迷惑なことして、あっさり帰ろうとする曹操たちを見て、イッセーは怒鳴り声をあげる。
それと同時に右腕から雷が激しく迸る。
「京都土産だ！　食らってけ！」
イッセーの腕から赤い雷が飛び出し、曹操たちに向かって飛んでいく。
ヘラクレスとジャンヌがその軌道を塞ぐ位置に立ってそれを防ごうとしたが、その直前で雷が消えた。
「ぐぁぁぁぁぁッ！」

その直後、曹操が苦悶の叫びを上げた。ヘラクレスたちの眼前から消えた雷撃は曹操に命中していたのだ。
「命中～これは九重ちゃんの分よ、外道ども」
イッセーの放った雷撃が消え、曹操に命中した理由。それは、ロウが雷撃を曹操の背後へと転移させたからである。
雷撃をもろに受けた曹操は倒れそうになる体を槍を杖代わりにして支え、懐から取り出した小瓶の中身を呷(あお)った。
すると曹操が全身に負った傷が消えていった。
「くっ……この借りはいつか返す。また会おう、赤龍帝」
最後にこちらを強く見据え、曹操たちはこの空間から転移していった。
「けっ、一昨日来やがれ」
そう毒づくロウの声を聞いた後に、イッセーの意識は急速に薄れていった。

Ｅａｒｌｙ　Ｅｎｄ

「うっ……」
目が覚めると、木でできた天井が目に入った。
「ここは……――アーシア！」
起きてすぐはどうしてこうなったのか思い出せなかったが、思い出した瞬間、俺は布団を跳ね除けながら体を起こした。
そして俺の隣にアーシアが眠っているのを見て一安心した。
「良かった……ん、なんだこれ」
落ち着いて辺りを見回してみると、枕元に一枚の紙が落ちていた。
「手紙か？」
文字が書かれたそれを拾って見てみると、これはどうやらロウが書いたものらしいことがわかった。
兵藤一誠殿へ
前略
あなたがこの手紙を読んでいる頃、私はあなたの近くには居ないでしょう。居たら直接言いますから。
さて、前置きはこのぐらいにして。
まずはおめでとう。君がミョルニルの雷に殺されることは無くなった。
当初の予定とは違ったとはいえ、こんな短期間で制御できるようになるとは思わなかった。
君たちはこれから好きにしなさい。今あなたが借りてる家に帰るなら紙の裏面に書かれてる魔方陣を使いなさい。
サービスで家に結界を展開しておいたので、そこで暮らしている分には異能関係者に気づかれることはまずないでしょう。
まあ、既に判明している場合はその限りではありませんが……
伝えたい内容は以上ですが、これで終わってしまうのもなんですので、少し話を続けさせてもらいます。
そも、いつもは何も言わずにフラッと消える私がこうして手紙を残すのは、あなたとはもう二度と会わないことにしたからです。まあ案

外またフラッと姿を見せるかもしれませんけど。
あなたはもう一人で大抵の相手よりは強い。下手すれば私よりも。故に、もはやあなたに私の庇護は必要ない。
そうなってしまえば、私の存在はあなたにとって害にしかならない。だから私とあなたの関係はこれでおしまいです。
結局、あなたには私の正体については言わず仕舞いでしたね。まあ聞かれても答えませんけど。
ですが最後ということなので、私について少しは教えてあげましょう。多くは語りませんが。
私の目的はとある存在の奪還です。かつて私の側にあり、奪われてしまった何よりも尊い存在の。
まあそれも取り戻す算段がつきましたので後は実行するだけですが。
そうなったら私は次元の狭間にでも引き篭るわ。そしたらもう会うこともないでしょうね。
その場合はあなたが幸せになれるように呪いをかけてあげる。
これにて話すことは終わりですね。名残惜しくはありますが、本当にこれ以上書く事がないので。
では、これにて失礼。縁が合ったらまたお会いしましょう。

ロウ

P．S．　お姫様の眠りを覚ますのに必要なのは――？
手紙を最後の一文まで読み終えると、俺の視線から手紙からそれて横を向く。そこには眠っているお姫様（アーシア）の姿があった。
（……え、まさかそういうことなのか？）
その後、俺を途轍もない葛藤を襲ったが、それについては割愛する。
「――よし」
俺は覚悟を決めてアーシアの枕元に座った。
そして体を傾けて、自分の顔をアーシアの顔へ近づけていく。
じわりじわりとアーシアの綺麗な顔が近づいて来て、俺の鼓動が速くなる。

後数センチ。ここまで来たら一気に行ってしまおうと息を止めた時だった。
「んんっ……」
アーシアが寝息を立て、それに驚いて飛び退いた。
「あ、あーしあ……？」
恐る恐る声をかけると、アーシアは綺麗な緑色の瞳を開いた。
（あ、あの野郎――！）
そう言えばそうしないとアーシアが起きないだなんて一言も書いてなかったな！　すっかり騙された。
「イッセーさぁぁぁん!!」
「うわっ!?」
ロウの性格の悪さに憤っていたら、アーシアに飛びかかられて押し倒された。
「無事で良かったですぅぅぅ！」
一体何事かと思ったが、アーシアが最後に見た俺は半死人だったことを思い出す。
「おう、アーシアが治してくれたからな。ありがとな」
落ち着かせるためにアーシアの頭を優しく撫でる。
俺は何となく落ち着かなくて辺りを見回すと、アーシアが寝ていた枕元にも一枚の紙が置いてあった。
手を伸ばしてそれを取ると、二つに折り畳まれて外側に『イッセーの枕元にある方を先に見てね♥』と書かれていた。
ふはははは、良い思いはできたかね？　できたのならおめでとうと言祝いであげましょう。できなかったらこのヘタレと罵って差し上げますわ。
精々末永く暮らすと良いわ。ああ、もし寿命の違いがあるなら私に相談なさい。まとめて二つに平均化してあ・げ・る。
それでは改めてさようなら。

永遠の１７歳　ロウ

（あの野郎今度会ったら本気でぶん殴ろう）

ロウへの怒りを再燃させていると、外の廊下からトテトテという足音が聞こえてきた。
「お、起きたようじゃな……すまん、邪魔をした」
九重は扉を開けて俺たちの姿を見るなり、扉を閉めた。
「ちょっと待て、何か勘違いしてないか九重！」
『そんなことは無いぞ。まだ疲れておるじゃろうからゆっくり休めという気遣いじゃ。私は気の利く狐巫女じゃのー』
「お前絶対勘違いしてるから！」
というか、なんで九重がその年で知ってるんだ？　ロウか？　またロウの仕業か！
叫び虚しく九重はそのまま去っていってしまい、再び俺とアーシアの二人きりという状況になった。
「あー……アーシア、落ち着いたか？」
「はい、なんとか……」
俺の上にいるアーシアへと声をかけると若干鼻声で返事された。少し泣いていたらしい。
「ごめんな、いつも怪我して心配かけて」
まあ怪我ってレベルじゃ済まない事の方が多いのだが。だからアーシアが心配するんだけどな。
「でも大丈夫だ。ロウが俺たちの家に結界を張ってくれたから、家にいる間は平気だぞ」
「いえ、別に怪我をしてもいいんです。私が治しますから。でも、イッセーさんが大怪我したとき、死んでしまったと思いました」
確かに、あの時の怪我は致命傷で、アーシアが居なかったら確実に死んでいただろう。
「私の力でも、死んでしまった人は治せません。イッセーさんが死んだら、私はまた一人になってしまいます。そう考えたら頭が真っ白になって……それからはよく覚えていません」
「そっか……」
あの時のアーシアの様子がどうにもおかしいと思っていたが、どうも意識が曖昧な状態だったようだ。

「イッセーさん。私、もうイッセーさんが傷付くところは見たくありません」
――だからもう、戦わないでください。
アーシアは顔を悲痛な色に染めて、俺に懇願するように声を絞り出した。
(俺は、ここまでアーシアに心配を……)
その必死の懇願を聞き、俺は覚悟を決めた。
「わかった。俺はもう戦わない」
これは今までと似てるようで違う覚悟だ。今までは戦いたくないという後ろ向きの考えだったが、これからは決して戦わないという決意だ。
結果としては同じかもしれない。だが、俺は今後一切戦闘をしないと決めた。
どうしても戦わなくてはいけない時が来ても、俺は本当にどうしようもなくなるその時まで戦わないと決めた。
腰抜けと称されてもいい。臆病と罵られてもいい。アーシアが傷つかないのなら、それが俺に取っての最良なのだ。
何故なら、今の俺にとってはアーシアは唯一無二の存在なのだから。
「さあ、帰ろうアーシア。俺たちの家に――」